
季節名の道

元国麗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

季節名の道

【Nコード】

N4418F

【作者名】

元国麗

【あらすじ】

人を斬り、時には食らってまで生き長らえた殺人鬼。そんな殺人鬼は様々な経緯を経て、用心棒となり、女として育てられた。しかし、それは平和になった世の中で生きるための饞別だったのだ。時代の流れに追いやられ、それでも剣を取った殺人鬼は魔物による混乱が続くという大陸へと渡る。まずはギルドへ、だが、殺人鬼には、名前がなかった。だから殺人鬼は愛刀の名を貰い受けることにした。

序章

暗い景色だ。

しかし、夜にしては暗すぎる不自然な光景がある。

耳にはうなりを上げる風の音とそれに揺られる梢の音が聞こえているのに体は何も感じず、周囲には木が見当たらない。

ただ目の前には時折風に流されてくる枯れ葉と石敷きの長い道路があり、それだけがくっきりと色づいていた。

随分と色彩に欠ける。道路の上に一人佇む私は目の前の景色にそんな感想を内心で漏らしていた。

自分の姿もまた暗闇の中にいるせいか妙だった。手を見るとまるで自分が影になったかのように黒くなっている。

暗闇より濃い闇を形作る自分はそれでいて、一瞬のうちに暗闇に溶け込みそうに思えた。

影のような平坦さというか、存在感の薄さを強く自分に感じて目を逸らすといつの間にか遠くに街灯の明かりが見えた。

明かりを見つけた途端に暗闇にいるのが不気味に思えて、早足に街灯の明かりを目指して歩きだした。

やがて街灯の所へ辿り着くと私は明かりの中へ入るのをほんの少し躊躇した。それに私自身驚きつつ意を決して入る。

すると、また突然に目の前にモノが現れた。それはまだ幼さの残る女だった。

「あの・・・」

女は戸惑いを隠さない口調で私を見ながら言った。簡素な服に身を包んだ女は不気味に赤い光りを照り返す黒髪で目を覆い隠していた。輪郭からして無駄の無さそうな造りの顔だが唇は青白い。それ

でいて頬はバラ色をしていた。

私は女を無視しようと思ったが、この場に二人きりなのだ。話すことは何となくではあるが、禁じ得ないことだった。

「何？」

せめてもの抵抗に少し不機嫌に言うが、女はとても嬉しそうに言うのだ。

「やっと話せる人が来てくれた。私の声が届く人が・・・」

そう言っただけで女は何度も涙を拭う仕草をした。すすり泣く声もするので本当に泣いているのだろう。

面倒な相手に捕まったかなと思う矢先、女は慌てたように手で髪を何度も梳いた。

「あなたはサムライなんでしょう？」

女は私の左手に握られている野太刀を見てそう訊いてきた。これには首を傾げるしかない。

「私は・・・殺人鬼・・・侍じゃない」

あつという間に喉が干上がる。もう喋れないなど喉を手で押さえながら思っている、女は私に抱きついてきた。不思議。何が不思議なのかと言うと、私がこんなにもあつさり組み付かれていることが正直、理解できない。

「お願い。私の母様になって」と言う女の顔を見る。それはいつ以来かも解らない、私に向けられた笑顔だった。

気が遠くなった。

一話 いい加減な回顧

目覚めるとそこは氷風組本部の離れの二階　私の部屋だった。
夢だとは思っていたけど、まさか、夢の中の人物の笑顔に心動かされるなんて思いもしなかった。

早く目が覚めてしまったのか、障子を開いて外を窺うとうっすら霧がかかっていたけれど、鳥の囀りと共に東から射す陽光が私の目を突いてきた。

瞬間、勢いよく障子を閉めた。この殆ど反射的な行動には理由がある。その理由は、私が赤い光が好きじゃないからだ。記憶を一番最初まで遡った時に見える風景、それが炎に包まれた建物と、人だ。あの人が焼け爛れていく光景で最初に思ったことは、炎が恐ろしいものだということ、最近思うことは、火葬はされたくはないということだった。死んだあとにせよ何にせよ、あのように炎に包まれて、体を喰われるのは本当に嫌だ。

私はそう思う中で過去を想起し始めていた。そう、最初の風景ではない。最初に耳にしたであろう言葉をそつと呟く。

「すべての命の価値は等しく・・・奪った命の分まで生きる」

これが私の生き方を決めた言葉でもある。あの火事の中で、炎に命を喰われていった人に託された野太刀を抱えて山の中をあてもなく彷徨っていた幼い私は獣に襲われた。いつの間にか鞘を失くしていた剥き身の野太刀を突き出したのと、獣の飛び掛ってきた時に僅かなズレがあったなら、私は死んでいただろう。そう、私は獣を殺して生き残った。

きつとその時だ。私のリンリカンというやつが打ち立てられたの

は。

その時の私が幾つなのかは知らない。ただ命の価値は等しいってことを妄信していたから、山から人里へやって来た時に人を殺すのに何の躊躇もしなかった。人を殺して物を奪って生きていた。獣も人も同じ命、それを一度奪ったのなら、あとは同じだ。

そんな生き方をしてはいたが、日がな一日人を殺している訳も無い。暇な時は空を飛ばうとしていた。鳥のように高く飛びたくて、懸命に跳び続けた。今では鳥にはなれないと解っているけど、私は鳥のように飛ばうとし続けて色んなことをした。細かい事は省くとして、私は結局、飛べなかった。その苛立ちをぶつけるように、宙で回る最中に野太刀を振り回していた。

鳥になりたいという一心で跳ね回って、鳥のように飛べない苛立ちを刀に乗せて振るっていた私は、そのおかげか只人より遥かに優れた脚力とシセイセイギョ？というものを会得していた。だから幼い身ながら野太刀を振るって生き残れた。

何にせよ人を斬って生きてきた私に、いや、これは誰にとってもだが、ある時、危機が訪れた。どこかの山が噴火して、大規模な飢饉が起きたのだ。その被害の真つ只中に置かれた私は、あることをした。

人を食べて、生き延びた。元々何でも食べていたし、命の価値はみな同じという言葉の根幹として生きてきた私にとって、人を食うという選択肢はさほど迷う必要はなかった。ただ、一つ言えるとなれば、そうしなければ死んでいたということだけだ。

飢えの時代を何とか凌ぎきるために私は別の土地へ移動することにして、移った先でも人を斬っていた。

そんな時だ、ここ氷風組の組長に拾ってもらったのは。けど、良い出会いなのかはよく解らない。お互いに傷を負ったし、組長はその傷が原因で半ば隠居の身となったのだから。

拾われた私は氷風組での汚れ仕事を一手に引き受けるようになって

た。

やることは今までと同じ人斬りなのに、それをするだけでお金がもらえなし、飢えることもない。それはゲキテキな変化だろう。

それから何年か後、ある日突然私の体から血が流れた。それと一緒に下腹部に鈍痛を覚えて、寿命がきたのかと思つた。結局寿命はこなかつたけど、その日から段々なのか急なのかよく解らないけど体つきが変わつていった。久しぶりに組長と顔を合わせた時にはやたらと驚かれ、あつという間に着替えさせられた。それが女物だと解つた時に、私は女なんだと気が付いた。そうと知る機会が無かつたのは私が人と離れて暮していたからだろう。それしか理由が無い。

その時から二度目のゲキテキ変化があつた。組長が突然「刀を預ける」と言い出したのだ。

訳が分からないまま、その場の流れ（時代の流れとも言えなくもない）で私は愛刀を組長に預け、代わりに色々と勉強のための道具を与えられたが、文字なんて覚える気がさっぱり起きないので、組長に色々と読んでもらつて覚えた。おかげで今の私には少しばかりのキョウヨウがある。ああ、一つ自慢できることがある。それは異国の言葉をいくつも話せるということだ。組長は手広く商売をしているらしく、異邦人がよく集まつて話しているのを耳にするうちに覚えたというだけのものだけだ。

ふと、目の前の壁に立てかけられた愛刀を見つけて、ぼんやり思うことがある。数日前に組長に返してもらつたけど、あの何とも言えない表情は何だったのか？それにそもそも用心棒として雇つている私から刀を取るなんて何を考えていたのか？

とりあえず二三年の時を経て、鞘付きで戻つて来た愛刀を抜刀する。

「しっくりくる・・・鈍るところかより一体になれた気がする」

愛刀を失つてからの勉強の日々の中でも私は跳ぶのはやめてはいなかった。鳥のようにはいかなくても、跳ぶのは楽しいのだ。

刃を丹念に見ながら、妙にしっくりくる理由に見当がついた。ただ単に、私の背が伸びたというだけだ。

すーっと襖ふすまが開く音に振り返ると組長がいた。組長は女には優しい。私がそうだと解った時とその前ではまるで態度が違うのだから、これは間違いない。

「起きてたんか」

黙って頷くと、組長は頭を何度か掻き毟った。

「おめえ、その、今まで悪かったのう」

何のことだかさっぱりなので首を傾げると、組長はぼそぼそと言ひ募る。

「女に人斬りなんぞやらせちまってよ。ワシも目が曇ったもんじやわい。それでだな、そのう、おめえこれからどうする？」

どうすると突然問われても何も言えない。ただ何となく予感がしできていた。

「つまり、私はお役御免？」

喋ると疲れるから、私は滅多に喋らない。現に組長は私の声を聞いて驚いている。

「あ、ああそうよ。それで、おめえに教育施したのはワシの自分勝手な罪滅ぼしじゃ。おめえがこれから先も生きていけるようになって

「よ」

「ふうん」

放り出すことを前提にしての行動だったらしいけど、一応は身を案じて勉強させてくれたのだから文句は無い。ただ、来るべき時が来たという感じがした。

二話 名前を名乗ろう

組長が「どこか行きたい所はあるんか？」と訊いてきたので、大陸に渡りたいと言ったら十分な路銀と上質の着物を一着、饑別としてくれた。袖を通した時の心地は本当に心躍るものがあつた。理由は解らないけど、嬉しかった。

私は袖の裾を掴んで何となく動かす。黒の生地には薄っすら浮かび上がる模様の繊細さが見て取れると嬉しさが増した。

そんな上機嫌のまま船に乗って大陸へと渡つた私を最初に出迎えたのは碎け散つた彫像だつた。この彫像がもし仏像と同じようなものだとすると何とも幸先が悪い。振り返れば大海原が広がっているだけで、もう、故郷の影も形も無かつた。

新しい人生をここから始めよう。そう決心して郷愁の誘いを振り切つて歩き始めた。

とりあえず組長が懇意にしていたギルドという組に所属できれば生計は立てられる。なにせすることは魔物と呼ばれる獣を斬ればいいという話だし、教育によって人を斬る自信を失くした今の私としては天職と言えるはず。

そう考えて歩き続けて、やがて日が暮れても、街に辿り着けず、仕方なく私は近くの岩に腰を落ち着けた。もちろん、着物は汚さないよう箆せきを敷おいてある。

風が私の首筋を一撫でした。やはり故郷と違って、どこか乾いた、冷たい風だつた。

ここは思ったよりも寒い。焚き火でもして暖でも取ろうかなと思ひ、腰を上げる。

そのとき、遠くから狼の遠吠えにも似た音が私の耳に届いた。同時に、悪寒が背筋を抜ける。音のしたほうへ目を向けて、集中すると、大分離れた岩山にいる生き物と　あれが魔物？　目が合っ

た。どうやら私を晩御飯にするつもりらしい。

ちようどいい、私も今日の晩御飯を見つけた。あとは、どっちが食うか食われるかを決めればいいだけだ。

じつと向こうがこっちまで来るのを待って、ようやく、五匹の群れをなした魔物がやって来た。その姿を見て、私はさっき思ったことを撤回することにした。これは、食べられそうにない。

気分を悪くした私の心境などお構い無しに魔物が一斉に飛び掛ってくる。が、遅い。

チン、と鐔を打ち鳴らしただけで、魔物たちは力なく地面に落下していった。まさか気を当てただけで気絶するなんて弱いにもほどがある。それともこの刀の持つ不思議な力が魔物にはより一層効果的なのだろうか？

考えても始まらないと思い直して、手早く首を斬って袋にしまった。ギルドはこうしたものも換金してくれるそうだから、とっておいて損はないはずだ。

袋の口をきつく縛って、それを肩に担いだところで誰か近付いてくるのが解った。やがて、顔が見えるくらいのところまで来るとその顔がわずかに緊張しているのが解った。その男は私を見ると、しばらくぼうつとしていたけど、それから覚めると慌てたように言った。

「君、大丈夫だった？怪我は？」

何やら私の身を察しているよう。喋らないと いけないか。色々聞きたいこともある。

「大丈夫・・・ところで、あなたは近くの街から来たの？」

同じ言葉話をしているつもりだけど、通じた様子が無いのか男はまたぼうつとしている。

「言葉・・・通じてる？」

「あ、ああ。そうだけど、そういう君はどこから来たの？」

「そんなことはどうでもいい。それより街まで案内してくれませんか？」

「ああ、分かったよ。それじゃあ、付いて来てくれ」

男は皮の胸当てに軽量の手甲という身軽さを重視した戦士の出で立ちだ。しかし、その姿に似合わない大きな盾を背負っているのが気になると言えば気になる。それも二つ重ねて背負っているのだ。興味が湧く。

けど、私はそんな様子をおくびも出さずにただ付いて歩いている。景色に目をやるのも悪くないけど、男の背中の方こうに見える壮大な星空だけでも十分に満足できるから別によかった。

良い空だと思う。この大陸の空は、故郷の空よりも舞う価値がありそうだ。
捨てきれない夢に身を焦がす思いに浸っていると、声をかけられた。

「君はさ、街にどんな用があるの？」

男の積極性が嬉しい。自分から訊くのは、少し気が引けていた。

「ギルドに所属しようと思って」

「そうなの？」男はとても驚いたのがよく分かる声を上げた。「あ、こっち側から来てるってことはそうなのかな？」

「そう」

喉が疲れるのであまり喋りたくはない。

けど、無視する訳にもいかない。ジレンマっていつのか？

「そうなんだ。ところでさ、君の名前、何ていうの？」

「……………」

黙っているのが気に障ったのか、男はこちらを振り返った。表情はどこか寂しそうで、怒っている訳ではなさそうだ。

「いや、その、俺さ…………一人です仕事してるんだけど、一人だと仕事がなかなか回ってこないんだ」

「それで？」

「だからさ、君さえ良ければ傭兵として一緒に組まないかって誘ってるんだけど」

「今初めて言われた」

「ははは、組まないとしてもさ、名前くらい知りたいかなって」

名前。そういえば、そんなものなかった。そうだ。無いなら今考えるしかない。でなければ、ギルドに所属することができないのは確実。そう考えると、男には感謝するべきかもしれない。

真っ先に目が向いたのは、左手に握られた愛刀だった。

「季節名、トキナ。それが名前」

「トキナか。俺はカイル・サークス。できればよろしく」

「よろしく」

私がそう言うと、カイルは満面の笑顔を浮かべた。

これだ　これが私を最初に出迎えたものにしよう、そう心に決めた。

三話 これからよろしく

街に着いたら早速、周囲からの好奇の視線というやつに晒された。特に気にする必要は無いと判じて、カイルをせっついてギルドにやっつて来た。石造りの建物が多いとは聞き及んでいたが、実際に目にするると獄舎か蔵に見える。それを口にするのは疲れるからしなかったが、そんなことよりもウエスタンドアというものに驚いた。向この人が襖を「動く壁」だと言うが、私からすればこれは「開く壁」と言えた。

あれか。開けゴマってこんな感じだろうか？

いつしか下らない連想遊戯を始めた私の手をカイルは引っ張ってわざわざ受付まで連れて来てくれていた。

「かたじけない」

「？」

「ありがとう」

「どういたしまして」

かたじけないは当たり前だけと通じない。けど何故だろう？こうして違う土地にいるせいとか、侍というものを嫌でも意識してしまうのは……。

そうして考えながら目の前を見ると、金髪碧眼の女性が鉄格子越しにこちらを不思議そうに見ていた。私はその視線よりも目の前の鉄格子がより獄舎の印象を強めているのを感じていたが、目的を見失ってはならない。私はここへ傭兵としての登録を済ませに来たの

だ。そう意を決して一歩、前へと進み出た。

女性は私の意を汲み取ってくれたのか、にこりと綺麗に笑って問いかけてくれた。

「ギルドへの登録ですか？」

私は黙って頷いた。

「それでしたら」そう言っただけの紙を差し出される。「こちらに必要事項を記入してください」

もう一度頷いて紙とペンを受け取る。

魔物という悩みの種はあれ、私の故郷よりずっと文化が進んでいそうだと。

そんな認識をしたせいなのか、それとも生まれ育った故郷に何かしら思い入れがあったのか季節名と漢字で名前を書いた後に振り仮名を振るようにして大陸の文字で名前を記して提出した。

「……トキナさんですね」言いながら何かのキラクリをカタカタ叩いていた。「はい。承りました」

今度は紙ではなく、固い板を渡された。花札に近い感じを受けたけど、別物だというのは一目瞭然だ。その銀色の札には私の名前がしっかりと刻印されていた。

「……換金してもらえますか？」

袋を台の上にドンと置いてそう言った自分がどこか無礼な気がしたが、気にしないでおこう。

しばらくして、女性は戻って来るとお金の入った革袋を持ってきてくれた。それを受け取るうと手を伸ばすと、その手を掴まれて、握手する格好になる。でも何故そうなるのか理解できない。私は首を傾げた。

「おめでとうございます！」

その興奮気味な大声に私は眉を寄せる。

「さる特A級の傭兵の方があなたの倒したウルフルの切り口を鑑定しまして、そうしたらトキナさんを推薦なされてね。本当におめでとうございます。あなたの傭兵の階級はA級からとなります」

この人は私の幸福を自分の事のように喜んでくれたんだ。そのことに深く感動する。

「ありがとう」

しかし、手を放して欲しい。いつまでも握られていたら、お金を受け取れないんだ。これからの生命線、早く懐に収めたいと気持ちが出るのは仕方ないことだった。

女性からの熱烈なお祝いを受けて戻って来た私をカイルが出迎えてくれた。その顔は笑顔だ。故郷に居た時に私に向けられる表情とかなりの違いに少し戸惑いのようなものを覚えながらも、傍まで寄っていった。

「おめでとう。これで晴れて傭兵になったわけだ」

ありがとうと言いたかったけど、一日に同じ言葉を何度も言うのは好きじゃないので、黙って頷いておいた。

「・・・嬉しくない？」

首を横に振って否定すると、カイルは何か得心が行ったのか「ああ」と言った。

「トキナ、喋るのはあんまり好きじゃない？」

頷こうとすると、顎を掴まれて上を向かされた。もしそこに攻撃の兆候があれば斬り捨てていただろう。

「もしかして、この傷が原因なの？」

そう言う手と手を離してくれた。そうしないと頷けないから当然の配慮だろう。私は頷いた。そう、組長との戦いで負ったこの喉の傷、どうして生きてるのか解らないほど見事に貫かれた。

どうやら綺麗に入りすぎて、抜いてみたら息を吹き返したという話らしいが、コウイシヨウというやつであまり喋れないのだ。

「刺し傷だったよね？どうやって助かったの？」

その問いには肩をすくめるしかない。そういう奇跡については神にでも仏にでも好きなほうに訊いてほしい。本当に、私の知るところじゃない。

「トキナ、階級は？」

・・・カイルは私に喋らせたのか？奇立った瞳を向けると、どうやらそう思う惑だらしく目を逸らした。

「ごめん。調子に乗りすぎた。それでコンビの件だけど、考えてくれた？」

頷いて、次に手を差し出す。それを見たカイルは嬉しさを爆発でもさせたのか、私に飛びついてきた。さすがに身の危険を感じたので、柄で鳩尾を容赦無く突かせてもらった。それを受けたカイルは悶絶して体をくの字に折った。

回復するのを待って、もう一度手を差し出す。今度はちゃんと握り返してくれた。

「よろしく、カイル」

これがお互いの利益となることを祈ろう。そんな損得勘定を働かせながら、私は、初めての仲間というのが嬉しくて、微笑を浮かべた。するとカイルは再び体中に嬉しさを爆発させたのか、

「ああ！ よろしくなトキナー！！」

凄まじい大声に気持ちを乗せてそう言ったのだった。

四話 夢の意味は？

空が広くなつたような錯覚を覚えつつ、私は砂利道ばかり歩いたから、ぽっくりに付けた爪皮つまかわは大丈夫か確認をした。一見する限り何も問題は無く、鼻緒が切れる心配も無さそうだ。

カイルとはとりあえず別れた。明日あたりにも何か良い依頼を見つけてくると言っていたから、そこは信用しよう。ダメだったらこれから先は疑おう。そう心に決めておいた。先立つものは手に入れたのだし、買い物でもしようかなとも思ったけど、特に欲しいものが無いというのが本音だし、行きたいところもない。したいことがないと、人生はつまらない。改めてそう思う。

考えるのは面倒だと視覚を頼りに街の中を彷徨ほつじうする。確かに文化の違った建物を眺めるのは面白いけど、はつきり言って風情がない。……風情、うん。風情とはまた違うけど、大陸では宝石や硝子を使ったきらびやかな細工が良かったということを思い出して早速、それらしい店を探して回ることにした。宝石は無理でも硝子細工くらいは売っているはずだ。

そんな私の希望に応えたかのように、その店はあった。しかし、店の中はやたらと影が濃い。要するに、暗い。けど熱気が肌に伝わってくる。中に人がいるのは確かだし、奥の方から私の嫌いな色合いの光がちらついている。どうやら硝子細工を作っている最中のようだ。

それにしても、あの光を見ているとどうにも足が進まない。だが、それでは何時まで経っても店には入れない。私は恐怖心を押し殺して中に入る。すると店の中が明るくなった。何かのカラクリなんだろうか？

驚く私の前に、一人の少女が走り寄ってくる。その姿を見たとき、私は危うく叫びそうになるのを何とか堪えた。叫んだりして傷に響

いた時のことは想像すらしたくない。

簡素な服に身を包んだまだどこか幼さを残した女は、不気味に赤い光りを照り返す黒髪に蒼い瞳をしていた。無駄の無い造りの顔で唇は桜色。それに頬はバラ色をしていた。夢で見たのとは多少の違いはあるが、間違いなく、あの女だった。

「いらつしやいませ。どうぞごゆっくりご覧ください」

女の反応は普通だった。ハハ、そうだ。夢で見た相手とそっくりの人がいたからと言って何をそんなに取り乱しているのだろう私はまったく、侍の魂を欠片でも持ち合わせているならこれくらいで動揺してはいけない。

目を閉じた状態でそう自分に言い聞かせて、意を決して目を開くと、女が興味深そうにじつと見てきている。何故だか解らないが、居た堪れない気持ちになる。

「何？」

「お姉さんとしても綺麗・・・その服も、とっても綺麗です」

「そう、ありがとう」

姿見もろくに見たことが無いから私は自分がどんな顔をしているのかよく知らない。ただ、綺麗だと言われるのは滅多に無いことだった。こんな風に店に顔を出すこと事態、滅多になかったのだと重ねて思う。

段々と気になってきた。愛刀を鞘から少しだけ抜いて、自分の顔を映して見る。鷹のような鋭い目つきに緑の黒髪、死人のようであるが確かに生きていると感じられる白く透き通った肌。何だか蒲柳ほりゅうの質のような華奢な女だと我がことながら思う。そうして顔の造りな

ども見て私が下した評価は、確かに美人だということだった。しかし、瞳孔がはつきりと見えない死んだ魚のような目は、いつか見せてもらった人形を連想して気味が悪い。

「それ、剣ですか？」

怯えたように言われてはっとする。女からすれば私が抜刀しようとしているように見えるのだろう。

「少し姿見代わりにしただけ、他意は無い」

言葉と共に刀を鞘に収めると女は安心したらしい。「それじゃあ、ごゆっくり」と言って店の奥へと消えていった。

真っ先に興味を引かれたのが耳飾りだった。ああでもないこうでもない、時間をかけて幾つか選んだ物の中で、一番気に入ったのが、真珠のような光沢を持った不思議な蒼い石の嵌まった板を吊り下げたやつだった。これを買おうと決めて店の奥に声をかけると女が慌てて走って来た。

「ありがとうございます。こちらはシンフォニーガラスというのが使われていますから、他の物より少し高いですよ？」

「おいくらですか？」

大陸での金勘定の仕方は事前に学習してある。値段を聞かされて確かに高いとも思ったけど、換金して得たお金にはそれを差し引いてもまだ余裕があるということ、財布の紐を緩めることには全く抵抗が無かった。

買った耳飾りをさっそく着ける。どこか新鮮な気分だった。

「その耳飾り、大事にしてくれろと嬉しいです」

どこか祈るようなその声から、切実な願いだということが解った。私はそれに頷いて踵を返そうとした、そのとき、

「・・・あのっ、私、お姉さんとどこかで会ったりしてませんか？」

と言われた。

刹那、全身が金縛りにあつたように動かなくなったことに気付かれていないかと心配していると心臓が暴れ始めた。死線を潜り抜けるよりも遙かに困難な壁にぶつかつた気分ではあるが、落ち着けば何ということはない。正直に答えればいい。

「会つたことは、ない」

その答えに女はすっかり意気消沈した様子で「そうですか・・・」
と言つと暗い影を引き摺つて店の奥へと消えた。

この答えが違つていたら、どんな未来があつたのだろうと、そう、
思わされる事になる。

五話 お酒は災いの元

私は、この大陸で過ごす最初の一日、朝日を拝むまでは眠らないと誓っていた。理由は漠然としたもので、そうすることで何か心の中に一本の芯が通る気がしていたのだ。

それまでの暇な時間、私は部屋を貸りた宿の屋根上で、筵の上に座って杯を煽って月見酒と洒落込んでいた。

饞別とは別に蔵から適当にくすねた物だったけど、美味しい。

一時の幸福感に浸って、それが無くなると、風呂の狭さに対する不満がまた顔を出した。

思うようにならない自分の心に窮屈な思いがして、それを酒と共に一気に飲み下した。

「ひっく」

………お酒を飲むにはまだ早かったらしい。私は早々に酔いつぶれて、眠ってしまった。

暗い景色の中にいた。

前にも似たような景色を見た気がしたが、似ているだけだった。

私が立っている道を挟むように見た目が同じ木造の家が立ち並んでいるのが、すぐ傍の桜並木がまとったぼやけた光によって解った。

どこか御伽草子を思わせる美しさだった。

桜色の光は障子越しのような優しい感じがした。故郷が恋しいのか？そう疑問に思っても誰も答えてはくれない。

少し歩こうかと思ったとき、車輪の回る音が聞こえてきた。徐々にこちらに近付いて来るのが解ったので、轆かれないように注意を

払いながら道の真ん中で待っていると、人力車がやって来て、私の前で止まった。

驚いた。人力車を引いている人間が黒染めした天蓋で顔を隠していることにはない。あの女が降りてきたことにだ。姿は夢と同じ、ということはこれは夢だということが解った。ということは、眠ってしまったのだ。

まずい、早く起きないと。そう思い焦る私は、腰にぐっと加わった力で夢に引き戻された。

女は私の胸に顔を埋めて、くぐもった声で言った。

「会うのは、三回目？」

一拍だけ、全身の脈が強くなる。それを女に気付かれてはいけな
いと思つたのと同じ時、女の腕の力が強くなった。

「会ってないって、嘘言つたでしょ？」

一歩一歩、踏み込むように放たれる言葉に、私の心は同じく一歩一歩、後退していた。夢の中では、私は赤子のようにか弱い存在だ
とここに来て本能的に理解した。抵抗できない。これが、未知の恐怖
と言つやつなのだろうか？

「嘘は言っていないよ。私は夢で会つても、現世では会っていない」

女の手が私の背中を撫でる。人の温もりの強さにクラクラする。

「分かった。おどかしてごめんね、母様。それと」

ちよつなら。

あの夢の、続きを見たような気がした。
酔いはすっかり覚めたようだ。ついで、目の前の光景を見たら眠気も覚めた。

私は、数人の屍の中心に立って、右手には愛刀を握っている。立ち位置から見て殺したのは私だろう。身に覚えはないが、寝込みを襲われた時、こんなことはしょっちゅうあった。しかし、どんな理由で襲われたのが解らない。それとも、酔った勢いで斬ったのかも思ったけど、それはさすがにないだろうと思ひ直す。

とりあえず、下が騒々しいので飛び降りてみると、周囲がどよめいた。

「ウソだろ、返り血一つ、浴びちゃいねえ・・・」

「それより上にいた奴ら、まさか全員、殺られたっていうのかよ？」

「落ち着けっ、全員でかかるぞ」

周囲の人間は誰も彼もが大なり小なり武器を持っていて、全員が私を見ている。状況がさっぱり読めない。

「うおおおおおお」

注意を喚起する雄叫びを上げて飛び掛ってくる相手に反射的に反応した瞬間を狙って他全員が全方位から攻撃を仕掛けに動くのが解った。中々の練度と言えるが、如何せん速さが足りない。

心眼のような感覚が相手の動きを捉えた。愛刀を手放し、手を袖の中に入れる。指先にしっかりと嵌まる感触と共に手を袖から抜いて、最初の一步でまず雄叫びを上げた男の腕の肉を今さつき着けた指輪包丁で削ぎ取り、次の一步、また次の一步と同じことを繰り返した。

そうして軽いカンナがけが終わったあとは腕を押さえて咽び泣いたり、地面を転げまわったり、気絶している人間で溢れていたが、命があるだけマシというものだろう。私は地面に刺してしまった愛刀を布で軽く拭いてから、鞘に収め、指輪包丁も隠した。

「トキナツ」

声に振り返るとカイルが顔面蒼白として私を見ていた。そこに貼りついた怖れは見慣れたものだった。

「カイル。状況を説明して」

その一言にカイルはぎこちなく頷くと、深呼吸を一つしたあとに説明を始めた。

「夜遅くに事件があつて、君に殺人の容疑がかかったんだ。それで、君を拘束しに向かった人たちが何時まで経っても戻って来ないから、一応増援も呼んで向かってみたら、この有様だよ」

つまり私は、最初の内なら濡れ衣で済んだ問題を、本当に人を殺してしまったことで取り返しが付かない問題にしてしまった訳だ。

少なくとも、屋根上で三人は殺したかもしれない。

申し開きも何も無い。私はおとなしく縛につくことにした。

六話 見えない結び目

ギルドの奥に構えられた牢屋の中には随分と質の良い机と椅子が二つ置かれ、一つに私が座り、対面に隻眼の男が座った。私に負けず劣らずの鋭い目をしていて、その奥にある光は私とは違った攻撃的な狂気が見て取れた。

男は煙草とかいう薬を吸うと、煙を吐きかけてきた。

「けほけほけほっ、けほけほっ」

咽る。なんて嫌な匂いなんだ。嗅覚にねつとりと纏わりついてくるし、喉が痛い。

苦しむ私を尻目に男は私から押収した武器、指輪包丁を輪に下げて、見せ付けるようにすると机の上に放り投げて言った。

「調べたら毒が塗ってあったが、一体何を塗った？」

「こほっ、し、神経毒っ……………激痛を引き起こして、敵の自由を奪う」

「お前、何をしたか分かってるか？お前のいた所がどうか知らないが、人を殺せば極刑は免れない。たとえ女でもなっ」

今までに陥った事も無いような状況に私は何も言えない。こういう場合、皆殺しが手っ取り早いと解ってはいても、何かが引っ掛かってそれを行動に移させようとはしない。

「……………」

「何とか言ったらどうだ？」

「何を言っても結果は変わらない」

正鵠を射たはずの言葉が気に障ったのか、男の拳が鼻の先にあつた。

「ふざけたことを抜かすと殺すぞ」

できもしないことをよく言ったものだ。もし、男の拳が私の顔面に入っていたなら男の拳は複雑骨折していたところだ。などと、力を誇示するようなことを思ってもどうにもならない。

しかし、このままいけば極刑が待っている。いや、ここはまず私 genuinely あの三人を殺したのかどうか検証する必要がある。

「屋根上の三人、手口は何だったの？」

「お前、バカか？」

「いいから、教えて」

「めんどくせえ、自分の目で見てこい。隣に安置してある」

手錠を嵌めた状態で隣の部屋へと移動する。そこにはきちんと並べられた仏が四つあって、その四つ目の顔を見たとき、驚きのあまり、一秒が永遠に化したように感じられた。

さようなら。頭の中でその言葉がずっと、反響していた。

硝子細工店にいたあの女が死んでいた。

それはそれで衝撃的だったが、あの男に言ったように、結果は変わらない。今はすべきことをする。

屋根上で死んでいた三人の死体を検分して、可笑しくて笑ってしまった。たとえ酔っていたとしても、こんな酷い斬り方はしない。これで私は自分がやっていないという確証を得たけど、他の人間を納得させるには、真犯人を捕まえるしかない。

よく見てみると、女の命を奪った傷と、他の三人の傷が酷似している。そうになると、犯人はセコイ奴だということが分かる。人に罪を擦り付けるためにわざわざ三人の屍を運び込んでくるんだから。そんなのは屋根上を調べればすぐに不自然な点が見つかるし、私が立って愛刀を抜刀していたということは……私も殺して、犯人は抵抗して死んだ」ことにでもする気だったに違いない。

だが、私は反撃なり威嚇なりをしてきて、逃げるしかなかった。ここでの犯人は運が良い。私が眠っていたから、顔を見られずに済んだのだ。犯人がもし、顔を見られたと思って逃亡したとしたら？ それは厄介なことだけど、突然いなくなれば不審に思われるはず。ただ、流れ者だったらどうしようもないが、私に容疑がかかったという時点で犯人は私を利用する計画を立てる必要があったことになるからその線は薄い。

結局、どうやって犯人を燻り出すのか、全てはそこにかかっている。

そうしてつらつらと考えていると、誰かの叫び声が聞こえてきた。「トキナは昨日ここに着いたばかりなんだっ！！人を殺す動機なんでもないし、するはずがないっ！！！」

カイルだった。しかし、凄い声だ。

「うるせえぞカイル！！じゃあ何かあ？！あの女がやってねえって証拠でもあんのかあ！！！」

張り合うようにして、煙草（仮称）が叫び返す。凄まじい声に周囲がビリビリと震える音を立てた。

「変なところがいくつかあった！死体が運び出される時に見ただけ切り口があまりに雑だ！！トキナはもつと上手だ！！！！それに屋根上を見てみただけ死体の傷口と比べてみて明らかに周囲の血の痕が少ないし、妙な血の痕も見つけた！！！」

「うるせえ！！！！じゃあ、どうしてあの女は剣を片手に下りてきたりした？しかも他の傭兵に怪我までさせてるぞ？仮にあの女が・・・真犯人とやらと鉢合わせしたとしてだ。追うこともせず剣を片手に降りてきたってのは不自然だが！」

ぐうの音も出ない反論だ。そんな煙草の言葉にカイルはしばらく黙っていたが、やがてこう言った。

「それはっ、彼女の茶目っ気だああああああアアアツツ！！！」

無茶を言う。まあ、屋根上に入ったという事は酒も見つけたに違いない。

それで、そのことを言うとな利になるからと考えてくれたの言葉なんだということは解るけど、本当に無茶を言う。もっと言い様があるというのに。

「バツカヤロウガアアアアツツ！！！」

煙草の堪忍袋の緒が切れたのか、怪獣のような叫び声を上げて、続いて破壊音が鳴り響き始める。このままだとカイルが危ないかもしれないので音のした方へと駆けつけると、そこには両手に盾を構えたカイルと鬼のような形相をした煙草が青空の下、瓦礫の上に立っていた。

二人は私の存在に気付くと、一斉にこちらを振り向いた。

「女、話は聞こえてたよなあ？どういうことだか言ってみろ！！」

「茶目つ気だよね！？トキナ？！」

カイルの言葉には首が取れても頷けないし、頷く気も無いので、はつきりと口にした。

「あれは正当防衛。向こうが勘違いして、襲い掛かってきた」

しーんと静まり返る。煙草は表情を消した。何か思い当たる節があるような顔だった。

「ほら！！正当防衛じゃないか！！！」

突如そう言いだしたカイルに煙草は再び鬼の形相を浮かべるが、疲れたのか、肩を落とすと私の前にやって来た。

「・・・仕方ねえから、とりあえず釈放してやる。ただし、お前も犯人捜索に協力しろ。それが条件だ」

私が頷くと、煙草は二回手を叩いた。

「はい」

元気よく返事をしてやって来たのは、大分幼くなってはいたけど、夢に出てきた女、そのものだった。

一体、どういうことなのか？

私は目の前の少女を眺めながら、ただただ、呆然としていた。

七話 挑まれた勝負

「私はノイル・イグジストって言います。どーぞよろしく、サムライさん」

そう自己紹介してきたノイルは煙草から私の監視を言い渡されている。もし逃走すれば刑は確定し、手配書が大陸のそこかしこに回るといふ話だが、逃げる心積もりなどない。あるのは真犯人を捕まえる。それだけだ。

とにかく、心惑わされている場合ではない。私はポーカーフェイスというやつで頷いた。

「サムライ？サムライって何なのトキナ？」

「私欲に流されることなく、また、己を乱すことの無い者を言う。そして、勝つためには手段を選ばない」

他を思いやるということも必要だと教えられたけど、それは口にしない。それに、長い台詞は私の喉が持たない。

「あ、武器に毒塗ってるんですね。なるほどなるほど」

ノイルは今ので納得したらしい。なにやら気になる笑い方だ。

一方、カイルは額に指を立てて考え込んでいる。

「……………トキナってさ、もしかして修行に来てるの？」

私は答えに詰まった。強い相手と戦うのは確かに好きだ。何より

私は、剣を捨てて生きることができないからここに来た。それはつまり、戦いを求めて来たとも言える。結論としては、カイルの言う通りなのかもしれない。

私は頷いた。すると、カイルがどこか好戦的な雰囲気を感じた。

「なら俺と戦って見ないか？トキナだって大陸の戦士の力を試してみたいだろ？」

「今は汚名を雪ぐのが先決」

「挑まれた勝負から逃げるのが、サムライってやつなの？」

その程度の挑発で闘争心を焚き付けられたりはしない。まして、心乱れることなど決してないが、カイルは私の中の土道、その火蓋を切ってしまったらしい。

「吹くね。いいよ。相手をしてあげる」

そしてそれは、落とされた。

だが、すぐに始めるわけにもいかないのが、遮蔽物の少ない開けた場所に移動する。周囲の人間は戦いの気配に聡いのか、私とカイルを取り囲むようにして集まって来ていた。その中にノイルが加わっているのを見届けてから、目測で初めの間合いを決めて距離を取る。

私の間合いが定まったのを感じ取ったのかカイルが構える。やはり両手に盾を持った。徹底的な守りが主眼なのだろうか？

「手合わせの前に、まずは名乗ろう」

「それじゃあ俺から……カイル〓サークス、盾使いだ」

いい心構えだ。私はカイルに内心で賛辞を述べつつ、抜刀する。

「三毒超克・・・・・・・・・・・・・・・・けいしゃむりゅう型捨無流、開祖。季節名・・・・・・
参る」

愛刀の野太刀、その柄の長さは一尺四寸強（約四十二センチ）。それを活かして棍のように回転させる。普通、刀を回そうとしたところで重心の問題からさほど速くは回せないが、切っ先の材料が他よりも重いこの刀はこうした扱いが可能だった。

何より、この切っ先の重さこそが、私の臂力の無さを補って余りある攻撃力を齎してくれるのだ。

「ソードの柄を使ってそんなことするの初めて見た。それにしたって、そこからどう攻撃を繰り出すの？」

少し試そう。

回転速度を上げたことで唸りを上げる刀がそよ風をカイルへと吹き付ける。まるで反応しないということは、変に深読みをしたり、虚仮脅しに引っ掛かたりはしないと見ていい。それが解ったので、回転の速度を徐々に緩める。

「・・・・・・・・・・」

攻撃の直前に剣気を叩き込むことで、これから攻撃すると伝えてから足を動かす。心臓が一回脈打つ前には私は既に距離を詰め切っていた。右半身を前にして、回転させている刃をそのまま振り下ろし右の盾を斬る。続けて右足で地を蹴り左足を軸にして回転する途中、刀を振り上げ、右足を踏み込むと同時に振り下ろし、左の盾を袈裟に両断する。

「・・・・・・・・」

自画自賛するようで気が引けるが、私の電光石火の早業にカイルはただ呆然としている。やがて盾が二つに割れて地面へと落ちた際の音に反応して何が起きたのか気が付いたようだ。

「・・・・・・・・あれ？ トキナ？ さっきまであそこにいたのに」

カイルのこの言葉は貴重な収穫だった。今まで戦った相手は必ず殺していたから解らなかつたが、どうやら、カイルは私の残像というやつを見ていて、私そのものが見えていなかったらしい。そんな境地にいたのかと思うと、天を仰ぎたくなる。そうしていると頂点が見えてしまった気がして、虚しかった。

だが、それは凄く自惚れだったとすぐに自覚する。不意を突いたカイルの拳撃がかわし切れず、頬を掠めて、そこから血が流れた。油断大敵とは、よく言ったものだ。修行不足を痛感する。

「トキナが速いのはよく分かった。でも、まだ勝負は着いてない」

全くもってその通りだと私も思ったので、頷いておいた。

「トキナは本当に速いよ。正直、まるで見えなかった。けどさ、剣の動きなら幽かに見えた」

そこで口を挟むことはしない。喋ると疲れるし、太刀の速度は必殺の段階までは上げてはいないからだ。

今の太刀を幽かとはいえ捉えるほどだ。あまり長引かせるとカイルの目が慣れる可能性があった。

慣れさせるのも面白そうだが、殺人鬼としての私が囁いている。

「手の内は一切見せず、即殺せよ」と・・・・・・・・殺しちゃいけないのに。

「攻守交替しようか」

カイルはそう宣言し、真っ直ぐに跳びこんできたところに私は兜割りを叩き込む。カイルはそれを強引に受け流し、近接戦の間合いへと 私の間合いへ 侵入してくると豆でもばら撒くように拳をばら撒いてきた。割れて無くなった盾の重みが減った分、速度が増しているのか、手強い。間合いを外させない囲むような攻撃。足捌きによる振幅の広さとその速度からなる体移動・・・・・・・・見事だと思った。

「シィッ」

しかし、避けてばかりもいられない。私は気合一閃、当たらないのを承知で裏を狙って斬り上げ、愛刀を宙へと放り出し、拳撃を見切って右腕を絡め取り間接を極めるとその状態のまま勢い良く放り投げた。 派手に骨が折れる音がした。

「ぐっ、うっうっうウウ」

投げられたカイルは地面に横たわったまま、痛みをぐっ和我慢していた。もう勝負は着いたかと思った。けどまだ立ち上がって戦おうとする戦意が見て取れて、私は困らされた。と、ここでノイルが割って入ってくれたおかげでこの場は収まった。

観衆もすっかりいなくなったあと、私は白い壁が特徴的な病院を眺めていた。ここに立っている理由は言うまでもないと思うけど、治療のためにカイルをノイルが連れて行き、私はそれについて来た

のだ。

大陸にある店はどれも暖簾のれんを掲げない。ただ売っている物が何か分かる絵の下に店の名前を書いた看板があり、他の建物との区別がしやすいよう壁を染めていた。

ここで素朴な疑問なのが、どうして病院の壁は白いのかということだ。

しばらく考えていると、カイルが扉の向こうから姿を現した。その腕に巻かれた包帯を見て、なるほどなという気がした。確かに、白はおあつらえむきの色なのかもしれない。

「お待たせ、いや、切り傷を覚悟してたから折られた時は一瞬だけ意識が飛んだよ」

後腐れのない様子のカイルは爽やかに笑うと左手の親指を立てて見せた。男が好きなのか？とりあえず意味のよく解らない合図は無視して、その隣のノイルを見る。前髪の奥に隠れた目と視線がぶつかったような気がした。

「サムライさんってカタナを振るものじゃあ……あ……ああ、勝つためには手段を選ばないから、戦い方も選ばないんですね？」

本当は刀を放り投げるなんて侍でも何でもない、無作法極まりない行為だ。なので、私は肩を竦めて誤魔化しておいた。

そこに空いた僅かな間に滑り込むようにしてカイルが言った。

「それじゃあ、犯人探しといこうか！！オー！！！！」

余談だが、この大声が原因で逝きかけた人が出たらしく、しばらく病院の人にお説教をされて余計な手間を取った。

八話 剣は戦いを呼ぶ（前書き）

一度消えてしまったのを復元したもののなので、
少しおかしいところがあるやもしれませんが、
気にしないでください。

八話 剣は戦いを呼ぶ

お説教から解放された私とノイルは一抹の寂しさを浮かべた顔を一人残されるカイルへと向けつつ、素早くその場を離れて行動を開始した。そのときにはもう、仮面は脱ぎ捨てていた。

私にとって「口に糊つける」方法は人斬りだった。だが、用心棒という仕事は決められた人間を斬るのが仕事だ。その経験上、狙った相手を見つけ出す方法というのは心得ている。そこでまず向かったのが、飲み屋だった。「酒場です」とノイルから即座に訂正を入られたが、細かい事は気にしなくていい。

ノイルに外で待つように釘を刺してから酒場に足を踏み入れ、全体を見回す。ここは宿と同じで木造というところがとても気に入ったが、その辺の観察はさつさとやめてもう一度見回す。私に向けられた視線の中に緊張の色を含んだものが多数あるが、少なくとも犯人らしきものは感じられない。

それにしても、私の着物姿がよほど珍しいのか感じる視線が増えてきている。つまりそれだけ目立つということであり、犯人の目に留まったのは偶然というより必然というやつだったようだ。

ここで、頭の中にぼんやりとした光が浮かぶ。網にかかったのだ。私は直感に従って奥の席に座っている男の正面にある席に座った。そして素早く袖の中から金貨を一枚取り出して投げる。それを受け取った男は用件を察して周囲を注意深く見ていたが、私を見ると大げさに溜め息をついた。

「こつそり話するから内容までは聞かれないにしてもだ。話してたつてことがバれてんじや意味無いぜ」

金貨を投げ返される。私はそれを捕って言葉を返す。

「迷惑はかけない。教えて欲しい」

言つて、再び金貨を投げると男は受け取つて、私の目を覗き込んだあとでまた大げさに溜め息をついた。

「女の癖してなんつう目してんだよ。いいぜ、無理やり吐かされるより金もらえた方がマシだしな」

男はどうやらそれなりに鍛えられた勘を持ち合わせているようだ。素直に嬉しい。無理やり吐かせないで済むのはこれが初めてだった。大抵、私を子供だと侮るため無理やり吐かせるのは当たり前だった。その過程で、指輪包丁などの拷問道具が生まれたのだが、その辺りの話は置いておこう。

「下手に口を滑らさないように禁酒する日々とお別れできる。まあ、たかだか一日だが……アンタなら勝てると思つて言つけどな、もしアンタが負けたらこの世ともお別れだ」

「言つた。迷惑はかけない」

「へへっ、信じてるぜ。アンタが探してる犯人の正体は、ラング。特A級の、傭兵だ」

特A級……もしかすると、私を推薦してくれた人物かもしれないが、違うという気がする。

私の切り口を鑑定までしておきながら、それを偽装に使わないというのはおかしい。

それとも頭の切れが悪いのか？

「そんな相手の犯行を目撃してよく生きていたものだ」

そこは是非とも聞かせて欲しいところなので、喉を酷使して尋ねた。

「あいつが死体引き摺って宿の屋根上に行って、下りてきたら怪我してたのさ。相当焦ってたぜ」

「それをギルドの方で証言してもらえない？」

「アンタについて行く形でなら問題なさそうだ。ただし、カタつけてからな」

「どうして？あなたが言ってくれば、それで解決・・・」

男の言っている意味が分かった。背後から感じる殺気、間違いなさそうだ。振り返ると鋸刃の大鎌を背負った赤錆色の髪と目をした大男、ラングがこちらを睨みすえていた。何故かは知らないが、怨念に近いものを感じる。

「貴様が、四人を殺害した異人というのは。今ここで葬ってやる」

白々しい口上をよく自信満々に並べ立てられるものだ。そう思いながらラングの右手に握られた酒瓶を見て、その自信の正体が知れた。

カイル。回収くらいしておいてくれても罰は当たらないはずだ。仕方ない。もうしばらく、喋るとしよう。

「決闘？受けて立つよ」

「決闘？馬鹿を言うな」ラングが右手を上げると、店の中にいた人間が一斉に立ち上がり武器を構えた。

「罪人は即刻処刑だ」

「おいおい。泳がされてったことか？　おいアンタ、このままじゃあ一網打尽だぜ」

男自身が言うように、私が行き着く先の手掛かりとして泳がされていたのだろう。私をここへ誘き出して抹殺するために。図体のわりに細かい考えをする。というより、そこに頭が回るならどうして切り口を真似しなかったんだ？ラングはどうにも、カンゼンハンザイというやつとは無縁らしい。

余り呑気にもしていられない。まず、気配を探る。数は、全部で十五というところか。好都合な事にノイルはいち早く逃げてくれた。続けて思考する。この局面を乗り切った先のことを考えると、ラング以外は始末せずに落とせばいい。簡単だ。

愛刀を抜刀し、鞘を手放すと同時に動く。心臓が鼓動を一つ刻むその前に、十四の露を払い。刻み終える瞬間にラングへと必殺の斬撃を放つ。

だが、それはものの見事に止められていた。

舞い散る火花の向こうでラングは笑っている。私としては、まるで笑えない。

「真っ先に俺を斬らなかったことが災いしたな。斬ってくる瞬間が分かちまった」

目が良いのではなく、勘が良いということか。そういう手合いは厄介としか言いようが無かった。頭の切れはともかく、この男、間

違いなく強者だ。つわもの

「フツ」

左足の脚力を全開にして跳ぶことでラングを吹き飛ばし、私は広
い外へと戦いの場を移すことに成功した。

そこで、私はするべきこととする。目の前の敵へとはっきりと聞こ
えるように名乗る。

「型捨無流、開祖、季節名。恨みは無いが、斬らせてもらおう」

「やれるものなら、やってみな？」

ラングは鎌を振り下ろし、構えた。

そのとき、驚くべきことが起きた。ラングの全身が炎に包まれた
のだ！

大陸の強者は、何とも妖しげな術を使うものだ。

私は堪え切れない笑みを微笑に変えて、愛刀 『季節名』を八
双に構えて対峙する。

ラングのそれを剣気と呼んでいいのかは解らないが、相手の剣気
は私のものよりも強い。それはつまり、私の敗北を意味していた。

だが、血を吐く覚悟でなら、その剣気を超えることは難しくない。
私は大きく息を吸い込んで、叫びという爆発に変えた。

「セヤアアアアツッ！」

海を割る。その覚悟、気合いの全てを乗せて踏み込む。

完璧な間合いから放った渾身の斬撃は防御の構えを取ったラング

の鎌を容易く両断し、ラング自身を両断する

「特A級　　　　どういう理由で特Aと呼ばれるのか知らない貴様は、俺に勝てない」

はずだ。だが、現実はどうだ？私の斬撃はラングを包み込む炎にせき止められていた。

「まあ、俺が特Aになる前だったなら、貴様の方が遥かに強かっただろうがな」

余裕というやつから、ラングは随分と舌が回っている。絶好調というやつだ。しかし、気になる言い回しだ。

「まるで、人間をやめたみたいな言い方だ」

その言葉に、ラングは口の端を吊り上げ、瞳の奥に狂喜を宿した。

「まさにその通り。だから、ただの人間でしかない貴様では俺に勝つことは、絶対にできない」

それでもない。人間の力は、私の力はこんなものではないと教えてやる。

ここで、ラングからの反撃か、私を飲み込もうとする炎から普段よりも素早く距離を取る。怯えて逃げると言ってもいい。その怯えは戦いにおいて致命的だ。現にラングは私の動きの違和感に気付き、シギャクテキな笑みを浮かべた。

「炎が怖いのか？ならいい。焼殺してやる」

この街の人間は本当に戦いの気配に聡いらしい。その判断も的確で、今回は被害を被らないよう非難しているのが解った。私としても、人がいなくなればそれだけ戦い易くなる。手を合わせて感謝したいけど、それは命取りだ。

秋の風によく似た風が私とラングの間を通り過ぎた。

その風に舞う炎が、この瞬間だけは赤く色づいた葉のように見えた。

九話 涅槃

ラングとの苛烈な戦いは日が暮れても終わらなかつた。あまりの人外ぶりに「こいつの方がよっぽど魔物だ」と、そう呟かずにはいられない。ただし、心の中でだ。喉、もとい気道がそろそろ限界だった。それというのも、ラングが周囲のものを破壊してそれを燃やすことで熱と煙を出して私を苦しめるといふ策の成果だった。

大火の中に置かれた私は今一つ、集中できずにいた。炎への恐怖を増長させる肌を刺してくる熱、目と喉を突く煙。今や、世界も敵となっていた。

そう思ったとき、激しく咽る。口許を覆った手を見てみると、血が付いていた。限界なのか？そう思うのと同時悔しさが込み上げてきた。戦う内にラングが人間だった時の実力というのを把握しただけにその思いは一際だった。ラングが冥府魔道に堕ちてまで手に入れた力を己の物にしていたならまだしも、その恩恵にあやかっているだけなのだ。力に溺れ、力を過信したラングには侍として、負ける訳にはいかない。

ならば、勝つしかない。勝つためにはどうすればいいのか、距離を置いたまま火の妖怪と化したラングを注意深く見る。何かまだ見落としているとしたら、それは何なのか、見切れ、見切るんだ。そう自己暗示を強めて集中を高める。

やがて、視界に映るラングの姿が濃い影のように黒くなり、右胸の辺りに小さく輝く紅い光が見えた。それを捉えた瞬間、勝手に体が疾走する。頭の中にはその一点を突く、それだけしか考えられなくなっていた。

「くそっ」

ラングがそう忌々しげに呟く声が聞こえた。

気付いた時、私の刺突は寸前で止められていた。一変していた視界は元に戻り、次の瞬間には眼前に炎の拳が迫っていた。

「ウアアアアアアア

」

今までに感じたことの無い痛みが左眼を襲った。紙一重で避けたところに飛んできた炎が左眼を焼いているのだ。あまりの痛みにも平常心を失いかける。

それを防ぐために私は躊躇無く左手の指を左眼へと突き入れ、抜き取って右側へと放り捨てた。残された右眼でそれを追うと、炎は消えることなく、私の左眼を灰にしたのだ。

やはり、斬撃を止められたときに感じたことは間違いでは無かった。

あの炎は、普通の炎ではないということだ。

「思い切ったことをする。そのまま痛みを持って余していれば、めでたく灰になれたものを」

まずい、左眼を失ったことに引き摺られるように右眼が光を失っていくのが解る。

窮地、そんな言葉が頭に浮かんで離れない。知らず知らずのうちに呼吸が乱れて速くなってきた。

「渴っ！」

張りの無い擦れた声ではあったが、精神力を高めるには十分な効果がある。私は頭の中を空にする。無我の境地とはいかないが、雑念を振り払う効果はあった。全身の血が冷えた水のようになって体を駆け巡る。音というものが遅くなって行って、やがて聞こえない

のと同じになる。

澄み渡っていく、どこまでも、どこまでも。

左眼を失った空洞が風を受けて疼くおかげで脈がはっきりと伝わってくる。

「ハアアア・・・」

私は跳んだ。高く、高く、風と一体となって、月を背に眺めるこの大陸の景色は、故郷よりもずっと広大だと解る。

心が踊る。この広大な大地にはまだまだ私の知らない素晴らしい世界があるんだと思うと、こんな所で終わりたくない、強く思う。それは一筋の光明のようで、羨望や期待といった心を引き付けてやまない魅力があった。

掴みたい。この心に浮かぶ光を 未来や可能性と人が呼ぶものを、本気で。私は、今ソレだけを望んでいた。

だからこそ、今ここで、立ち止まるわけにはいかない。

落下する私をリングはどうするつもりなのか知らないが、「剛」が通用しないのなら、「妖」で攻めれば良い。もう一度、感覚を澄み渡らせる。手負いになったことで意思の力を超えた領分での力が、極限の力が解放された今なら勝機はある。逆を言えば、今を逃せばあとは衰弱していくしかないのだ。

運命というのが振り子だとしたなら、今は中心で止まっている。生か死か、そのどちらに振れるのか。それを今から試す。

「型捨無流 光芒散花」
「こいつはみたか」

命名したのは組長だ。刀が月明かりを受けて振られ、幾筋もの光芒となって、それが散った花のように見えたことからこの名が付い

た。はつきり言つと超高速の乱回転剣舞で、手数を重視した技ということだ。

最後の一振りが、剣舞が終わる。そうして光の花が散ったとき、ラングの命は

「貴様ア、やってくれたな・・・」

散ってはいなかった。しかし、その体は切り刻まれ、あと一歩というところまで追い詰められていた。読んだとおり、一撃必殺の太刀は一撃、つまりはたった一度の攻撃だ。本来ならば止められる道理などありはしないが、ラングの妖術はそれを受け止めた。それは全力の一撃に全力の防御を行っているからであり、一撃だからこそ、勘の良いラングはその一撃が来る箇所へ力を集中して受けられる。

ならば、手数を増やせばその防御が追いつかなくなるのでは、そう思い立ったのだ。その予想は、見事に的中していた。

「終わりだあつ」

宣言と共にラングの拳が迫る。左眼という代償を払った私は、既に見切っている。空中で姿勢を巧みに制御して回避、着地する。

間合いは、十分に詰まっている。視界がさつきと同じ紅い光を捉えた。私は確信している。そこが、奴の弱点なのだ。

闇に塗りつぶされた世界を切り裂くように、私は、この戦いの決着に相応しい奥義を繰り出す。

そうして繰り出された刺突は、激昂して我を見失ったという予想に反したラングの下から突き上げる拳撃に弾かれ、私の手から離れた愛刀は、天高く宙を舞った。

「今度こそ、」

ラングが言葉を言い終えぬうちに、私は、その先の言葉を引き取った。

「終わり」

私の手に握られた小太刀は、真っ直ぐラングの右胸を刺し貫いていた。燃え盛る大地は瞬く間に夜の暗闇を取り戻した。

「なぜだっ、いつの・・・間につ」

「型捨無流奥義　ニルヴァーナ。その意味は、　炎の消滅。私
が、一番好きな外来語」

私が命名した奥義。それは私の怖れを消し去るという意味と、相手の命を炎に喩えたことから由来する。それにしても、初めて奥義を使うことになった相手が火の妖怪とは最高だ。笑いが止まらなかった。ただ、笑うと吐血した。それに炭が混じっているのを見て、私はどこか諦めたような溜め息をついてしまっていた。

私はとうに限界を迎えている喉に鞭打って、ラングに冥土の土産を持たせることにした。ただ、言葉は極力削らなければならぬ。

「いつの間に、違う。最初からずっと握っ、てた」

一尺四寸強の柄、それは柄と言う役割も兼ねた仕込み刀なのだ。そう、あの刺突は如何様だ。弾かれたことで得物を失ったと思わせ、油断させたところで、神速の刺突を突き込む。

三段構えの最終奥義。その三段目が、前のめりとなったラングの首を刺し貫いた。炎が無ければ只人と同じ固さだということ、あの男の言から既に知れていたから、これで幕だ。首から愛刀を引き

抜き、仕込みを納めて留め具を固定する。それと、そろそろ意識を失くしそうなので、私は最後の力を振り絞って、倒れたときに着物を汚さぬよう、筵を敷いた。

頭が痛くて割れそうだ。そう思ったとき、私の体が傾いでいくのが解った。

十話 平和なとき

気が付けば、寝台の上だった。すぐに視界に違和感を感じて、ラングとの死闘を思い出した。カイルとの戦いよりも遥かに高い授業料というやつから学んだことが何かを感じ取るうとしていると、扉が開く音と共に人が近付いてくる気配を感じた。

「トキナツ！久しぶり！！目覚めてすぐで悪いけど聞いてほしい。君の容疑は晴れたよ、おめでとう」

カイルの話によると、やはり犯行の野暮ったさが目立ったようだ。本人が死んだことで口を割る人間も何人が現れたことも手伝って、とんとん拍子に事件は終息を迎えたいらしい。ただ、ラングが何故、あの女を殺したのかは永遠の謎となった。

晴れて無罪放免となった訳だが、それは予想通りのことだった。ラングの犯行が穴だらけだったのは解っていたことだし、それを補うものが暴力であることも知っていた。つまり、その暴力を取り除きさえすれば自然と解決する事件だった。

カイルは黙って頷くだけの私を心配するような顔で見ると、

「ここ数日、ずっと眠っていたから心配したよ」

と言った。本当に心配してくれていた。私はそのことに感動してお礼を言おうとしたが、声が出なかった。そんな私の様子を見たカイルがあのだ闘の傷跡は体の外よりも中の方が深刻だったと教えてくれた。

なるほどと頷くと、自分の服装がおかしいことに気付いた。あの死闘で、私は着物に煤汚れ一つ付けていないというのに、勝手に着

替えさせられていた。理由はよく解らないが、頭に血が上った私は部屋中を荒らすようにして探して回った。やがて壁に見せかけた戸の奥に仕舞われていたのを発見すると今の服をさっさと脱ぎ捨てる。そこでカイルが慌てて出て行ったが、私の知るところではなく、着物に着替えた私は寝台の脇に立てかけてあった愛刀を手に部屋を出た。

すると、間髪入れずカイルに肩を掴まれる。不覚にもふらついてしまった。左眼を失ったことで、感覚がわずかに狂っているようだ。

「待ってくれ。トキナはこれからギルドに行かないと」

カイルの言っていることに疑問を感じた私が振り返ると、カイルは両肩を掴んできた。思ったよりも大きな手だった。

「ラングが死んで特A級に欠員が出た。それも魔物との戦闘でも病気で年からでもない、一騎打ちでの敗北で、相手はただの人間のトキナだ。これって、大陸の歴史上で初めてのことなんだ。すごいよ」

私を気遣ってくれているのか、ここが病院の中だからか、声の大きさを抑えてそう言った。

それからしばらくして、私とカイルはギルドへとやって来た。疑問に思っている用件を聞くこうにも喋れないのだから、直接行ったほうが幾分かマシというものだった。

ギルドの中に入ると、最初に会った金髪碧眼の女性が深々と頭を下げて謝ってくれた。私としては女性には何もされていないのだから謝れるのは意外だったが、「ギルドを代表して」と言うので、素直に聞き入れておくことにした。そうして過去を清算すると、私一人が女性に連れられて行った。その行き着く先は地下の一室で、何故こんなところに連れてこられたのか解らない私は首を傾げていた。

特に危険を感じなかったので、ここまでついて来てしまったことが、果たして正しかったのかどうかを思索し始める私に、女性が振り返って言った。

「トキナさん。あなたは今回、特A級の賞金首のラングと交戦し、それを倒しました。よって特例として、あなたを特A級へとこれから昇級します」

これらの言葉とラングとの戦いで記憶から私は、一つの未来を予知した。私が、ただの人間ではなくなるという予知を。予知したというよりも、確信したと言ってもいい。選択権は、私の手にはなさそうだ。ただ、ラングの呼び方が傭兵ではなく、賞金首に変わっているのが気になり首を傾げると、「ラングは街を火事にしました。その時から彼は狩る者から、狩られる者になっていたんです」と笑顔で説明してくれた。

私は女性の一見変わらない笑みに、何か得体の知れない影を感じていた。言うなれば、太陽のように普段輝いていて見えなかったものが突然、月のように光を加減してその表面を僅かに覗かせているような感じだった。ただ、太陽も月も遠くて細かいところは知れない。しかし、遠いからこそ全体が見える。適した距離が定まらない女性の心を読むのは至難の業なのだ、私は確信した。

「これを」女性がそう言って差し出してきた瓶の中には目玉が浮かんでいた。「トキナさんが眠っている間に適正を調べ、それに合ったものを先日、中央より届けてもらいました。魔獣キメラから抽出した、神獣グリフオンの目玉です。薬品で小さくしてありますから大きさには問題ありませんよ」

説明に出てきた獣が何かは知らないので無視しておくこととして、左眼を引き抜いたときは、痛みが痛みを殺してくれていたからでき

たことだ。普通の状態で目玉を入れるだなんてできるのか、私は不安になった。それに、人間をやめてしまったら人間としての自分の強さを失いそうな気がして、気が引ける。

そう思いつつも、私は包帯を外して目玉を手取る。すると目玉から水より反射してきたような不可思議な黄金色の光が発し始めた。女性はそれを見届けると、私を一人置いて行ってしまった。

一人残された私は、グリフォンという獣の強さを感じていた。全身が強く脈打ち、力が湧き上がるのを感じる。手の上で軽く転がして瞳を覗いて見ると、今発している光と同じ、黄金色だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何を躊躇う？

無言の内、心でそう呟いた。

一度頷いて、覚悟を決める。私は仰け反るようにして目玉を左の眼窩へと押し込んだ。

躊躇ったほうが、良かった。食べて命が繋げるのなら、部品も代用が利くのかもしれない。その想像だけの甘い判断は、現実では苦しみを招く結果となった。

私の新しい左眼となった獣の一部に頭の中を食われたような言い表せない感覚、心臓が増えたような鼓動の乱れ、朦朧として霞んでいく視界。湯気が立ち上ってもおかしくない熱さを体の奥から感じたそのすぐあとに、私は痛みに耐えるために固く閉ざしていた左眼を開いた。そのとき、私の視界は光に灼かれた。

私はその圧倒的な光に、神の存在を幻想した。

気付いたとき、私は筵の上に愛刀を抱えて座り込んでいた。

何故か辺りは暗闇だった。それが両目を固く閉じているからだと解った私は目を開くが、右眼しか開かなかった。

左眼を軽く撫でる。中身はあるから問題は無いのだろう。それに、

失った時点でこの先の苦難と戦う覚悟はしていたのだ。まだ右眼が残っているならそれでいい。

無いものをあつたことにして物を考えるのは好きではなかった。そう、独りごちたところで女性がやって来た。

「上に来てください。賞金の受け渡しと特A級の資格をお渡しします」

ラングを倒したことで、法外な額のお金と資格を受け取った私は、それを使って近くの滝の傍に草庵を建てることにした。

半年という時間をかけて建てられた草庵は、故郷のものとは大分建築の様式が異なる。さすがに故郷そのままの造りでは、家としては役に立たないと大工に言われ、大工との話し合いの末、気候に合わせてしたものにしたところ、全体的に厚みを増した。ちなみに、暖を取るための仕掛けについて少し揉めた。この大陸での暖を取る仕掛けの暖炉というものが何かを見た私は、その炎をちらつかせる様を嫌悪し、何とかならないかと言って、大工にセントラルヒーティングとかいう暖房を導入させ、その上で囲炉裏を作るようになるなどの数々の要望を出していたら、土地を食うようになり、実際は草庵とは全く別のものに、そう、壁のない屋敷となっていた。

こんなはずじゃなかったと、言いたい。しかし、私の喉はラングとの戦い以来、全く使い物にならなくなっていた。

私は自分が思うよりもずっと、贅を尽くすのが好きなのかもしれないと、耳飾りを弄りながら思っていた。

半年の間、カイルとノイルとは何度か顔を合わせて、向こうが暇な時に色々話を聞かせてくれるというものだった。私は喋れないので、それは当然のものとして出来上がったひとつの形だけど、やはり話せないというのは人間としてあまり付き合えないということであり、それほど親しくすることもなかった。ただ、噂によると魔物の数は増えているらしく、その忙しいなかで私のところへと会いに

来て話をしに来てくれるのだから、気の良い人たちだと思った。

私は金銭に不自由しないということもあり、傭兵を半ば辞めている。ギルドはそのことに何も言っては来なかった。いや、一言「それでもトキナさんは特A級です」とだけ女性に言われた。広く門戸を開いている組織だけに束縛する真似はしてこない。だが、時折ギルドの役人のような者がここを訪ねて来て魔物を退治して欲しいと依頼をしてくるので、私はそれを引き受けて魔物を斬り捨てていた。報酬をたくさんもらうので、今ではどう使えばいいのか解らないくらい貯えができていた。

矢の如く過ぎ去った日々はもちろん過去のことになる。そして、これからのことが始まる。

それはまた 夢から始まるのだ

十一話 笑いは時として人を殺す

相変わらず、そこは暗かった。

そう思うほどにここに馴染んでいるのか自分でも解らない。ただ、ここは暗いのだ。そして、その中でくつきりと色づいて見える景色はいつも違うもので、今回は蛍のように儂げな光が無数に散りばめられていて、私と女は水面に立っていた。

これがただの夢なのか、それとも現実に関わることなのか判断できない私は思い切つて女に尋ねようと思つたが、現実と同じようにここでも喋ることはできず、それが腹立たしかった。

更に腹立たしいのが、女のくすくすとした笑い声だった。理由もなく斬つて捨てたくなる響きを持った声に眉を顰めると、女はどことも解らぬ場所を指差して言った。

「このたくさんさんの光が何か、母様には分かる？」

首を横に振ると、女は浮かべていた笑みを消して私に告げた。

「これは、母様が奪った命の数だよ。数えてみたら、三千はあったかな？」

三千人を斬つて捨てた。それは私も当然知っている。そして、故郷の人間は千人は斬つたということを知っている。それは怪談として語られるなどして、人呼んで、殺しの神、殺神と呼ばれていた。もつとも、怪談に使われるところからも察してもらえらると思うが、その姿を知る者は、組長以外はいない。だから、大抵の人は御伽噺だと思っっているはずだ。

のんびりとした風に人の過去を蒸し返している女は平然としていて、再び顔に笑みを浮かべた。

「お家建てたんだよね？お金にも困らないよね？それでなんで、剣を捨てないの？頼まれたときに魔物を殺すため？それとも他に理由があるから？」

私という心が生まれた時から、私を生かしてきたものは刀だった。たとえ今が満ち足りたものであったとして、仮に刀が不要だと思われることがあっても、私は刀で、刀は私なのだ。刀とは侍の魂だ。決して、捨てはしない。

それよりなにより、名前という一つの本質が同じなのだ。そう、私は『季節名』なのだ。

「ふうん、母様って違う陸の人だもんね」

まるで私の心を読んだかのような言葉だった。何故読めるのか疑問に感じてじつと見ると、女は笑みの質を変えた。

「母様、私に何か訊きたいことがあったら、喉を直してね」

その私は誰なんだと、水の中に沈みながらも私は問いたかった。夢とは思えない苦しみの中で、おぼろげで、得体の知れない女への疑問は深まるばかりだった。

目覚めは最悪だった。柔らかい陽射しにさえ敵意を向けたくなくなるほどに、私は不機嫌だった。髪は汗で肌に張り付き、寝巻きは生乾きよりも僅かに湿った状態だった。その体にまとわりつくような水気が本当に溺れたのではないかと要らぬ想像を掻き立てて、私はより一層、不機嫌になっていた。とりあえずこの酷い寝汗を風呂で流

して着物へと着替える。それから縁側に出て風に当たって涼みながら、髪を乾かしていると、カイルがやって来た。その嬉しそうな顔がやたらと気になった。

「トキナ、少し遠出をしないか？ 滝に打たれて修行するのもいいけどさ、たまには外に出ないと……えっと、これは建前でさ、ほら、こっちに修行に来てるならアツチエントで行われる天武祭に出場してみない？ そこに行けば、腕の良い医者もいるから喉も診てもらえるし……えっと、ダメかな？」

駄目ではないと、そう伝えようとすると、ノイルがやって来た。私は知らずそれを咎めるような目で見てしまう。

「ふえつ、サ、サムライさん？ 何で睨むんですか？ えーと、もしかしてお邪魔でした？」

これに私は首を横に振った。しかし、カイルは首を縦に振って言った。

「お邪魔かな。トキナの機嫌悪くなっちゃったし、もし、断られたらノイルのせいだからな」

「ちょっと、サムライさん。お願いだから断らないでえ」

縫りつかれた私は、ほとんど困り果てるしかない。この少女を突き放すのはいささか以上に気が引けた。

紙のかさばる音がした方に手を伸ばすと何かを掴んだのが解った。それを目の前に引つ張つてくると封筒があった。

「あ、それサムライさん宛てに来た手紙ですよ。印章からすると教

会からですけど、どうにも目的が透けてるんですよね」

ノイルはろくなことじゃないと、そう言っているのがよく解るが、わざわざ便りをくれたのだから、読まないのは失礼だ。開封して中に目を通す。

『急啓（時候の挨拶は無かった）季節名様にはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、本日は突然のことで誠に恐縮なのですが、お願いしたいことがあります、書状をしたためました。

じつは近々行われる決済に、どうしても金貨二十枚が不足しており、困っています。

つきましては、大変恐縮ですが、金貨二十枚を拝借できないでしょうか。

もちろん正式な借用証書は作成いたします。

身内でもない季節名様に甘えるのは筋違いだというのは重々承知のうえですが、日々の生活に追われ、

何の貯えもなく、もう、こうしてお願いすることしかできないのだということをご理解くださり、よろしくご配慮いただけますようお願いいたします。

どうか、お願いいたします。（まずは、書中にてお願いまで。）

草々
『

異国の言葉で綴られているので少し手間取ったが、内容は大体こんなものだろう。しかし、出来の悪い手紙だ。近々とは何時なんだ。日時をはっきりさせていないので減点。更に、返すあてについて何も書かれていない。いや、書けないのかもしれないが、普通それでは、まずお金は借りれないので減点。それと、かなり厳しい状態かもしれないのにこんなことを思うのはどうかとも思うけど、利子はいくら払うのか書かないといけないと思うので、減点しておくことにした。

「・・・・・・・・」

私は多分、慥然とした表情をしていた。ノイルはしたり顔で二度頷くと、もう一通手紙を差し出してきた。急に面倒な気分になった私は、大儀そうにそれを受け取って中に目を通す。思わず、口の端が吊り上ってしまった。

「 トクエイキュウ トキナ ヘトツゲル ワガクニ アツチエン
トヘトハセサンジ ケンヲオシエヨ 」

私の故郷の言葉で書いたことから、誠意は認めてもいいが、脅迫文にも似た字の下手さに、笑いを堪えた。

「 国からの招待状ってそんなに可笑しいですか？サムライさん？ 」

そんなことはないと言ったと首を横に振るが、肩を震わせている私の姿はまるで信用ならないとも言つようにノイルは口を尖らせるとそばを向いて、何か見つけたのか少し口を開けてどこかを見つめている。そこに視線を合わせると、馬車がすぐ傍までやって来ていた。それを見て、私は手紙の続きを読んだ。

「 ムカエノバシャヲ ムカワセタ ソレニ ノツテコイ アツチ
エント オウツシ 」

「……ツ」と「シ」が逆になっているのが可笑しくて、私はお腹を抱えて身を擦った。体の震えが止まらない。これにはさすがに耐えられる自信が無くなりそうだが、それでも私は侍だと自分に言い聞かせて耐えるのだった。

「……ツ……フフフフ」

鼻から息が抜けて変なことになってきていた。お腹の痛みを逃がすように何度も身を擦っていると、何を思ったのか、カイルとノイルが取り乱して、私を担いで馬車へと放り込んだ。

「はっ、早く病院に向けて出して！！トキナが！！トキナが！！内臓破裂を起こしたアアア！！！」

そんなものは起こしていないと言いたいが、どちらにしる喋れないう状況にある私を尻目に、ノイルが驚きの声を上げた。

「ええっ！サムライさんが死んじゃう！」

二人のこのあまりに大げさな台詞は、私を更に笑わせる結果となり、堪えるために余計激しく身を擦ることとなった。

そうして、必死に私を心配する二人と必死に笑いを堪え続ける私という図が余計に可笑しくて、やがて息が出来なくなり、病院に着いた時には、本当に死にかけていたとか、いなかったとか。

喉を直そう。そうしないと、生きることができない。私は、アッチェントへと出発することを決意した。

何の因果か。何にせよ、この偶然の一致は幸運だと思うことにした。

十二話 魔王の笑いが響く時

私たち三人を乗せた馬車は病院から出てからずっと、笑い声が溢れていた。

それを意識して聞かないようにしている私は、狭苦しいと思える小さな窓から、草原が風に揺られて波打つのを遠くに見ていた。太陽の中で動くその様子はどこか活き活きとしていて、心を和ませてくれた。

「ハハハ、噂では氷のような冷たい表情をした剣士と聞いていたが、ハハハ、笑い死にしそうになるほどによく笑うとっても愉快な女性だと分かって安心したよ。ハハハ、上司に『下手をしたらお前の命日は四日後だ』なんて四日前に言われまして、ハハハ、でも本当に良かったですよ。ええ、ハハハ」

このさつきからよく笑っている中年の男はエルムスという名で、アツチエントの騎士として私を迎えに来たらしいが、その上司の言葉は大体合っているだろう。私は火照った頬を無視しつつ、エルムスを今までには無い「理由」から殺そうと考えていたのだから。

「ハハハ、それにお友達も本当に愉快だ。アーハッハッハッハッハッハッハッ」

カイルは力無く笑い。ノイルは耳まで真っ赤にして俯いている。恥ずかしい三人組だと心の底から思った。しかし、最後にかなりわざとらしく、それも盛大に笑ってくれたものだ。でも、憎めないな。そうして笑っている姿はどこか、組長に似ていて、見ていると安心できるのだ。だが、その反面、あのような痴態を見られたと思うと熱病に浮かされた気分が殺したくなる。

私は馬車に揺られながら、自分にも語ることでできないこの大陸へと渡った本当の理由を考え、同時に教会という、大陸の寺院の存在を思い浮かべていた。故郷の南側にそれを真似た建物があり、何となく想像がついたので、そこで想像は終わり、そこからは少し、思い出を振り返ることになった。ほんの数日、見聞を広めるためにやって来たという貴族の少女、ほんの少ししか話をしなかったけど、彼女は私にとっても特別な言葉を残してくれた。それは私が勉強を重ねるうちに罪とは何かについて思い悩んでいると打ち明けたとき、

「罪は善行と同じく積み重なります。けれど、罪がその人の心の行く末を決めることはありません。決めるのはあなたです」

そう言って、私の中でわだかまっていたものの全てを取り払ってくれた。

別れ際に尋ねた自分を今もどこか齒痒く思う。もつと話ができたら、それはとても有意義だったはず。そう思うと、大陸に足を運んだのは彼女との再会を望んでいたことだと言える。だが、それも今一つ、合点がいかなかった。ただ、多くの理由が道となって、私をここまで歩かせてきているのは確かだった。

「それがトキナ様の剣ですか？背丈に合っていないように見えますね？ハハハ、それでも自在に振るうのですから、ハハハ、本当に凄いな、ハハハ」

私はずつと無言でいるとカイルが気を利かせて事情を説明してくれた。するとエルムスは、相変わらず笑っていた。本当に、よく笑う男だと思った。

そして、四日という月日を経て、アツチエントへと私たちはやって来た。

石造りの頑丈そうな門をくぐったすぐあとには大勢の人が賑わっていて、馬車では先に進めないということ、そこからは歩いて行

動を開始した。まずは、喉を直すためにエルムスに医者のところにある案内してもらったことにしたのだが、

「ならさっさと城へ行きましょう。ハハハ」

と、笑い飛ばされるように言われ、あっという間に城の奥へと連れて来られていた。城という建物は、そこかしこに柱があり、それを見ていると順番に斬りたくなるのが不思議だった。

しばらく待たされたが、アツチエント王は急務ということで謁見は先送りにされた。ただ、この国にしばらく滞在し、暇があれば兵に稽古をつけて欲しいという旨を伝えられ、私はそれを了承した。

王の急務ということで慌ててやって来た人間の様子からして一大事なのだということが解ったが、まさか、戦でもするのだろうかと思ったことから考えを広げているうちに、私は椅子に座って見知らぬ男と対面していた。腕の良い医者らしいこの男の名はアル口といい、若いのに髪が完全に白髪と化していることと、深緑を思わせる瞳の色と穏やかな目元が印象的だった。

「口を開けてください。喉を見ますから」

周囲には誰もいない。カイルとノイルはエルムスに部屋へと案内されているからだ。

とりあえず口を開けると、アル口の瞳の色が蒼に変わって私の口の中を凝視してくる。そこはかたなく気に入らないと思いきや、手が伸びたところで「もういいですよ」と言われたので口を閉じると、アル口は横を向いて頬を指で掻いた。

「それじゃあ治癒のマテリアルを欠損箇所埋め合わせます。首に触りますけど、殺そうとしないでくださいね」

すっかり見られていたらしい。私は仕方ないと頷いて、アルロの手を見ていると、太陽を模した記号がその手の平から浮かび上がり、それをそのまま私の喉に当てた。

日に当たっているときのような暖かさに目を閉じて浸っていると、やがて影が差したようにそれは唐突に無くなっていた。

「声を出してみてください」

「.....」

「何でもいいです。一言お願いします。そうしないと治ったのかわかりません」

「今のもう一度やって」

今までにないくらい快調だ。完璧だ。にわかには信じ難いことだが、私の喉は完璧に治ったようだ。

「あーあー」

声が出ることを確認している私を、アルロは驚いた様子で見つめていた。

「え？もしかして、陽術が気に入ったんですか？困った、まるで姫様のようだ」

「姫様？」

喋れる。言葉を越えた喜びの衝動が私を突き上げる。

「ええ・・・あの、大丈夫ですか？震えています」

「クククク、ククツ、アアアハツハツハツハツハツハツハ」

私は思う存分笑っていた。しかし、これを城に居た人間は「魔王が現れた」と言って大きく騒いでいた。

十三話 可能性との遭遇

記されし暦452年。

記されぬ暦と呼ばれる確かな歴史の空白は、この世界の中心が定められた瞬間に現れ始めた。

その世界の中心を定めた存在は、自然の法則に従うことでしかその法則に抗う術を持たない人間達に自然に従わない法則、後に魔術と呼ばれるものを人類に齎した。

一部の人々は魔術の出現と共に発覚した歴史の空白を疑問視したが、その他大勢の人々は魔術という新たな力に魅せられ、過去を振り返ることを忘れていった。

人々は世界の変化に引き摺られるようにして、かつての世界を忘却していったのである。

現在と未来しか見えなくなり始めた世界で、人々はひたすらに魔術を振るい、世界を変えていった。

変化した世界はやがて、人類以外のものにも変化を齎した。それは魔物と呼ばれる存在の誕生だった。

しかし、魔物は大陸と呼ばれる土地にのみ現れた。

その原因は何かと考えたとき、人は空を見る。

遙か遠く、この丸い球状だと何故か知られている世界を回す軸の如く、悠然とその中心に聳え立つ月光の柱を。

その月光の柱はこの世界のあらゆる力、あらゆる物質へと変わる謎の光、“アルケー”を発し続けている。

人々はそれを創造神の力の結晶、神の柱、ヤハウエの塔と呼んだ。このとき、大陸の人々は魔物の存在するこの時代を「試練」と称していた。

ある日、この世界にあつて唯一、魔術の存在しない国、そんな一種の異世界に生まれた殺人鬼がこの大陸に足を踏み入れ、一つの偉

業を成し遂げる。

魔物をその血肉の一部とすることで人を超えた存在、融魔を倒したのだ。

その者は名を季節名といい、その者の武器の名もまた、季節名と
いった。

『季節名』は、歴史に伝説として記される資格をその手に勝ち取ったのだ。

私は大陸の冷たい石の床がどうしても気に入らず、エルムスに案内された部屋を飛び出し、辿り着いた先の中庭の大樹に背を預けてぼんやりと騎士たちの訓練を眺めていた。この大陸を隅々まで見て回りたいと思っていたのに、屋敷を建ててまで一つ所に留まっていたのは、隻眼という不利を無くすため、心眼の本格的な修行を行っていたからだ。結果から言って、半年もの時を費やしたが、未だに体得はできていない。それはともかく、騎士の剣は型にはめた綺麗な動きだった。しかし、実戦ではどう動くのかと想像していると、草を踏む音がしたので振り返る。そこには太刀を持ったカイルがいた。

「喉、治ったんだってね。おめでとう」

カイルはよく祝ってくれる。その言葉は嬉しい限りだった。

「ありがとう。それで、それは何？」

「ああこれ？これはちょっとトキナに剣を教わろうかと思って拝借してきた」

「私に剣を？」

喉の治療は完璧だ。アル口には何かお礼をしないとならないな。

「ケイシャリユウだっけ？何だか気になってさ」

「型捨無流だけど、縮めてもいいか。教えるのは構わないけど、カイルじゃ全ては無理」

「うわあ トキナがこんなに喋ってくれるなんて、なんか、感動だ」

「そう？」

カイルは笑顔で頷いた。

「それで、全部は無理でも何か一つは教えてくれるんだろ？」

「「剛」形なら、奥義以外、全て教えられると思う」

「他にも何かあるの？」

「ある」

そう言っって横目で見ると、カイルは目を輝かせていた。

「トキナすごいよ。その若さで剣の流派を作るなんて。それで、ゴウケイの他には？」

「説明するよ。型捨無流は「剛」「柔」「妖」の三つの構えからなる介者剣術。介者剣術は鎧で身を固めた相手を斬ることに重点を置

いた剣術で、型捨無流は野太刀を使うから一応その傾向が強い。

それで、「剛」形というのは、刀の扱いにおいての基礎をひたすらに磨き上げた。剣の振りと呼吸を一体にしたうえで敵に防ぐことのできない斬撃を放つ、小細工一切なしの、欲を捨てた構え」

「そういえばさ、奥義っていくつもあるの？何だか、聞いた感じだとそんな風に聞こえたんだけど」

「一つの構えに一つずつ奥義があるよ」

その三つのどちらも、カイルには伝授することができない。だから、細かく教える気はしなかった。カイルも教えてはもらえないと諦めがついているようで、それ以上の追及はしなかった。

「へえ、まあ俺はカタナの扱いを教えてもらえればそれでいいかな。使う側になってみれば、色々分かるだろうし」

カイルの目に宿る闘志から私は悟った。いずれまた挑んでくるつもりなのだろう。大した男だと思った。

正眼の構えから一つ一つ、動きを見せて模倣させていく。そうして剣の指南をしているうちに騎士たちが手を休めてこちらをじっと見ているのが解った。

鬱陶しい。そう感じた。

「あれ？トキナ、どこに行くんだ？」

「気分が悪くなった」

「一人で大丈夫？」

「私を、見くびるな」

心配無用だと言いたかったが、私は不機嫌になっていたので、言い方を尖らせていた。

それからしばらく城の中を彷徨するうちに、ノイルの気配を見つけたので素早く背後に回る。数秒が過ぎた頃にようやく気が付いたノイルがこちらを肩越しに振り返って見た。

「サムライさん、勢いよく近付いて急に止まるから、風で髪が乱れちゃいましたよ」

ノイルは手で髪を梳きながらこちらに体を向けた。

「ああ、すまない」

「うわ、何でいきなり喋るの?!」

ノイルはぎょつとして、その場から後ずさった。

「喉が治ったから喋れるようになった。だから喋ってるんだ」

「声……何だか怖いですね。澄んでるんですけど、冷たい感じがします」

そう言って身震いしてみせる。私は、これも才だと思うことにした。

「それは良いことだ」

「そうですか？人が寄りつきませんよ？」

「私は、人の鳴き声の種類が多いのは好きじゃない」

人々の喧騒は好きになれない。あれは、五月蠅いのだ。

「はあ・・・サムライさんって人嫌い？」

どちらからともなく歩き出し、並んで歩きながら話を再開する。

「嫌いじゃない。ただ、大勢の人を見ているのが苦手なだけ」

「それで？サムライさんは私に何か御用ですか？」

「一つ訊きたいことがある。ノイルは不思議な夢は見る？」

「見ませんよ」と言って、前髪をかき上げると額を縄で縛った。「ただ、興味あります。その夢に」

突然の変化だった。生え際から髪の色が濃紺に変わり、肌は褐色に変わる。変化の後には、金色の瞳が私を見つめていた。

私は驚きのあまり、目をこすって目の前の光景を見直したが、何も変わることはなかった。

「これは、どういうこと？」

「今までの姿ですか？あれはまあ、事件の被害者に変装してたんです」

「それは何故？」

「ほら、似た人が生きてるって分かれば、気にする人が出てくるんじゃないかということでの変装でした。それが今の今まで続いてしまった、そういうことです。その理由はなんというか、サムライさんが犯人でないと判明した後も妙に気にしてたからなんですけど・・・どうなんです？もしかして、夢に出てくる人に似てるとか」

「よく分かるね」

「ふう、それならいいです。こうして会話して確かめたかったんです。これでようやく、元の姿で過ごせます」

大した仕事ぶりだと感心してしまう。ノイルは確証を得ない限り、行動を起こさない性質らしい。変装を半年もの間続けた根気強さは本当に見上げたものだった。しかし、

「何と面妖な・・・いえ、不思議な術を使うね」

教育の残り糟とでも言うべきものが表に出そうになったので、袖で口許を隠した。

「不思議ですよね。私も不思議なんですよ」

「そうなん、だ」

花畑が目に残ったので、興味を惹かれ、そちらに歩き出したときだった。

「わーッ！」

頭上から何か降ってくる気配と、声が出たので避ける。そしてさつき私が居た場所に幼い女の子が綺麗な着地を決めていた。藍晶らんしよ石うはねのような不思議な濃淡のある宝物のような髪を持ったその子は、幾度か屈伸運動を繰り返したあとで、こちらを怒りの形に変えた愛らしい瞳で見えてきた。瞳の色も髪と同じ色をしていた。

……何だろうか。この胸の奥を暖かくする何かは。

私がぼかんとしてその子を見るのと同じように、その子も私のことをぼかんとした様子で見っていた。

「おねえちゃん変な格好」

「君は、動き易そうな格好」

「うん、そうだよ」

にっこりと笑うその子は、私には考えられないくらい露出の多い格好ではあったけど、その笑顔に似合う活発な印象が感じられたので、すんなりと受け入れられた。

「おねえちゃんのお名前はなんていうの？あたしはエスタシアニア ツチエントっていうの。わーい」

両手を挙げて喜ぶエスタシア。私はどうして喜んでいるのか解らないので、事の成り行きを見守る事にした。

「名前ちゃんと言えたよー。えらいでしょ」

子供とはこういうものなのだろうか？同意を求めようと視線を送ろうとしたら、ノイルが逃げて行くのが解った。私だって子供は苦

手なのに・・・まあ、この子の相手なら別に構わないか。

「えらいえらい」

組長の真似をして頭を撫でると、エスタシアは嬉しそうに目を細めている。私はその姿の愛くるしさに微笑を浮かべていたのだが、突然、後ろから突然怒声を浴びせられ、エスタシアは怖がって身を縮めた。私は、気分が悪くなった。

「無礼者がっ！姫様に何をしているんだ?!」

「頭を撫でていただけだよ。五月蠅いやつだ」

肩越しに振り返ってそう言うと、騎士は怒りの度合いを上げた。それはともかく、エスタシアがアル口の言っていた姫様なんだ。あちこち走り回ったり、飛んだり跳ねたりして、怪我をしてくる治療をねだるといふ困り者らしいが、あの身のこなしからするとそうそう怪我はしないように私には見えた。

「おのれっ、騎士をぶじよ・・・その剣、そしてその格好・・・あなたはもしかやトキナ様ですか?」

「そうだけど?」

「そうですか。でしたら、仕方ありません。しばらく姫様のこと、よろしくお願いいたします」

「分かりました」

相手をきちんと見ることが出来る相手に助かった。騎士の背を見

ながらそう思っていると、着物の袖を引かれる。下を見るとエスタシアが不安そうにこちらを見ていた。

「どうしたの？」

「トーマスがいつもとちがうの。あたしを置いて行っちゃった」

あの騎士はトーマスというらしい。覚えておこう。

「それは、私にエスタシアのことを任せてくれたんだよ」

「そうなの？おねえちゃんはトキナっていうの？」

「そうだよ。私の名前はトキナっていうんだよ」

「よろしくね」

差し伸べられたのは小さな手。

「よろしく」

私は、その手を取った。

十四話 戦いの季節

その日から私は、暇さえあればエスタシアとよく行動を共にするようになった。とは言っても、殆ど暇なので一日中一緒にいることが多く、そのせいか、私が独りで稽古をしているのを不満に思ったのだろう。私に剣を教えて欲しいと言い出したのだ。私はそれを何故か快諾して剣を教えているのだが、教えるうちにエスタシアの天賦の才というものに惚れこんでいる自分に気が付いた。そう、私はいつしか、エスタシアに全てを教えようと思いついていた。

「天武祭？」

昼下がり、カイルが持ち出した話題はこの国で開かれるという一番強い者を決める大会の話だった。確か以前にも一度耳にしたことのある言葉だった。

「そう、天武祭に優勝すれば俺たち南側の領地を取り戻せるんだ！ トキナが出ればきつと優勝さー！」

「領地を取り戻す？その試合は何かを取り決めるための儀式なの？」

「まあね。中央は無関係だけど、東西南北それぞれの勢力は一年に一回、天武祭を行って陣取り合戦するんだ。参加者は中央も含めて各勢力から二十人の代表枠とそれとは別に六十人の選抜枠からなる百六十名を八つの区画に分けて一区画二人に絞って、残った十六人が本選を戦う。この残った十六人の中でどの勢力が多いかによって領地の分配が決まってきたりするから、予選とは言っても、かなり重要なんだ。」

まあ、細かいところは偉い人たちが一年間じっくり話し合って決

めるんだけど、その話し合いでの取り決めはさ、貿易とかに関わることもあって、それは本選で勝った方に適用される。だから、こっちが得するように良い条件を付け加えても、負けたら逆にその権利を取られるとか、そういう背景とかも色々あって、本当に色々、とにかく、みんなそれぞれに必死なんだ」

「それで、優勝にはどんな意味があるの？」

「えっとさ、優勝した場合は特別な権利を得られるんだ。これは各勢力がそれぞれ要望を出して、俺たち南はこのところ負け続きでさ、優勝したら取られた領地の返還が認められることになったんだ。でもさ、それってつまり、東と西は絶対に南が優勝できないと思ってるってことなんだよ。悔しいよな」

「話し合いで決められた権利、および領地の争奪戦……まるで、戦を遊戯にしたよう」

「まるでじゃなくて、その通りだよ。そうすることで、本当に戦争をしないようにしてるんだって。本当の話、こっちは楽しいお祭りだから俺は面白いと思う。面白いって言うと、二年前にあと少して金脈を掘り当てられそうだった時に負けてその山の金をまるごと掻っ攫われたって話もあってさ」

それは笑って言えることなのだろうか。疑問に思った私は口を挟んでいた。

「待つて。他の勢力に開拓をさせておいて、その利益を横から奪うのは問題になつたりしないの？」

「しないよ。奪われなくては勝てば良かったんだし、採掘権を

賭けたほうが悪いんじゃないかな？」

「ああ、それもそうか・・・そういえば、中央は無関係と言ったけど、その中央が勝った場合は？」

「それぞれの勢力の情勢を鑑みて・・・えーと、分配するらしいよ。中央はできることならこの体制を続けていこうって考えで動いてるみたい。ギルドで傭兵の階級を決めたりするのもその一環なんだって」

「へえ、そうなんだ」

「そうなんだ」

そこで、話は終わる。こちらに走り寄って来るエスタシアの姿を見つけたカイルは別れの挨拶も無しに去って行った。

「無礼者め・・・」

そんな呟きが苦笑と共に漏れていた。エスタシアはカイルが去って行ったほうをしばらく見ていたが、すぐに飽きたらしく私の袖を弱い力で引いてきた。これはどこかへ行こうという意味でエスタシアが送ってくる合図だった。

「そうだ。今日は教会に行こうと思ってたんだ。エスも一緒に行くよね？」

エスタシアはエスという愛称で呼ばれるのがいらしく、私はその要望に応じてエスと呼ぶことにしていた。

「うん。いく」

私は喉が治っても長々と喋るのは好きになれずにいたが、道中でエスタシアを退屈させる訳にもいかず、かといって、楽しい話の持ち合わせなど持っていないので、私は、治った喉を全開に活用して歌を歌って聞かせていた。

かつてあったとされる世界の歌を歌いながら、目的地である教会へとゆっくりと歩く。

エスタシアは走り出せばそれこそ韋駄天の走りを見せるが、歩くとなるとこれが随分とゆったりとしている。きつと走るときは急ぎ、歩くときはのんびりとしようというように明確な区別がなされているのだろう。

だが、それだけに私が歌う歌の数が増えているのには肩を落とすたくなる。

「冬はゆきて 春すぎて 夏もめぐり 年経れど きみが帰りを
ただわれは 誓いしままに 待ちわぶる ああ……………」

生きてなお 君世にまさば やがてまた逢う 時や来ん 天つみ
国に ますならば かしこにわれを 待ちたまえ

ああ……………」

『ソルベークの歌』を歌い終えたとき、エスタシアは笑顔で拍手をしてくれる。その嬉しい心ばえのおかげで歌うのは嫌いにならずに済んでいる。むしろ、心丈夫になれていた。

エスタシアは目的地を見つけると教会の門の前まで走って行って、こちらへ手招きしている。私はすぐに門の前まで行くとそれをゆっくりと開いた。

天窓から降り注ぐ光は淡い色彩に溢れているはずなのに、一箇所

から視界を白く灼く陽射しが開くことの無い左眼の暗闇を赤く染めていく。それは私の忌み嫌う光景にも似て、神は私のような者が嫌いだったと思い出して鼻で笑った。

礼拝堂の奥にはオルガンという楽器を壊れているにも拘らず、その鍵盤の上で指先を躍らせる寂しき奏者が独り。その姿は何かを追い求めるように眼を深く瞑り、額から幾筋もの汗を流していた。

静寂の中に響き渡っているはずの来訪者の訪れを告げる音にも気が付くことなく、その指は鍵盤の上に奔り続けている。

本当は何か、奏でられているのではないかと耳を澄ましても、この世界のどこにも彼女が弾いているであろう音楽は存在していなかった。

果たして、その音色は如何なるものなのだろうか。私は感じることもできないその音に、首をもたげていた。

エスタシアも何か思うところがあつたのか、私の袖を引くと近くの椅子に座った。私もその隣に座って、演奏の終わりを待つことにした。その途中、私は音とは別の空気の変調に体を押したり引いたりするかのような、不可思議な緊張と緩和の繰り返しを肌と体の内側で感じていた。

音の無い演奏は続いた。

彼女は懸命に鍵盤に指を奔らせる。だが、響く音色は存在しない。それは不思議とこの礼拝堂の持つ静寂と共にある廠かで、神聖なものを彷彿とさせていく。

そう、幻想させる。

あるはずのない音楽を、いるはずのない、神を……。しかし哀しいことに、そこまでだった。私の胸中に神の存在は無かった。

咎人は神への幻想を刃の煌きに隠した。罪の証は身の証にして我が名を示す。

祈りの言葉を捧げるように内心で言葉を紡ぎ終えたとき、演奏が終わったのが見えた。

彼女は立ち上がると、肩を上下させながらこちらへとゆっくり歩み寄ってくる。

「ようこそ、お二人とも。歓迎いたしますよ」

歓迎するにしても、もてなしなどできそうには見えない。そう言ったら気分を害するだろうか。

「手紙を頂いたのでこちらに足を運ばせてもらった。季節名と名乗れば分かる？」

「ええ、差出人は私ですから。直接来られたということは、お金を借してもらえるんですか？」

「それが私には一番気になる。教会は普通、寄付を募るものじゃないのかな？」

私の言葉を吟味するように彼女は深く眼を瞑ると、どこか毒のあさりそうな笑みを口許に浮かべた。

「確かにそうです。教会の中枢が聞いたら借金なんていうのはもつての外でしょうね。けれど、寄付金を募るだけではもう、自分の命を繋ぐ事さえできないとなれば、気の迷いからあのような手紙を送ってしまうのもしようがないこと」

そこで言葉は終わった。本当にそれだけの理由なのかは、疑わしい限りだった。

これ以上の追及は野暮と言うやつだ。そう判断した私は金貨を入

れた袋を差し出した、その瞬間に消えていた。

恐ろしく迅い。彼女が右手で取ったために見えることはできなかつたが、見えたとして、それはどれほどのものか。

「感謝します。貴女に幸福があらんことを」

そう祈るように組まれた手から下がっている金貨袋は、祈りを天へと届かせないための重しにも見えた。

「……ありがとう。それと、そのお金は寄付だから、返さなくていいよ」

そう言うと、彼女は何故か中身を確認し始める。確認して、驚いていた。それもそうだ。お願いされたのよりかなり多くの金貨を詰め込んだのだから。

「やはり、貴女は私に下った天啓のとおり的人物でした。トキナに改めて感謝を捧げます」

天啓で借金の依頼状をしたためるとは、大陸の神はなかなか面白い相手だ。

「あなたの名前を聞かせてもらっていい？ 私はあなたの名前を知らない」

「私ですか？ 私はシルクリム。これでも修道女です」

どうやら自覚はあるらしかった。

「あたしは……エスタシアって言うの」

会話の合間を見計らってエスタシアが挨拶をすると、シルクリムは微笑んだ。

「そうですか。どうぞこれからもよろしく願いします」

シルクリムは膝を立てて目線の高さを合わせると、エスタシアの手を握って言った。どこか熱のこもった声だった。

「うん。よろしくね」

天窓から降り注ぐ光が二人を照らす。これを天が祝福しているようだ、人は幻想するのだろうか。

「トキナ」

「なに？」

「貴女はこの幼いエスタシアに、何を教えるつもりですか？」

訊かれたとき、脈が乱れた。その乱れはとても強いもので、危うく意識を失うところだった。

「今は、剣を教えている。きっとこれからも、剣を教えていく」

そう宣言した私は、しっかりと立っていた。さっきは一体何故、あれほど脈が乱れたのか、まるで解らなかった。

「そうですか」

膝を伸ばして真っ直ぐ立ったシルクリムという存在が異質であることに、私はようやく気が付いた。礼拝堂の持つ空気が、その異質を自然なものとしていたのかは定かではないが、きつとここより外では明らかな異質である事に間違いはなかった。

遊色を持った白髪に蛋白石のような瞳の奥で、光が踊っているように見えた。

「・・・・・・・・」

その全身から放たれる威圧感も含めて、これは人間ではないと私は判断する。

「あなたは何？」

だから、問いかけてみた。

「知りたいですか？本当に？」

逆に問われた私は、知りたいから尋ねたのだと言う代わりに頷いた。

「いいでしょう。纏めて言いますと私は人とは異なる生まれ方をしました。その生まれ方というのは、一つの術です。貴女の居たところには馴染みが無いでしょうが、この大陸では転生術への関心が高いんです。私はその一つの過程であり、結果でもありません。その術に名はありませんが、方法は言うだけなら簡単なもので、百九の魂を人の形に封入して、戦わせるんです。そして百八の魂を超えた魂がその肉体の主導権を獲得すると同時に、生まれながらにして一つの境地へと至り、人を超える。そうして生まれた私には幼少の頃というものがありません。生まれながらにこうして在ったのです。そ

れで、私が何なのかと言いますと、さあ？一体何なんでしょう？」

「一番肝心なことは言わないの・・・」

私が言葉を発するとシルクリムはくすくすと笑った。

「私が何かという問いには答えを持っていません。ただ、術によって生まれた私のような存在は魂の本質を強く表すというとても分かり易い特徴があります。その在り方を言うのであれば、私は『子を愛する者』です。前世がよほど子供が欲しかったのかは知りませんが、自負できるほどに子供は好きですし、見ていると幸せです。だから私は貴女が嫌いです」

敵意も怒気も、何も無い。不思議な安らぎを与える声で「嫌い」だと言われるのは妙な気分だった。しかし、私から見るとお金も相当好きなように見えた。

「剣を教えることがよほど不満と見えるけど、教えられた剣にエスがどんな理ことわりを持たせるのか。全てはそれ次第だよ」

「・・・そうですか。ねえ、エスタシア」

「え？なあに？」

急に言葉をかけられたことに目を白黒させているエスタシアにシルクリムは微笑を向ける。本当に子供好きのようだった。

「エスタシアはトキナから剣を学び続けたいですか？」

「うん！でも、つまらなくなったらやめる！」

「それが聞いて安心しました。…………随分と長話をしてしまいましたね」

「そうだね。でも、エスは私に剣を教わることをつまらないとは思わないよ」

「いきなりなんですか？」

くすくすと笑われる。

「いや別に。ただ、私は弟子に愛想を尽かされるような師匠じゃないつもりだよ」

「そうですか。それではお二人とも、よろしければまた来てくださ
い」

シルクリム。人とは異なる生まれを持った修道女。

心なしか縁がありそうだと思った。

私が剣を極めようとするならば、いずれ必ずぶつかる強敵として、教会をあとにした私は、また歌をエスタシアに聞かせながら、ぼんやりとこれからのことを考えていた。

それは天武祭が始まる三日前のことだった。

十五話 戦いは日常

私はここにきて、本当に微かではあるが、焦りというものを感じ始めていた。同時に、武者震いが止まらずにいた。

強者と仕合えるというそのことがこれほどに嬉しいものだとは思わなかった。だが、今の私の剣では大陸の魔術を組み合わせた剣に僅かに及ばないと今までのことから解っていた為に、たった二日という時間を思うと焦るのだった。

何か、魔術に匹敵する力であり、且つ、魔術やラングの使うような力ではない人間としての力を剣に持たせなくてはならない。何故そこにこだわるのかというと、私はどんな力でもそれが全て己のものだと受け入れるのが嫌いだからだ。

そうなるともまた理由を答えなければならなくなるが、それは「人間を超えた」という言葉が地獄の業火と同じくらい嫌いだからだった。超えられるはずがない。人は人である以上、いかに他者より優れようと人なのだと、私はそれを己の在り方で証明したいのだ。

証明した後のことなんて全く考えてはいないけど、私の在るうとする形は、人としての強さの体現。

それを成し遂げたとき私は人間を「超える」のではなく、人間を「窮めた」ことになる。たとえそのために何人斬ろうとも、それもまた「窮める」ことに変わりはない。

そういえば、最近人を斬ってない。それに、魔物もだ。掌たなこしろに命の重み感じたいと思った。

左手に持った愛刀を抜刀する。三千人を斬っても、侍のうちでよく聞いた妖刀になることもなく、ただ快刀で在り続けるその刃鉄はがねは、その時間を止めたように過去から現在に至るまで手入れを要したことはなく、早い話がこの愛刀は錆もしなければ刃こぼれもしないし、刀身が歪むことも無い。野太刀であるにも拘らずだ。つまりこの愛

刀は、刀であつて刀ではない得物と言えた。もしかすると、そうと気付かぬうちに、とうの昔に妖刀となつていたのかもしい。

それだけではない。この刀はどのような業を使ったのか、切っ先の重さが他に比べて重いという他にも、竹刀で言うなら先革から中結の辺りの部分をあとからくつつけたような節がある。

とは言つものの、煩雑な痕は全くない。それでもそう思わせるのは、普通、鋼を鍛えて引き延ばしたなら種々の鋼が混ざり合うはずなのだが、そこには混ざつた様子が無い。そう言い切れるのは、そこには刃紋が無いことと、そして、そこから手元の方には刃紋があるという明らかな違いにあつた。この途切れ刃紋は『季節名』の最大の謎であり、これについて何人かの刀工に尋ねてみたが、答えは分らずじまい。改めて考えてみても、不思議な刀だつた。

そんなことを思つていても剣の腕は上がらない。私は左脇を軽く撫でながら、今一度手に握られた愛刀を見て、一つの決意をした。

「うっ、ああ………」

左眼が疼く。足がどこに着いているのか解らなくなつてその場に倒れこむ。

そう、半年も前から承知していることだが、この眼は私の「人としての強さ」 武士道とも言えるものを喰つていく。

私は初めて、自らの行いを悔いそうになつていた。忌まわしい左眼は私に何かを見せてくる。普通に生まれたのなら見ることの無い世界の面影を私の世界に重ね合わせ、実像を結んでいく。

世界が、変わる。

「………これは、唯識だ」

迷わず、乱さず、心を完全に支配する。見える世界が正しい世界

ではないという否定と拒絶の意思によって、左眼は再び、“光”を失い、閉ざされた瞼の奥に隠された。

「？」

そうなったとき、私は一体何を見たのか解らなくなっていた。正しくは、忘れてしまった。そのことが、ひたすらに不気味だった。

だが、今はそんな迷いの種など育てる気も起きない。私は立ち上がると愛刀を鞘に納め、人知れず部屋をあとにした。

それから数刻、私はシルクリムと剣を打ち合わせていた。

暴風のごとくその場を荒れ狂う疾走とそれに雑じる稲妻の太刀は火花を散らし、戦いは嵐のような激しさを思わせた。

何故このようなことをしているのかというと、その理由はとても簡単なもので、私が修行の相手をして欲しいとシルクリムに願い、彼女がそれを受け入れた。ただ、それだけのことだった。

シルクリムは僧侶に近い立場に関係してか、月牙サン（げつがさん）を得物としているが、その刃は恍惚としてしまいそうなほどに美しい。そしてそれを伸縮自在と言わんばかりに持ち手の長さを変えて仕掛ける攻撃の数々は、もはや長柄武器の常識を無視した距離を選ばないものとなっている。

早い、速い、迅い　颯と左の大手を細切れにされそうになる。心なしか修行ではなくなっている気がした。

濃霧に霞んだかのように捉えられない連撃、続いてサンを回転させ鋤すきにも似た刃から繰り出される重い一撃に持ち手が痺れる。その隙を狙って振り切った刃を地へと突き立て、水平に小手へと蹴りを繰り出されるが、辛うじてかわす。

ここで、シルクリムがさきほど地に突き立てた刃を掬い上げるように抜いた。その刃には土の塊があり、それは躊躇無く、私へ向かって投げられる。それはさながら矢のごとき速さで飛んでくる。こ

れは全力でかわす。着物を汚されるのは、とても嫌だからだ。

このまま防御に取り紛れていては、腕の一本を失ってしまいそう
だ。

私は柄の持ち方を変えて応戦する。右手を逆手に、左手を順手に
することで剣術から杖術へと変化させ、続けて来る攻撃の全てを払
い退ける。我が愛刀の奇剣ぶりをいかんなく発揮した戦い方だった。
型捨無流は剣術だが、その「剣」は刀のみに限ったものではない。
それでは型に嵌まっている。型捨無流という流派の真髄は形を捨て
る。転じて、型を捨てるところから始まるのだ。

それは、北より伝えられたとされる教えにある空、つまり色即是
空より始まる臨機応変の武であると知れ

「型捨無流 空即是色」

三つの構えのうちの一つである「柔」の技。

これは最も優れた迎撃方法を見切りによって導き、剣を振るうと
いうものであり、型捨無流を体現したものとさえ言える。だが、心
眼の境地に未だ到達していない私では完全には使えない。

しかしそれでも、シルクリムの攻撃を凌ぐことはできていた。

一際強い、それこそ神の鉄槌かと思わせるほどの一撃を受け流す。
鋼を打ち合わせた音は暴力となって耳を突き、気を抜けば立ち眩
みでも起こしそうだった。

「空即是色 素晴らしい剣捌きですね。攻撃を受ける上で肝要な
察知・予想・判断・実行の四つを予知に近い勘によって、途中二つ
の過程を無視して察知した瞬間に達えることなく実行するなんて、
察知されるような心の動きは無いはずなのに、私の攻撃を先読みす
るといのは、どんな魔術なんです？」

シルクリムが手を休めて訊いてきたが、私は気が抜けない。彼女

の言つとおり、彼女の攻撃には殺気と言われるものなども含めて、あらゆる気が存在しない。そのため、うかうかお喋りに参加した刹那には死ぬ危険があった。

私は修行をやめるといふ合図として納刀する。シルクリムは微笑を浮かべて頷くと、得物を近くに立てられた二本の棒の間に物干し竿の代わりに掛け、かごに取り込んでいた洗濯物を干し始めた。

その途中、横目で軽く見られる。聞いているから話せと目が語っていた。

「単なる見切りだよ」

「大した想像力ですね」

短く答えると、短く返される。

シルクリムは作業を終えるとどこか晴れ晴れとした表情で私を見た。この修道女は楽しい、嬉しいの感情だけは前面に出してくる。

そして、その感情はとても純粹だと感じられた。

「今日はもう修行には付き合えませんが、何かお役に立てたまじか？」

物干し竿となった得物を見やりつつそう言うのは、何かの計算なのだろうか。下らないことを考えながら私は頷いた。

「そうですか。貴女に一つ、言うておかなければならないことがあります。その剣は一度浄化されていますが、あまり無闇に命を奪うと、取り返しのつかないことになります」

「どついでと？」

「その剣は、魂を喰らっている。そして、その剣は今まで喰らった魂を研ぎ澄ましたかのような強い魂を持っています」

「私の愛刀に、魂があるの？それと、浄化された？」

「あら、そんなことはしたことがないという顔ですね。それでは訊きますけど、貴女は昔、何か斬らないと気が済まなくなっていたりしたことはありませんでしたか」

「一週間くらいあった。ちょうどその時、知り合いに預けたけど」

そう言うシルクリムは目を見開いて驚いていた。

「それは、すんなりと預けたんですか？」

頷くと、彼女はまた驚いて、

「それじゃあ、預けられた人は今、生きていますか？」

などと尋ねてくる。これにも頷いたところ、彼女はとても感心した様子だった。

「とりあえず、その人が貴女の代わりに浄化を執り行ってくれたのでしょうか。貴女といいその人といい、とても強い魂をお持ちのようですね。もう一度忠告しておきますけど、その剣は魂を喰らうようになっていて、その過程で自らの魂を持つようになっていきます。貴女がその剣で命を奪う度に、剣の魂は強くなります」

「それで、血によって穢れたこの刀が、呪いを振り撒いたりするの？」

そのようなものにはなつて欲しくはないなと思つたので尋ねると、シルクリムは首を横に振つた。

「穢れるということは、多分ありません。その剣は浄化された際に自らの魂を持った物ですから、とても強靱です。言うなれば、剣という自らの在り方を表したように鍛えられ、研ぎ澄まされたモノです。ですから心配なのはその魂が強くなりすぎることです」

私は、その言葉にとても安心した。同時に、勇気付けられたとも感じていた。

「……強くなりすぎたら、私の魂が負けるとでも言うの？」

「そのとおりです」

「私は刀であつて、刀は私……そんなことはありえない」

「とは言うものの、私の目には全くそう映りません。そうですね……そこまで言うなら自分を斬つてみてはいかがですか？ そうすれば魂が一つになれると思います」

「シルクリム。刀はその持ち主を斬るということは絶対に無い。私がこの世で斬れないものは唯一つ、私自身だから」

誰が言つたかは知らないが、『我が剣に切れぬもの無し』などというのは世迷言だと私は思っている。

それにしても傷付いた。私と愛刀の魂が一つでないというのは、どうにかして一つにしたいと思つた。

「そうですね。頑張ってください」

不思議な笑顔に見送られているのを感じながら、私はその場を後にしようとして、足を止めた。

「シルクリムは、天武祭には出ないの？」

「私は中央より派遣された修道女という立場がありますから、野蛮なことには参加しません」

「それほどの強さを持ちながら、何故なの？」

私は確信していた。シルクリムの技は十年二十年なんていう段階の研鑽ではない。

まして、私のような才に後押しされた剣では決してない。それは悠久の時、千年に近い研鑽を感じさせる最高の技。堂の奥の室のさらに奥、前人未到の領域に入っていた。

型捨無流に未だ存在しない奥義を超えたものを 背後の女は持っている。

それ故に戦えないことを惜しいと感じた私の疑問だった。

シルクリムは迷わない。ただ、言葉にするのに時間を取ったあとで言った。

「私と初めてお会いした時の事を覚えていますか？」

「覚えてるよ。壊れた楽器を一生懸命演奏していた」

「そうです。私は天武祭本選にて、場を盛り上げるための音楽を演奏する役目があります。それを放棄はできません」

得心が行った。彼女は彼女で果たすべき役割があるのだ。

理由は聞けた。ならばあとはもう去るだけの筈なのに、私の足は止まったままだ。

まだだ、まだ足りない。

「シルクリム。もう一度相手をしてもらえないかな？」

「生憎ですが、得物がありません」

「なら素手で相手をしてよ」

普通ならば愚かだと思っただろう。それでも、シルクリムはそう望めば、

「いいでしょう」

その望みを叶えてくれる。さすがは神に仕える者と言ったところか。

もう戦いは始まっている。神速の抜刀を行おうとしたそのときには既に、懐に潜り込まれていた。

殺される。

そう感じ取ったとき、比喻ではなく、私の体を電光が走った。

抜刀術の要領で稲妻を纏った手刀を放つ、それを見えない糸に牽引されるかのように飛び退いてかわすシルクリム。

私はきつと間抜けな表情をしていたはずだ。自分のしたことの訳が分からず、呆然としているのだから。

だが、シルクリムはその隙を突くことをせず、あちらも驚いた顔を見せて、笑っていた。あの毒のある笑いだった。

「フフ、今のは驚きました。思うに貴女は敵に攻め込まれたことが殆ど無いようですね。あれほどの速さがあるのですから、それも当然と言えば当然でしょうが、分かりました。下手に刺激をするのはやめて受け手に回しましょう。どうぞ」

シルクリムの言葉には目が覚める思いがした。

私は死に踏み込んだことはあれ、踏み込まれた経験なんていうものはなんと、皆無だった。

それ故に感じた死の感触の違いが、さきほどの攻撃を可能とする要因があった。だというのに、シルクリムはそれをもつしないと宣言し、両足を閉じ、両手を楽にして像のように立っている。

攻めてこなければ相手をしないという、言葉よりも遙かに明確な意思の表れだった。

なんだっていい。今はこんなにも、楽しいのだから。

足首をぶらぶらと振ってぼっくりを脱ぎ捨てる。素足が久々に地を踏んで土の感触を味わっている。

「本気で相手をしてあげるよ」

私には悪い癖がある。それは自惚れだ。たとえ手加減できない相手だとしても手加減してしまう。そんな悪癖の表れは他人から見取れる薄ら笑いと、そこに交じる虚ろな笑い声だ。

今、私はそうなりそうだった。だから、それを取り去るつもりで素足となり、宣言もした。

ここからは、全速力で戦う。

「妖」の秘剣 両八双

八双の構えをそれぞれ両側に同時に構えて見せる。

この曲芸が相手の目にはどう映るのだろうか。

「同時位相、ですか。人の身でありながらよくもそこまでと褒めてあげたいですが、それで私が斬れますか？」

私はシルクリムを見据える。これからの挑戦は、

「今から、それを試す」

人間を窮めたかどうかの判決となる。

軽い跳躍の後に地面を蹴り刹那で肉薄、上から十字に断ち斬る。

「！」

鋼の残光を目が捉える。その形は、中心を通ることなく左右で三日月を描いていた。

直前で逸らされた！

逸らされたことでまやかしが解けて、私の刀が元の一本に戻る。その形は、右に腰溜めた状態だった。

「フツ」

呆けている暇は無い。左足首を捻り左に一閃、それを避けたシルクリムは一步踏み込んでくる。私は振り切った勢いを殺さずに一步右にずれるようにして左足を交差させ、心臓を狙ってきた一撃をかわし、反転する途中で体を思い切り反らすことで直角に変化した一撃もかわして、反撃に後ろに倒れこむように突きを繰り出す。

逆さになった視界がシルクリムを捉える。

完全に意表を突いたと思ったそれは、シルクリムの衣服を大きく裂いただけだった。

真ん中に入った裂け目から白く美しい太腿が覗く。その足は後ろに振られ、次の瞬間、私の頭を蹴り上げんと迫る。私はそれを刀の刃を立てて構えることで牽制する。そのまま蹴れば斬れるぞという脅しは完全に無視され、刀諸共蹴り飛ばされた。

それを利用して前方へと飛び上がり、回転して着地した。ここで、右曲がり大きく跳び、間合いを取る。

「これで、お互いに得物はありませんね」

シルクリムは片足で立った姿勢から、頭よりも高く上げた右足を折って膝を胸の高さで止める。

靴の爪先に食い込んだ形で、その指の間には私の愛刀が挟まれていた。

そう、私の愛刀はこの手からもぎ取られていたのだ。シルクリムはこともあろうに私の愛刀をそこらに投げ捨てると、右足を下ろした。

愛刀への扱いに抗議の意味で半眼で睨みつける私を気にした風もなく、シルクリムは平然とそこに立ち問いかけてきた。

「ここで終わりにしますか？」

「体が久々に熱いんだ。もう少しだけ続けるよ」

それに、ここでやめたら、人間を窮められない。袖に両手を入れ、指輪包丁を嵌めて、

「な」

気付いたときには羽交い絞めにされかけていた。

咄嗟に右足を前に出し、重心を落とすつつ足を運んで腕から抜け出し、左手首と首を押さえ込むようにして回転させて投げ飛ばす。そのあとは綺麗に受身を取られてしまい追撃が間に合わなかった。しかし、投げる瞬間には指輪包丁の刃がシルクリムの肌を裂いていた。

極限状態での動きは、まさに人間を窮めたもののソレだった。

「うっ、くっ、本当に……貴女は達人と呼ぶに相応しい」

シルクリムはここで初めて、汗をかいていた。手首と首から入った毒が想像以上に効いたようだ。

やがて毒の苦痛に耐えかねたのか、片膝を着いて息を荒々しく吐いている。

「これで、終わりだね」

もう、戦いは終わっていた。

判決は下ったのだ。

「そのようですね」

手加減されて勝っても嬉しくはないけど、これで、人外の力を揮う決心はついた。

何故、手加減されていると感じるのかという理由は無い。けど、確信していた。

踵を返して歩き出す。解毒剤は後ろにいるシルクリムへと放り投げしておくとして、私は愛刀を拾い鞘に納めた。

「シルクリム」

「なんでしょっ?」

けろっとした感じの声。やっぱり手加減されていた。いくらなんでも、解毒剤の効き目はそこまで早くは表れない。

「ありがとう」

それは、至上の感謝の意を込めての言葉だった。

言いたいことは言ったので、返事は待たずにそのままこの場を後にする。

気が付けば、日は西に傾いていた。

………情け無いけど、私はその後すぐに、脱ぎ捨てたばかりを回収しに行く破目になった。

天武祭まで、あと二日。

十六話 季節の変わり目（上）

いつもは青く澄んだ空と冷たい空気、そして柔らかな陽射しが満ちている世界に今日は賑やかな音楽とそれに刺激されてさらに活気付いた人々の喧騒で溢れていた。

私はそれを城の尖塔の上から眺めていた。空は高く、広い。全身に吹き付けてくる風がその大きさを力強く感じさせる。

眩しい世界の綺麗な空、その空をごく自然のこととして飛んでいる鳥たちが、陽射しのせいか余計に眩しかった。

「サムライさん。姫様が探してましたよ？」

猫のようにふらりと現れたノイルは私の隣に座ると寝転がっている。

「ノイルは猫みたいだね」

思ったままを口にすると、ノイルは眼を瞑って陽射しの温かみに浸たるように目を閉じた。

「見立て遊びですか？それならサムライさんなんて翼を持った虎みたいなものですよ」

「・・・可愛くない」

そう言うつくつくつと笑われた。

「そついえばサムライさんって、見た目、身だしなみにはすごく気を遣ってますよね。ああ、女なんだなって気がしました」

当たり前のことを言っただけでまた笑い出すノイルには軽い殺意を覚えるが、今はあまり体を動かしたくなかった。

シルクリムとの修行を終えた私の体はさながら、熱した鋼が急に冷まされたような状態だった。つまり、かちこちになって悲鳴を上げているのだ。だから、今日は動かずに過ごしたかったのだが、

「エスタシアを寂しがるさせるのは良くないよね。だって、任されたんだし」

気だるさを言葉で振り払い、塔から飛び降りると、トーマスを引き連れて泣きそうな顔をしたエスタシアが目に入った。

「トツキーどこに行ってたの？心配したんだよ」

聞くたびに苦笑して思う。この愛称は何かならないんだろうか。しかし、今までに何度言っても無駄だった。子供特有の頑固さというやつは、思った以上にねばり強いものなのだ。

だから甘んじて受け入れる。何も本当に嫌だったりする訳じゃないのに尖るのは変だと思うからだ。

「ごめんね。それで今日はどうしたの？」

見れば市井の人のような服装をしている。髪も瞳も大陸ではよく見られる色に変わっている。

向こうを見るとトーマスは、忸怩たる思いを噛み締めるかのようによく俯いていた。聞いた話によれば、エスタシアが生まれたときから傍に付いていたというのだから、横から攫われたような気持ちなのだろう。

そう思いながら見ていると目が合った。闇を焦がす炎のような、

危うい目だった。

「だからね。今日はお祭りを見て回るの。分かってくれた？」

わがままを私という助っ人を傍に置くことで承諾させたという説明だったかな。とにかくお祭りに行くのは問題無いので私は頷いた。

「エス」

「なあに？」

「私は少しトーマスと二人で話したいんだけど、いいかな？」

「うーん、うん。分かった。できるだけ早くね。大人の話って長くてイヤ」

「心得てるよ」

エスタシアは膨れ面をしながらその場から離れていく。時折、こちらを振り返っているのは好奇心なのだろう。私はその姿をしばらくの間見送って、中庭の大樹に寄りかかって座ったのを確認したところでトーマスの方を見た。

「どういっつもりですか？」

心なしか声も態度も尖っている。トーマスは私が好きになれないようだ。

「もう少し丸くなってくれないかな？私は嫌われることをしたのかもしれないけど、その気持ちの間違ってエスタシアに向くのは嫌だ

から」

そう言うとトーマスは僅かに俯けていた顔を上げて私を凝視してきた。まるで初めて私を見ているようだった。

「そうですね。ええ、全くその通りです。騎士トキナ」

目に宿っていた炎が鎮められているのが解る。良かった。

「私は騎士じゃないよ」

その言葉にトーマスは困惑の表情を浮かべる。

「騎士ではないというのですか?! それほどの剣の技量を持ったあなたが、騎士でなくて何だと言うんですか?」

ここで、一つの答えを出せば私自身は嬉しいだろう。けど、それは真実ではない。ならば、

「殺人鬼だよ」

真実を言うのが一番だと私は思った。

トーマスは面喰らったように驚いて目を瞬かせている。

「殺人鬼、ですか? ですが、あなたからは血の匂いが、死の匂いがしない」

これには思わずくすりと笑う。するとトーマスは顔にある困惑をますます深めていた。

「死つて言うのはね。普通は意識されるものじゃないよ。もしも死が常に意識されるものだとしたなら、人はみんな心を病んでしまうはずだから、それと同じように私も普段は意識されない、意識させないだけだよ。あははは」

最後は虚ろな笑い声を漏らしてしまふ。その中に交じる確かな死の気配をトーマスは感じ取ったのか、畏怖の目を私に向けていた。

「……………あなたは、殺人鬼なんて生易しいモノじゃない。死の化身だ」

「嬉しいことを言ってくれるね。そう、私はいつも命あるモノの隣にいるよ」

ただ嬉しいから嬉しいと言った。そんな私がどこか狂っていると、学んだ知識の塊が糾弾するのが解った。

「トキナ、様。あなたは、姫様をどうするおつもりですか？あなたがどのような人格の持ち主であれ、姫様を大切にしているのは分かっています。ですから姫様があなたと居ることを望む以上、引き離そうとは思いません。ですが、あなたの口から何か聞かせてもらわないことには不安なのです」

これが、騎士というものなのかと、私は感動した。

「私が言ったことをあなたが信られるかにもよるけど、トーマスは私を信じる力を持つてるの？持っていないなら、何を言っても始まらないよ？」

「信じましょう。我が剣を捧げし姫君に誓って」

その崇高な忠の精神、確かに見せてもらったよ。

「私は、あの子を継承者として育てていくつもりだよ」

「・・・それは、その、殺人鬼にするということでは、ないですよ
ね？」

「私の剣の理が「斬るに迷いは要らず」っていただけだよ。あの子はきつと「自分を守って、誰かも守れる」剣を振るうよ」

「剣の理ですか・・・トキナ様、そろそろ話を切り上げましょう。
姫様の我慢の限界が近いですから」

まだ何か物問いたげな表情をしながらも、エスタシアのことを思いやり、トーマスは話を打ち切った。

無言で踵を返してその場から離れていくトーマスの背中を秒にして三つほど数えて見送ったあとでエスタシアの傍に行くと、笑顔を向けられる。ただ、その笑みが普段とはどこか違う、菩薩像に下から光を当てたときほどまどとはいかないにしても、不思議な笑みだった。

「ねえトッキー。今日はお祭りなんだよ」

「知ってるよ」

「たまには違うもの着てよう」

私は風に乗って聞こえてくる噂を考えに取り入れる。現在、アツチエント王は遠征で不在であり、その関係で城内に不穏な動きがあ

ると、今回エスタシアの外出が許可されたのも何か城から一時的に遠ざけることに意味があるんだろうか。

それ以前に、私はこの着物が気に入っているんだけど、万年着にしたって問題はないけど、大陸では着物は目だっしょうがないし、私が目立って、目立たないようにしているエスタシアに手間をかける訳にもいかないと思った。

「そうだね。でも寝巻きくらいしかないんだ」

「大丈夫、トーマスが用意しておいてくれたから」

何とも手際がいい。

そこで思考を打ち切る。これ以上はもう、下種の勘ぐり、野暮にもほどがあると判断したからだった。

僅かな時間を経て、姿見の前に立った私は鏡というものを疑った。

「目の色が、違う」

以前、大陸に来たばかり頃に見たときには確かに黒かったはずだ。それなのに、今では鳶色だ。これは、本当に鷹のような目になってしまったな。

いや、強そうでいいじゃないかと思うこととして、服装は質素な見た目だが、生地は良いものだし、たまには白い服装も良い物かも知れない。

私は部屋の外で待つエスタシアの所へ行き、その手を引いて歩き出した。

だが、城を出る前に一歩踏みとどまって振り返る。祭りを見るために置いてきた『季節名』を心配した。熟練した敵に武器を持っていることを悟らせないためのことではあるが、どうにも心細かった。

そして、このことが私に逃れ得ないひとつの終わりを告げた
のだった。

十七話 季節の変わり目（下）

祭りの人ごみに流されないように気を配りながらエスタシアの手を引いて歩く私は、木よりも石に馴れ親しんだ人々の暮らしぶりに胸をざわつかせていた。褐色砂岩で建てられた建物の多くは塗料で染色が施されて個性を訴えてくるあたりが、故郷とは大きく違うし、造りは大雑把で洗練がされていないものも多いけれど、この活気がそれが人を活かすものなのだと教えてくれる。ただ、身分制度というものがこちらは厳しいのか、洗練されていると言えば、城はかなり技巧が凝らされていた。その点を鑑みると、大陸では建築技術があまり市井の者達には伝わっていないのだろう。いや、私が屋敷を建てたときは大陸の建築技法は相当のものだと感心したものだ。教会も蔦が絡まっていたりして老朽化してはいたが、いい仕事だった。そうになると、やはりヒンプの差というやつなのだろう。カイルが言っていたように領地を取られたりした影響で色々と問題を抱えたりしているのかもしれない。

だが、結局この大陸の大工たちは、職人は、お金に見合う働きはきちんとするという情を切り捨てた仕事人なのである。

「お祭りなのに、楽しくないことを考えちゃったよ」

自分の血の巡りに苦笑しつつ、私は常に愛刀を握っていた左手が今掴んでいるエスタシアの手を少し強く握った。

「うん？トツキー？」

不意に、この世界が私から遠ざかっていくのが解った。

この死期を悟った感覚は、正直懐かしい。さすがに、潮時なものかもしれない。いくらアルロが優れた医者とはいえ、彼が気が付く道理は無い。死を悟ることなど、医者にできることではない。こればかりは自分にしか解らない。

冬の山を思い出す。吹雪で見えなくなった世界に目を凝らしたときに見えた気がする、あの黄泉の国が、こんなにも近い。

雲の流れが速い。血が滾っている。血が流れている。血が腕を伝っていく。

大陸の鉄砲というやつか。如何せん、左手に握っていたものが悪かった。型捨無流と名乗りながらも、咄嗟の防御が型に嵌まってしまっているとは。

シルクリムの言うとおりだ。死に踏み入る事に慣れていても、踏み入られるのには全く慣れていない。私はいつだって、死が踏み入るその前に、自ら踏み入っていたのだから、気が付けなかったときが終わりだったということだ。

あらゆるものが加速して感じられるのに、心臓の鼓動だけが、こんなに遅い。

強張り手を握っていた私は、改めて握っている手を意識する。温かい。この手を守らないといけないと私は思った。

手を強く引いてエスタシアの体を抱き寄せ、抱えるとそのまま全速力でその場から離れた。

エスタシアが何か言っていたばたしているが、関係無い、このまま敵を引き寄せるしか手立てはなかった。

残像すら映させはしないと聞いたかったが、それでは敵が私たちを見失ってしまうので、時折姿を見せながら郊外へと逃走を図った。森の中に逃げ込んだところで、思ったよりも当たり所が悪かったのか、信じたくはないけど、早くも体力を失くした私はすぐ傍の木に凭れかかっていた。

「トツキー……大丈夫？」

・・・子供にはこういうとき、安心させるために嘘を言えばいいんだ。私は臆な心持ちで思い出し、口を開いた。

しかし、それはより大きな音にかき消されたのだった。

爆発という、大きな音に。

音のしたほうへ頭を向けると黒い煙と、ゆらめく大気の中に踊る炎から逃げようとしている人間達の姿が遠くから見えた。

一体何が起きているというのだろうか。私の頭の中は疑問で溢れかえっていた。

「もしや、戦か？」

何とも間が悪い。神は平和に魔が差したか？いや、魔が差したの
は人間か。

浮ついた意識で必死に考える。『季節名』は城に置いてきてしまった。それに今城に戻るのはあまりに危険だった。私独りでなら、何とかなるかもしれないが、エスタシアを置き去りにはできない。何か考えなくてはいけないんだらうけど、私は、独りで生きる術ばかり磨きすぎて、そこに誰かを加えたらそれはもう邪魔にしかならなかった。

そうだ。エスタシアは邪魔だ。けど、置き去りにはできない。それは何故？解らない。

いつの間にか、私の頭の中では自問自答が同じ所をぐるぐると回り始めていた。

私たちは森の中でずっと息を潜めていた。エスタシアにはかくれんぼだと言い納得してもらっているが、遠くの炎が消える様子は無い。この様子ではこう判断するしかなかった。

アツチエントは、滅ぼされた。天武祭という一大行事を控えてのこの蛮行は、この大陸に大きな波を引き起こすだろう。

どこの国が仕掛けたのか、首謀者は何者なのか。そういったこと

は只の殺人鬼には推し量ることすら無理だ。私に考えられるのは、カイルやノイル、エルムスやトーマスにアル口にシルクリムなどの身近な人の安否だけだった。きつと、他の多くの人間が同じ思いで、あの炎の中を彷徨している。

「トツキー？」

エスタシアはもう、気が付いているのかもしれない。だから、こんなにもおとなしいんだ。

「エス・・・エスの家が火事になっちゃったのは、分かる？」

もつと上手に言えない自分が、何だか可哀想だった。

「・・・うん」

そのときだった。

それは、私のあるかないかも解らない隙を突いた一撃。凭れかかった姿勢だったために大きく飛び退くこともできず、私は、エスタシアを逃がすのが限界だった。

「　　、あつ・・・ぐふっ」

月の光を照り返すソレは一瞬、私という罪人を裁くために振り下ろされた断頭の刃にも見えた。

「あ・・・くっ」

左肩を大きく割いたそれは、見間違えるはずの無い、私の愛刀だった。

強い風が吹きつける。音がびゅうびゅうと鳴り止まず、木の葉は風に舞い上げられていた。

愛刀を木から引き抜き、崩れ落ちそうな体を気力で立たせる。鼓動がよりゆっくりとなっていくのが解った。

もはやここまでで、完璧な致命傷というやつだった。私は、己の死を悟った。

しかし、ここで死ぬ訳にはいかない。ここで死ぬことは、私の在りかたが許さない。

手に握った刃を放して柄を握る。刃の長さがこんなところで仇になるとはついぞ思いもしなかった。

「敵は、だあれだ？よくも傷を負わせてくれたね、殺してあげるよ」

殺気を放って闇夜を見つめると五人の人影がゆらりと音もなく現れた。やれやれ、全員かなりの手練のようだ。

「仕損じたか、想像以上の相手だったようだが、その身体ではもはや戦うことはできまい。それでも姫を守るのか？」

聞き覚えの無い男の声に目を向けると、鋭い眼光をもって私をこの場から退かそうとしていた。

おかしな話だ。こんなときに、左眼が違和感なく開いた。死に限りなく近い今の私は、目の前の世界に嫌気がさすこともない。左腕は使えないが、それを補って余りあるものを今の私は感じていた。全身を電光が走る。それに敵が怯んだ一瞬の隙を突いて一人を切り伏せる。

「

苦悶の声は出させない。間髪入れずに首を刎ね飛ばす。最後の戦

いだ。今宵は、返り血を浴びないための余分な動きは省かせてもらうことにした。

「な」

「ん」

「だ」

「と」

面白い芸だけど、聞くのは一度で十分だ。

一の刹那が満ちるまでに一步踏み出す。私の心臓の鼓動は遅い。この鼓動一つを終えるまでの時間はひどく緩慢だ。

獣のように歯茎をむき出しにして、笑いを形作っていくのが解る。その間にも刃は大気を通り過ぎ、敵へと向かう。それを受け止めて見せる敵が私の背筋を震わせる。

もっとだ。もっと受ける、捌け、私を喜ばせろと思う矢先、相手の剣が私の愛刀に両断され、そのまま分割される。鈍刀なんて使うから、そんな死に方をするんだ。命を預ける物は慎重に選んだ方がいいと心の内で助言するが、もし聞こえたらなら来世で活かすとい。きつと役に立つだろう。

止まることなくすぐに次の敵へと向かう。エスタシアを盾に取るうとしていた時点で勝負は着いた。たちまちに一刀両断にして身を翻し、足を止める。残された二人は愕然としているのかこちらを阿呆のように見つめていた。

「そうか、貴様、融魔だったのか・・・油断していた、この俺ともある者が、」

「無駄口が多いよ」

言葉の通り無駄口が多い方を両腕と首を飛ばして斬り捨てる。心なしか切れ味が良くなっている気がした。

あとは大将を斬れば終わりだと、そう思い一気に距離を詰めて刺突を放つ。それは、確実に相手の額を刺し貫く必殺の一撃だった。

刃は額の中心、眉間へと吸い込まれるようにして真っ直ぐに向かつていった。

そんなとき、実にゆったりとした調子で音が耳に届いてきていた。

こ ろ し だ

め？

「ころしちゃだめー！！」

それは、エスタシアの悲鳴だった。

「！」

しまった！剣尖が僅かに右上に逸れた。大将は私の動きを捉えている。

だからこのままでも倒せる。

ただし、それはこの刺突が一寸の狂いもなければの話だ。

『抜かったな、小娘』

仮面の下に顔を隠している大将が、何故だかそう言っている気がした。

僅かに逸れた刀を紙一重のところまで避けるべく大将は体を屈めて私の刺突を肩に受けながらも、そのまま構わず手に握った短刀で私

の心臓を刺し貫き、手早く引き抜いていた。

死んだ。

間違いなく、死んだ。だが、残された刹那の時を以って私は大将の首を刎ね飛ばした。

そして、秒という時が満ちる。五つの屍から勢いよく噴き出す血が、雨となって私の世界に降り注いでいた。

永遠を思わせる狂言じみた動きが止まれば、当然のことながら世界は見せかけの狂言に気付いてしまう。そして、私の死が確かなものだと教えようと心臓から零れずにいた血を穴から零していくのであった。

もう少し、私の狂言に付き合ってくれてもいいと思うんだけど、自分から続けられないなら、世界は付き合ってはくれないものだと今しみじみと思い知った。

腰砕けと言うのか、私はその場に崩れる。死んだと確信してから生きている時間が妙に長い。

目の前で小さくなって私を見つめている女の子の普段の行いが良いから、神様がお願いを聞いてあげているのか、もしくは神よりも高い世界に住むという悪魔に私が気に入られたのかは解らないが、幸運なことに違いはなかった。

「あ、う」

エスタシアは震えていた。このまま置いて逝くにはいかないと、強く思わされた。

どうやら、左眼の力が私をぎりぎりのところで引き止めているようだ。あと数刻、一日は保たせられると私は判断した。役に立たないかと思えば、ここ一番で活躍をしてくれたことには素直に感謝しておこう。

改めて姿を確認すると、体を走る電光が血を弾いてくれたのか、私は他人の血に汚れてはいなかった。

「エス、私と一緒に来てくれる？」

私の言葉にエスタシアは戸惑いを見せていた。自分の手とこちらを見ては何かを躊躇するようにしていたが、しばらくするとおっかなびっくりとした様子でこちらに来ると私の左手を両手で掴んでいた。

哀しい事に、左手にはもう感覚が残っていないかった。

「エスの家は火事になっちゃたんだ」

「うん」

「それでエスの家に火をつけた怖い泥棒が今の人たち」

命を奪いに来るのだから泥棒で間違いは無いだろ。それなら私は大泥棒だと思いき笑い出しそうになるのを何とか堪えた。

「うん」

「怖い人たちは追いかけてくるだろうね。だから、逃げなくちゃならない」

「う、うん。ねえトッキー、血が出てるよ？大丈夫？」

「心配しなくていいよ。エスは必ず『季節名』が守ってくれるから」

右手に握られた愛刀は私の血を吸ってからずっと脈動を続けてい

る。この分なら何も問題は無さそうだと思えた。

それからは国の全体を見渡すために山を登っていたのだが、途中で雨が降り始め、それによって生じた濃い霧の中を彷徨い歩いた。

やがて、朝陽と共に霧が晴れた頃、山の頂上から見下ろした私の目に飛び込んできたのは、ただ一箇所だけ、何の変化も見られない闘技場と、そこから流れてくる力強いオルガンの旋律だった。

思い起こせば、今日は天武祭の日だった。

戦いが私を呼んでいる。最後の戦いに相応しい相手がそこに居る。

「いいね。決着をつけよう、シルクリム」

そう、たとえ仏になっても、この戦いに決着をつけよう。

朝陽を祝福するように笑って、私は空へと踏み出した。

十八話 決戦

決闘者が分を競う祭壇でもある闘技場に足を踏み入れる。薄靄を照らす光は柔らかかった。

空間を埋め尽くす音楽は背筋を震わせ、戦いを求めてやまなくさせる。気分は最高潮だった。

「トキナツ！無事だったんだね！！」

カイルが真つ先に駆け寄ってくる。心臓を刺されたので無事ではないが、気が付かないならそれでいい。

後ろではノイルが縄を使って数人をまとめて縛り上げているのが見えた。

ノイルと目が合うと、目を細めて私を睨んだ後で驚いた表情をしている。何か言い出されても困るので首を横に振ると理解してくれたらしく、ぐつと息を飲み込んでくれた。

「カイル。この子をお願い」

ぼんと背中を押し出すとエスタシアはしがみついてきた。困った。

「姫様……………」

適した瞬間にトーマスがエスタシアの手を引いて私から離してくれる。微苦笑しながら礼をすると礼を返された。

「ハッハッハッ、姫様が無事で良かったですよ。ハッハッハッ」

エルムスは普段よりも愉快そうに笑うと壁際へと下がっていった。

傷一つ負っていないあたり、中々できるようだ。

「二人とも、エスタシアのことは頼んだよ」

「トツキー？」

私は何も言わずに軽く手を振って、闘技場の上でオルガンを弾く女に声をかけた。

祭りということもあってか、煌びやかな衣装を身に纏ったシルクリムは、音楽の余韻も消え去らぬうちに、あっという間に私の前に移動していた。

「おはようございます。トキナ」

「シルクリム、おはよう」

まだ余韻は終わらない。

「お祭りはめっちゃくちゃになってしまいました」

「そうだね。でも今日がお祭りだということに変わりはないよ」

余韻が、終わる。

「武の頂点を、目指してみますか？」

笑顔と共にシルクリムは武器を構える。私もそれに合わせるように抜刀した。

「そこが私の求めた場所ならね」

爆発させた。全身全霊の力を以って踏み込んだ。

幾度と無く刃がぶつかり、寺の鐘のように低い響きと、風鈴のようない響きが合わさった音色が瞬く間に耳を殺した。

その途中、私の一撃はシルクリムの剣先から生まれる円の動きに巻き取られてそのまま愛刀を手から失った。

一旦死地から離れる。それは今までには見せたことの無い純粋な跳躍だった。

これは布石だ。着地した足で思い切り地を踏んで膝を曲げ、次の一瞬で奴の死地へと入り込むための。

そもそも、私が最も得意とする動きは跳躍に富んだ神速の殺しの剣、飛翔剣術に他ならない。

「型捨無流奥義　ニルヴァーナッ」

抜刀していた小太刀による神速の刺突を繰り出す。激しい火花を散らしながらも力技で逸らされる。続いて首を狙って降る刀は予想外だったのか辛うじて避けたはいいが、腕を僅かに切られていた。

ここで、いつ手を離していたのかシルクリムは鋭い拳を下から突き上げて私の手から小太刀を飛ばすと、転じて得物の柄で私の喉を潰しにかかってきた。

私は咄嗟に柄を掴んだが、地面に押し倒され、シルクリムはそれにのしかかる形となった。

体重もかけてきているんだらうけど、相当に重い。このまま押し潰されかねない状況になった。

自慢じゃないけど私の華奢な腕は見かけによらず怪力だ。それでもシルクリムはその重みに世界でも加えたかのような馬鹿力で押してくる。徐々に柄が喉へと近付いていくのが忌々しかった。

足を使って投げるなり何なりしたいのだが、左腕が動かない今では、その一瞬で首を潰されれば終わってしまう。まさか、純粋な力

勝負になるとは考えていなかった。

「ああああアアアーーーーー」

シルクリムは本当に修道女なのか疑わしい攻撃を私に加えてきた。感覚が鈍って気にしなくなっていた左肩を一切の容赦無く踏みつけてきたのだ。それもかなり力強く、力士の四股のように重い。戦いの最中に意識が飛ぶなんて、驚きだよ。

衝撃で肺に溜まっていた血を吐き出すと、シルクリムは咄嗟に距離を置いた。私と同じで血に汚れるのは嫌いのようだ。

奇跡のようなことだが、私はまだ負けていなかった。

すぐさま体勢を立て直して、全身の力を抜いて構えを無くす。左肩が引き攣るのは、この際しようがない。

「柔」形奥義 舞踏操指

やって来る必殺の一撃、それは私の急所を正確に突いてくる。だが、その全ては直前で逸れていた。

「指で……………!!」

得物という一つの重しを取り払った私の手の速度は神速を超えている。その指先に意識を集中すれば敵の剣尖を逸らすことは造作も無いことだ。多対一でなら人形劇のように戦場を操り、同士討ちに持ち込ませることだってできる。

私は指先一つでシルクリムの攻撃の全てを捌き切っている。だが、片腕の上に本当に指一本で相手取れるほど、目の前の敵は遅くはないのだ。

「どうしました？風に圧されて指が刃に触れられてませんか？」

「そういうのは攻撃を当ててから言っただけよ」

口は災いの元という諺があるが、その通りとでも言うのかのように腰を強かに打たれた。

つんのめる体勢を元に戻そうと足を一步踏み出すと、膝が力無く落ちた。してやられた。

「幕です」

月牙が首の真上に構えられているのを感じる。さすがに首を切られれば必殺だ。

「ただだよ」

力が抜けていた一瞬が過ぎ去ったあと、私は本能的に身体の気を操作したとでも言うのか、雷光を纏って距離を置いた。

気分を害する力だ。最期であるからこそ、やり遂げねばならない、果たさなくちゃいけない誓いがあるというのに。

「貴女がどうして人の命を奪うのか訊いてもいいですか？」

私は笑い出しそうになるのを堪えながら言った。

「……懺悔しろとでもいう気？人の命？なにかなそれ？私は命を奪う理由に区別を付けた覚えは無いよ」

「理由があるようなら、それを教えてもらえませんか？」

「殺すということは、己を生かすこと。私はそれを自分の生き方の

中で見出した。でも、研ぎすぎた刀は折れるとも言っから、私は自分を生かす分だけ殺してきたんだよ。

生きるのなら、死ぬ。死ぬのなら、生きる。生きるのなら、生きる。死ぬのなら、死ぬ。

シルクリム。あなたはこの四つのうち、どちらを選んで生きてきたの？」

「答えを吟味する前の質問ですか。四つの内容については私なりの勝手な解釈で構わないですか？」

「構わないよ。それを聞いてから斬ったほうがずっと充実できそうだし」

「私は三番目を選びます。命は唐突に失くしてしまうものですが、きちんと使いたいと考えていますので」

「言うておくけど、私は二番目だよ」

ゆっくりとすり足で間合いを計りあううちに、私は小太刀にそれとなく接近していた。そしてそれをゆっくりと引き抜き、構える。シルクリムに気付かれない様に上手く足を運ぶのには苦労したが、どうやら上手くいったようだ。

シルクリムも私の動きの流れが自然に行われていたことに気が付いたのか目を丸くしていた。

「まさか注意を逸らされるなんて」シルクリムは驚きの表情を微笑に変えた。「貴女と話すのは思いの他、楽しかったようですね。私自身、とても驚きですが」

「私は小太刀の落ちた場所を把握するのに必死だったよ」

「そうでしょうね。貴女が僅かでも拳動にそういったものが混じっていたなら私はすぐさま決着を着けようとしていました」

「それでも、如何様は大の得意技だよ」

「私には貴女がいつも如何様をしているように見えますが」

「戦いに如何様はつきものだよ。だって、敵の隙を見つけ出して攻撃するっていう基本からしてそうじゃない？」

小太刀を逆手に構えて、真っ直ぐに腕を突き出し、もう片方の手で手首を掴んで固定する。

「その構え、どこぞの暗殺者を彷彿とさせますね」

「修道女というわりに、野蛮な事に詳しいね」

刃先がちゆうは両刃の造りである小太刀の波紋の輝きは美しい。だが、こうして改めて見ると、刃先以外はあちこち錆びているのが解った。

「泥に汚れた鏡のようですね。所々錆びていて、刃こぼれも目立っています。使えそうなのは刃先だけ。そのような剣で私が斬れますか？」

「斬りはしないよ。刺すだけ。それと言っておくけど、錆びていようと刃がこぼれていようと、この小太刀は最高の一振りなんだ。何せ、私の命を一度は奪った刃だから」

組長、あなたの愛刀を随分粗末にしてしまった。

再び走る。互いの足が、刃が、大気を踏み潰して、切り裂いていた。

しかし、せつかく仕切り直したというのに、圧倒的にまずい。一撃を受ける度に刃が震えて、手が痺れた。

打ち合わす度に私は傷付いていく。蠟燭の灯りのような意志が風に吹かれて頼りなく揺れる。幾度も消えそうになった。

私の筆先で文をしたためるような滑らかな剣捌きは空を切って、紙の代わりであるシルクリムには紙一重で避けられる。

ここで、如何様を使う。右手から左手へと素早く持ち替えて回転して一分距離を詰めた斬撃を放つ。虚を突いた一撃は、見事に心臓の近くを決るが、決め手にはならない。そこで、私は剣戟を打ち合わせて距離を詰めていた愛刀を地面から引き抜いて切り上げた。

土を掘った一撃は避けられたものの、土煙が一瞬、シルクリムの視界を塞ぐ。

その一瞬、この一瞬で勝負を決める。この決め手を使って、

「型捨無流

奥義

」

小太刀を鞘に納めて上段に構え、全身の気を高める。それに合わせるように私という天と地を雷が結び、雷光を迸らせた。

そして、電光が『季節名』の刀身を覆ったとき、全ての力が頂点に達し、弾けた。

「裂界!!!」

打ち込みは面、小細工如何様一切無し。必殺剣が世界を断ち切る力を持って振り下ろされた。

シルクリムはそれを空を舞う羽のように滑らかな動きで受け、得物を減速のために犠牲としながらもその凶刃をかわした。

だが、甘い。型捨無流の奥義はその全てが三段構えになっている。

今の第一段目。続いて来る二段目は、

「風がつ……！！」シルクリムは驚愕していた。「真空を生み出した?!」

世界に負わせることができないと思いつけていた。それは傷。そんな私の否定を否定した一閃が負わせた世界の傷口、その傷口を塞ぐために世界は周囲の空気を飲み込んでいく。そして、その傷口の前に居るシルクリムは空気同様、飲まれるのだ。

世界が震える。洞窟に隙間風が吹いたときにも似た風の音が微妙に聞こえたとき、シルクリムは全身から血を噴き出して、それでも尚、二つになつた得物を両手に持って立っていた。

だが、それも刹那で終わりを告げる。最後の三段目。すり足で一歩、突きを放つのに似た足捌きで、滑るように間合いを詰め、私は振り下ろしたままの刃を返して、一直線に切り上げた。面という動作、一見単純なその動きを奥義にまで高めた神域の必殺剣が、ここに決まった。

「トキナ　そうなのですね。死神の片棒を担ぎ続けたその剣は天よりの才などではなく、煉獄より賜りし才だったのでですね」

身体を中心に描かれた線から血を流し、全身に付いた血を血で洗い流しながら、シルクリムは立っていた。

………　最後の一刀はひとひらの差で、届かなかったのだ。

風が吹き、それは血風となって私たち二人を通り過ぎていく。

互いにもう死力を尽くしている。だから、あとはどちらが先に倒れるのかという話になっていた。

息を長く吐くと、魂が散っていくのが解る。この戦いを始めるその前から、私の心臓はもう、動いていなかった。

「本当に仏になってまで戦えた。生死を越えた先に勝利を得られなかったのは、残念だけど、無念じゃないかな」

最後に私は詠った。

「光映え 奇^{くす}しき力 我迷う 声は残らず 我が名はあらず た
だ手に携えし 刃の名を借りて

生けし季節は 常に死があり 我はただ 見出し光に消えた
闇なり この手は何も与えることなく

風と同じく 過ぎれば消える この我が心 誰を思う 我が光
それはなんぞ それはあとなき夢なり

月はささやき 日はもくして ただ我を照らし 祝福する 武
の頂を この手は掴み そして果てる 「

ゆつくりと左眼の瞼が落ちていき、世界が傾いていった。

光に満たされた世界で私は、風に舞うひとひらの桜の花びら
を見た気がした。

十九話 謎の勇者と二代目と

記されし暦463年。

記されし暦452年に起こった戦を契機として、大陸には魔王が現れ、更には突如として思い出した(?)技術により発展した文明などの諸事情によって世界は更なる混迷を深めていた。

戦で大打撃を受けた中央は守りを固め、不干渉を貫き、中央の守護を失った四方の人々は苦しめられた。

暗い暗い年月が過ぎ去って行つた。そんな中で魔王を打倒するべく人々は立ち上がった。

しかし、人々は人間を裏切つた融魔たちの強大さを前に倒れて行き、やがて一つの伝説を思い起こす。

人の身でありながら融魔を打ち破つた剣士『季節名』の伝説を。人々はその姿を捜し求めた。その力を貸りて魔王打倒を目論んだのだ。

だが、その姿は十年の歳月をかけて探してもその影すら見えなかった。

『トツキーが死んじゃう!!放してよ!!』

『トキナ様はもう死んでいます。それでも尚、戦いを求める者を阻むことなどしてはなりません・・・』

『・・・トツキー・・・あたし、ごめんね。あたしのせいで』

当然である。『季節名』と名乗つた殺人鬼は、既にこの世にはい

ないのだから……。

「蒼い真珠の耳飾り、黒に金の紋様がある異国の衣服、全長六尺を超える長刀……ようやく見つけたぞ剣士トキナ」

だがしかし、『季節名』は生きていた。二人目の担い手、トキナ「エスタシアという剣士によって。

「誰？何しに、来たんですか？」

わたしがこの屋敷の主になってからの初めての来客を迎え入れて、突然かけられた言葉は思いの外、わたしにはショックでした。確かにわたしは『季節名』の名を継いで型捨無流を継承したけれど、トキナは、トキナの死はあまりにも壮絶な闘争をわたしに見せて逝ってしまった。だから、その名で呼ばれることにわたしは心を怯えで一杯にしてしまっていた。

十年前にわたしは故郷を失った。それからの日々は、刺客に追われることもなくて、平穩無事で、けれど厳しい日々だったかな。わたしはトキナが前もって書いていた手紙に従って彼女の愛刀を譲り受けて、幼いわたしは何がしたかったのか自分でもよく解らないままずっとずっと、あの日の戦いを、彼女との日々の中で見たものを再現しようとして、刀を一心不乱に振り続けて、気が付いたらわたしはトキナの全てを身に着けていた。

トキナと出会ってから別れるそのときまでに、わたしの心の奥深くに彼女は居て、わたしは、わたしを命を賭して守ってくれた彼女が今でも大好きで、儂げでいて、光のように強い微笑は今でも色褪せることはない。だからなのかな。わたしは彼女のようになりたかったのかも知れない。そして、トーマスに聞かされたトキナの言葉が何よりも決定的だった。

『あの子はきつと「自分を守って、誰かも守れる」剣を振るうよ』

わたしはその言葉を聞いたときに本当に胸の中心で何か弾けた気がした。その剣を振るうために彼女が教えてくれた全てがどうしても欲しくて、わたしは戦いへの怖れを忘れて剣の腕を、誰かを守りたいという思いから磨き続けた。

結局、一年前に一つの完成を見たわたしの剣はこうして屋敷に独りぼちでいるように、振るわれていなかった。それが、わたしが独りぼちでいる理由で、それから今までの一年をわたしは吹けば飛ぶような薄くて軽いモノとして過ごしていました。そのことを後悔はしていないけれど、夢のような曖昧なものが現実に取りつて代わってしまったような果てしない虚しさを胸に抱えていた気がする。

息を吹き返したように自分を思い出したわたしは目の前の人を改めて見た。彼は随分とくたびれた格好をしていた。旅路で相当な苦勞をしたんだとわたしにも一目で解るほどに。

「俺の名はフォルティス。今は魔王を倒すために仲間を探しているんだ」

フォルティスは玄関に入っているのに頭に被ったフードを取らない。それが気になって影に隠れた目を見ると水面に映し出された月のようにぼんやりと光っているのと、黒い髪が見えた。

「フォルティスって異国の出身なの？」

「何？トキナは俺と俺の母とは同郷かと思っていたんだが、違うのか？」

「それはそうだけど」わたしは確かめるように黒く染めた髪を一束つまんだ「フォルティスはもしかして・・・」

口の中が乾く。いけないと思い直して口を開いた。

「わたしの国の剣術を修めたの？」

「一応な」フォルティスはマントの前を開くと腰に差した武器の柄を見せる。「魔王の存在は海を越えた先の俺の耳にも届いていて、父の故郷の危機を聞きつけてこうしてやって来たはいいが、敵は強い。そこで仲間を集めようと思った訳だ」

「理由は解りました。けれど、魔王が現れて早くも十年が経ちました。その間、何もせずにいたわたしのような臆病者が戦いに赴いてもお役には立てないでしょう。そんなわたしだから、大切な人たちも、みんなわたしを置いて逝ってしまった」

思わず口に手を当てる。気を緩めたら泣いてしまいそうだった。フォルティスに怪しまれないよう、わたしは心を落ち着かせて言った。

「とにかく、わたしがお役に立てるとは」

続けて言おうとしたとき、わたしは玄関の向こうに見える庭でたつた今起きようとしていることに絶句して、それをやめさせるために全速力で動いて、腕を掴んでやめさせた。

「その樹を傷つけちゃダメなの！！」

わたしは頭の中を真っ白にしながら胸の奥底から声を発して怒っていた。相手が子供でも、こればかりは関係無い。だって、この桜の樹はトッキーのお墓なんだから。彼女の眠る桜の樹を傷つける

ことは許さない。

「いたい、離して・・・」

わたしの手から逃れようとする。それが苛立たしくて強く握るとわたしの手の隙間から血が零れていくのが見えて、慌てて手を放した。頭の中に立ち昇っていた怒りの炎はたちまちに消えていた。

「いたいいたいいたい」

「あ、その」

わたしはわたしのしたことによってしようもなくおろおろするしかなかった。手に付いた血を払って、後ろに下がる。

「聞きしに勝る速さだな。しかし、一体どうし・・・大丈夫か?!」

慌てて子供に駆け寄るとフォルティスはわたしを睨んでいた。この人も、本気で怒っていた。

「子供を傷つけるとは何を考えてるんだ!」

「その子がこの桜の樹を傷つけようとしているのが見えたから、つい怒ってしまって」

「やりすぎだ・・・しかし、始めの非がこつちあるならこれ以上は言つまい。それより、十年もの間に全く衰えた様子が」

フォルティスはまた言葉を切ると、わたしをじっと見てきた。

「十年という時を経て、そこまで若くいられるはずがない。お前は誰だ？」

彼は明らかな疑いの眼差しをわたしに向けていた。

「わたしはトキナです」わたしは言うべきかどうか少し考えた。「それ以外の何者でもないわ」

二代目であるとか、そういうややこしいことを言っても何にもならない。わたしはトキナ、それに違いはないの。

「そうか。それなら、その力が本物か確かめさせてもらおうか」

「待つて、わたしたちが争う理由なんて」

頭よりも身体が反応してフォルティスの攻撃を避けようとして、鼻先を掠めていった。得物は丸い鉄の棒、長さは三尺ほどで、素材は墨のように黒く柄のすぐ近くで枝分かれした鉤かぎが特徴的だった。これは知識として知っている。確か、十手と呼ばれる打撃武器で、長所と短所が同じ重いことにあるものだけど、それを自在に、それも二本操れるということはこの人は油断ならない相手なんだ。

「今のをかわすか。どうした？ 抜刀しろトキナ。そして力を示せ。でなければお前のような過去の遺物は消すだけだ」

「どうして？」

「俺は戦う意志の無い奴に勝つたら協力しろなんて言わない。戦えないのなら、お前は死ぬだけだ。それだけの罪を、お前は犯している。それくらい分かるだろう？ 同郷の者同士な」

この人はトキナの罪を知っている。彼女は多くの命を奪ったって。
「そうなの。なら仕方ありません。お相手します」

それが『季節名』を真に受け継ぐということなら、わたしにはやらねばならないことがあるということ。

名乗りを上げる。この行いに一切の偽りは許さない。それが剣で仕合うときにトキナに教えられた侍の流儀。

「型捨無流二代目 トキナ」エスタシア 故あって、戦います」

「二代目だと？開祖はどうした？」

聞く耳は持たない。柄を握って、剣の鼓動を確かめながら抜刀する。鼓動を合わせながら八双を構えて、そこから切っ先をフォルテイスへと向けた。

「わたしは戦います。それが偽りでも。知っていますか？人の為と書いて偽りと読む文字があることを……わたしは偽り、そうして人の為に戦えるということをおあなたに示す」

「偽って戦う？ ならお前は一体」

「お覚悟を」

「……分かった。二天一流 フォルティス」深夜 手合わせ願おうか」

鏝鳴りの音を合図として、わたしは剣を振るった。

それはさながら居合いのように、けれどその軌道は縦に振るわれる。

フォルティスは振り下ろされた高速の斬撃を右の十手で苦もなく受けると左の十手を首に向けて鋭く振るってきた。

見切つてかわすと、驚いたことに肌に痛みが刺す。丸い金属の棒で切り傷を負わせるだけでなく、わたしに見切り損なわせるなんて、なんていう強者。

お互いに颯と間合いを開いた。わたしは一点への集中と全体への集中の秤を調整する。

「お互いに見切りを会得した者が。面白いな。だが、俺は二天一流の二刀流はまだ使っていない」

何を言っているのかと思っていると左の十手を腰に差しして右の十手を逆手に、左の拳を引いて構えた。

相手は不動のままわたしの動きを見ている。

こちらから打って出る。さきほどと全く同じ力の斬撃を振るう。

そして、同じように止められる。

けれど、ここからは少し違う。互いの武器が接触したときに跳ね上げるように力を込めて右手で押し切る。それから動かさないでおいた左手に持った仕込みの小太刀を抜いて、心臓を突きに身体を捻り込んでいった。

けれど、フォルティスはそれを避けようともせず足を組み替えて左の拳を前に出して鋭い拳を打ってくる。

相打ちでも狙っているのかと思ったけど、わたしの凶刃は彼の胸を貫く事は、無かった。

一撃が決まらない。凍らせていた心が碎けそうになる。そこに拳が顔面に入ってきて、くるくると回って倒れそうになるのを四肢を使って何とか堪えた。この着物を汚すという事は、型捨無流の歴史を汚すことになる。

だって、彼女は「何があっても着物は汚さない。たとえ汚れが雨のように降ってきても」と言ったから。

「威力を殺した？前に踏み込んだ状態からよくもそんな芸当ができるな」

わたしの心は萎縮してしまった。今ので決められなかったのは、もう覚悟の限界だった。

「あなたこそ、どうやってわたしの突きを受けたの？」

「それはな」フォルティスのマントの内側に見えたのは黒く染められた草を編んで作られた鎧だった。「こういうことだ」

「草の鎧なんかで……」わたしは本当に驚いていた。

「兀突骨うぶこぶの軍が用いた藤甲ふじこうを改良したものだ。草だからな。軽くて動き易いぞ」

「道理で、鎧を着けているとは、夢にも思いませんでした」

「俺もまさかその長い柄の中に仕込みがあるとは夢にも思わなかったぞ。そんな長刀をそんな華奢な腕一本で振るとはまるで思わないからな」

「それじゃあ、これはあなたの夢ですね」

わたしは小太刀と長刀の二刀を振るい、それから小太刀を納刀して正眼に構えた。

「真似事や子供騙しって訳じゃ、なさそうだな」

「あなたが認めると言ったら、わたしは剣を納めます。いいですね？」

「それは参ったって言うのとどう違う？俺は今のところ言う気は無いな」

「なら、夢の途中で果てなさい」

面を打ちに行く。その起こりを察知して懐に入って来たフォルテイスにわたしは先行させて小太刀を抜刀して斬りに行って、続いて長刀で胴を狙い、よけられたらすぐに間合いを詰めて小太刀を逆手に持って突きを放つ。

けれど、その全てを彼は捌き切っていた。淀みなく行われるわたしの斬撃をこうもあっさりを受け切るなんて。

「やっぱり腑に落ちないな。お前の剣の動きの全てが俺の急所に僅かな隙を作っている。にも関わらず、そこを突いてこないということとは、どういうことだ？変に剣をずらすから当たるものも当たりはしない。正直、舐められている気しかないな」

「わたしは命を奪ったりはしない」

彼女は言った。命の価値は全て等しいって、だからわたしは

「じゃあその剣の動きからひしひしと伝わってくる必殺の理は何なんだ？即斬を是とした鬼が俺には見えるね」

型捨無流とはそういう剣術。けれど、

「見えたぞ」フォルティスは目の灯りを揺らして笑った。「トキナ。その剣技にお前の理は無い」

わたしが黙っているとフォルティスは続けて言った。

「お前は己の振るう剣技の理を跳ねつけている。そんな剣は刃の無い刀も同じだ。幕にしようかトキナ」

十手を二つ手に持つと同時に踏み込んでくる。わたしは先を読んで体の向きを変えてかわしていく。

ここで、横に薙ぐ一撃が来る。飛び退いて避けると十手が飛んできて、地に足の着いていないわたしを容赦無く打った。

柄に付けた紐を使っての投擲。遠心力を加えた強力な一撃は一段階速い打撃となっていた。

これほどの速さともなると、トキナでも避けられたかどうかというところでしょうか。

それにしても、手強い。武器を素早く手元に戻して振るわれる連撃は打撃というよりもずつと斬撃に近かった。

何度もお互いの武器を交える。一歩間違えば命を落とす綱渡りをしながら、わたしの心は戦いとは別の所にあった。

トキナの型捨無流がわたしとは異なる理を持つというのなら、わたしはわたしの型捨無流を振るってみせる。

「誰かを守る剣を、多くの命を殺めたこの剣で、振るう」

振れていたなら最初からそうしていたはず。それでもそうできないのは、剣の鼓動に他ならない。

わたしの手にある『季節名』がわたしの剣の理を嫌い、わたしも同じようにこの剣が刻んできた理が嫌い、思うようには剣を振れ

ない。

それでも、わたしは彼女の願ったわたしの剣を、わたしが願ったわたしの剣を振りたい。

その一心で技を磨いて、それでその結果として、わたしはトキナの剣を受け継いだ。けれど、それは違った。

「わたしを縛らないで」

『季節名』に願いをかける。鼓動をわたしからは合わせず、剣に合わせさせる。そうなんだ。わたしは今まで剣に振り回されていたんだと、今になって気が付いた。なら、これからはわたしが主であると、そう認めさせなくちゃいけない。

わたしは　　わたし自身になるべきなんだ。

フォルティスは戦いの中でわたしの中に澱のように沈んでいたものを思い出させてくれた。

渾身の一撃を受けて弾き飛ばされ、大きく間合いが開いていくれたのは幸いだった。

「わたしはあなたと戦えて良かったと思います」

「そうか。そろそろ幕引きか」

「あなたのそのフードを取ってあげます」

「季節名」を上段に、小太刀を下段に構えて気を高め充溢させながら威圧する。生きてきて一番、自分を力強く感じられている。

これなら、できる。絶対に殺すことなく勝つことができる。わたしは確信を持って機を探り始めた。

そんな場面となってフォルティスはわたしの剣気に押されたみたいで、一歩後ろに下がった。

「フードを、取るだと？俺の英雄譚を終わりにするつもりか？」

わたしは首を傾げた。何を言ってるんだろう？

「伝説を終わらせる訳にはいかないからな。認める」

フォルティスはポツリと言って、十手を腰に差すと屋敷へと向かって歩いて行った。

呆気ない終わりに、わたしの中に満ちていた力は霧消してしまつて、その場に立ち尽くすしかなかった。

とりあえず、力は認めさせたいけれど、わたしはこのまま勇者の間間というのになつてしまふんでしょうか？

顔を隠したままのよく知らない人について行くのは何だかイヤだなあとわたしは思いました。

二十話 同じであって、違う道

それから数日間、フォルティスは特に何をする訳でもなく屋敷に滞在していました。ただ、その間に一度としてフードを取ることはなく、顔を隠し続けています。

わたしは彼を遠巻きに見るばかりで、彼と一緒に居る盲目の少女は出会い方が良くなかったから、すっかり避けられていた。

「トキナの屋敷は故郷を思い出す。特に畳は居心地が良くて、ずっとここに居座りそうになる」

桜を縁側から眺めていると隣にはフォルティスが立っている。彼は気配を消すのが癖だった。

「魔王を倒す仲間を集めるんじゃないんですか？」

わたしは初めに聞いた目的について訊いてみた。

「仲間を集めるためにはとりあえず中央に行かなくてはならない。しかし、上陸してからそう離れていないトキナの屋敷へと行き着くまでに三ヶ月もかかった。分かるか？仲間を探しに行く前にお陀仏になるようではいけないんだ。今のところはここでのんびりさせて欲しいものだ」

「わたしなら三日で海まで行けますけど」

「それはお前は俺よりもずっと足が速いからな。剣速と最小の動作になら差が無いから上手く立ち回れるが場所をもっと広く使えば、お前は俺よりもずっと強いはずだろ？」

「善人としての実力不足おおいに結構！俺は「英雄」になればそれで十分！」

話を打ち切るようにして、フォルティスは拳を構える。手の内に寸鉄を忍ばせることも忘れない。仕掛けを発動させる機会さえ掴めば、勝利できる。

「英雄」になれるのだと、フォルティスは己の内に秘めた闘志を燃やす。

季節名もそれに応じるように右足を一步前に踏み出す。嵐の中という視界の悪いこの状況である以上、彼女もまた相手の目を盗むようにして、構える際に指先に丸みのある刃のついた指輪を嵌める。互いに素手を装い、その油断を突いて相手を殺す心算を立てていた。

「三毒超克……型捨無流 開祖 季節名。せめて私により多くの死境を覗かせて欲しい」

「……二天一流改め、深夜流忍術 フォルティス「深夜」

両者共に動かない。まずは様子を見るためなのか、石のように動くことをしない。

しかし、本気となったフォルティスには時間的猶予が残されていない。彼の足元から徐々に水面が赤く染まっっていくさまは、その事実を季節名の目にも明らかにしている。

だが、季節名は動かない。ただ相手が自滅するのを待つ気配とは違い、だからといって攻めに徹しようという気配もない。完全な隠蔽状態を維持している。

次の瞬間、前触れもなくフォルティスの顔面が三度叩かれる。

フォルティスは攻撃を受けながらも、攻撃の正体を見切っていた。その正体は、この嵐によって降り注ぐ雨粒。季節名はそれを手刀

に乗せてフォルティスへと高速で弾き飛ばしたのである。

それを即座に理解したフォルティスに、季節名の策は意味を為さない。

精神的なショックを与えることで作り出した隙を突くことができ
ない以上、既に必殺はありえない。戦いで有利に立てない季節名は
攻めあぐねる。

そう予測した瞬間、フォルティスは季節名から繰り出される上か
らの手刀を受け、足を地に沈み込ませていた。

ぬかるみに嵌まった！ いつからそんな状態に？

反撃と脱出を同時にこなすべくフォルティスは瞬時に蹴りを繰り
出そうとして、思わず曲げた膝を踏み抜かれてしまったことで先手
を打たれてしまう。

「くっ」

フォルティスは季節名を睨もうと目を向けるが、その姿は忽然と
消えている。

それが意味するところに気付いた時には、フォルティスは季節名
の空中からの飛び蹴りを胸に受けていた。

その衝撃が完全に肺腑へと到達したことを確信した季節名はその
場にて着地し、

次の瞬間に殴り飛ばされる。肉体が負荷のほとんどを散らしたが、
それでなくとも腰の入っていない大振りの拳であり、大した脅威と
はならない。

だが、続けて顔面を捉えてきたフォルティスの拳は同じ大振り
でありながら季節名を六メートル近く吹き飛ばした。

鼻骨に響く痛みを悪くしながら、季節名は身体を器用に動か
して着地する。

フォルティスは腕を突きだしたまま、季節名との距離を一足飛び
に詰めてくる。

季節名はこのフォルティスの動きにまるで気を払わず、凄まじい加速によって走り出し、そのまますれ違いざまにフォルティスの腕の肉を指環の刃によって削ぎ落とす。

しかし、苦悶の声は上がらないことに季節名は疑問を抱いた。

常ならば、肉を削がれた痛みと刃に塗られた神経毒によって相手は苦しみに支配される。

おかしい。

季節名の疑問は一瞬毎に強くなる。

そして、その瞬間に終わりを告げたのは、音も無く接近するフォルティスの姿だった。

一、二、三と、季節名は連続して攻撃を受ける。防御が間に合わず、無防備に受けたこの攻撃の威力は凄まじく、体を突き抜ける衝撃波は嵐を吹き飛ばす突風と化していた。

そこにいるという気配でフォルティスの動きを感じ取っていた季節名の、その感覚を完全に欺かれた結果である。

だが、季節名には納得が行かなかった。雨粒がものに当たり散っていくことで得られるそこに物体があることを示すある種の日影のようなものがフォルティスの接近時には感じられなかったからだ。

嵐は嵐としての激しさはあるものの、雨粒が落ちる瞬間は季節名の周囲では常に一定の間隔となっている。それ故に気配を生じさせない敵が相手であっても見落とすということはないように仕組まれていた。

気配で欺き、仕掛けを破った。結果としてはそれだけのことでも、後者を成し遂げることは不可能に近いはずなのだ。

季節名は続く攻撃を捌き、痛みを無視しながら考える。

考えながら、仕掛けに頼ることをやめ、フォルティスへと反撃する。

反撃で打ち出した拳はフォルティスの拳によって弾かれ、手首を掴まれると空いた脇へと恐ろしく鋭い拳が叩き込まれる。

フォルテイスはこの瞬間こそが必殺だと判断した。それだけに拳の力は尋常ではない。

「ッ」

季節名は痛みで堪らず姿勢が崩れたところに今度は鳩尾へと拳が刺さり、体がくの字に折れたところで頭を掴まれ、下に引かれた瞬間に合わせて膝蹴りを顔面に叩き込まれる。

都合三度の膝蹴りを顔に受けた季節名の頭がようやく下がる。

そこでフォルテイスは手の内に隠していた寸鉄により季節名の盆の窪を強烈に打った。

そして、同時に針を打ち込んだ。

糸の切れた人形のように倒れた季節名を見て、フォルテイスは確信を持って叫んだ。

「獲った！」

それはフォルテイスが戦闘を再開してから、ようやく心の内を見せた瞬間だった。

だからこそ、倒れ伏した季節名が今度は糸に引かれる人形のように立ち上がったことに驚きを隠すことができなかった。

「あ？」

続いて来るのは衝撃、ただひたすらに衝撃の連続。

勝利を確信し、脱力したところに襲い掛かる無数の衝撃は、まるで機関銃で八丁の巢にされるのと何ら変わらない状態であり、フォルテイスはただ無様で奇妙な踊りをさせられることになってしまっていた。

攻撃を受ける度に肉が削がれ、血が飛び散る。血が未だ涸れず、

肉がなくならないのは鎧のおかげもあったが、フォルティスが自身に施した強化によるところも大きい。

もしどちらかが欠けていれば、季節名はとうにフォルティスを殺していただろう。

延命はできたが、フォルティスの思考も痛覚も衝撃によって白く塗り潰されている。

唯人ならとうに死んでいるだろう状況で、それでもフォルティスは生き、考える。

俺は、

考えるうちに体は動き、浮きかけていた足は大地に根付き、腕は季節名の攻撃を捌いていくようになる。

「英雄」に、

季節名はたった一瞬のうちに形勢が互角となったことに驚き、喜ぶようにして微笑む。

しかし、それはフォルティスにとってはどうでもいい。

目の前のこいつを殺し、俺は「英雄」になる。

今やフォルティスの眼光は執念一色に染まっていた。

「執念。素晴らしい執念。そうだった。私も、私にも執念がある」

「俺はお前を殺す。俺は殺す」

首にも傷を受けていながら、フォルティスの意識は鮮明だった。

執念と殺意のみで彩られた寸鉄による猛攻は舞台と同じく嵐そのもの。

それを季節名が爪の刃で受ける度に火花が散り、血の花が咲いては散っていく。

その先に見えてくる不変の光景に、季節名は、フォルティスは手を伸ばそうとする。

相手の命を奪おうとする。

その命を、欲するが故に。

季節名は微笑する。その心は死境を覗くのではなく、踏み入って戦うフォルティスへの歓喜に打ち震えていた。

「まさか踏み入るとは……いいね。キミの命が欲しくなったよ」

「貴様は死ななければ、今ここで、すぐにでも死ななければ、俺に殺されなければ……命を差し出せ、神様と仲直りさせるチャンス을 くれてやる」

「仲直りも何も無いよ。仲違いすらしていない」

「地獄へ落ちる人間にはどっちも同じだ」

フォルティスが回し蹴りを放つ。季節名も同時にこれを放ち、ぶつかり合う。

そのまま蹴りの応酬を続けお互いが半歩体を移動させた時、季節名の背後に隠れる形で飛び出してきた何かフォルティスへと向かって回転しながら襲い掛かってくる。

「!」

完全に不意を突かれたフォルティスは、季節名が放り捨てた筈の剣に鎧を切り裂かれた。

「何故だ？ いつの間に、俺はここまで」

この運びに至ったのは単純に、季節名があらかじめ剣を放った地

点に来るよう誘導し、機を見て柄を踏み抜けば、地面に埋まった石を支点としてフォルティスへと飛ばすように仕掛けていたのである。

そうしたのは、フォルティスが撤退も視野に入れていたから。

そうさせない為に、強者と戦う為に季節名は武器を捨て、フォルティスに意識せずとも勝機があるのだと感ぜられるようにしてみせたのだ。

「私の兵法は相手の不意を打つこと。これで、勝負ありだ」

フォルティスは最後の反撃を行おうと声にならない叫びを上げ、全力を込めて一步踏み込む。

季節名はその足を払い、倒れ込むフォルティスの首へと剣の平を叩き込んだ。

この一撃で、彼は己の敗北を認めた。

挿話 惑わされても執念は消えず（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

二十三話 開祖の疑問、二代目の疑問

夜に町へと戻ったわたしは濡れた体を引き摺って服屋さんへと飛び込んで、着替えた服とタオルを買ってお店を出た。濡れた着物のお手入れのことも考えて、服屋さんに預けたから、しばらくはここに滞在することになった。

視線を逸らすと左手に握られた『季節名』は今までどおりの小太刀仕込の長刀に戻っていた。何だか哀しかった。

まずは、この世界に彼女がいる理由を知らないといけない。そう思ったわたしは知っていそうな人物に、シルクリムに話を聞くことにした。

さっきの飲み屋さんでシルクリムはわたしの話を聞いたあと、何だかよくない笑顔を見せてわたしを不安にさせた。

「まさかアツチェントの転生術が完成していたなんて。なるほど、合点が行きましたよ」

「どっぴいつこと?」

訊いてみるとシルクリムは蝋燭立てから肝心の蝋燭を抜き取ると尖った先端でカリカリと魔法陣を描いてくれた。けれど、わたしにはそれが何を意味しているのか解らないから、魔法陣を食い入るように見ることしかできない。

「トキナと一度話した際に言ったことなのですが、大陸は転生術への関心が非常に高いのです」

「そうなんだ」

「それで、貴女の今は亡き故郷でも転生術が、密かに開発されていたのです。しかし、それは邪法だったのです。それが全ての災厄の始まりと考えても何ら間違いはないでしょう」

「細かい事は放っておいていいの。それよりどうしてトッキーが魔王なの！？」

興奮するわたしを宥めようとシルクリムは両手をどうどうと言いつて動かす。この人はわたしに隠し事をした。そのことで掴みかかりたい気持ちを何とか抑えて椅子に座った。

「教えて」

シルクリムは頷くと魔法陣を蠟燭立てでトントン叩いた。

「これは私がアッチェント滅亡後に知ったことなのですが、魔物が誕生したのは、この転生術の失敗が原因だったのです」

「それって」

「そうです。今大陸に蔓延る魔物というのは、転生に失敗した者の成れの果てなんですよ。つまり私の親戚ですね。まあ、魔物の全てがそうだったものだという訳ではありません。魔獣と魔人という分類もありますし」

長々と聞く話でもないから、わたしは話に割り込んだ。

「魔王もその転生術で生まれ、じゃなくて、転生したの？」

「ええ、きつと中央の統治に異を唱える者たちが中央が行った粛清

に便乗して奪い取ったのでしょうか」

「肅清って……まさか、アツチエントは中央に滅ぼされたの？」

「そうですね、細かい事は放っておきましょう。トキナが魔王として転生したのは十年前、予期せぬ成功によって新生した魔王の力はご存知の事かと思いますが、魔王は私のような転生体とは違い魂を洗淨することなく全てを継承した転生者。つまり転生術の真の成功体ということになります。私の考えではその術もはやその魔王の手で消し去られたでしょうが」

「どうして？」

「トキナの多分、性格でしょうか。トキナが今でも人を殺していることからして、術を行使した人間が生きているとはどう考えてみるもありえません」

「シルクリム。トツキーを止めるにはどうしたらいいの？」

「それを私に訊くのですか？でしたらこう答えましょう。頑張ってください。いい大人なんですから」

「わたしまだ十七だよ。大人じゃないもん乙女だもん」

「頑張るって言ったのは貴女ですよ」

膨らませた頬を掴まれて、空気を抜かれる。不満を唸って表すと指が食い込んできて、口を開けられたところで中に薄い、フィルムに似たものを入れられる。それは舌に貼りついて、強烈なハツカミ

たいな味がした。これはシルクリムが昔おしおきと言ってわたしに食べさせていたマズイ食べ物だった。

「
」

わたしは思い切り苦しみながら舌に貼りついたものを前歯を使って取ろうとしたけれど、全然取れなくて、わたしは奇声を上げてじタバたしていた。

三分経ってようやくピークを過ぎた味覚への暴力はわたしの舌を未だにいじめてきていて、呼吸をするのも大変だった。

「ハーハー、ひ、ひどい。しよれはもうしない約束はのに」

大人つて、厳しい。それにウソつきだ。舌がヒリヒリして上手く喋れない。

「頑張ってください」

綺麗だけど酷い笑顔だ。涙がちよちよ切れる。魔王打倒の前にシルクリムを打倒したい。そんなことを思いながら、飲み屋さんをあとにしたあと秋ちゃんに取ってもらっておいた宿の二階の部屋に行つて、窓を開け放ったあとでベッドに横になる。

彼女との再会がわたしの夢を崩壊の一手手前のところらまで追い込んでいて、何だか泣きたくなった。でも、泣けなかったから、気分転換に出掛けることにした。

歩きながら空を見上げたら月は明るくてまん丸で、星も綺麗で、こつして見ていると今までのことがごんごん思い出されていって、何だか落ち着く。落ち着きすぎて怖いくらいだった。

それからずつとぼうつとしていたら、後ろから重なった声がかかった。

『ひゅめくさくまー!!!』

爆発みたいな声に驚いて体ごと振り返ると、そこには二人の男の人。わたしにとつてとても大切な人たちだった。

「トーマス！エルムス！」

二人が走って近付いてくるからわたしも走って、トーマスに抱き上げてもらう。

「会いたかったよ」

「姫様、ずっとお会いしたかった……」

「ハハハ、お久しぶりですなあ。本当に大きくなられて、ハハハ、しかし髪の色が元に戻っていますが何かありましたかな？女とは身だしなみでいかようにも変化すると言いますからね、ハハハ」

「これは雨で落ちちゃったの。でも嬉しいな。二人と会えるなんて」

「ハハハ、私も嬉しいんですがね。今日は疲れが溜まっているのでここで失礼させていただきしょう、ハハハ」

エルムスは随分あっさりと去ってしまった。もう少しいてくれると思ったから寂しが増した。でも大分年だから、休みたいっていうのには嘘は無い。それにゆっくり休んでくれたほうが明日遊んでくれるかもしれないと思って気を取り直した。

「姫様、剣を置き去りにしてますよ」

「あ、忘れてた」

何だかとても悪いことをした気持ちで『季節名』を拾おうとする
と掌に痛みが走ったものだから慌てて引っ込めて、恐る恐る手を見
てみると、横一線に綺麗に切れて血が流れていた。カツとなったわ
たしは感情に任せて考えなしの行動に出た。

「このお!」

お返しにと蹴っ飛ばすと『季節名』は虹のように綺麗なアーチを
描いて宙を飛んで、誰かの手によって掴まれていた。

その手がどんな人なのか目線を動かしたとき、砂利を滑る音と剣
同士がぶつかつて弾かれる音がした。

わたしの前に立ったトーマスはたったの一撃で剣を杖にして何と
か立っているような状態になっていた。

「トーマス!？」

「姫様!逃げてください!！」

「私を蹴るなんて、酷いなエスは」

首が石になった気がした。月明かりを背にしていて顔ははっきり
と見えないけれど、間違いない。彼女だ。

「トーマスが相手なら少しは話す余裕があるかな」トキナは虚ろな
笑い声を響かせた。「剣で仕合うなら人として勝負しようかと思っ
て来たんだ。はっきり言うと、頭の上にも雷雲があるのは気分
の良いものじゃない」

トキナは右手で空を指差しながら言うと、トーマスに『季節名』を向ける。

無言で「そこをどけ」と言っている。彼女の殺気は「殺す」という意思じゃなく「殺される」と思わせる。そんな殺気を前にしてもトーマスは一步も引かなかった。

「やはりあなたは変わった……………今のあなたは人を思いやる心が失われている」

トキナはその言葉に力を失ったみたいに刀を下ろして言った。

「それは私が一番自覚してるよ。でも、これがシュウセイというものだって思うと、案外楽に割り切れたよ」

その言葉にわたしは我慢の限界がきたことを感じた。

「…………トーマス。剣を貸して」

トーマスから剣を受け取ったわたしはトキナの正面に立って向かい合った。

「その剣じゃ勝てないよ」トキナは何を思ったのか『季節名』を返してくれた。「それはもうエスのものだけど、もっと大事にして欲しいかな」耳に痛い言葉をおまけしてくれた。

剣を返す。トーマスは剣を鞘に納めると怖い顔をしながら、わたしたちから少し離れた。

わたしが抜刀して刀を大上段に構えるとトキナも同じ構えを取る。その構えの意味するところはひとつしかない。

「虚虚実実の勝負といこうじゃないか」

トキナは妙に嬉しそうな声で言った。

お互いに同じ構え、同じ呼吸をしてこれから同じ動きをするはずなのに、それをやる剣の放つ光だけが違っていた。

わたしの剣は月の光を受けて蒼く、トキナの剣は黒々とした剣の周りに赤い光を纏わせていた。

『型捨無流 奥義 』

声を重ね、動きを、全てを鏡のように合わせて動くお互いの動きに、トキナは微かに笑っていた。

心臓の鼓動がひとつ終わった瞬間に大気を押し退けながら一步を踏み込んで、斬る。

『裂界！！』

同時に振られた剣の刃が正面からぶつかる。髪の毛一本ほどもずれたらお互いに真っ二つになるんじゃないかと思えた。

時間が止まったように思えたとき、剣が交差する。動き出した時間に合わせて、地面が見えない斬撃に鋭く抉られて、雲が割れた。

お互いに同じ流派を窮めていることからさすがに一撃では決着が着かない。

剣を高速で打ち合う、けれど高速で動くのは剣だけじゃない。体の動きは悟らせず、走る速さならわたしは十年前のトキナよりもずっと速い。

周囲を砕くように強烈な力で跳び回りながら剣を振る続ける。空気を切り裂く刃は足で加えた分の加速も受けて、熱気を立ち昇らせて陽炎を起こして、やがて不可視となる。

「型捨無流 陽炎」

トキナとわたしは「妖」形が根本的に違う。これが、わたしの型捨無流の技。

これほどの速度の剣を避けるのは、いくら彼女でも不可能のはず。そう、わたしは自分に言い聞かせてその命を狙って刃を向けた。

その剣を見切っているトキナは恐ろしくゆっくりと動いているように見えた。けれど実際はとても速い。

そんなずれた動きで剣を天に掲げると、トキナは何の素振りもなくわたしへと迫って跳んで来た。それに反応したわたしの剣は、間違はなく、急所を狙わされていた。

咄嗟の事に体が硬直してしまっただわたしの両肩とお腹をトキナは同時に貫いて、お腹にそのまま突き立てて下にゆっくりと斬つていくとした。

「あ う！！！！」

髪を引つ張られたときみたいに剣の動きに合わせて膝を着いてしまっ。両肩から先は動かない。トキナの剣は骨と肉をスタスタに切つていったから、普通に刺されるのよりもとても痛かった。

「臍を貫かれると痺れるらしいけど、どうかな？」

痛みでお腹に力が入る度に刃が体に食い込んで痛みを起す。体中から冷や汗や脂汗が流れ出て干からびるんじゃないかと思えてきた。血も流れていくから意識が、無くなりそうになる。それなのに、体に入り込んだ凶器がそれを許してくれない。

「エスは我慢強いね」トキナは柄から手を放すとしゃがみこんで顔

を近付けてきた。「男だったら死んでるだろうね」

痛みが薄れてきたと思ったら、今度は痺れて動けない。

「まさか、剣に毒を塗るなんて……」

「まさか、私は自分に毒は塗らないよ。今エスが動けないのはそういう場所を刺しているからだよ。トーマス？動かない方がいいよ」

遠くで地面を滑る音がする。きつとトーマスが急に足を止めた音なんだと思っていたら、トキナが微笑を浮かべて、わたしの顔をじつと見てきた。

「？」

朦朧としている意識ではよく考えられない。だからわたしはぼつと彼女の顔を見ていた。

「命って尊いよね。けど重いつて言うわりには軽いよね。でも貴重だ。でも腹の足しにはならない」

言っている言葉のひとつひとつの意味は解つても、それがどう繋がっていくのか解らなくて、わたしは戸惑った。

「ねえエス。命って何なんだろうね？」

そんなことを訊かれてもわたしにはよく解らない。だから黙っているとトキナは光の無いくすんだ目でわたしのことを静かに見つめてくる。

「エスは命が大切なものだと思った。それが私のものであっても変わらずに。だから剣が一瞬止まった。でも、命が何なのかは解つてないまま、そんなことをして良かったの？」

「何を言ってるの？」

「命って何なんだろうね？」トキナは同じことを小首を傾げて言うと、わたしから剣を引き抜いた。「エスはもう少し修行をしたほうがいいんじゃないかな。今のままじゃあ、私に掠り傷一つ負わせられないよ。フッフッフ」

わたしはその言葉を耳にしたあと、血の赤が広がった地面に顔が近付いていくのが解った。

二十四話 白き虹

目が覚めても、わたしは目を開かなかった。ただ、瞼を通して見えるのはきつと今空にある蒼に負けないくらいの蒼色で、日の温かみがとても心地よく感じられる。風が首と額を撫でていくのが解る。それでざわめく木々の音と鳥の声がわたしの目に見えない部分を癒してくれているのが解る。

世界は綺麗なんだって改めて知った。こうして目を閉じて耳を澄ますだけで、世界がこんなにもわたしを包んでくれる。

疲れた心が元気を取り戻したところでもわたしはその場から跳ね起きた。わたしは人よりずっと上手に魔術が使えるから一回二回の致命傷を受けた程度ならすぐに回復する。だから、短期間でここまで強くなれたんです。

起き上がって肩回しをしながら冷静な方のわたしになって考えてみる。

「魔王を倒すのに必要なものは、迷い無く命を奪う精神。それを得ることは可能？不可能？」

答えはすぐに出てくる。不可能。それは間違っていないはずなのに、どこか信じられないわたしがいた。

「どうやら回復したようですね。でしたらこれに着替えて外に来てください。修行をしますので」

シルクリムは言いたいことを言うどわたしの着物を置いて行ってしまうていた。面倒だと思いつながらやると普段よりも動きが遅いことを自覚しながら帯をしっかりと結ぶ。

朝ごはんが食べたいと思いつながら外に出て宿の裏に回るとシルク

リムがバトントワリングによく似た動きで得物を自由自在に動かしているのが見えた。それが終わったときに拍手をするとシルクリムはお辞儀をしてくれた。

「聞きましたよ。魔王を斬り損なったそうですね」

「わたしは間違ってない」

「あの瞬間に人としての正しさに一体どれほどの価値がありましたか？」

「ただ。わたしはまた価値の解らないものの価値を訊かれている。そんなの知らないのに。解らないのに。」

「わたしはわたしが正しいと思うことをしたの」

わたしは自分に解ることを口にした。真っ直ぐにシルクリムの顔を見ると、笑ってる。

「そうですか。ならいいのです」

「え？」

わたしが驚くと、シルクリムも驚いてわたしを見ていた。

「驚くことはないでしょう。貴女は貴女の正しいと思うことをした。私はそのことに疑問を差し挟むつもりはありません。私が疑問に思うことはひとつです。何故武器を持っていないのです？」

「わたしは人を斬るための剣を持たない。けれど、剣は人を斬るも

のでしかない。そのおかしさをずっと疑問に感じながら、わたしは剣を振るってきました。でも、はつきりしたの。わたしには剣は要らない!」

「何故です?」

「だって、わたしに剣は要らないって解ったから」

「ならば聞きましょう。剣を持たないその手で、貴女に何ができるのかを」

「わたしはこの手で魔王を倒します」

拳を握り締めて蒼い色をしたわたしの魔力を体に沿った形で解放する。

心臓の鼓動に合わせて魔力が波立っていた。

「ああ、そういえば貴女は魔術を使うんですね。ついでに言うのなら、王族でしたね。トキナの剣技に合わせて膨大な魔力を使えばあなたは最強の、はずでしたね」

シルクリムは確認するように言うと静かにわたしの魔力を見ている。わたしは意を決して告げることにした。

「わたしはトキナから全てを写し取った。盗み取ったと言い換えてもいいのかもしれませんが」

彼女は仮にもシスター。静かに言葉を聞いてくれる。

「でも、わたしはトキナの全てを得たとき、その違いに気付いたの」

剣と鼓動が合わないのもそう。剣に拒絶されるのもそう。そう、わたしは、

「わたしは素手のほうが強いって」

だから人を斬る道具は必要無いって、変な風に割り切ったときから、わたしは『季節名』に嫌われたんだ。

「トキナも、そうなのかもしれません」

シルクリムは閉じていた目を開くと戸惑いながらそう言った。

「え？」

「彼女は、人として剣を窮めていました。しかし、それは剣の道を極めている訳ではありません。そうですね。素手で戦ってみるのも悪くないかもしれませんよ？」

わたしは何だか良くない予感がして口を開いた。

「シルクリムは、魔王になったトキナとも戦って、それで負けたの？素手で？」

「実を言うとそうですね……貴女にしか倒せないと言ったのもそのためです」

「……………」

「……………」

お互いに言葉が出なくなつて、鳥だけが鳴いていた。言葉に必要な材料が何も出てこないから仕方ないんです。

「まあいいでしょう。貴女が無手でどの程度戦えるのか見せてもらいましょう」

シルククリムは武器を放り投げて言った。

「見るだけじゃダメだと思つな。そう、見ているだけでは、その本質が見えることは無い」

シルククリムは足を閉じて手を広げる。それは教会に置かれている像と同じ構え。それは優しさと大きさを感じさせてくれるけれど、目の前にいる女神にも似たものは全然違つた。逆が何かは解らないけど、逆という言葉に近い何かがある。

「我が名は偶像^{シルククリム}。神の化身として汝の力を見定めよう」

シルククリムから六色の魔力が放たれる。虹を七色とするなら不完全だけれど、綺麗な光だった。

「貴女の蒼天の輝きは、私の光を満たしますか？」

シルククリムの魔力から赤が頼りなく揺れて、炎を生み出して、次に紫が稲妻を、緑が溶けるようにして風に、黄色は無数の剣を、オレンジが樹木を、その中で青は何も生み出さない。まるで万物を生み出すみたいだったのに、青だけが何も生み出さない。その何も生み出さない青がわたしにはとても気になった。

でも一番気になるのは、これほどの力を持ったシルククリムに勝つ

たという魔王の力の底知れなさにある。

「世界とは光と闇、目に見えるものと見えないものでできているのです。貴女には見えないものが分かりますか？」

「シルクリム。世界はきつと、感じられるものとそうでないものでできてるんだよ。人にとっての世界は、結局はそういうものでしかないんだと思うの」

わたしが言葉を返すと、シルクリムは髪を風に揺らしながら綺麗に笑った。

「やはり、貴女はトキナだ」とも楽しそうに言った。「ただ、貴女の笑みは夏の太陽のようですね」

「トキナは季節の名っていう意味があるの。それで言うなら彼女は春で、わたしは夏になるのかな？」

魔力が交じり合おうとして、跳ねつけて火花を散らしているのが見える。戦いはもう始まっているんだ。

わたしの型捨無流はトキナとみんなから学んだものでできてる。わたしの「妖」形は無手での戦いになる。

「貴女の構えと私の構えを比較していると東西の神の像を思い浮かべますね」

「わたしは東」

「私は西」

「けれど、立っているのは北と南です」

「北の神を私は知りません」

「わたしも南の神様は知らない」

それでも、お互いに心で話せることがある。その言葉はきつと同じ、それは、わたしたちは

『 戦い方を知っているということ』

お互い魔術を発動前にキャンセルし合う。最初からこの勝負では決着を着ける気はないから、熊手で正拳突きを打ち込む。

シルクリムは優雅に足の位置を変えて最小の動作でそれを避ける。わたしは姿勢を傾斜させて溜めを作ったあとで肩を入れた体当たりを加える。その瞬間に加速して横に回り込まれるのが解ったから距離を取って構え直す。左手は頭上より高く、右手は下段に構えたあとで一度浅く息を吸って、その吸った息の百万倍くらいの力で地面を蹴る。

一歩で間合いを詰めて、槍を突き入れるように貫き手を繰り出す。それをどうよけるのかを読んで足を地面に火が付くくらい早く動かして肘打ちを決める。シルクリムが仰け反ったところで、無防備なお腹に横蹴りを入れると見せかけて、足を踏んで固定して心臓を挟むようにして肘を打ち込んだ。

シルクリムの心臓が止まるのが解った。わたしは追撃の為に足の位置を素早く変える。火線を引きながら刹那の内に手刀で三打、顎と首と脇腹を叩く。どれだけ技が優れていても、それを封じる速さと技があれば怖がることなんかない。鉄砲だって引き金を引かせなければ意味が無いのと一緒だった。

とどめに肋骨の内側に指をかけて、本来なら思い切り引つ張る技

だけれど、怖いから骨を握り潰すことにした。

けれど、技はかからない。わたしの手は寸前で掴まれていた。

「やはり甘い」

言葉が骨に響いてきたのを感じたときにはわたしは首には左右から、頭には後ろから衝撃が来て、次に頭の中に重りを入れられたような鈍い痛みがくる。続いて来る攻撃はなんとかかわして距離を取ると、集中の途切れを狙って打ち出された魔術の一斉射撃に思い切り当たってしまった。けれどこのくらいは体を覆っている魔力で相殺できるから平気だった。

「あ」

そうだった。シルクリムも魔力で体を覆っているから普段よりも頑丈なんだってことをわたしは忘れていた。

「やはり貴女は妙に余力がある。一生懸命にやっているのは分かるのですが、良くも悪くも貴女はトキナと同じで全力を出さない。いえ、貴女は全力が出せていない分、トキナに劣る。貴女はその才能が高いから手加減が上手くできてしまう。もしも貴女が普通の人間であつたなら、その手加減は通用しない無意味な攻撃ではないでしょう」

シルクリムは一息吐くと魔力の色を重ねていく。それは段々と白くなって、やがて眩い光になった。

「仕方がありません。こんな汚れた感情を表には出したくないのですが、貴女は人の動きを読むのに長けているのですから、こうした方が分かってもらえるでしょう」

鉄がひしゃげるような嫌な音がそこかしこから聞こえる。シルクリムの殺気が大気を泣かせているのが解る。

「あらかじめ言っておきますが、私の白虹はつこうは月か太陽のどちらかが顔を出していないと使えない技です。この技がトキナにも使えるのなら、私は苦も無く彼女を討ち滅ぼすことができますよ」

シルクリムが自信満々に言い切った背後の白い光のアーチ、『白虹』は確かに強い力が感じられた。彼女が頭上に常に嵐を巻き起こしているのにはこういう理由があったんだとわたしは納得する。

「ここからが本番になります。せいぜい命を繋ぎとめることです」

白銀の虹が煌く。その輝きは刀の刃にも似た鋭さを感じさせて、わたしに確かな恐怖を与えていた。

「待って！」

わたしは戦いそのものへの怖れとは別の、戦いの内容に空手だということが不利なことを悟って怖くなった。

「……何でしょう？」

「やっぱり、刀取ってきてもいい？」

「自由」

この人の前で大人ぶるのは絶対にできないなど、わたしは心の中で挫けてしまった。

二十五話 魂の敗北・夏の終わり

白い虹が煌く。その軌跡は綺麗なアーチを描いて迫る。数は七つ。全てが必殺。

一点に収束するのは読めているから避ける。けれど、それはとても速くて、わたしの足だと避けるので精一杯だ。

再開してからまだそんなに時間も経っていないのに、私の体からは力が無くなってきた。

背筋が知らずに丸くなって、肩が息をする度に上下する。鳩尾が重い。くらくらししてきた。やっぱり朝ごはんを食べないで激しい運動をしたから体力が底を突いてきたんだ。

反撃する機会を窺いながら、たまに剣を打ち合わせる。

そんな状態が長く続いて、わたしは体力も精神力も底を突きはじめていた。けれど、呼吸をする度に感じる空気は澄んだ水のように清涼で、剣を握る手は力で溢れ返ってくる。そして、人を斬ることに申し訳ないと思ったり、いつも斬ろうとすると手を止めようとす
るはずの縄が、心の中から無くなっているのが解った。

ぼうつとする。

そんなわたしにシルクリムの、敵の眼力が叩きつけられる。気に入らないから斬りかかった。

敵の表情が曇った。わたしの反撃がそんなに意外だったのかな？

「力をつくし、技をつくし、思いをつくして、汝が信ずる剣を愛せよ」

敵は第一の掟によく似た響きの言葉をあげると、鋭い吸気音のあとに得物を振るう。

目に映らないそれを何とか受け流して足を運ぶ。この足が止まっ

たら、本当に全てが止まると知っている。

だから、わたしは止まらない。

視界を覆う霧は濃くなっていく。濃くなればなるほど、わたしの剣は鋭く冴え渡っていく。

武器が触れ合う度に手に握られた『季節名』が震える。まるで喜んでみるみたいだ。何だかわたしも嬉しくなる。

「剣は人のためにあるもので、人が剣のためにあるのではない」

得物を地面に突き立てて軸にした敵の全力の蹴りが、刀の峰を見事に蹴って防御を無くす。

「愛の意味を知れ、愛に連なる全ての意味を知ったとき、人と人のあいだにあるものが見えるだろう」

突撃の威力を殺すことなくわたしの頭を残った足で蹴飛ばして行く。

地面を滑る。何とか倒れないようにしたけれど、首の骨がおかしくなつて、違和感で集中できない。

「人の幸福を知り、己の幸福を知りなさい。人の不幸を知り、己の不幸を知りなさい。そして知るでしょう」

鋭い呼気。わたしはそれを聞きながら首を捻って骨を鳴らす。

こちらから斬り込んでいく。飛び散る火花は見ていて楽しくて、だから剣を振る速さを上げる。

「その数は決して等しくないということに。そして、気が付くですよ」

剣戟は激しさを増す。楽しさを増す。
白い虹が敵の得物と重なって、万華鏡を覗いた時のように周りに散りばめられる。

「己の幸福が人よりも多ければ、その人より幸せであり、己の不幸が人よりも多ければ、その人より不幸だと」

敵の姿が、見えなくなる。

「それは間違いであると信じなさい。それは正しいと信じなさい。そして、疑いなさい」

敵が踏み込むのが解る。その踏み込みから流れる魔力が大地を水面のように波立たせるのが伝わってくる。

そして、そのままわたしは波にさらわれるようにして敵の間合いに引き込まれていた。

「ふう」

焦らずに全身から力を抜いて、間合いに入った瞬間に右手に握った『季節名』を腕が抜け落ちるくらい速く振るう。

鼓膜をマヒさせる衝突音の多重奏。それはわたしの居合いの剣圧が敵の攻撃を凌いだことへの福音だった。

振り切った状態で手首を返す。右手に合わせて動かしていた左手で柄を握る。

時間を飛ばして間合いを詰めて、小太刀を使って最高速度の抜刀術を決める。

敵はそれをかわす。けれど、裂界と同等の力を持った斬撃は容赦無くその体を傷つける。

見える。敵の動きが。

見えていない。大切なことが。

刹那、頭を掠めた疑問は、次の刹那には消えてなくなる。

わたしは振りかぶったままの『季節名』を思い切り袈裟に振り抜いた。

「白虹！！」敵の叫び声が耳を叩いた。

わたしが剣が地面を切り裂いたのと同時に、七つの閃光がわたしを切り裂いていた。

「い、痛い」

体中に走った痛みで、わたしの視界を覆っていた霧が、晴れた。

シルクリムは片膝を地面に着いた。胴の傷は深く流れる血の勢いも早い。無くなった右腕はもう元には戻らない。

わたしもこの傷で身動きが取れない。どうしてこんなに痛いのでしょうか、こんなことになったの？

そう思ったとき、『季節名』がわたしの手から落ちて転がった。

「エスタシア……まさか、剣に呑まれるとは。その魂の弱さに付け入られたようですね」

「シル、クリム」

「私はこれくらいでは死にません。ですが、これではっきりと分かりました。そして、はっきりさせました」

わたしも血に染まった自分を見て悟った。

「貴女は」

「わたしは」

「その剣を」

「『季節名』を」

『二度と使うことができない』

何故なら、わたしもシルクリムと同じように片腕を失い、それによつて自分の魂の弱さを知ったから。
そして、わたしの心は、折れた。

二十五話 魂の敗北・夏の終わり（後書き）

いざ伏線を拾ってみたらこんなことになりました。

悲劇は基本的に嫌いなのですが、何故でしょう？

いつの間にかアクセス数も伸びていて、この作品が多くの人の目に触れていると思うと感無量です。

何はともあれ、読んでくれてありがとうございます。

この一言に尽きます。

二十六話 三代目

記されし暦474年。

魔王が忽然と姿を消し、大陸に平和がもたらされてからしばらくの時間が流れた頃、ある記録が大陸に伝えられた。

あるとき異界の神が現れた。

異界の神は我らの神の許しも無くこの地に降り立ち、七日七晩のうち神の大地の多くを奪う。

奪われた地に君臨した数多の王たちは我らの神を見限り、異界の神へと魂を引き渡した。

我らは異界の神を悪魔と呼ぶことにした。あれはあってはならないものだ。

悪魔は陸たちの間に陸を生み出して神の大地をいようにして遊ぶと人手を借りることなく自らの威光を示そうとするかのように大きな教会を作り、塔を作り、城を作り、そして、学び舎と呼ばれる巨大な何かを作った。

悪魔が奪った大地に息づく者どもは悪魔に与えられる恵みに正しき心を失い、悪魔を称えるようになる。

もはや、あの大地は神のものではない。悪魔の眷属が住まう卑しく穢れた大地なのだ。

我らは我らの神の判決を待った。

そして、裁きは下された。悪魔の大地は一夜にして消え去ったのだ。

我らは歓喜して大海原へと船を漕ぎ出して行った。そこで、驚くべきものを見た。

悪魔は異界の神へと立ち戻った。異界の神は我らの神の許しを得て小さな島に住んでいるらしい。

ここで我らは迷った。我らの神の許しを得てここにいるのだからあの島を我らのものとしてよいのか。

それとも、あれは異界の神のものとして神が認めたものであるから、我らの立ち入っていい場所なのかどうかと。

やがて、我らの中の不信信者たちが悪魔の大地へと半日ほど滞在して戻って来たという。

その話はおかしなものだった。彼らの言う話では、その島が広大に過ぎたのだ。

我らはよく分からなかったが、そこは仮にも異界の神が住まう場所人の理ことわりでは理解できるはずもあるまい。

長い時間が過ぎた頃、我らの前に異界の神の使いがやって来た。

我らはそれを迎え撃とうとしたが、異神の使いから感じられる神性を前にして、それが愚かであると悟った。

神の使いは我らの地で困っている者たちがいないかと聞いた。我らはそんな者たちはいないと言った。

ここは神の地である。その矜持からの言葉だった。異神の使いも納得したような顔を見ると去って行った。

またしばらくして、我らの争いが終わったちようどその頃、また異神の使いがやって来た。

今回の異神の使いは我らと話をせず、迷える者たちへと問いを重ねた。

やがて、我らの神を敬う心を捨てて異神の使いへと救いを求めた者たちは異神の島へと導かれて行った。

我ら、いや、我はもうこれ以上のことを語ることはできない。ここから先の話はいずれまた……

大陸の人々はこの記録に関心を持ち、海の方こうへと今までよりも強い関心を持つようになる。

そして、人々と同じようにこの記録に関心を持った者がいた。

妖刀『季節名』を真に継承した盲目の三代目。トキナ「アウヌム
トウス。

剣士『季節名』の名を継いだ彼女は今、独り大海原を進む船の先端に立ち、太陽を見上げていた。

二十六話 三代目（後書き）

三代目の話は、おそろく長いです。

二十七話 異邦人

肌に感じる熱の強い方に顔を向ける。暖かい。
この暖かさだけが私にとっての光だと気が付いたのは何時のこと
だか。

言葉に色が抜け落ちていることを変に思われ、目の前が見えない
ことを嘲られたのはいつ始まって、いつ終わったのか。
こんな感傷に浸ってしまうほどに生きられるなんて昔は考えてな
かった。

これも二代目のおかげ。けど全ては私のおかげ。

二代目は武人じゃなかった。だから刀をどう使うか悩んだ拳句に
『季節名』に魂で負けた。

それでも師としても、剣士としても強かった。

何より、美味しい料理を作ってくれる優しい人だった。私は二代
目のそんなところが一番好きだけど、そんなだから開祖には絶対に
勝てなかったし、『季節名』の主としても不十分だった。

少し違うか。二代目の魂は弱くは無い。ただ、隙を見せ易いから、
負けたんだ。

それにしてもこの刀、私の手には恐ろしく馴染んでる。きっと私
のことが好きなのね。

正式に三代目になってからは二代目と一緒に大陸を歩き回って開
祖を探して、本当に大陸からいなくなつたことを確認してから、暇
になった人生にちょっとした、彩りを加えようと与太話に乗って異
神の島へと向かっているというのが現状だった。

私は魔術の影響で獲得した視覚とは別の感覚『心眼』で後ろを見
る。そこには海賊という海の盗賊が額を刺されて死んでいる。海賊
のおかげで私の服はボロボロだ。そういう戦い方をするから、私に
は『季節名』しか与えらなかつた。

別に、あの着物が欲しい訳じゃないけど、あれは良い物だって判

る。これ以上無いというくらいによくできた代物だ。

だって、あれは枯れることを知らない花みたいな物だから。

揺れを感じて周囲を確認すると、塩の匂いとは別の匂いを感じた。このとき、肌を感じる風と腹時計から時間帯が夜だということに気付く。耳を澄ませば、確かに夜の静寂しじまが聞こえてくる。

泳ぐのがあまり得意ではない私はおつかなびつくりといった心持ちで傷んだ木の板を渡って、石敷きの固い地面を慣らすように二、三回踏んでから周囲に注意を払いながら歩いて行った。

どうやら、これで『季節名』宛てに来たという手紙の内容も本当になった。

幸運なことにこの島での仕事は決まっている。

実を言つと、私がこの島に足を運んだのはちよつとしたきつかけがある。

そのきつかけは一通の手紙。二代目が言つには私に島へと出向いて剣を教える立場になって欲しいという話だった。それと何か事件が起きた場合にそれを解決する力になって欲しいとも、手紙には書いてあつたらしい。

せつかくだから来るだけ来てみたけど、この感じだと学校という場所に着くまでには大分かかりそうだ。

だって私、道を歩くの苦手だから・・・きつと迷うんだろうな。

思ったとおり道に迷いながらも学校に着いたとき、私の近くには人が集まって来ていた。

会話の端々を聞き取ってみると「始業してから今まで一度も」とか「もしかして今来たの!？」とか色々聞こえてくる。

「あの」若い男の声だ。「あなたが剣術の指導を担当してくれるトキナさんですか?」

わざわざ聞かれた。一応、外見の特徴を伝えておいてもらったのに、不十分だったのか？

「・・・拙者はトキナに見えぬのか？」

侍は形からだと考える私としては、人と話すときは拙者と言うことになっているけど、周りは静まり返っている。

私のたった一言が何か間違えたとは考えにくい。それでも場の静寂が破られることは無い。不信感と不快感から腕を撫でていると「何だあの猟奇的な雰囲気は？」とか「殺気を感じる」とか聞こえてくる。殺気なんて出してない。

「拙者は殺気立っているように見えるのか？」

話し声が消える。場が水を打ったように静まり返る。

「すみません。それよりここに来るまでに何かあったのでしょうか？」

男の要領を得ない問いに眼力を強めると、明らかに狼狽しているのが解った。

「何かとは？」

「いえ、出発する前に連絡をいただいた時とは声が違ったものですかから」

「それはきつと拙者の師匠だ。拙者、機械の扱いには心得が無いゆえ」

殆ど与太だと思っていた私に代わって二代目が色々と手を回してくれていたことを思い出す。

おかげで、この何の縁も無い場所に居場所があるから、出てくるのは感謝の言葉ばかり。何だか少し癪だった。

「師匠つて言ったねあの人？じゃあ弟子なのかな？」「若いしね」

「あれ何かな？」「あれはカタナつて言うんだよ」

「何で腰から下げてるの？」「たぶん、あれはクリエイトじゃないんじゃないのかな？」「島の外はまだあんな骨董品を」

聞き逃せないことを言う。私の刀が骨董品、役に立たない古道具？

「聞き捨てならぬな。拙者の剣が骨董品だと言ったヤツ、前になる」

この一言に周囲が騒ぎ立つ。こういうときには静かにして欲しいものだ。

「自分が言いましたけど、何か問題がありますか？」

声の調子、心音、血の巡る音、それとそこに潜む感情を殆ど無意識に感じ取って解るのは、嘲りと傲慢さだった。

刀を骨董品と呼ぶくらいだから、きつと文明の発展度合いが違うんだ。それがこの驕りに近い自信の正体。

「今の一声で大体解った。どうやらこの島は拙者がいたところよりも随分と進歩した技術があるらしい。だが、それを扱う者はさして進歩はしていないようだ」

「ウィリアム先生。ちょっとこの人、試していいですか？」

「フィリップ君、それは困るよ」

「どう困るって言うんですか？ああ、もしかして俺が勝っちゃうからですか？」

頭痛がしてきた。相手の実力も解らない。自分の実力も解らない。そんなのに好き放題言われて黙っているほど、私の堪忍袋はそう都合良くできてはいない。

「オマエに解るときが来ると信じて言っておく。持つ者が持たざる者を笑うことは自らの祖先を笑う恥知らずの行いだ」

「先生。向こうもやる気みたいですよ？」

ウィリアムの心音と呼吸が乱れに乱れているのが聞こえてくる。あまり気の強い男じゃないらしい。

「トキナさん！あなたの力は保証されています。ですから生徒を殺すのはやめてください！！」

最初、それが与太かと思っただけど、かなり本気で言っている。道理でそんなに心臓が暴れてるわけだ。

ウィリアムの大音声に周囲の雑音が途絶えた。緊張して震え上がる心臓たちの音が耳に届く。きっとウィリアムの言葉にはそれだけの信憑性があるという、その証明だった。

「拙者は教えるためにここに呼ばれて来たのだ。教える相手を殺しては元も子もあるまい」

私の言葉の効力は思いのほか効き目が無い。すごい癩だ。
それがいつの間にか顔にも出たのか、周りは余計に静かになって
いた。

「先生はいつも大袈裟ですよ。だって相手は無駄に長くて鞘に入っ
たままのカタナ。こっちは」

微かな風音。熱がフィリップの右手に集まっている。魔術でも使う
のかと思いきや、集まったものが何かの形を得ていることに気付い
た。

「ハンドガンですから」

聞き慣れない金属の可動音のあと、ハンドガンが私に向けられた。
ガンということは、鉄砲。飛び道具なのか？

「それで拙者の力を試すのか？」

冷静になって聞いてみると、ほんの少しフィリップに緊張が走る。
結構、臆病なんだ。

「この距離で撃つたらお前死ぬぞ？」

その言葉で自分を勇気付けている哀れなフィリップ。何だかもう
名前からして哀れに思えてきた。

「フィリップ君！お願いだからトキナさんを刺激しないでください」

「ウィリアム・・・フィリップに目は付いているのか？」

「は？何言つてんだお前」

フィリップは絶句するウィリアムを置いて苛立った調子でそう言う。頭に血が上り始めている。

私の最初の師匠でもあるフォルティスは戦いを挑まれたときにいつも言っていた。

「拙者がいいことを教えてやろう。喧嘩を売るなら、相手よく見て売れ」

フィリップの筋肉に動きが起こる。引き金を引く気のように。しかし、その動きと私が動く速さは違いすぎる。

弾が銃口から出たときには、私はそこにいない。本来ならいけないけど、少し大道芸でも見せてみようという気になった。

小太刀を抜いて刃を撃ち出された弾の前に立てる。

そして、弾は真つ二つになってはるか彼方に飛んでいった。そもそも、弾自体が大した速さを持ってない。

「良かったねフィリップ。もし弾が当たって死んでたら、拙者、オマエのことを許すところだった」

体中の気がざわめいて、それが段々と眼を圧迫するのを感じる。

私の目は、見えはしないけど、魔力を使って相手に感情をぶつけることができた。

そのせいでどれだけ表情を消しても、目から伝わる感情に因縁を付けられて酷い目にも何度か遭った。

今では、それも便利な武器になった。私の感情は立派な凶器として、フィリップに突き刺さっている。

歯の根が噛み合わなくなったフィリップは恐怖している。

これくらいで心が折れるようだと言開祖の前に突き出したらそれだ

けで死ぬ。だって、アレには昔の私だって死にそうになった。こうして比較する相手がいると二代目はやっぱり強いんだ。

「ヒッ」

手に持ったままの小太刀を足元に投げ付けてみるとフィリップは短く悲鳴を上げて尻餅をついた。

「格好悪い」

感想を言つて小太刀を拾いに足を進めるとフィリップはどこかへと走って行った。

小太刀を拾つて鞘に納めていると周囲の気配がおかしい。それで私に注がれる視線がどうにも居心地が悪くて、できることなら今横に抜けていった風と共にこの場を去りたかった。

「ウィリアム。オマエは拙者を案内する役ではないのか？」

こちらに意識を戻すとウィリアムは生徒達に解散するようについで学校に歩いて行こうとする。

私はその前に、ウィリアムの手を掴んで引き止めた。相手の心臓が飛び跳ねるのが解った。

「・・・なんでしょうか？」

私は手を放し、それからウィリアムの耳をつまんでそつと耳打ちをする。

「拙者は目が見えない。だから入り組んだ場所を歩くのは苦手ゆえ、できればゆっくり歩いてくれ」

そう伝えてから、私は何故この学校の人間に必要なとされたのかを
真剣に考え始めていた。

挿話 開祖が名前を変えるとき

私が仏になつてから、二十一年もの月日が経った。始めのほうは気が向くままに人を斬り、やがて待ちわびた敵を倒して、成長を待ちわびていた弟子にその未熟さを教え、更に強くなることを望んでいたのに、エスタシアは戦うことを捨ててしまった。

私は剣の道を極めたかった訳じゃない。人間を窮めたかった。けど、その先にあつたものは。

海で眺める夜明けは格別だ。これからはこんな風に景色を見て回るだけでもいいのかもしれない。

「戦える相手がいなくていうのは、楽しくないね。ねえカイル？」

それに、こうして微笑を送る相手もいる。この十年、孤独で無いらからこそ、私は生き方を変えるきっかけを得ることができた。孤独だったら、今見ている太陽の光が心に射し込むこともなかった。それは確かだった。

「俺が戦ってあげられたらいいんだけどさ、俺じゃちょっと相手としては不足だしなあ」

カイルは苦笑を浮かべる。その顔に刻まれた皺の深さが、流れた時間の長さに実感を持たせてくれた。この点において、私の体は目印にはならなかった。おそらくカイルが傍に居なければ、私は時の流れから外れていただろう。

「俺思うんだけどさ、十一年前のこと、お姫様に嘔吐いたままでい

いの？」

「嘘なんか吐いてないよ」

「いいやあれは嘘だ。真つ赤な嘘だよ！君のおかげで中央に巢食っていた悪が根絶やしされたんじゃないか！！」

「更なる悪になってね」思わず笑うと、カイルが困った顔をした。「魔物が大陸で急増したのも元はと言えば私が招いた結果だし、それがこじれて魔王なんて架空の存在が作られたし、そのあとには中央の息のかかっていた特A級の一斉蜂起、向こうは私を魔王呼ばわりで討伐しようと刺客を送り込みながらも徐々に四方へと援助という形を取ることと支配力を広げたよね。そこから中央は真実を知る特A級をシルクリムに討伐するよう命じて、関係者を抹殺。ついでに私を倒すように仕向けたけど、失敗。シルクリムは、どこまで解ってたのかは知らないけど、エスタシアを使って私を倒そうとして、これまた失敗」

「その時だよ。その時、君は仕立て上げられた魔王になりきった。俺は何でそんなことしたのかが知りたい」

カイルの目は真剣だった。私の故郷に行ったことで男というのに磨きをかけたようだ。

私はひとつ息を吐いて、全てを白状しようという気になった。

「戦ってみたかったんだよ。エスタシアの才能には惚れていたからね。けど、才能は開花することなく終わってしまって、それを知った頃にはちょうど私のすることも無くなって、あのときは本当に途方にくれたよ」

「君は、魔王じゃない。英雄『白き隼』だよ」

「そうなのかな？私は確かにそう呼ばれもするけど、そう呼ばれるのはあの顔隠しのおかげだよ」

あの男は私から知った真実を受け止めて行動した。その後ろ盾によつて、私が単に正義の旗を掲げて人を斬っただけの話。そう、あれは周りが私の人斬りを正当化しただけの話だった。

「それに、厳密な意味で言えば魔王も英雄も架空の存在だよ。どちらも私という扱いからすればわざと揉め事を起こしてそれを鎮めつつ考えてもおかしくないよ」

「君のしたことはマッチポンプなんかじゃない！！」

珍しいことに、カイルが怒鳴っていた。

私はそのことに驚いて、うたた寝していた梟が目を覚ましたときみたいに目を丸くしてしまっていた。

「あ、ごめん。ただ、さささ、さ」

続く言葉が無いことに私は辟易した気分になりながら言った。

「無理に呼ぶ必要はないよ。けど、どうしてカイルは私の新しい名前を呼べないの？」

「だって、君のお父さんに」

私はここですかさず口を挟んだ。

「父親じゃないよ。組長は」

「でも、トキナのこと娘だって言ってたよ」

「まあね。組長は本当の父親じゃないけど、あの人が私を娘だって言うのなら、きっとそうなんだろうね」

「よく分からないよ」

「私も組長のことは父親だと思ってる。血の繋がりは無いけど、確かに私と組長は家族だよ」

「やっぱりお父さんじゃないの?」

「少し説明したかっただけ」

また、自然に笑みが零れる。私は、十分に幸せだ。けど、もう少し欲しいところだ。

「ねえカイル。名前で呼んでくれない?」

「トキナ」

「それはもう昔の名前だよ。今の名前で呼んでくれないと」

「……」

カイルは固まったまま、息を呑んで私の顔を見つめている。口が開いては閉じるを繰り返す。

はつきり言って、もどかしかった。

やがて、カイルの顔つきが変わる。覚悟を決めたいい顔だった。

「さくら、俺とずっと一緒にいてくれないか？ いやそうじゃなくて、ずっと一緒にいてくれ!!」

今度は私が固まる番だった。新しい名前で呼んで欲しかっただけなのに、突然、求婚してくるなんて驚天動地だった。

顔が上気していくのが解る。心臓を患っている訳でもないのに胸が苦しい。

呼吸を整えながらカイルを見つめると、何だか憤死寸前の人間に見えた。

「ずっとは無理だけど」そう言うとカイルは小さく俯いた。「カイルが死ぬその日まで、私は一緒にいてあげる」

そこまで言ったとき、カイルは顔を上げる。

私はそこで、最高の笑顔を浮かべて言った。

「いいよ。だってカイルは、私の本当を信じてくれる人だから」

嬉しさから獣のように吠えまくるカイルのことを見つめながら、私は別のことで迷っていた。

けど、それはこれから先のことだ。だから、それは私を受け継いだ人間に任せようと思う。

そう考えた私はそのあと、会ったことも話したこともない三代目に色々と問題を押し付けてみることにした。

正義の味方でもやらせるつもりなのかと、鼻で笑いながら。

せめてもの励ましの意味と、今ある喜びを祝うために詠った。

「たそがれのとしびは　いとしくもほのぼのと　薄れゆく思い

出に 愛の光をともす

あこがれの輝きを 過ぎしあの日のままに 今宵もまた若き日
の 夢をひめてたそがれは

美^{うつく}わしくもなつかしき 愛の調べとなりて かえり来る

たそがれのしらべこそ やさしくもはるばると わが悩みつか
れたる この心をなぐさむ

とわに忘れじの なつかしき愛の歌 今宵もまた若き日の 愛
をひめてたそがれは

美^{うつく}わしくもなつかしき 愛の調べとなりて かえり来る

詠ってみて思い出す。歌の題は確か、『なつかしき愛の歌』とい
うんだっけ？

歌を間違えたと笑っていると、カイルは私を後ろから抱きすくめ
て言った。

「さくら!!!!愛してる!!!!」

あまりの不意打ちに対処できなかった私は、その凄まじい声で気
が遠くなった。

「耳元で叫ぶのは、やめて」

そう言っって私の顔に浮かぶのは、微笑。

二十八話 ウィリアムの授業

誰の入れ知恵なのか、私の招かれた部屋は和室だった。というのも、踏みしめた感触が畳のそれだったからだ。

学校が広いということもあり、部屋に行くまでの間にウィリアムと打ち解けて色々と話が聞くことができた。人間なんて、この目を上手く使えば仲良くなるのはそう難しいことじゃない。でも、この目は私の知る感情以外の感情は送れない。だから私が目から送る感情は嘘偽りの無いものだ。もしも、この感情を知らないままだったら、私の目はろくでもない感情ばかりを見せていたんだろうか。

ここで一旦思考を止めて、茶釜から茶碗にお湯を移して茶筌ちやせんを使ってお茶を点でて飲む。わざわざこんなものまで用意するなんて、随分と特別扱いされている。

フィリップや他の生徒達から集めたことからはこの扱いはおかしいということが判る。島の外を蔑視する人間が多いのにも拘らずに、何で私に剣を教えて欲しいと便りを寄越したのか？この島のことを知れば知るほど疑いたくなる。

考えを再開する。そしてさっきウィリアムから聞いたことを鼓膜の内側で再生するイメージを命令として体に発した。

額面的に言いますと、創造の柱より散布されている本来不干涉のはずの“アルケー”へと干渉する技術です。

繊維状の物体で、服として着用ができます。その機能は読み取り・記録・集約・挿入の主にも四つとされています。

魔術によってマテリアルを操作するのとはほぼ同様の術ですが、これは無から有を発生させる点だけが大きく異なります。

これは使用者の知識や想像を読み取り、使用用途などに応じてそ

れを記憶し必要があれば“アルケー”を収束させ、そこに情報、頭の中の武器の設計図を挿入し実体化させるんです。

魔力を消費する必要が無いため何度でも使用が可能ですが、魔術のように自然に干渉し操作するのは非常に困難です。

とはいえ、適正がごく僅かの者にしかいないのでまだ未開の領域ですが、ここの生徒達はみんな使えるんですよ。

あと、稀に創造された物に情報を書き加えてより高性能のものとして使用できる適正者がいまして、

彼らはセカンドクリエイタまたはゴーストクリエイタなどと呼ばれています。

そうして生み出された物を持つ者は単体で軍勢に匹敵する働きを見せる場合もあるんです

再生終了。理解終了。

この島には魔術に似て非なる奇跡、クリエイトと呼ばれるものがある。

聞くところによると、布のようなものらしい。

付け足すとそれは衣類などの繊維でできたものになり、何にでもなるらしい。

そして、さつきフィリップが行使した技がそのクリエイトを使用した一例であり、クリエイトテクニクと呼ばれるものだという。

実に楽しそうだと思えた。欲しいと言ったらくれるだろうか？

そう思いながら、お茶を飲み終えたところで、部屋に誰かが入ってきた。

「随分ゆっくりだな」

正式な作法に則ってお茶を一杯飲み終える時間は決して短くはない。それゆえの言葉に、誰かは口を開こうとしない。

まるで乱れが無い。聞いていて心地良いテンポの音楽に似ている。

体温などから体の線を想像すると、女のようにだった。

ここには私と女の二人きりになっている。代わりに話をする人間はいない。なら何で口を開かないのか。

「そこな女人。何故口を開かない？拙者はそちらが話すのを待っているんだが」

「ぼ、僕は女じゃない」声にも心音にも明らかな動揺があった。「目が見えなくせにいい加減なことを言うな！！」

「声は確かに女らしくはないが、拙者の心の眼はしっかりとオマエを見てるよ」

拙者と私のことを指して言うとは何か口調が固くなるのが難点よね。いつも思うけど、これは侍の呪い？

「……………っく」

「悔しそつに齒噛みをされても困る。言うことがあるなら言ってほしい。オマエの言うとおりで拙者は目が見えないから」

女は面白いことにすぐに調子を取り戻したらしく、私の傍まで歩いてくると淡々と話し出した。

「生徒とのいさかいがあったようだけど、どうか許して欲しい」

「気にしてない」

「なら、いい。それで今日から早速、あなたには生徒達に剣を教えていただきたい」

「そこで質問だが、何故、拙者なのだ？島の人間の様子からしてわざわざ余所者を呼ぶ考えが判らない」

「それは、信じてもらえないかもしれないが、この島にあなたと同じようなサムライがやって来まして……そのサムライの技を見る機会があつたんです。僕はその技に感動しまして、最初、それが何かの魔術かクリエイトの能力かと思わされましたが、ただのいえ、普通に剣を使っているだけだと分かつて余計に感動して、是非その技が欲しいと言いましたが、相手は、あまりに欲が無かつたので、僕の話をろくに聞いてくれませんでした。僕は引き止めるのに必死で思い付きで、技を生徒にも教えて欲しいと言つたら」

「拙者に白羽の矢が立つたと？拙者の実力はその者のお墨付きというわけか？」

それを訊くと女の呼吸が浅く速くなっていくのと、若干ではあるが発汗しているのが判る。その侍はよほど腕が立つ上に、恐ろしいということか。

「判つた。ただし、拙者は無作法が過ぎる性分ゆえ、多少の事には目を瞑つてくれるとありがたい」

私は立つてその場をあとにしようとして、あることを忘れていたのを思い出した。

「拙者はトキナ「アウヌムトウス。オマエの名前は？クククク」

名前を尋ねると何故か決まって不吉な笑い声が口から漏れる癖に更に笑いを足していると、女が動揺していた。

「僕はアユムナオセだ。これからは校長先生と呼んでくれ」

「あい判った。校・長・先・生」

所変わって、学校の運動場脇にある林。時刻は暮れ六つ時。

「そろそろだ」

言いながら紫煙をはく真似事をして間を作る。それからまた考え直す。やりたいことは一つ。妖刀を作ることだった。

「師範。俺、帰ってもいいですか？」

昼時にちようどこで再会したフィリップは躡された動物のようにおとなしいが、酷く怯えているようだった。現に私から離れたいと訴えてきている。確かに、もう百を超えるやり直しをさせられているのだから、嫌にもなるか。

そこに黙って眼力で重圧をかけるかどうか迷っていると、何もしていないのにせつせと働いてくれる。何もしないほうが、返って考えて動いてくれる性質らしい。性格が歪んではいたが、根元から愚かという訳でもなさそうだ。

しばらく上を向いていると、風音と共にフィリップの手に熱が集まり、それがようやく注文どおりの形を得た。

「できました」

「でかした」私はフィリップの生み出した刀を受け取って感触を確かめる。「よし、もう帰ってもいいぞ」

フィリップの足音が遠くなっていくのを聞きながら、私は手にした即席の刀を持ってウィリアムを尋ねた。

ウィリアムは私が直接部屋へとやって来たのが不思議らしく感心しきりだったので、理由を軽く説明するとまた感心した。

「すごいですね。一度聞いた音でその人間の居場所が判別できるだなんて、常識を超えていますよ」

このままだと質問攻めにされてしまう気がしたので、私は隙を突いて言った。

「拙者、ゴーストクリエイトに興味湧いてな。一度試してみたくなった」

そう言うと、ウィリアムの関心の矛先が私の言葉に向かうのが判った。

「ならまずは適正があるのかどうかを試さないといけませんね」

「やり方は知っているのか？」

一応の確認に対してウィリアムが首を縦に振るのが判った。思えばこうして相手の一挙一動を知るためには大分苦労したものだ。今でこそ楽になつてはいるが。まあ、これができなければ私の腰に『季節名』は無いか。

「まず、クリエイトに文字は必要ありません」

「それは便利だ」

思わず言葉が口を突いて出てくる。文字は私の世界に存在しないものだから、それが不要なのは嬉しい限りだった。

「次に、クリエイトは人の知識と想像の両方を必要としますが、それはクリエイトそのものが自動的に学習してくれるので、そう難しく考える必要もありません」

「ますます便利だ」

私はクリエイトへの興味で熱狂していく。

「ですが、クリエイトを扱ううえで注意してほしいことは、求める結果を得るのには一つの式があるということです」

「それは一体？」

「式というのは正しくはありませんが、結果を得るまでの過程では九九のような処理があるのです」

「クク？乗法、掛け算のことか？」

「そうです」

肯定された途端、私は理解ができなくなった。九九でハンドガンや今私が持っている刀ができるとは考えられないからだ。

私が混乱している間にウィリアムは説明を考え終えたのか、口を開いた。

「ある物を創り出すとすることで、その結果を想像します。その想像の中で、いかにしてその工程を簡略化できるかと考えた場合にて

すね、その処理に数字に当てはめると、ちょうど掛け算がしくりくるんですよ」

「例えば？」

私は何だか生徒になった気分で先生であるウィリアムに問うた。

「例えばという問いに例えそのものの答えを言うのは妙ですが、一番簡単な物を創る時は $1 \times 1 = 1$ になります。これがより難解な物を作り出す場合になりますと、必要な数字は1よりも大きなものになり、掛けていく数も増えていきます。そうなるとどうなるかは分かりますか？」ウィリアムの言葉はまさしく生徒に対してのそれだった。

「当然、計算は難しくなる。答えを出すのに時間がかかり、途中計算を間違う事もあるだろう」

「紙に書かれた問題は最終的な答えが合っていれば、それで問題はありませんが、クリエイトの場合では途中計算を一度でも間違えるということは問題になります。それで失敗になってしまいますからね」

「それは面倒だな」私はほんの一瞬うんざりした。

「クリエイトの上手な人には二種類います。それがどのように複雑であっても全てを計算しきるタイプと式を簡略化するタイプです。前者は優れた計算能力を武器にします。後者は複雑になるにつれて大きくなる数字をあらかじめ1にします。クリエイトが更なる発展をするためにはこの大きくなる数字を1にする手段が必要不可欠です。何故だかは分かりますよね？」

「1×1を繰り返すだけなら、考えるまでもなくそれが1になるから。それならどんなことでも一瞬で行える。それを行うのが、クリエイトの最終目標であると・・・そういうことであるう？」

「そうです。そして、肝心のゴーストクリエイトですが、これは足し算に近いですね。クリエイトで生み出されたものは必ず1という扱いになるとしましょう。ゴーストクリエイトは1という力を持った物に場合によっては100や1000といった膨大な数を足す技術なんです。理想論を言っていると数字を飛び越えた話になりますが、不死の肉体を最強にするとかですね」

私はその言葉にどう答えていいのか判らなかつたけど、理想とはいえ興味深い結果の例にとても感心した。

「クリエイトで不死になれるというのか？」

「トキナさん。さつき教えましたけど、クリエイトは繊維状の物になら何にでもなります。たとえばそれが人の筋肉でもです。分かりましたか？肉体に移植したうえでそのクリエイトに肉体の構造を記憶させ、それを瞬時に生成できるようにできれば、たとえば首を失っても即座に蘇生することが可能だと、理論上ではされています」

私はあまりのことに驚愕して、何も言えなくなっていた。まさかと心の内で呟いて呆然とする。

「驚いたな。本当に。これには拙者、驚いたとしか言いようが無い」

二十九話 主君と侍と

適正を試すというのが先送りだったので宛がわれた部屋に戻った私が眠って、朝を迎えたとき、部屋の前にアユムが何かを持って立っていた。きつと私が起きたのとアユムが部屋の前に来たのは同時のはずなので、私がすぐに扉を開けると少しだけ驚いた顔をする。

「おはようトキナ師範」

朝の挨拶としては最高と評していいくらいの静かな口調に私は少し活力を貰った気がする。

「その師範というのが正しいのかどうかは判らぬが、よい日和であるな、校長先生」

「しかし」アユムの視線が私の爪先から天辺をゆっくりと見ていた。「やはりその格好は頂けないな。だから、これに着替えるといい。ウィリアムの言葉を受けて一応クリエイトで作ってある。着ればすぐに体型に合った服になるはずだ」

私が襪襦同然の着物を着ていることが気掛かりなのだろう。私自身も気になってはいたし、礼を言っておこうか。

「ありがとう。心遣い感謝する」

礼を言うとアユムは何も言わずに着物を渡して去って行った。手触りからして馴染み深いほうの着物らしいが、などと思いつつ着替える。

そして、最後の仕上げに私は帯を前で結ぶ。まるで遊女のような

けど、そうじゃないと上手く結べない私としては仕方の無いことだった。

所変わって教室へとやって来た私は自己紹介という難問に立ち会っていた。

これに私は名乗る時に嘘は言わないということのを代々守っているという流儀に則って自己紹介をすることにした。

「型捨無流三代目 トキナアウヌムトウスと申す。アウヌムトウスとはどこかの国で秋という意味だそうだ」

それで終わってしまったことに対してウィリアムも生徒達も空気に間が空いた気がしたのか、ウィリアムが一つ咳払いをすると口を開いた。

「そういえば、トキナさんは亜麻色の髪に飴色の瞳をしていますね。どこの出身なんですか？」

水を向けられたこととは別に、私がそのような容姿をしていることに驚いていると教室が静まり返っていた。

「まさか、地雷？」とか「またしてもあの本人否定の殺気が」とかまた周囲のやかましいこと。少しうんざりする。

「ノステアノの「色薄き大地」だ」

私の故郷は色が薄いと言われていた。フォルティスが言うには雪というのが沢山降っていて、一面がその雪の色に染められていたからだというらしいが。

「ノステアノ・・・あの北の島ですか。確かあそこは」

ウィリアムが戸惑いながら言う言葉に、私は何の躊躇いも無く答えた。

「滅びた。大火山の噴火によって跡形も無く消えたが、まあ詮無きことだ」

「そうですか。それで、肝心の剣術はどのようなものを？」

「居合いだ。とはいえ、居合いに関しては開祖はからつきしで、二代目は小手先の技とする程度だったので、居合いを本格的に修行したのは拙者の身体の都合によるところが大きいな。まあとにかく居合いという鞘から刀を素早く抜いてすぐさま納める技を修めている。しかし、オマエたちに居合いを教える気はないが」

もっとも、開祖の剣の一太刀はその全てが居合いのようなものだったと聞いた。『季節名』をあらゆる間合いで振るうことができた開祖に対して、二代目は長刀の不利を補おうと試行錯誤をした結果、攻撃に手数を加える意味で小太刀を必要なきに抜刀するという特異な二刀流を用いた。私の場合は、間合いに入られる前に必殺するという方法を取った。

そうなると、型捨無流という流派がまるで受け継がれていないように思えるけど、基本は同じ。ただ、「妖」形という構えの違いがそれぞれの特色となって随所に現れているに過ぎないのだけだ。

教える気が無いという言葉に周囲が納得の行かないという雰囲気醸し出したのを感じた私は言葉を付け加えた。

「そう疑うものではない。剣術は教える。ただ、拙者の居合いの技は教えないというだけだ」

すると、一応納得したように周囲の疑念は消えた。
そんなとき、席に着いていた生徒の一人が立ち上がるとおずおず
と言った。

「あのう、師範はどうしてそんな長いカタナを使っているんですか
？」

そこはかたなく期待していた質問だった。ただし、聞いて欲しくない
という意味合いでの期待だが。

「さてな。拙者の流派の開祖の代より、剣技を継承せし者が振る刀
だということくらいの認識でしか持ち歩いてはいないが、この刀、
野太刀はよく斬れるから重宝している」

「どのくらい斬れるんですか？」

「どのくらい？ 実際に見せることはできぬが、口で言うなら、ある
程度の心得があれば七つ重ねた死体を一刀両断にするくらいだと言
えば、判ってもらえるだろうか？」

「実際には見せてもらえないんですか？」

「それは無理だ」

そう言うとその生徒は引き下がってくれた。聞き取ってみると、
随分と緊張していた。私に質問するのはそんなに緊張することなの
が大いに疑問だった。

「もう質問は終わりか？」

気を紛らわすつもりで水を向けてみると、以外にもずっと机に伏せていたフィリップが声を上げた。

「師範はその先代たちと比べると強いんですか？弱いんですか？」

難しいことを訊いてくるな。私の心に迷いが生じたことに私は酷く不愉快になった。

「さあな。戦ってみなければ判らぬ」

そう言ったそのすぐあとに、コウナイホウソウというものが流れしてきた。アユムが私に何か用があるとのことらしい。

教室にいつまでいても私には何の益も無いので、天の助けといわんばかりに私はアユムの所へと向かった。

そして、アユムの部屋へと入って行くと、アユムは私に突きつけるように言った。

「あなたの腕試しも兼ねてしてもらいたいことがある」

私は剣を教える他にも問題が起きたときにはそれを解決する役割もあったことを思い出して、気が滅入ってしまった。私の掟はあまり賢いとは言えないので、面倒な事になることを思うとそれも一際というやつだ。

「トキナはサムライだろう。「忠」の精神をしっかりと見せて欲しい」

「……………ああ、そうか。そうだな。拙者はオマエに仕えると決めたことになる訳だから、そうなるのか」

絶対の掟の上に行く絶対の掟を持ち出されては嫌とは言えない。

というより、今になって思い当たるなんて驚き。

「僕があなたを呼んだのにはその「忠」の精神を見込んでのことだ。正直、僕には敵が多いわりに味方が少ないから」

ほんの少しアユムの生い立ちや今の背景が見え隠れしたけど、そうなんだ。私はアユムに一生仕える立場になったんだ。

侍とは一人の主君に一生誠実に仕えるもの。剣を教えるだけならお願いだから受けるだけでいい。けれど今のように指示を受けて動くなら、それはたとえ雇われただけだとしても侍にとっての主君に変わりない。つまりアユムは私の主君という位置づけになる。

今にして思うことがあるなら、聞いた話の内容はきちんと考えたほうが良いということだけど、アユムは悪い相手では無いので、反省する事はあっても、不満は今のところ何も無いのだけど。

それにこうして考えることからして、私は誰かに仕えてみたかったという、いい証明だった。

ただし、仕えるとしても奴隷にも召使いにもなる気はないので、口調を改める気はない。

「・・・それで、拙者は何をすればいいのだ？」

「武装している集団をサクツと始末して欲しい」

不満は僅かに募る。早速の掟破りに私は憚然とする。それでも、その心には喜びがある。

掟無しで人を斬ることは、嫌いじゃない。久しぶりに奥義を使ってみようか。

「あい判った。それで、仕事場所までの案内役はいるのだろうか？」

「それは大丈夫。僕が案内するよ」

その言葉に私は黙って、主君の後に続くことにした。

三十話 殺戮抜刀

風は激しく唸りを上げて吹き付けてくる。この島に呼ばれた理由に合点が行って心の中は晴れ渡っているというのに、どうして外はこつも曇っているのか。

このまま行くと嵐が来るだろう。そうになると私の『心眼』は一つ潰れることになる。しかしそれも些細なことと思いき直してアユムの後ろにびったり付いて歩いていった。

雨の匂いが濃くなっていく、朝にはまるで思わなかった天気の変化に好奇心にも似た気持ちから上を向いて歩いていっているうち、道が徐々に傾斜していくのが判った。途中、石の尖った所を踏んでしまい苦悶の声と涙が出そうになるのを堪えてからは地面を警戒しながら歩いていた。

それにしても、もう大分歩いているというのに目的地に辿り着く様子が無い。

そのことを不審に思ったときにアユムが足を止める。それに合わせて私も足を止めた。

「今思っただけけど、目が見えないのによくこんなところを、それも殆ど裸足で歩けるな。僕だったらたくさん転んでいる」

私は足首と土踏まずのところを布で縛っている。だから殆ど裸足と言われたんだらうと考える必要も無いことを考えてから、私は言葉を返した。

「拙者は確かに歩いてはいるが、石を踏んでいる。まだまだ未熟だ」

「石を踏まずにか、難しいね。ははは、こつして話してみるとトキナは、そうだな。魅力的で、話を続けたいと思える雰囲気がある。」

僕にもそういう魅力があれば、もっと上手に生きれそうな気がしてならないよ」

「無いものは有るようにしない限り、有ることにはならない。しかし、校長先生の言う魅力や雰囲気というのが生まれついてのものだと言つのなら、気の毒だが諦めたほうがいいだろう」

「今、僕はとても悲しいし、怒ってしまった。あなたのように容姿に恵まれた人間にこうもはつきりと言われると、やはり、むかつくね」

「言われなくても判る。しかし、拙者は自分の姿というものが見えぬからな。恵まれているかどうかは知らないが、敵か」

体温と息遣い。鼓動の音から割り出した人間は武器を持ち、私たちを取り囲んでいる。武装している。集団である。ということとは、敵で間違いなかった。

「そうなのか？じゃあ早く始末してくれ」

「いいご身分だ」

しかし、おかげで私は自己を律することなく思うがままに人を斬れる。

「主君とはそういうものだよ、マイソード」

その言葉に、私は壮絶な笑みを浮かべていた。

計る。敵の数を。

図る。敵の考えを。

測る。敵との間合いを。
私の口から、笑いが漏れた。

「型捨無流三代目 トキナ」アウヌムトウス 主君が命により、オマエらを殺戮する」

斬る前の準備運動代わりに軽く伸びをしてから、腰から下げて引き摺っていた『季節名』を左手に持って無構えに立つ。

奮い立たずにはられない。これから始まる惨劇に。これから始める殺戮に。

「我が主。残酷な事が苦手なら、これからの起きることに目を見せたほうが良い。夢見が悪くなるぞ」

トキナはそう言うのと左手に持ったままのカタナをいつでも抜刀できるように鯉口と呼ばれる刀剣の鞘の口をゆるめた。

「鯉口を切れば五人死に」

その言葉と同時に、それよりも僅かに早く、岩の陰から鮮血が飛び散るのが見えた。そこで気付いたことは、トキナが岩の陰に潜んでいた人間を岩ごと斬ったということだった。けど、それは僕の目がおかしくなったことを認める必要がある。何故なら、彼女は柄に手をかけてすらいないのであるから。

「柄に手をかければ十人死に」

楽にしていた右手でゆっくりと柄を掴んだときには、どうやら全

員死んでしまったようだった。

「抜刀すれば数多死ぬ」

トキナはそれだけ言って、刀は抜かずに柄から手を放すと、どこか遠い目をしてた。彼女はいつも焦点の合っていない目をしているのに、何故かこの時は何かをはっきりと見つめているような趣があった。

「今のが、居合い？」

あまりにも不思議なその技に半ば忘我して僕が訊くと、トキナは私の方を見ているつもりなのか僕よりも僅かに横に視線がズレた状態で静かに言った。

「まあ、そんなところだ」

その言葉に、目に映らなかつた惨劇に、僕は、思っていたよりもずっと強い手駒を手に入れたのかもしれないと、いつしか暗い笑みを浮かべていた。ただ胸の中が熱くて、嬉しくて仕方がなかった。僕自身が強くなったはずもないのに無敵になったと有頂天になりそうになっているのが自覚できる。だって、嬉しいんだから仕方がない。

「僕は良い手駒を持って幸せだよ」

「拙者も、主が正直者だと不満で腹が膨れずに済む。ひとつ言っておくが、拙者は校長先生が道を踏み外すならば、そのときは、道を正させてもらおう。まあ、拙者が仕えるのだ。それはないと、信じているぞ」

僕は何故か意外に思えた。トキナが信じるだなんて言葉を使うところが、全く想像ができないから、思わず笑っていた。

「あなたに信じられると、何だか怖いね」

「ふんっ、無礼な」

トキナは少し拗ねたようにしてそう言うと、踵を返して帰ろうとする。これに僕は慌てて声をかけた。

「待つんだ。まだ仕事は」

「既に終わった。何なら周囲を探して回るといい、そこらじゅうに死体があるだろう」

トキナは僕の言葉を遮って強く言い切ると鏗鳴りの音を響かせて、そのまま歩いて行った。

後日、指示を出してその近辺を調べ上げたところ、総勢で五十名の惨殺体が発見されたという。その惨状を見た者の中には発狂するものもいたらしく、この情報を齎してくれた僕の知り合いも、普段余計なことは言わないのに「戦場の方が、ずっとまともな死に方ができる」と零していた。

もしかすると、僕はサムライという名前の悪魔を呼び寄せたのかもしれないと、そう思った。

三十一話 お庭番と侍

朝食が口に合わず、味わうことなく飲み込んだために淀んだ気分を味わって、よく噛んで食べれば良かったと思いつながら、外に出て剣の修行を行う。

その前にまずは人気の無い開けた場所を探す腹ごなしの散歩してみると、やっぱりこの学校という建物は広い。何度も思うことだけど、ここは本当に島なのかどうか疑わしい。そもそも、島という呼び方をされるものがどんなものか見定められない私には関係の無い話だが。

そんなことを考えていれば、足は自然と求めた場所に立っていた。

「はあああ」

信剣の構えを取り、刀の尖端の動きに微塵の揺らぎも無いことを確かめて、まずは一振り。

振り下ろした剣尖を上げて、正眼の構えを取る。そこから抜き面を放ち、反動をつけるようにして肘を曲げ、胴を一閃。その一連の動作が必殺かどうかをさすに感じ取りながら、私はただひたすらに抜き面と小手の素振りを繰り返す。

剣の戦いにおいて致命打となるかは別として、剣道においてはこれが最速にして必勝の手段であり、剣術においてはそのような小さな動作からの一太刀では必殺が難しいと、それぞれの師匠から教わった私は、修行の末にゼノンという大昔の学者のパラドックスにも似た理屈の、パラドックスではない技を会得した。それはただ、理屈通りに剣を振るい、その理屈を阻む摂理を断ち切ったとても単純で、明快的な技だ。そう、致命になりえない抜き面を、致命にしうる。ただそれだけの技だ。

けど、さらに修行を重ね、居合いを極めんとするうちにそんな技

はけちくさいものに成り下がっていた。

そんなことに考えを割いたせいかな精神統一が乱れて、刀身を地面にぶつける。気に喰わないので鼻を鳴らして刀を鞘に納めると、それを待っていたかのように何者かがゆっくりと存在を感じさせ始めた。

「あまりよい趣味ではないな。しかし、拙者も鈍ったか」

「拙者か・・・秋、随分と変わったな、いや、化けたというべきか？あのトキナの弟子とは思えない人斬りの剣を振るう」

「フォルティス？」

過ぎ去った歳月か。フォルティスの声は随分と渋く枯れたものになり、人に与える安心感が増していた。

「師匠の顔を忘れたか？哀しいもんだ」

見えもしないし見せもしない顔を覚えるという無茶を言うのは間違いなくフォルティスだった。

「何故ここに？」

フォルティスは気配を薄めていく。

「早い話がお庭番というやつさ。先代の校長、つまりは今の校長の祖父に雇われてからすでに六年になるな。といっても今の校長は祖父の言葉に従って顔も知らない俺をそのまま雇っているだけだがな」

「六年もいるのか。ならアユムが何故性別を偽るのか知っているか」

？」

「簡単な事だ。本当の跡継ぎだった双子の兄が死んだ折、その代わり自分に死んだ事にして後を継いだ。それだけだ」

「名を捨てたか。先代の校長はもう既に死んだのか？」

「ほう、分かるか？」

「後ろ盾が無いようなことを言っていたからな。それよりフォルテイス。腕を上げた？」

フォルテイスは微かに笑ったあとで言った。

「老いさらばえるつもりで生きちゃいない。腕を上げたかと聞かれれば当然上げたさ。俺はいつか初代トキナに勝つつもりでいるからな」

面白いと思っただから笑うと、フォルテイスも笑う。

「秋。随分と面白そうだな。何なら、今日の夜仕合うか？雑魚とばかり戦っているのはトキナの名が泣くぞ？」

「名は泣かぬさ。しかし拙者は無闇に人を斬ることは是とせぬのである。だが、オマエとは戦いたくて仕方がない。だが、二代目との約束だ。狂気で正気を保たず、正気で狂気を抑えるべしとな。その果ての剣を望めとな」

されど、狂気という純粹な感情の果ての剣が二代目の言う剣に劣るものではないのは確かだ。ただ、私の知る狂気と二代目の知る狂

気は違う。それなのに私の狂気による理性の維持に気付きそれを矯正しようとしたのには感服だ。けど正気なんていう小さな枠は私という心の住処にはほど遠い。結局、私は常軌を逸した人格の理性を狂気によって保っている。

この冷たい狂気は激情から来るものではない。それ故に思考が冷静に、より自己へと埋没するほどに研ぎ澄まされる。

「相変わらず、交わした約束に義理堅い性格なんだな秋は。ならどうして人を斬った？」

「アユムは拙者の主君だからな。斬れと言われれば斬るさ。何よりも都合だからな」

「ならその主君に今日の戦いの許可でも貰って来い。それにしてもお前ほどの強靱な意志の持ち主が何かするのにお伺い立てるのは妙で仕方がない。だが、それも侍というやつか」

フォルティスはそよ風と共に完全に気配を消した。耳を澄ましても足音がしない。本当に強い。戦うのなら命懸けか。

「さすがは羽音はねな無しの鴉と異名を取った男か。本当に、オマエの足音は聞いた試しがない」

そして、心臓の音も。私はあなたが生きているなんて、出会った頃はまるで思いもなかった。

もし今夜、刃を交えたのならフォルティス、あなたが生きているという確かな音を聞けるだろうか？

私は加速する血潮の滾りを感じながら、左手の『季節名』を強く握り締めた。

早速行動を起こす。早足に歩き、アユムを捕まえて夜にある敵を

斬るという話をする、何も聞かずに承諾してくれた。

「感謝するぞ。校長先生」

「別にいいさ。子供のように無邪気に人を殺したいと言われて反論なんかする心が、僕には無いだけの話だ」

そのときのアユム的心情を推し量るのなら、それは触らぬ神に祟りなしと言ったところか。

そのあとは夜まで眠って、目覚めた時には必ず忘れる夢の中を旅することで暇を潰した。

そして、戦いの夜。

私は知らぬ間に流していた涙を拭って、それを舐めた。

「しよっぱいな」

私にはまだ、涙がある。そのことに、深い感慨を覚えた。

三十二話 掟の剣

以前アユムに連れられてやって来た森の開けた場所を選んで、そこに立って時を待つ。

場所の指定などはしていないから、私はフォルティスがやって来るのをただ待つのみ。けど、フォルティスは忍と侍の流儀を気まぐれに選ぶ男だった。これといって指定することがなかったということ、戦いは日が落ちた瞬間には既に、

始まっているか。

踏み込んで来るのをよく伸びた草という天然の仕掛けで聞き取り剣を合わせる。想像以上の重さに肩が拉げるのを感じた。

押し切られる前にその衝撃で足が地を滑る。重心の移動があと刹那遅れたなら私は一撃で敗れていた。

幼き日の、何も見えないことへの恐怖が蒸し返される。姿は始めからなく、熱もなく、音もない。違う。熱はある。ただそれが酷く感じづらい。

「気配を完全に消せば、たとえ鼻先に顔を近づけても目には映らない。それが究極の、暗殺術だ」

声が出たほうに私が反応したときには既に距離は咫尺。初撃を居合いで防いだことでフォルティスの戦法は決まっていたらしい。けど、居合いは何も斬るためだけに鍛えてきた訳ではない。それに私は、まだまだ余裕だ。

先端を鋼で拵えた柄を使った打撃を連続で叩き込むが、フォルティスはまるで怯まない。鎧で身を固めているはずだからわざわざ貫通打撃に切り替えたというのに、この男、内臓まで鋼並みか。

首を狙って来る刀剣を右手の指先で掴んで強引に流す。それから手刀を首に叩き込んだ。しかしそれが通用せず、逆に一撃手刀を左肩に突き入れられる。私の壊される音が響き渡って、さらに突き込まれた手刀が肉を断裂させて、皮を破り、貫通したことで血が噴き出すのが分かる。

「ああ………」

このままだと殺される。そうなったときは取り返しがつかない。そう思った私はフォルティスを振り払うために二代目直伝の正拳突きを鳩尾へと叩き込んで吹き飛ばした。岩を砂に変えるほどの拳打は通用したのか苦悶する声が聞こえた。

「ぐふつ、俺じゃなければ木っ端微塵だったんだろうが、俺には有効打にしかならんぞ」

私は二代目ほどの魔力が無い。だから今の拳打はもう使えない。けど、それで困るようじゃ『季節名』は名乗れないか。

フォルティスには私の魔力が印となって残っている。いわゆる目印だ。

位置さえ分かればもうフォルティスは敵ではない。鞘に納めたままの『季節名』で右腕を叩き折りに行く。

「油断したな？」

戯言を言うなと心の中で言って腕を狙う。しかし直前で、その姿が『心眼』から見失われた。

心への衝撃が動きを鈍らせ、そのことに不覚にも焦った私の隙をフォルティスは見逃さないはず。間合いを取ろうと身体を捻りながら飛ぶが、更に焦る。この跳躍術はフォルティスから教わったもの

だ。墓穴を掘ったと思った瞬間には背中にも強烈な痺れと痛みを受けて地面へと墜落させられた。

まさか、ここまで身のこなしに差があるなんて、空すらも足場にしない限り今の加速を蹴りに加えるなんて不可能だ。ということはフォルティスは全てを足場として活用できる技の持ち主ということか。

考える合間にもフォルティスと私は剣を打ち合わせる。既に十六合、今二十三になる。居合いで突き放しながらの剣戟だというのにフォルティスが回避から攻撃に転じる瞬間の適度さ、その判断と速さはさすがと言えた。

「どうした？ いちいち鞘に納めて。これなら二代目の二刀の方が遙かに楽しめたぞ？」

「嘘を言え、拙者の一太刀に込められた威力は二代目の一太刀のそれより遙かに強い」

動きがまるで感じられない。肌を刺す痛みはどんどん増えている。

「俺は威力の話をしてるんじゃない。命中精度の話をしてるんだ。その点で言うと、お前は俺との相性が悪すぎたな」

戦いにおける相性。そういったものは考えたくはないけど、確かに悪い。フォルティスが隠していないのは姿のみ。その姿を見ることのできない私にはフォルティスの動きを把握する事ができない。それに体力にも問題がある。戦うということは疲れることだ。それも長引けば長引くほど、体力は失われる。それも圧倒的密度の剣戟を続け、全力で剣を振るい続けなければならぬこの状況は、気力の勝負になるか。

けど、そう考えながら私はそれを否定する。だって、剣を合わせ

た瞬間の音から徐々に、相手の居場所が分かりつつある。

あと少し、あと少しで聞き分けられる。

上下左右からの連撃。時折、投擲されることで範囲を広げ、微細な緩急をつけてくる攻撃を刃と柄で弾いていく。

「そこ！」

抜刀して鞘を捨てる。鋼と鋼が打ち合う音が響き、鏝迫り合いとなるのが腕にかかる重みで分かった。押し切られないよう両手で柄をしっかりと握って左足に力を込める。

「ようやく鞘から抜き切ったな。なら俺の動きが少しは読めるようになった訳だ」

「型捨無流三代目 トキナ「アウヌムトウス 勝負だ、フォルティス」

両手に持った剣先を沈め、鬨気を鎮めて動きを無くすようにして力を流し、僅かに緩んだときに一瞬、強い力を加えて押し退けることで距離を離す。そうして生まれた距離は今までとは違って縮まらない。その違いにあるものは、私の構えが違うということではないけど、その違いは大きい。今の私に正面から挑むことは、突き立った剣へと自ら串刺しになりに行くのと何ら変わり無いのだから。

「全く、信じられない速さだな」

それに、離れ際に放った一撃がフォルティスには大きな重圧になっている。迂闊に攻め込めるはずもないか。

けど、私の予想に過ぎないそれはあっさりと裏切られ、今度は右肩を振り下ろされた斬撃が決る。この深さなら死んでいても不思議は無い。

これだけ傷を受けたなら十分だ。あとは、受けた傷の分、許すだけがいい。

「許し、之報復也」

全身を巡る気を爆発させるかの如く発散させ、手に握った刀をようやく本気で振るう。

今の私の本気で振るう太刀は時間の「無」の中にある。「飛ぶ矢は飛ばない」と言うが現在とは一瞬前の過去に過ぎない。その瞬間という「静」と「動」の狭間を人間は視ることができない。けど、私にはそれが視えてしまう。真の現在という時間が過去へと置き換わるその「瞬間」という名の時間の断裂が。そして私は、いつしかその断裂の中で刀を振ることができるようになっていた。それは、決して見破られることはない。時間という秩序が絶対である限り、私に敗北は有り得ないのだ。

「今ここに、ひとつの罪が裁かれた」

刀が唸りを上げて血しぶきを払う。風がびゅうびゅうと吹きすさぶのは世界からの口笛による賞賛と受け取っておこう。

あとはただ、帰り道を歩くだけだ。そうして返そうとした踵に何が巻きついて地面に引き倒される。

「勝ったつもりか？」

この目では確認ができないのだから仕方ない。しかし、受けた傷をそっくり返した筈なのに、しぶとい男だ。

「しぶといな・・・だが」巻きついた鎖を柄に仕込んだ小太刀で切る。「今回は勝ちを譲っておくといい」

立ち上がって歩みを再開すると、フォルティスの血の匂いがする。

「今のフォルティスでは、もう私には勝てぬよ」

フォルティスは私の言葉の真意を掴んだのか、それ以上は何も言うことは無かった。

三十三話 季節名の兆し

フォルティスとの切り合いが終わり、夜の空気が徐々に身体の熱を冷ましてくれる。それは心地よくもあり、恐ろしくもある。それはこのまま体が冷え切ってしまうのではないかという恐怖が、不意に心を掠めたからだだった。

半ば無意識に森の中を彷徨い歩き、やがて道に出たところで近くにあった樹に背中を預け、そのままズルズルと座り込む。

正直なところ、私も人の子である以上、傷付きもするし疲れもする。それを調子に乗って無茶をしている。この分だと死ぬのはそう先のことでもないのかもしれないと、傷の深さからか、そう思わずにはいられなくなっていた。

ふと、慣れ親しんだ気配を感じて顔をその気配の方へと向ける。

そこには『季節名』がいた。正確には『季節名』の中に潜んでいる何かだけど、この気配はいつも何の前触れも無く私の前に現れては「母様がどこにいるか知らない？」と訊いてくる。

しかし、いつもと違う。この気配が私起きている間に現れたことは今の今まで一度としてなかった。一体、何が起きたのかと訝っている、気配が語りかけてきた。

「久し振りね。でも残念です。母様はここにはもういない」

「母様母様と、オマエは他の言葉を知らないのか」

呆れ交じりの私の言葉を気配はまるで意に介さない。

「私のお願いを聞いて欲しいの」

「お願いだと？ 生憎だが、拙者はオマエの母親を探していられるほど暇ではない」

気配がブレる。それと同時に『季節名』を持った左手の指先から肩までに鋭い痛みが走る。それに少し遅れる形で気配が私に対して笑っているのが声で判った。

「傷を治してあげたから、お願いを聞いて。お願いだから」

気配の言う通り、傷はもう癒えていた。何故こんな芸当ができるのか、疑問で仕方がないけど、おかげで体は楽になった。

とはいえ、恩を押し売りされても私にも都合というものがある。けれど、受けた恩を返さないというのは気分が悪かった。

「判った。聞くだけ聞こう」

話を聞く姿勢として刀を前に置いて正座をすると気配が小さくなるのが判った。

「ここには私がいる。だから私を見つけて、私と話をしてほしいの。何を言っているのかさっぱりだと言いたいけど、そうやって考えることを諦めては話にならない相手なので、私は考える。『季節名』がこの島にいる。その『季節名』なら話ができる。だから見つけてほしい。そうすることでどうなるのか？考えを一つ先のところへ推し進めようとしてはみたものの、やはり判らない。ただ、最初の仮説をもとに動くことはできる。同じ気配を持っているのなら、探すのはそれほど難しくは無いだろう。」

「この島にオマエはいるのだな？」

「ええ、います。だからこうして話ができる」

「承知した。拙者が会って話す、それだけで良いのだな？」

「ええ、きつとそれで、話せる・・・」

その言葉を最後として、気配は消える。拙者も話す相手がいなくなったことで黙る。その直後、微かな音が鼓膜を打った。

「校長先生か？」

立ち上がり気配と熱の方へと顔を向けるとそこには確かにアユムがいる。けど、私は感じ取っているだけで見えていない。そのことに久しくなかった焦りがフォルティスとの仕合いで呼び起こされていたために、気が付けば手を伸ばしてその頬に触れていた。

「どうかしたのかい？」

アユムは私の手に触れると不思議そうな声を上げる。

「いや、拙者はやはりオマエが、世界が見えていないのだということを書いてな」

「そうなのか、それより、敵は斬れたのかい？」

「いや、拙者には斬れなかった」

「・・・そう。それよりも、僕がここへ来たのはトキナに頼みたいことがあるからなんだ」

「……主君の命とあらば、引き受けよう」

「ある武術の大会に紛れ込んで欲しい」

「紛れ込むだけで良いのか？」

「ああ、それで君の眼で使える人材を何人か見極めてきて欲しいんだ」

「なるほど、人材を調達してきて欲しいというのだな？」

「ああ、二人の力を合わせて取り組んで欲しい」

二人というのはどういうことかと訊き返すと、アユムは笑ったようだった。

「今回は君の師匠にも協力を要請したんだ」

「何を考えているんだ？」

私が訝るとアユムは苦笑している様子。心音に乱れは無いことから問題はないかと思つた矢先にこう言われた。

「トキナなら僕が悪企みしているのかそうでないのか分かるだろう？」と。

「そうであつたな」

私も苦笑を漏らす。主君を疑っている私のような不屈き者に対し、

何とも寛容なその精神。私の器の小ささを教えられているようで少し癪だった。

「すまぬな。我が主よ」

「いや、盲信されるよりははずっといいよ」

アユムは本心からそう言った。それは私を理解者として傍に置きたいという人恋しさのような感情があつて、私はああなるほど心の中で納得する。この人は、信じるだけのものでも、信じられるだけのものでもない、信じ信じられる存在を求めているのだと。

その願望に気付いているのかは知らないけど、私にそういった存在になつて欲しいのだろう。

本当に、これからはもう少し、アユム、あなたを信じる努力をする。

私自身、今はそうでなくとも、必ずそういった存在は必要になるだろう。それを思えばアユムの求めに応じることは、私にとっての信じ信じられる存在を得ることに繋がるだろうから。

心の内でそう考える私は、明日には二代目がこちらへ来るということを聞き、心を騒がせることになった。

三十四話 拾い物と疑い

日が昇ったことを背に感じつつ、私は地面から伝わる冷たさに眠気を打ち消されながら、気休めに軽く足を叩いて温めていた。

その様子をアユムは黙ってしばらく見つめていたが、やはり思うところがあったらしく、おもむろに口を開いた。

「僕は先に帰っているよ・・・ああトキナ」

「如何した？」

「いや、ただね。寒いのなら靴でも履いたらどうかと思ってね」

「確かに不便は多いが、直に地に接していないと判らないこともあるのでな」

「そうかい。それじゃあ」

アユムが去つてからしばらくの間、私はその場を動かさず耳を澄まし、匂いを吸い込んで周囲のものを感知取ること集中した。そうすることで気を落ち着けてから立ち上がった私は、あるものを足の裏に感じて繰り返しそこを踏んだ。

小さい、子供の足跡だった。まだそう古くはないけど、新しくもないこの足跡・・・近くに大人の足跡がないところからして一人で動いているのは判る。けどこの森は賊がいなくなったとはいえ人里からは遠く、安全とは言い難い。

知らず溜め息に似たものが漏れる。昔の事に心が揺り動かされていたせいもあってなのか、私はこの足跡の主を探すことに決めてしまっていた。

人助けに情を割くのは、余計なことのはずなのに。それをやるう
と思ひ立つた私はきつと、甘い。これじゃ二代目みたいだと肩を落
として歩き始めてすぐに、それでもいいかと開き直っていた。二代
目はそういう性分で、私はそういう性分ではないんだ。ガキ一人に
構うくらいに気まぐれで気を落とすようではやってられない。

人の気配を探りながら残された足跡を辿る内に徐々に徐々にはあるけ
ど、着実に目標に近付いているのが判った私は少しだけ早足に進ん
で行った。

気配は弱く、身体が冷えているのだろう。震えていると理解する
のに数瞬も要することはなかった。

すぐ近くにまで来た時、湿気が口の中に広がった。焚き火をしよ
うとして失敗したのか湿気た火種と枝の匂いもする。川が近くに流
れているらしく、少し歩くと朝露に濡れた小石を踏んで足に巻いた
布が濡れるのが伝わってくる。幸いここは下流のようで、尖った石
を踏む心配はない。それだけのことに天狗になった気分で足跡の主
へと交互に片足で跳びながら近付いていくと、その音を聞きつけた
らからか、相手は慌てて飛び起きると走り出した。けど、こんな場
所で眠っていたことと身体を冷たくした状態で急に動こうとしたから
すぐに転んでしまっていた。その様子を鼻で笑いながら近付いて行く
と足跡の主が怒鳴る。

「くるんじゃねえ！おめえは誰だ?!」

妙に訛りのある話し方。この辺に住んでいる訳ではなさそうだ。
それにしても、随分と擦れた声。そのせいで男か女かイマイチ判ら
ない。

「誰だつてきいてんだ?!」

私が助けようか否かで迷っていて答えないのが頭にきているらし

く再び怒鳴る。これまでの疲れなどもあつてか色々と拍車がかかっている。限界が近いんだろう。体力が底を突きかけてるといつときに叫ぶのは余計に体力を損なうだけなのに。

「オマエを探しに来てみたのだが？」

「おめえ何言つてんだ？なして・・・おめえが探しに来るんだ？」

相手からすれば私は突然現れた得体の知れない人間でしかない。偶然通りかかったという言葉も今やすぐに嘘だとバレる。というより信じはしないだろう。けど、この子は何でまず私が何者かということを書いてきたのか？それはそれで不自然なように思える。

「つかぬことを訊くが、オマエ、悪さでもしたのか？」

「・・・・・・・・」

相手は答えなかった。そのつもりだろうけど、私にはそれで十分だった。このくらい誰でも判るか。いくら『心眼』を持っているとはいえ、この程度のことは遼東之豕リウとうノイノ、大したことはない。

「何か後ろ暗いことがあるようだが、拙者にはどうでもよいこと。オマエ、助かりたいか？」

本当に昔に感化されたみたい。言うことが昔フォルティスに言われたこととそっくりだった。

「おめえ、何なんだ？」

「オマエこそ」

「あ、あちきはヤナギ」ヤナギの強い視線が『季節名』に注がれている。

一瞬だけ浅くなった呼吸と強い警戒心を発した心音が刀を怖れるヤナギの心を教えていた。

試しに左手に持った『季節名』の鐔を軽く打ち鳴らすと無様に尻餅をついている。思わず喉の奥から笑いが漏れる。

「やはり恐ろしいか？ククツ、オマエ、武器を手にした者が怖いのか？」

「うるせええ！あちきにだって剣があればおめえなんか怖くねえんだよ！？」

剣があれば強くなれるとでも言いたいのかもしれない。確かに素手よりはマシになる。人が鍛えた牙は確かに拳よりも優れた牙になる。けど、それで強くなれるというのは勘違いだ。

私はまず最初にそのことを教えられた。その教えは強く印象に残り過ぎていて、そう、私はその教えを強く信じている。だから今の言葉は聞き流すことができず、腹立たしさも手伝ってか『季節名』を鞘から抜きヤナギへと放っていた。

「うわあ！？」そう言ってヤナギが再び無様に尻餅を着くのが分かった。「いきなり何すんだ？！」

「剣があれば、拙者など怖くないのだろう？」

私の言葉を耳に入れた途端、ヤナギの心音が怒りに満ち、冷えていた身体に熱が点るのが判った。これは唯人とは思えない熱だと思

ったとき、その熱がすぐ傍まで迫っていた。それが魔法だと気付き身体を逸らして見送ったところで雑な踏み込みが砂利を散らす音が聞こえる。あまりにも読み易い動きに私は苦笑しながら。目前に迫る白刃を五指に捕らえた。

「素手で刃を受け止めた?!」

「いちいち五月蠅い奴だな。いいか? 刀で人を斬るんじゃない。体で人を斬るんだ。刀は人を斬ってくれない。刀は人を斬るものだが、何時の時代だろうとも、人を斬るのは人なんだ。オマエのようなガキの一太刀で……拙者が斬れるものか」

『季節名』を軽く奪い返す。そのときにつんのめったヤナギの胸倉を空いた手で掴み上げてみれば、随分と軽い。

「何だオマエ、ガキだとは思っていたが、思った以上にガキなんだな」

「放せよ、このッ」

言葉と共にヤナギは手の内にしまっていた何かを私の目に向かって投げ目潰しを仕掛けてきた。それで怯んだ隙に逃げようとしていたんだろうけど、生憎と私はその直前に瞼を下ろしているから平気だしそもそも視界を持たない私には通用しない。しかし、かなり勢い良く肌に叩き付けられたそれは私の頬を切り、血を流させた。知らず胸倉を掴む手に力を込めてしまふ。それで首を絞められたヤナギは足をバタつかせて暴れ始めたので仕方なく下ろすとすかさず攻撃を加えようとしてくる。こういうガキはしつこいな。うんざりしながらそう思っていると、とうとう限界が来たようではらくらついた後で倒れた。

「全く、手のかかるガキだ」

思ったよりも頑張ったその気力は認めようと内心で続けて、私はヤナギを脇に抱えて歩き出した。

暗い世界の中で、脇に抱えた冷たいものは不思議な温かさを私に感じさせている。不思議なことに。まあ、人の温もりというものは大抵そんなものだった。フォルティスだって二代目だって、人は大体温かい。

ヤナギを連れて学校に戻って来た私は部屋に戻ってみて、知らず首を傾げていた。ここにきて何かの違和感が急速に膨れ上がっている。脇に抱えたヤナギが少しだけ重く感じてきているのとは違う。

何か忘れものがある訳でもない。何故そう思うのかといえば、何か忘れていたような気がしてならないからなただけで、どうしてもその正体が突き止められない。

そうして数秒思い悩んでいると、こちらに向かってくる心音が一つ。ウィリアムだ。私はヤナギをその場に降ろして部屋の外へと少し急いで出た。私としても不自然さを隠しきれないとは思っただけ、もう遅い。

「ああ、おはようございます。トキナさん」やっぱりウィリアムは妙だと感じている。「床が濡れていましたけど、どこかに出かけていたんですか？」

思わぬ言葉に表情を変えた瞬間、ウィリアムの心音が遠くなって聞き取りづらくなる。その変化は形容し難く、知らず首筋を汗が伝っていくのが判った。どうしてかというのと、どういう状態なのか把握できないからだ。私は視力を持たないがその分全身でものを視ることができるよう修行を積んできた。だというのに、『心眼』の焦点がウィリアムという人間に合わなくなる。

それは有り得ないことだった。一度感じ取った感覚を拾い損ねるなんて。

内心で動揺しながら私は体温で温ぬるくなった足の布で床を二三度拭くという、大して意味の無いことをしながら、更に意味も無く鞘で床を叩いていた。動揺のし過ぎだった。

「少し森のほうへ出向いていた」私は平然と言った。

このとき、『森』という言葉にウィリアムの心音が微かだけど変化する。

「何故森に？」

どついう意図を持って聞いているのか判らないその言葉に、私は不信感を覚えた。『心眼』を以ってして意図が読めないということ、何か普通の意味ではない点に意図するところがあり、それを隠している。ウィリアムはそうした意図を隠すことで私に知られた訳だけど、私に判ることはそこまでだし、何か勘付いたと思われるのは良くない。

「何故と言われても、拙者が外を出歩くことに、森にいたことに何か思うところでもあるのだろうか？」

良くないとは思っても、口は自然と動いていた。

「いえ、別に」

それは心を閉ざそうとする言葉だった。少くない動揺がウィリアムの脈の乱れから手に取るように判った。

ウィリアムが何かを隠している。そのことに気付いているせいか、

れだけ。次の行動を起こす様子が無い。

「如何なされた？」

「すみません。もしかして、あなたが島の外から来たっていうサムライの人ですか？」

「いかにも」

「なら、カタナにも詳しいですか？」

「詳しくはないが、扱いは承知している」

「あの、お願いがあるんですけど、もしよければ一緒に来て欲しいところがあるんですけど」

相手の心は初めから今まで、ずっと不安そうな音を出している。あまりにも不安げなそれは、かなり下手な演奏を聴かされているように癩に障ったけど、言っている言葉の内容には興味があった。

「すまぬが、今すぐには無理だ。用事を片付けたら拙者からオマエを訪ねる。行くのはそのときでよいか？」

私にはアユムから、主君から命じられた任がある。まずそれを済ませないといけない。私用は二の次だった。

「あ、はい。それでいいです。ただ、来てくれるって約束してもらえれば良かったので」

約束。その言葉は私の中では特別強い力を持っている。だからこ

そ、その言葉に知らず気持ちを寄せていたけど、それも部屋の中に置いてきたヤナギが動き出したのが判った瞬間にどこかへ置いて走り出していた。

間がかかったと思うんだけど」

私が大陸からここに来るまでにかけて時間はかなりのものだった。それを思うと後から来た二代目が何故こんなにも早く来ることができるのか不思議でならない。実を言うと、それは頭の片隅にずっと引っ掛かっていた。

「わたしには魔法があるから」

明るい笑顔と共に言っているのがはつきりと判った。

「そうだったわね」

二代目は大抵の事に対する説明をこの一言で片付ける。実際、魔法が大抵の事を可能にしてしまう以上、私はその理由で納得する他はないのだから、無駄に言及することはやめ、仕事の話をすることにした。

「校長先生から大体の事情は聞いてる？」

「うん」

「もしかして、私よりも仕事の内容には詳しい？」

「うん。一通りの手筈とか他にも色々だね」

「説明してもらえん？」

「ごめんなさい。それは無理」

返事を断られた私は何故と問う。二代目は私が言葉と共に僅かに送った眼力にもまるで動じることなく答えた。

「だから、無理」と、ただ一言。けど、それで納得することはできない。

「そんな無理は通じない。訳も聞けずに納得しろと言っなんて、それこそ無理」

それは二代目も当然判っている。だから弱り切ったように小さく息を吐くと頭を必死に働かせている。けど、二代目が考えた末に出す答えはいつも強引に事を運ぶという実力行使になる。だから、頭を使うだけ無駄だと思う。

そう考えていたところで、二代目に異変が起きる。私の背後を見て呆然としている。

「ねえ、秋ちゃん」

「何？」

「えーと」二代目は私のことを気遣っているのか言葉をしばらく選らんで「フォルティスがいる」と言った。

「フォルティス？」

気配を消しているから判らなかつたけど、どうやら私の背後に居るようだった。

それで二代目が驚いている理由にも得心が行った私が一つ頷いていると、背後から声が届けられる。

そこで、教える立場になってみれば何か掴めるだろうとのこの考
えだけど、

さて、どうなるかしら？

何のために。それは例えば、誰かに勝ちたいから剣を学ぶという
ことなんでしょう。

三十七話 墓前でのやりとり（後書き）

の詩はドイツの作家ブレンターノのもので、
注釈として、ここに書いておきます。

三十八話 再生

記されし暦456年。

私が仏となつてから三年余りの月日が流れたこの時に再び生を受けたとき、初めて見た場所は冷たく湿った空気と人間の狂気が呼び起こした災厄によつて撒き散らされた血の臭いが頭の中を冷たくする暗い地下だった。

私はこの場所に降りている沈黙、その沈黙に早々に嫌気が差したところで、手は自然とすぐ傍に飾られていた大剣を取り、足はその場から離れていった。

風の流れを燕さながらに読み取つて歩きながら、手にした剣の刃に微かな光を当ててじっくりと眺める。愛刀以外の得物を意識せず手に取っている。そのことへの驚きを感じながら、私はこの剣の素晴らしさを理解していき、浮気心を起こしていた。

そこでようやく気が付いた。寝ぼけていたというのか。私はシルクリムと戦い死んだはずだ。

知らず知らずの内に空いた手が左眼の瞼をそつと撫でる。それだけで私の体から冷気は残らず吹き飛んでいた。

間違いなく左眼には力が宿っている。五体に気力を充溢させるものは正しく血の力。私は生きている。生きている。

剣を手放して右手で左胸にそつと手を当て目を瞑る。心の臓が一回一回鼓動を刻む度に心が弾むのが分かる。

「ああ、ああああ、生きている………生きている」

顔が綻び、笑みを表す。私は己を思い切り抱き締めて、今感じる

全てのものに痺れていた。

嬉しい縁起だ。そう思ったとき、左眼が開いたことで私は体を寸時強張らせる。

けど、何も起こらない。そのことに安堵しながら、私に幸運を齎してくれたに違いない左眼に感謝の念をゆつくりと瞼を閉じることで表した。

地下の出口と地上への入り口の役目を兼ねる扉を開いて頭を覗かせて外の様子を窺うと、赤い光が目の前を覆い尽くした。

吹き付ける熱がやはり死んだのではないかと思いを換えさせる。

炎に覆い尽くされた世界は、私にとっての全き地獄だ。

けど、どうやら地獄ではないらしい。叫びを求める血塗れた何者かの狂った声と助けを求めて叫ぶ者の姿が遠目に見えた。

私は油断無く走りながら小石を振り抜かれようとする凶刃へと当てる。それで注意を引いたところで走る速さを一時緩めて、次の一歩で体を大きく沈ませて膝を折り、思い切り跳んで、大剣の一太刀を以って斬り捨てた。

切っ先に重みが無い分、多少力んでしまったが、いい切れ味。この剣、気に入った。

私の動きを受けて、殺気が集まって来るのが分かる。人というよりも獣じみた殺気が共有されている。

私はこの空気を知っている。吸う度に、吐く度にそれが体へと馴染んでくるのが分かる。

これは、戦の空気だ。

殺気が私を闘争へと駆り立てる。気持ちの昂ぶりが剣の舞となつて風を切る。

「三毒超克」それを口にして、私は己が欲に惑わされていることに気付き、愛剣を背に差した。

周囲が燃えているせいで喉が焼けるように熱いが、それよりも助

けた相手をどうにかしないといけないだろう。

そう思って相手を見たが、悪い空気を吸い過ぎていた。すでに意識は無く、以前の私のように中もかなりやられている。

助からないか。少し考えてはみたものの結果は変わらない。それに何時までもここには私もせつかくの命を無駄にしてしまう。後ろ髪を引かれる思いはしたが、火事場は御免だし、この場をあとにすることにした。

それからしばらく歩いた私はそこから程近い町へと辿り着いた。

道中、魔物はかなり増えているのが目立ったが、害はそれだけに留まらないらしい。

「まるで何時かの大飢饉の時のようじゃないか」知らず口が言葉を発していた。

痩せた犬を追い回す亡者同然の生者がいつしかいがみ合い争って、呆気なく力尽きていき、泣いている赤ん坊を母親が近くで恨めしうに見詰めている。

地獄とはいかないまでも、この惨状への既視感と共に齒に、舌に、人の血肉の食感と味が呼び起こされてくる。

気分の悪さに我慢できず一つ唾を吐き捨てると、痩せた野良犬が寄って来てそれを舐める。

かつての私もこの犬くらい懸命だったのかと思うと失笑する。そして唾棄した己の辛抱の無さに呆れた。

一体何があったのか、まず私ははそれを知るところから始める事にした。

けど、私は今大陸のどこにいるのか全く知らない。旅をしようと考えるはいたが、地図など目にしたことも無い。

馬鹿は死ななきや治らないと組長は言っていた。それで、私の馬鹿は治っているのか？

「地図は嫌いなんだ」

誰に対してという訳でもないのに言い訳をしてしまう。何だろうこの心細さは？面白くない。

エスは無事だろうか、私の屋敷は壊れていないだろうか。様々な疑問が頭の中を回り始める。

沈黙は時に最大の回答者となるが、時に最悪の質問者となる。

人を啓発したり、孤独を与えたり、罪に気付かせたり、罪を行うようにけしかける。沈黙ほど手強い話術の持ち主はいない。

かくいう私も一度も言い負かしたことはない。そもそも、己が心の内で言われることだ。勝負は死ぬまで着かない。

道の真ん中で佇んでいると寂しい風が体を撫で付けていった。

さてはて、私は何をしよう。それを決めるための手掛かりは得ていたものの、それを為すにはとにかく見聞が必要だった。

「まさか、トキナさん？」

声を掛けられるとは思ってもよらず、内心で驚きながら振り返るとそこには白髪に深緑を思わせる瞳の男がいた。

私の記憶にあった姿と比べて随分とくたびれてはいたが、間違いなく恩人のアル口だった。

「やっぱり、トキナさんだったんですね、よかったです。ずっと探していたんですよ」

と言って、私の手を取ると笑みを浮かべる。疲労から顎を突き出しながらも、その目で瑞光のように私を見ている。

私も微笑を返す。この男なら色々知っているだろうと当たりをつける。外れにはならないはずだ。

「私もあなたを探していたんだ。侍は恩を忘れない。あなたに恩を返しに来たよ」

偶然は言葉一つで必然へと変わる。ほんの些細な偶然を如何様によつて運命へとすり替えることができる。

「神に感謝しないといけませんね」

神。その言葉がこの二度目の生において決して無視はできない言葉だということを、私は本能的に感じていた。

興味深いと、いずれその存在を確かめよう。このとき、強い敵意のようなものと共に私はそれを心に留めた。

アルロは私をギルドへと連れて奥にある会議室へと通してくれた。

「檻のようだと思っていただけ、こういうときはいい拠点になる。ギルドは知恵があるね」

ここを拠点として集まった人々が備蓄した食糧などを分け合っていた光景からそう述べると、アルロは表情を固くし、歯を食いしばると苦々しく言う。

「そう、中央は本当に知恵がある。彼らは不正の極致をなしてみせた。正しくもないのに正しいと思わせる。今のあなたのように判断を誤らせてね」

思わぬ反応に私は目が楽しんでいることに気付く。口がその先を知りたそうに微かに震える。

「アルロ。私に大陸の現状を教えて欲しいんだけど」

そう言うとアルロは表情にこそ表さないがどこか笑っていた。なるほど、私を焚き付けるつもりという言葉だったのか。面白い。

「中央は入念な仕込を終えて、今、この大陸に覇を唱えているんです」

その一言に私は思い切り首を傾げるしかなかった。私の記憶とその行為は辻褄が合わない。

「中央は上手い具合に大陸の秩序を保っていたはず、それを打ち壊して覇を唱えることの利が見えない」

「彼らはずっとこの大陸を統治したかった。けれど位置は四方を囲まれていた。だから機を見計らっていた」

「そのためにややこしい偽善を長いことしていた・・・とんだ如何様だね。じゃあ魔物というのは」

「彼らが四方の戦力を削るために用意した仕掛けの一つです。自然発生したものだとはかり思っていましたからね。」

まんまと騙されましたよ。まさか裏で糸を引いていたなんて・・・待つてくださいますか。あなたは何か故そこまでのことがすぐに分かるんですか？」

私はそれに答える前にまず、左眼を指す。

「左眼？初めて会った時は閉じていて、今は開いている。いえ、それよりもその眼は、神獣の・・・」

絶句するアル口に私は答える。

「この眼が閃かせるんだよ。というより、アル口の話を繋げてくれている」

知識とは違う映像とも違う。けど、言葉として理解を促してくる命令をしてくる。

集中しないと聞き取れないが、何かをしると言ってきているのは間違いなかった。

この左眼は中央から齎された。そして、私のように己の体に別の生き物、魔物の一部を取り込んだ人間がいる。

融魔。どうやらこの存在は中央が強者を手中に収めるための手段の結果といったところか。何故だか私は命令を受け付けないようだが、特A級と呼ばれる傭兵達を操れば戦力は十分過ぎる。

傭兵を管理する立場にあったのも全ては統治を実現するため。表向きは周囲の人間のためだと偽って、階級をつけ腕を競わせ、優秀な者には力を与え、機が来れば操れるようにしておく。これだけでも大した手の込みようだ。

一部の者は必ず国が召抱えているだろうから、頭を討ち取る際にもさぞかし便利だろう。本人さえもそうとは知らず、常に隣に控えている脅威に獲物は決して気づく事ができないのだから。

中央はそれ以上のことをずっと長い間続けていた。その組織力と手段に私は感心する。

そこで、思い当たりそうな記憶があるとしたらひとつだけ、あの金髪碧眼の女性が言っていた。

『それでもあなたは特A級です』

あれはそういう意味での言葉だったのだろうか。私も操られる者

の一人だと内心で続けていたのだろうか。

「どうやら融魔というのも中央の仕掛けのようだけど、私の読みではあなたは知り過ぎている気がする」

それだけ入念に根回しをし、不正の極致をやったのけていたのなら、今更になって馬脚を現すとは考え難い。アルロは独力でその真実に気付いたのだろう。そして、私の力を必要としていた。今度はその理由を尋ねようとしたが、

「まさかあなたが融魔だったなんて……っ」アルロは驚愕に顔を染めると壁に掛けられていた得物を手にする。「私を消すつもりで来たという訳ですか?!」

「アルロ、それは誤解だよ」

そう言ったときには既に、私の心臓目掛けて鋭い一撃が打ち込まれようとしていた。

三十九話 別れて、また会うこともある

迫る一撃を前に右手は背に差した愛剣の柄を掴み、半身を引いてかわす。

直後、鋼の一撃が霞となって消える。

「！」

予期しない動きを目は捉え切れない。右腕もこの体勢で無理に動かせば肩を壊す。

悠長にしている時間はない。左足を軸足として回転し、鋭角に右足の踵を振り下ろし二撃目を打ち落とす。

続けて左足で顎を狙うつもりで、また直後に一撃が腹を狙って迫って来る。

ぎりぎりのところで抜剣が間に合う。床に突き立て全力を以って軸を剣に移し無理矢理にかわす。

体を右にしなせると脇腹を一撃が掠めるのが分かる。着地と同時に愛剣を引き抜きざまに振るう。

私の一太刀はアル口の小手を強かに打った。手は砕けたらうけど、そこは勘弁して欲しい。

「くう、らあっ！」

しかし、アル口は得物を取り落とす事も怯む事も一切なく、更に恐るべき事に威力を落とすことなく打ち込んでくる。

どうにか引かずに打ち合わせていられるが、納得が行かない。何故アル口は無傷でいるのか。

「………つと」

それに、一撃をかわす度に穂先が霞となって消えたように見えるのはどういうことだろう。

攻撃の引きの動作にしては出鱈目な速さだ。攻撃よりも遙かに速いというのがまた更に不可解だ。

相手は全力全開だ。

それに対して私は全力ではあるけど全開とはいかない。一度死んだ身のせいかな、あちこち強張ってしょうがない。

この部屋の中でも剣は満足に振るえるけど、そうすれば瓦礫を払うのに手間取ってしまうし、何よりアルロは相打ちだろうとお構い無しといった具合に攻めてくる。

別に私に殺すつもりは無いのだし、剣で斬るよりも楽な対処法でやらせてもらうとしよう。

力任せに愛剣を投げつける。轟と、風を切るというよりも押し潰すような凶暴な音と共にアルロへと飛んでいく。

さすがのアルロもこれは避けると見える。私は短く息を吸い前へと跳び出す。

六割の速さを以ってして行うことは何のことはない、ただの体当たりだ。

体当たりが決まり、アルロの姿勢が崩れる刹那、腕を取り間接を極めて地面へと叩きつける。

これで終わった。間違いなくそうだと思ったとき、体は余分な力を得たときと同じようにしてカクンと傾き、アルロが霞となって消える。

驚きはしたものの、カラクリは何となく知れたので先程アルロがいた場所へ服の中へ忍ばせていた石を投げると、案の定それはアルロに命中する。それに怯んだその隙をたっぷりと使って振り返ると、そこには無傷のアルロが立っている。

私はここで切り札を使う。ラングとの一戦で身に着けた眼力でア

ル口を見切る。

この眼力は神秘のカラクリを映す。妖術の類ならば必ず見切れる。全てが闇のように黒く染まる中で、アル口だけは光を失わない。

「ふふ、カラクリが分かったよ。そうだった。アル口は妖術使いだったね」

戦いの中での言葉にアル口は耳聡く反応する。このあたりが、武人と術師の違いだろう。

「私の術を理解したと言うつもりですか？」

いや、こうして会話に興じるのは理解されたとしても破られはしないという自信の表れからか。

もしくは得物を失った私に対する評価なのか。いずれにしてもどうでもいい。

「時間を戻しているんだろう？ 攻撃をするときも、傷が治ったときも、拘束から抜け出たときも、同じ場所に戻っていたよ」

「……………」アル口は無言だが、顔が凶星だと語ってしまったている。

「けど不思議だね。体の時間だけを戻すなんて技をアル口が身に付けるなんて」

「それが私の最終的な回答だったんです。傷を癒すための……結局、自分にしか使えない代物でしたが、おかげであなたたちと戦うことができるようになった」

「そうかな？どっちでもいいよ。それより誤解しないで欲しいな。私はアル口の敵じゃないよ」

「あなたは融魔だ」

強い憎しみが、声と言わず全身から溢れ出す。

「そうかもしれないけど、私は違っていて、どうしたら信用してくれるかな？」

「信頼はいつでも捨てられるものです。トキナさん、あなたが私から得た信頼をすぐにドブに捨てないとは限らない」

これにはもう首を振るしかない。哀しい事に、アル口は信頼する心を失くしたのだ。

信じて欲しいと願っていた分、そうならないことへの痛みが胸を刺す。身勝手だけど、この辛さには慣れることはない。こういう気持ちでいるときの心はいつも知らず知らずの内に無防備になっているからというのは分かっている、だからこそ辛い。

「なら、私はせめてもの証として、この場から去ることにするよ」

私は壁に突き立てられた愛剣を手にしてこの場を去った。きつとアル口には残像しか見えていなかったらう。

一瞬で森の奥深くまでやって来た私は周囲に誰もいないことにはつと息を吐いていた。

少し気を許し過ぎていたのかも知れない。それにしてもとんだ恩返しになってしまったとまた息を吐いてしまう。

胸に溜まったものが吐き出せない。こういう晴れない気分は嫌いだった。

行く当ても無く歩き出す。少なくとも、歩いていけば少しは気が晴れるのはよく知っているからだ。

「しかし、先に手を出しておいてよく言うよ」

歩くうちに、ついそんな言葉が漏れ聞こえる。私はつい愚痴でも言ってしまったのかと思いはたと足を止めると、実はそうではないらしい。近くから何やら言い争う声がする。

その方向へと足を向けかけたところで、少し後ろへ下がると鼻先を矢が飛んでいく。喧嘩にはいささか以上に物騒だ。

声の方が段々と荒くなるにつれて、飛んでくる矢の数も増えてくる。それを見切ってかわしながら近付いて行き、争っている相手の元へと辿り着いた。

「何してるの？」

「あなた誰？」

「えっ！後ろに人居たの！？」

声を掛けてみるとまず驚かれる。争っていた二人はまだ子供だったが、暮らしには困っていないらしく血色も良く元氣そうに見えるのが印象強い。きっと面倒を見てくれる人がいるのだろう。羨ましい事だ。

羨ましい？私には組長が居ただけで、羨ましいのだろうか。。

私はたまに私にも解らないことを言う。もう解りきっていたつもりだったけど、そうはいかないらしい。

「私は季節名。あなたたちはこの辺りに住んでるの？」

二人は警戒していることを隠しもせず、注意深く私を見てから答えた。

「そうだけど、トキナは旅人なの？」

一つ頷いて見せると、二人の顔が一変して明るいものになる。

「なら、話を聞かせて！ 私たちあんまり遠くに行けないから遠くのことを知りたいの！」

何かをせがむとき、子供は人の手を勢い良く引つ張って行く。エスタシアもそうだった。そう思うと、昔が色付いていくのが解る。記憶の器に水が並々と注がれていく、その途中で、頭の中にあの言葉が響いてきた。

全ての命の価値は等しく、奪った命の分まで生きる。

ああそうか　私は理解した。私はまだ、奪った命の分だけ生きていないのだ。

だからこそ、こうして生きているのだという言葉在心中で続けて、それをすんなりと受け止めていた。

それこそが私にとって一番理解し易く、辻褃の合った理屈だったから。

徒然と考えているうちに、子供二人に連れられて、私は小さな山小屋の中へと入り、椅子の所まで案内される。私は愛剣を傍に置きそこに腰掛ける。

「二人は私が悪者だとは思わないの？」

家の中にまで招き入れられてもらっておいで何だけど、見知らぬ他人に対して、こども無防備というのはどうなのだろう。

そのことについて尋ねると、二人は顔を見合わせたあとで笑ってみせる。

「悪者はそんなこと言わないよ」

「だから大丈夫だよ。それに」ここで言葉切り、背中の弓を指す。
「悪者ならこれでやっつけられる」

「ふうん」

子供は可愛いと誰かが言っていた。成程、確かにこれは可愛いものだ。

「そういえば・・・二人とも名前は？」

「私はホズル」

「私はビダル」

弓で撃たれていたほうがホズル。撃っていたほうがビダル。こうすれば覚え易い。

「ねえ、そんなことより話聞かせてよ」

そうビダルに言われて私は己の過去を振り返る。よく考えずとも、人に聞かせられるようなことはしていない。

自分が何者かと言われれば殺人鬼だとしか答えられない。この点

はただ生きている人間よりも明確な身の証があるとも言えるものの、それが罪というのは他人からすればお笑い種だろう。

とにかく何か話してみよう。私はこのとき、真剣に考え、ようやく常とは違った訥々とした喋りで今までに見てきた景色や人達について色々と語って聞かせてみた。

すると、思いの外受けが良かったらしく、私は話を長い間続けた。いた。

「ねえ、話にトキナのことが出てないんだけど、どうして？」

続けていると、やがてホズルに気付かれる。これに私は肩を竦めてみせるしかない。

「何でだろうね」

「あ、分かった。恥ずかしいんでしょう？そういう顔してる」

どついう顔をしているというのだろうか？

半ば真剣に悩み始めそうになったところで、家の中になんとアル口が入ってきた。

「……」
「驚きの余リアル口は声が出せずにその場に根を張ったように立っている。」

「やあ」

私はすっかりくつろいでいたせいか、かなり落ち着いてそう言っていた。

意図した訳ではないにしろ、今度は人質がいる。アル口も手荒な真似はしないだろう。

心中でそんなことを考える私は、やはり悪者だった。

四十話 最初の一步

思わぬ形で再会は別れ方のせいもあり、会話などまるで生じないものとなっていた。

「地獄同然の街、あれはどういうこと？」

「あれは魔物を使いあやまって一度壊してから、援助という形で支配下に加えていくんですよ」

「そうなんだ。それでアルロは今までどうやって生活を？」

「藁細工を売ったりしてどうにか食い繋いでいますよ」

色々と尋ねる事はできても何か言う度にあまりにも明確な回答を返してくるためにすぐに理解できしてしまうし、バツサリと切り捨てるような物言いも加わってまるで会話にならない。これは禅問答とは違うはずなんだけど。

そんな風に会話が続かないせいもあり、私は小屋の隅に置かれていた藁を適当に拝借し、外で草鞋を編んでいた。

この藁で生活を立てているアルロにしてみれば材料をかつぱらつていく私は正しく泥棒だろうけど、足を汚すのは嫌なので、勝手ながらも、ありがたく使わせてもらっている。

丹精を込めて草鞋を編み上げる途中何度か足に当てて大きさを合わせていると、アルロがこちらに近付いて来るのが見えた。

「どつという積もりなんですか？」

その戸惑いを隠せない声に、私は人間の心の移り変わりようについて思案しながら、足の指を曲げて草鞋の履き心地、その調子確かめる。

そうして、私が言葉を無視して草鞋作りを続けているとアルロは俯いた。

「私はへそ曲がりじゃないってまず言わせてもらおうよ。それにこの再会は本当に偶然。たまげるくらいにね」

「それで動揺して武器を置き忘れるほど・・・トキナさんは間抜けじゃありませんでしたね」

「いや、私はこれでも結構間抜けだよ。だから一度死んだんだ」

そう答えるとアルロは返す言葉を失った様子だった。

「この話は終わり。アルロ。私の質問に答えてくれる？」

「・・・・・・・・・・どうぞ」

「紆余曲折を得たけど、これでようやく訊ける。アルロは私を捜していたんだっただよね？その理由を教えて欲しいかな」

仕上がった草鞋の大きさを今一度確かめる一方でアルロの様子を窺うと、口許に手を当てて考え込む素振りを見せる。

やはりまだ完全には信頼できないということか。けど、信じようとしてくれるだけでも十分だろう。

「重要な事は伏せてくれて構わないよ。言っただろう？私は・・・・・・・・侍。細かい理屈は要らないよ」

「私の力になつて欲しい……これだけしか言えません」

「分かり易くていいよ。求める事は不足の証。不足の証は無力の証。無力の証は望みの標、侍一人、旅のお供を致しましょう。あなたという船の行き着く先まで、旅の無事を約束しましょう」

気の向くままに言葉を口ずさみながら、私は木の切り株から腰を上げて立ち上がる。

それと時を同じくして、大きな殺気が二つ、こちらに近付いて来るのが解った。

そのせいか左眼から伝わる命令がはつきりとしてきた。キョウメイという奴か……相手は十中八九、融魔だろう。

アルロもそれが解ったからか、表情を固くすると得物を取りに小屋へと向かつて行つた。

私の愛剣を取ってきてくれそうにはないけど、構わない。得物は敵から拝借すればいいだけのこと。

草鞋を編むという手先を使った作業から今の己の力量はおおよそ把握できた。恐らく、私は人の限界を抜けてしまっている。

それを人の私がどこまで扱えるのか、これからの事はそれを試す絶好の機会に違いない。

その前に、こちらから打つて出る必要があることに考えが至る。

この場で戦えばホズルやビダルが巻き添えをくらう。それは良いことではないし、それを許してしまうようだ。私の今の力量が何の意味も為さないものに思えてくる。

ここで、一度呼吸を整えて、心中に漂っていた気だるさを払う。

「三毒超克……」

戦いを前に言霊を唱えて荒ぶる気を鎮め、剣気を内に隠す。隠し

て、私は敵に向かって疾駆する。

ラングとの戦いから学んだことは一つ。本気を出させぬうちに、本気で倒す。至極当然のことだけど、これに全力を出し切れなかった私は左眼を失った過去がある。

二度も同じ失敗はしない。

二人のうちのどちらも私の動きに気付いてはいない。鼓動は未だ一つとして刻まれていない。

「ハアッ！」

一人の手首を返し、その手から剣を奪い膝裏を払うように蹴って膝を着かせたところで差し出された首同然の足へと剣を突き刺してその場に固定し、肘を斧の如く、これまた無防備な頭へと振り下ろす。

そうして、一人は地面という墓穴へと埋まった。さすがに化け物、埋まりきるとは頑丈だ。

残る一人は面白い顔をして私の姿をようやく認める。ただし、それは実体のないただの残像だ。

骨がゴキリと音を立てる。それが首の骨というだけで、あっさりと死んでいた。

呆気なさ過ぎる。やはり戦うのなら、仕合うのならばお互いに全力で戦いたいものだ。私は微かな後悔に似た心持ちで、それを渴望していた。

足りない足りない。戦いが足りない。剣光が時折見せる生と死の狭間に差す光明を見たい。

必要以上の欲望が血を熱くするのを感じる。どうやらこの体はまだ完全に私のものではないようだった。

全てが終わってからしばらくして、アルロはやって来て、周囲の状況をよく見てから、私を呆然と見詰める。

「そんな、融魔をこんなにもあつさりと……」

「あつさりか。これでも結構頑張ったんだよ。ところで、彼らと私は無関係だっていうことは」

「分かっていきます。私は彼らからすれば単なる邪魔者ですから、泳がせる意味は無い。そんな私を助けてくれたあなたを疑うほど、私は論理を見失ってはいません」

論理。つまりは理屈から私を信頼するというのは少し納得が行かないが、ここは仕方ないと己に言い聞かせる。

ただ、私は論理は好かない。それはあくまで道具であり、心の中心に据えて置ける代物ではないと思うからだ。

それを今のアルロに言っただけで聞かせるには機が熟していないので、代わりに微笑を浮かべる。

「それじゃあ、これからよろしく」

私が差し出した手を、アルロは力強く握った。

そして、私は大きな戦いへと身を繰り出した。

四十一話 関門（前書き）

新年明けましておめでとございませう。

四十一話 関門

記されし暦458年

それから二年の時を経て、アル口は中央を打倒するための戦力を整える。

中央は表立って動けない。それを利用して暗闘を繰り返し、ようやくここまでこぎつけた。

けど、ここまで来るのには相当の苦勞と魂を支払う必要が、アル口にはあった。

中央という多勢に対して、私を含めたところでアル口の無勢に変わりは無く、おまけに表立って仲間を集めることすらままならないいや違った。そもそも、向こうと戦えるだけの力を持った仲間など集めることは最初から不可能だったんだ。

それ故に、アル口は勝ち目を出そうと躍起になっていた。目つきが途中から悪魔の言葉を信じて輝いているようだった。

そして、彼は本当に悪魔の言葉を自らの口から吐き出す。

「トキナさん、あなたの左眼をください　大丈夫です……
代わりの眼はちゃんとあげますから」

それに応じ、私は通算三つ目となる左眼をくり抜いて渡した。でなければ、いち早い成功へと至らなければ多くの犠牲が出るのが既に知れていたからだ。それに、応じれば目を交換するだけで済む断る理由は無かった。

私という敵側からすれば『失敗作』の融魔を　本当は一度死んだことで変質した　アル口は原型として、中央の支配下に置かれる事のない、より屈強な融魔を作り出すことで少数精鋭の戦闘集団

を組織した。

そんな風にして作られた味方はいずれも私と肩を並べる実力だという異常ぶりだ、中央よりもこっちと戦いたくなってくる。

というのも冗談ではなくなるほどに頼もしい味方が揃った。

そんな連中の頭をやる私はその証として身に着けることになった純白のカパラミブ、それがいつしか戦場でのシンボルとなり、『白き隼』という名を私に与えた。

戦いは圧倒的優勢だった。けど、仲間は一、二人、また一人と戦場で命を落とした。とはいっても、別に斬られた訳ではない。

ただ、意図的な失敗という無茶の結果が出ただけのこと。仲間は皆、力を得る代わりに非常に短命になる。

だから、戦いは可及的速やかに終わらせる必要があった。要するに私たちには攻められる機会は一度しかない、文字通り死力を尽くして戦う他に勝機はないということだった。それほどに勝ち目の無い戦いだった。

何千何万という軍勢は雲霞のように。それを前に私は仲間になんて一瞥をくれて走り出す。

一、二、三、間合いに入った瞬間に首を斬り飛ばし、刃についた血飛沫を目潰しに使い怯ませて敵陣深くへと飛び込む。

やっている事はなんていうことは無いただの殺戮。だけど、目の前の軍勢を蹴散らせれば決着はもうすぐだろう。

私が頼まれた事の内容は単純だ。私の左眼を研究して得られた成果、情報を元に特定した融魔を操る力の源を斬り、洗脳から解放することで勢力図を塗り替える。そうして、そのまま一気に王手をかける。

けど、私がこの戦いに望むものは正義だの悪だのなんて心からじゃない。

強者との戦い。

それこそを望み、私は真っ直ぐ行く。

敵を斬って斬って斬り続け、そうやって直進して、私は既に千を超える数の魔物を相手にしていた。

やがて、巨大な壁を遠い景色に捉えていた。近付いて行くにつれてはつきりと、より巨大になっていく壁を前にして、私は山頂からの景色を見ているような気分を味わっていた。

天を分断するかのような壁の前にようやくと辿り着くと、一人の女が地獄と共に私を待ち構えていた。

「おやおや」

仲間の屍の上に立つ女はそれだけ言うと私の顔をしげしげと見る。

「おやおや」

私もそう言って相手の顔をじっくりと見る。随分と懐かしい顔だ。

「シルクリム、久し振りだね」

シルクリムは一度天を仰ぎ見ると、私の姿を再び見る。見続けていて、何もする様子が無い。

「地獄の辺土から舞い戻って来たよ。なにせ死んだら戦えないからね」

それでようやく得心が行ったのか、シルクリムは顔にあの毒のある笑みを浮かべる。

「なるほど、あなたが南の私を相手に引き分けたサムライですか」

今度は私が天を仰ぐ番だった。どうやら人違いらしいということ
は解ったものの、目の前の相手はあまりにもよく似ている。

そのことは確かに不思議ではあったけど、今は関係の無いことだ。
ようやく、強者と戦えるのだから。

私は相手から視線は外さずに手に持った愛剣を軽く振るう。やは
り愛刀『季節名』には及ばないのか、根元から折れた。研ぐうちに
大分痩せ細っていたし、仕方ない。

これで、ここに来るまでに都合三本の剣が折れてしまった。

残るはこの二年を費やして鍛えられた秘蔵の刀を一振り残すのみ。
私は白鞘に納められたそれを抜く。嵐が過ぎ去った後の朝を思わ
せる刃紋の美しさ、太陽の光を受けて秋水煌々とする姿に思わず見
惚れてしまう。

「その刀、その紋様の上着。あなたは『白き隼』でもあつた訳です
か。あなたは本当に我々にとって邪魔な存在のようですね」

目的の場所は壁の向こう側に。それで、その前に立ちはだかる強
敵が一人。

「私はあなたを求めていたよ。三毒超克……型捨無流、開
祖、季節名 一手所望す」

「いいでしょう。私もあなたと闘ってみたかったですよ」

空気が張り詰める。途端、相手が遙か遠くにいるかのように見え
る。そのズレを見切ることで無くす。

こうして刃を向け合ってみて初めて、本当に別人だということを
悟る。

この相手、私の故郷と同じ剣術の使い手だ。よくよく見れば、得

物の特徴もよく似ている。

相手は腰を低く落とす。抜刀術の構えか　　そう推察したところで私の視界からその姿が忽然と消える。

思考するよりも速く、これまでに刻み込まれた戦いの記憶が体を動かしていた。

左に大きく払うと白刃のきらめきがぶつかり合い、火花が散つて頬に当たる。それと同時に伝わる腕への手応えに、ようやく求めたものを得た私は微笑んでいた。

「ハハハハツ、ハアアアア！！！！」

気合に笑いを含みながら相手の剣を返して突きを放つ。避けられた瞬間は横薙ぎに払う。この平突きを、相手は跳んでかわす。

体がうずうずするとでもいうのか、背筋から全身へと痺れが広がっていくのを感じる。同じく危険も感じて半身を引けば剣光がその場を通り過ぎていく。

そこから間を置かず一步後ろに跳ぶと鼻先に剣尖が触れそうになる。この危うい刹那を、剣の平の部分を宙返りして蹴り紙一重のところでもやり過ぎし、着地の瞬間に跳躍して距離を開ける。

この開いた距離もまた一瞬の内に無と化して、私と相手は剣を数合交える。しかしこの数合はお互いに決め手を完全に欠いた弾きと流しの繰り返しであり、拍子を外し合うだけに終わった。

その結果として、お互いに見抜こうとした虚実は判明せず、私とはともかく相手は不満そうな顔をした。

これまでの相手の動きは素早い、印象としては地味だ。けど、その裏に見え隠れする攻め手を隠す技の巧みさには驚かされた。

技を更なる技を以って隠す。そういう使い手に出会うのは珍しい。私は刀を右手に持ち、空いた手を腰の鞘に当てる。この勝負、手数で劣ることは敗北を意味すると感じたからだ。

相手の呼吸は一向にして乱れない。それどころか余裕綽々といっ

た具合か。一人でここを守護するのは楽とは思えないけど、私を倒す必要は無い。その方がやり易いのは確かだった。

そこに考えが至ったところで、私は愕然としそうになる。

「あなたは、本気で戦ってくれている？」

「貴女ならそれが分かるのではないですか？」

「全力だということは分かるけど、全開なのかどうか、よく分からなくてね。本気を出してくれないとつまらない」

「そういうのは自分が本気を出してから言ったらどうでしょう？」

「嫌だよ。私が本気を出したら……人としての戦いが楽しめない」

私は怪物とでも出会わない限りは人として戦う心積もりだと加えて言うと、相手は私を狂人でも見るような目つきをする。

「そうでしたね。貴女の融魔としての覚醒状態の能力については、気の触れた者の戯言として聞いています」

「そう。そこまで派手に立ち回ったつもりはないけどね」

言葉を終えるよりも速く、私は相手の背後に回り込んで袈裟に斬る。が、あっさりと踊るようによける相手の姿は既に側面にある。刀を振るった方向とは真逆の位置に回り込まれるのは百も承知。その為に腰に差していた鞘を抜き、相手の刀を納める。

大きさが合っていないために音を立てて割れていくが、これで武器は封じた。

これに対して、相手は武器を即座に捨てることをせず、抵抗するけど、そうする間が命取りになる。

案外呆気ない終わりだなと、思ううちにも体は動き、必殺の太刀を相手の眉間へと振り下ろす。

これで終わった。その油断が命取りだと、私はよく知っている。だからこそ、気を引き締めた。

その瞬間に、白刃が私の左手を切り裂き、勢いそのままに首筋へと迫ってきた。

右腕は動き出した直後にあり、これを即座に変化させることはできない。守る術など考える暇も無い。

私は咄嗟に、口を開いた。

忌々しい音が、震えが頭蓋を中心として全身を駆け巡っていく中で、口の端が僅かに切れる痛みと共に火花が無数に散っていくのを見た。

やはり、小さ過ぎたか。血が口の中に勢い良く流れ込んでくるのが解る。まずい、顎が凄く痛い。

「歯で止めてしまうとは、噂どおりの達人だ」

本来なら左手で腕を取って投げるなりして状況を打破したいのだけど、生憎と指は一本も残っていないため使えない。

本当に、勝負というものは一瞬で状況が一変するものだ。

右の手に握った刀は当たることなく、相手の左手に捕まれた。この膠着状態、不利なのは当然、私だ。

相手の力に圧されて微々たるものではあったが、徐々に体勢が反り返って来ている。今のような無茶な体勢はもうあと数秒と持たないだろう。口を閉じていなければならぬせいを含み針を飛ばすこともできない。

「……………」

右腕に限界を超える力を込めて押し込む。この場において限界を超えられない腕など私は要らない!!

体勢を押し戻す、その適した瞬間を狙って歯を食いしばり相手の刀を引くことで体勢を崩し、その隙を逃すことなく口を離すことに成功する。

そして、体勢が崩れたことで片膝を着く格好となったところで片脚を踏み台として高さを適度に調節し、側頭部へと膝蹴りを叩き込み吹き飛ばす。

「がっ あっ……っ」

相手の苦悶の音が響く。

睨んだ通り。剣の上ではかなりのものだけど、徒手空拳の心得はさほど無いらしい。

剣を地面に突き立て、懐に忍ばせていた酒瓶を取り出すとひび割れて殆ど中身が無くなっていたけど、口に含んで左手に吹きかける。傷に染み込む痛みが熱となって、血を失ったことによる気だるさを誤魔化してくれる。

追撃をしたいところではあるけど、少々飛ばし過ぎたせいもありそれは無理だ。

それよりも、息を整えることに集中する。
きっと、次から相手は本気で来る。それに勝つために、今は呼吸に使う体力も削る。

「いいでしょう。失敗作を相手に……………などと思っ
ていますが、本気でお相手しましょう」

……………!!
そうやって最初の時と同じ構えを見せる。腰をゆっくりと沈めて

「うっ」

先程よりも遙かに速い。そう考える間にも煌く剣光が縦に無数。私はこれに驚きながら剣を打ち合わせる。

剣光が何度も視界を過ぎるなかで、私は剣を噛み合わせ鏢迫り合いに持ち込もうとするが、相手は左手を峰に添えて舵を回すようにして、半ば強引に私の一撃を受け流した。

その隙を逃すまいと即座に横へ薙ぎ払いを仕掛けようとするが、直前に相手は跳びあがると宙で回転しながら刃を振り下ろしてくる。辛うじて片手持ちで受けたところで、右手に相手の手が触れる感触を覚えた。

このとき、相手は私の手を土台としてバネ仕掛けのカラクリのように背後へと飛んで行った。

飛び去っていく瞬間、私の背中を踏みつけることも忘れずに。おかげで体勢が傾いてしまって、即座に次の一手を打つことができない。

それを狙って迫る刃を寸でのところで受け、続く蹴りを腹に受ける。驚くことに、片足でそのまま持ち上げられ、右肩を刺される。反撃として足を切り落とそうとすれば、私を支える足と地に着けていた足を入れ替え様に蹴り飛ばし、私は地を転がされた。

「ぐう　こほっ、かはっ」

出したくもないのに苦しみの声と喀血が止まらない。

当然、相手は容赦無く追撃を仕掛けてくる。

私はそれを蛙みたいに無様に跳んでやり過ごさなくてはならない。何とも忌々しい。

思い切り跳ぼうとすると膝が落ちそうになる。痛みが腹部に走る度に息が止まる。

小さく舌打ちして、また剣を連続して打ち合わせる。

今度は探り合いではなく、確実に仕留めるための鋭い気の込められた攻撃。それに応じた相手の体の動きも、目にも留まらぬものとなった。私はそれを、他ならぬ相手の気から感じ取って受ける。

きつちり十合目に右肩が悲鳴を上げて、手から刀を落としてしまった。

そこにすかさず敵の刃が首を狙って来るのを体勢を低くしてかわし、未だ宙にある刀を掴んで出足を蹴りで払う。

そうして、相手の体勢は崩れ、私は刀を振り下ろせる体勢となった。

構えは既に大上段となっている。ここで、決める。

「裂界！」

顔面を狙つての必殺の太刀は刃筋を通してなお阻まれる。けど、攻撃の手は緩めない。二段目を受けて相手が怯んだその隙を突き刀を素早く逆手に持ち替えて喉を柄頭で押し潰した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

止めにもう一度、ねじ込むようにして柄を押し込むと、ようやく相手の息の根が止まる。

「ふう」

楽しめはしたものの、想像以上の傷の多さと疲労が体を蝕んでくる。

私は急いで筵を敷いてそこに膝を正して座る。この筵にはアルロが施した術が記されている。

それを使い傷を癒す。二年という時を経て完成した術は決まった

時の分だけ時を逆行させる。

左手に五指が戻ったところで効果が切れ、術付きの筈はただの筈に変わった。

傷は癒えたし、体力も戻った。愚図愚図はしていられない。急ぐとしよう。

四十二話 火の手

「それで、あなたが真実を知った時はいつなんだ？僕はあなたの武勇伝を聞きたい訳じゃあ」

痺れを切らしたらしいアユムの声を聞き、私はそれを手で制する。

「年寄りに捕まったと思ってももう少し付き合ってよ。記憶を共有していない人間に掻い摘んで話すには難しいことなんだから。」

決死の反撃は成功し、融魔たちを精神支配から解き放つたことでアル口は有利になった。

けど、王手をかけるには至らなかった。

やはり駒が少ないこともそうだったけど、盤上から敵の姿を見失ったことが最大の理由。

あなたなら解っているとは思うけど、あなたたちの頭は得体が知れないからね。

それで、私にも未だにその正体はようとして知れない訳だけど、思わぬところで真実を答える者が現れた。

何だったかな？オペラに出てくるデウス・エクス・マキナ……
・機械仕掛けの神様みたいな相手がね」

壁の向こうにはカラクリ仕掛けの武器がひしめいていた。

これまでとはまるで違う。鉄の文明が広がっていて、私はとても驚いていた。

耳を澄ませば、すぐにも戦いの音が世界を満たしていく。

それを紛らわすように鼻歌を歌いながら、残骸となったことで輝きを失った水晶の破片を踏み砕く。

それこそがアルロが破壊するように言った融魔を支配する力の源、その正体だった。

どうやら、私は一足遅かったらしく、既に目標は達された後だった事を知った。

その直後に、水晶の砕ける音を掻き消すようにして、赤い光が尾を引いて雨のように、しかし横向きにこちらに向かって降り注いできた。

私は素早く通路の角に隠れてこれをかわしたものの、カラコロという小気味のいい音が砲弾の直撃音に紛れて聞こえた瞬間、目でその正体を探れば、すぐ脇に手投げ式の爆弾が転がってきていた。

脇目も振らずに走る。床に壁にと立て続けに節操無く食いつく弾丸を掻い潜り、爆発を背後に感じながら、何とも快感を覚える恐怖に身を震わせた。

耳が疲れてしまいそうな程の音の連続の中で、砲声が響き渡る。走る足を止めて滑走。それでも砲撃は脅威。間一髪で避けることはできない。斜め前へと跳んで石柱の陰へと避難するが、続けて撃たれば柱は他愛も無く砕け散ってしまう。

別の柱の陰へと素早く移動して、刀を軽く持ち上げて刃を丹念に見る。

刃を鏡の代わりとして砲台までの距離を目算する。やたらと撃ってきてくれるおかげもあり距離を測るのには苦労しない。

鼓動を一度落ち着けて、何度脈を打つうちに片付けられるのか想定する。

そして、それが終わると同時に大量の砲身から立ち昇る煙が風に乗って前方に煙幕を張った形となる。

この期を逃す手は無い。

「スウ………セヤアアツッー!!!」

気合を乗せて最速にして最大の威力を誇る突きを放ち、壁という

壁を貫いていく。

そうして、開けた場所に出たところで地に足を着ける。

後に続くのは、巨人が倒れ伏すかのような轟音と爆発音の連続のみ。

髪についた細かい瓦礫や埃を払っていると、この場にはそぐわない喝采が響いた。

私は一度語る言葉を止めて一息吐く。

「このとき喝采を送ってきた相手が、私に世界の真実とやらを教えしてくれたんだよ。端的に、ではあったけど」

「すごいなあ、お宅ほんますごいわあ」

依然として喝采を送ってくる相手は私にも僅かに馴染みのある、けど、随分とはしたくない格好をしていた。

白を基調とした色使い。印象からして神社の宮司が着る服の意匠が僅かだけ感じられるものの、肌を晒しすぎている。

まあ、大抵の男からすれば涎を垂らしていそうなくらい婀娜な女ではある。出し惜しみのない豊満な胸がそのいい証拠。

それだけでなく、骨法も肌も自然が生み出せるとは到底思えないくらい美しい。よく見ると限りなく良く見える女だ。

ただ、それよりも遙かに目を引いたのは光を受けて不気味に赤く光る黒髪であり、耳は相手の言葉に過敏に反応していた。

「あなたとは初めて会うけど、まるで古馴染みに挨拶するみたいだね」

「僕の目的は最初から決まっている」

そう言って、前に差し出された両腕が炎に覆い尽くされる。

「火に触れた報いは受けてもらわないとならない。」

そのために僕、アユム、ナオセはこの失われた秘術『超越火術』により開祖、あなたを倒す」

とても穏やかに、平然と言つてのけるその表情を私はあまり目にしたことが無かった。

およそ情念のようなものはなく、ただ信念と化して立っていると悟つて、口許が笑みを形作る。

「ふりかかる火の粉は払おう………型捨無流、開祖。さくら尋常でない勝負をしよう」

その腹立ちをぶつけるように言って通信を切る。切ってから、疑問が首を擡げてくる。

最後まで、どうしてああ微笑んでいられるのか？
きつと僕には一生解らない類のものだ。

「不可解極まりない人だったな」

何はともあれ、これではらくは僕の信頼も保てることだろう。
せめてもの手向けに、僕はあらかじめ用意しておいた花を海へと
投げる。

三代目の髪の色と同じ、亜麻の花を、どうか受け取って欲しいと
思った。

よくよく考えると、ここに来てからは何かと用事が多い。
けど、そんなことよりも、今はゆっくりと眠りたい。

けど、見捨てられるのがイヤだってことは良く判った。

この日、私はクレーデル「サイフとの接触を図った。
なんて言うけど、別にお膳立てをしたりはせず直接顔を合わせ
に行った。

けど、人探しは知己の相手ならいざ知らず、知らぬ相手となると
探し出すのは私には不可能。
なので、

「クレーデルウウウー—————」

所構わず、一定の距離を移動することに名前を叫んで周った。

途中何人かが私の大音声に気絶していたけど、不可抗力。
そうして叫び続けていると微かな苛立ちをこちらに向けて歩いて
くる女がいた。

「ちょっとそこ、朝っぱらからうるさい」

頭の後ろに手を置いてから発せられたその声に私は好感を持った。
ただ、全身が薔薇の花びらで作られたとでもいうのだろうか？薔
薇の香気を全身から漂わせているのは好きになれそうにない。

「オマエがクレーデル「サイフか？」

「そうだけど、名指しっていうことは用があつてのことだよね？」

「オマエはここに何をしにやって来たのかが知りたい？」

「いきなりの直球勝負ね。あたしだからいいけど普通だったら逃げ

るわよ。

服装も怪しいし、おまけに眼を布で覆ってるし……ねえ、ちょっと髪に触ってもいい？」

特に断る理由も無いで進み出ると頭に手を置かれ、優しく撫でられた。

「うわぁサラサラ、癒される」

手の位置はいつの間にか頭から顔に移り「肌も触ってて楽しい」などと言っている。

最後に軽い抱擁までして、唐突に離れてから言う。

「質問の答え。何をしにやって来たかといいますと、お仕事」

とぼけるようにしながらも本当のことを言う。いや、言葉に嘘を含ませていないだけなのかもしれない。

思考を巡らせる私に対し、クレードルは問いを発した。

「ヴァンパイアを狩りに来たって言うても、あんたには分かんないでしょ」

言われたとおり何のことが判らない私は判ることについて訊いた。

「狩人なのか？」

「不本意ながら世界最強の狩人ですよ」

私はその何の気持ちも入っていない世界最強という言葉に面食らった。

「クツ、世界最強とはまた大層な事を打ち上げたものだな」

そう言えばクレードルはそれを気にせずまた自嘲的に笑う。

「本当に世界最強なんだけどね。周りが世界最強つてのを随分大きく見てるせいで生きるのが辛いよ」

「何だ？ヴァンパイアというのは弱いのか？」

「倒し方さえ分かってくればそんなに手こずる相手じゃないから。ただ正面から挑んで勝てるのがあたししかいないってだけ」

「それで、強いのか弱いのかどっちなんだ？」

己を否定したいのか認めさせたいのかどっちなんだと思い重ねて訊けば、突然クレードルの口の中から何かを噛み砕く音がする。匂いからすると甘味らしい。

それからガリガリと乱暴な音を立てて何かを咀嚼して飲み込むと服の中に手を入れ、何かを私に差し出してくる。

「ミルクキャンディー、食べる？」

「いただきます」

受け取って包み紙を剥がして口に入れると舌の上に甘みが広がる。美味しい。

夢中になって舌の上で転がしていると、クレードルも口の中に新しい飴を放り込んでいるのが判った。

「大会にはどういう意図で参加している？」

「えっと……あなたもしかして僧侶とかなんか、そんな感じの人？」

「だったら遠慮したいという心の声が聞こえてきそうだけど、私には何の問題も無い。」

「いいや、侍だ」

「私は侍だからだ。」

「サムライ？ えーっと、『季節名』っていう武人の異名だったっけ？」

「如何にも。その侍だ」

「へえ、あたしがこの大会に参加してるのは暇潰しと、腕試しが目的なんだけど、どうしてそんなこと聞くわけ？」

「オマエが未知の大陸から来た人間だからだ」

「答えるとクレードルは呆れている。」

「そんなことで？ まあ、ここが余所者に敏感なのは知ってたけど、もしかしてヴァンパイア絡みで何かあったのかな？」

「知らん」

あちき自身はそんなこと考えてなかったんだけどよ、そのことを「学んだ」とか言っつて、年上のクセしてあちきにくっついてくる野郎が現れた。

ま、野郎じゃなくて女なんだけど、これがまたえらい別嬪さんてやつで、太陽に当たつてるとキラキラ光る髪と瞳だなんて珍しいものもつてる。黒い衣服に杖もったやつだった。

そいつの名前はシルクリム「メリディエスとかいうらしい。とりあえず、あちきはそいつのおかげで楽が出来るようになった。少し話してみてもすぐに思ったのはこいつは正直者だつてことだった。

あちきを助けた理由が子供だったからとか言うから、子供じゃなきゃ助けねえのか訊いたら「はい、それはもう」とか言いやがる。

でも、嘔吐きじゃないからあちきはこのことが好きになった。シルクリムもあちきが子供のうちは好きだとか言い切るから、なら大人になるまで助けてもらうことにしたんだ。

シルクリムは右腕が無かった。何で無いのか訊くとまたバカ正直に答える。

「不幸が降りかかる時など分からないのに、それが分かった気でいたことへの代償ですよ。ヤナギだつて、不幸なんものはていつの間にか起きていたでしょう？」

言っつてゐることはよく分からねえけど、言いたいことは何となく分かった。

要するに運が無かつたんだろ。

あちきがその一言で片付けると、シルクリムは大笑いしやがった。

しかし、こんなところに居るってことはこいつも落伍者なんだな、

そう思ったら、あちこちぶつたたかれて吹っ飛ばされた。全然何にも見えねえ……なんて速さだよ！

床の上をごろごろと転がされる。

叩かれた時よりもこっちの方がいてえ。

「いつう、くそ」

骨が折れたんじゃないかと思っていいたら、丸めた新聞紙を持ったままのシユエが近づいて来る。

髑ろ者にされてたまるかと立ち上がると、その直後に顔を引っ叩かれた。

右の頬を叩けば続けて左、そしてすぐさま頭をまた叩かれる。

あまりの痛さに勝手に涙が出てきやがって、止まらねえ。

「お前は自分に無理なことでそうでないことの区別すらつかないし、弱いという自覚も無い。自覚が足りない奴っていうのが私は一番嫌いなんだ」

叩かれる。すげえ連続して叩かれるから全身から火が噴出してんかと思つちまう。

白くなった目の前しかねえ、もしかして気でも失ってるのかもしんねえ。

今頃はもう夢の中なんてこともあり得る。

けどなあ！

「あああああああああ！」

負けたくなんかねえんだよ！

頑張れば世界だって救えるって言うてくれた正直者の言葉を、嘘

なんかにできねえ！

熱に浮かされた気分の中で、目だけに力を集中する。

一瞬、シユエの動きが遅くなる。

これなら避けられる。

「っ！」

避けれた！

それに、よく分かんねえけど今のシユエは遅えから動きについている。

手に握られた木刀の感触はまだ残ってる。

なら、まだあちきはやれるんだ！

「っらあ！」

吼えて振るった一撃がどうなったかなんて分からねえ、けど、確かに振った。

そしたら、段々と体に感覚が戻ってくる。

そんでもって途中から白んでた視界が晴れたら、そこには額からダラダラと血を流してるシユエが居た。

やったのか？

シユエに一太刀浴びせたってのか？

「なるほどね、あの師匠にもあの師匠の考えがあったわけか」

「その通りだ」

勇ましい感じの口調とは裏腹の淑とした女の声が自信満々って感じで言った。

驚いて声のした方を向けば、師匠がいた。

「お、おめえいつからそこいやがった！」

「つい先程だ。それよりも、よくやったな」

「へ？あ、ああ」

何なんだよ・・・調子狂うな。

「シユエ。今日のもうここから去れ」

シユエは自分の血で顔が真っ赤になってたが、気にしてねえのかあちきの方を見ることがなくあっさりどっか行っちゃまった。

「ヤナギ」

「お、おうー！」

「オマエにも努力が報われるくらいの才能はあるらしいぞ」

言うことは相変わらずだった。

それでも笑顔で言われると妙な気分になっちゃまう。

何だよ・・・嬉しいじゃねえか。

四十九話 開祖の誘い(上)

あくる日の朝、クレールデル・サイフは未だに「異神の島」と呼ばれる土地で往生していた。

どうしてそんなことになったのか？

その原因は昨夜この島から離れるべく海に向かった際に血で海面を赤く染め上げ、危うくサメの餌になりかけていた怪我人を見つけてしまい、見捨てられずに助けたことにある。

そして、そのそもその原因は、討ち漏らした吸血鬼の下僕を追って訪れた島で開かれるという大会に要らぬ興味を抱いて、仕事が終わったというのに長居したからだろうと独りごちるクレールデルはすぐ脇のベッドで横になっている女を眠い目で見遣る。

滑らかなシルクのような白い髪に無駄なく整った顔が、どんな夢を見ているのかずっと微笑んでいる。

寝顔独特のあどけない感じが妙に愛くるしく、軽い悪戯を試みたいとも思わせるがそうするととてもむずかるだろうなと容易に想像もできるので、結局は起きるまでこのまま待つことにしてクレールデルは椅子に座って歯磨きを始めた。

そうする途中で、昨日起こったことを軽く整理しておくことにする。

まず一番に思ったことは結果的に騙したことになるだろう女侍のこと。

とてもお淑やかな印象のある美女であり、腰辺りまでの長さのある亜麻色の髪に少しはだけた着物から覗く扇情的な肩のえもいわれぬ曲線美と、剣なんて絶対に持ちそうも無い整った指先は同じ女で

もついつい目が追ってしまっていた。

そして盲目故なのか、嘘がまるで通じない相手であった。だから関わりを避けようとしたのだが、思わぬ拾い物が予定を狂わせる結果となってしまっている。

(絶対に嘘の通じない相手を偶然とはいえ騙したあたしってスゴイんじゃない?)

始めにそんなふざけたことを思った後で、狂ってしまった予定をどうするか思案する。

その補助的な事として懐中時計を取り出し、秒針の音を聞き取りながら思考を続ける。

(取り敢えずは怪我人の世話をする。それでもって、島を出る?)

ついこの間、海が急に荒れたことを思い出す。

(海のご機嫌なんてあたしには分かんないし、もつしばらくはここにしようっ)

規則的な音と脳裏を過ぎる記憶、その両方がある瞬間でピタリと重なった。

「決めた」

そう言って、クレードルは今後の予定をしっかりと決めた。

ちょうどその時、怪我人が目を覚ます。驚いた事に、もう起き上がっている。

クレードルがヴァンパイアの他にもしぶとい生き物はいるもんだと感心していると、相手と目が合う。

突然目が合ったクレードルは慌てて歯磨きをやめると今までの行為を無意味にするかのように飴を口の中に放った。

「やあ、おはよう」

怪我人の第一声はそれだった。

本当に何気ない、しかし必要だと思わせる挨拶だった。

「それで、あなたは何者？ 融魔か何かなのかな？」

融魔。クレードルの故郷にはそんなものは存在しなかったが、知ってはいたので同じに扱われるのは不愉快だった。

「あたしはそういったものを狩る側なの。狩られる側じゃない」

「私には酷く半端に見えるよ」

一言一言を無視できない不可解な力を以って言うてくることにクレードルは苛立った。

そして、自身の正体を知られたのかという恐怖がない交ぜになって、声が焦る。

「あなたにはあたしがどう見えるって言いたいのか？」

「狩られる筈の者が狩る者になった。そんな印象だよ」

クレードルは返す言葉が見つからず、ただ目だけで「どうしてそう言えるのか」と問いかけた。

「私も似たようなものだからね。それで、あなたは私を助けてくれたの？」

「うんそう・・・ああ、そうだった・・・」

言われてクレーデルは自身の失態に気付いて目を覆いたなくなった。明らかに危ない橋を渡っているだろう女を助けて匿っているこの状況はまずいことはあっても旨いことはない。

面倒事にすっかり慣れてしまったクレーデルはもう既に、面倒事を避けるための警戒心が磨耗してしまっていたらしい。

自分でいくらか心がけていても所詮は「つもり」かと、自嘲せすにはいられない。

今更見捨ててどうにかなるとは考えない。今まで生きてきて、そんな生易しい厄介事には巻き込まれた試しがないクレーデルはいち早い対処に当たるために目の前の女に訊く。

「ねえ、あなた名前は？」

「さくら≡季節名≡サークス」

（季節名か・・・ならこの人も武人。そう意識してみると、なるほど確かに）

「さくらね。あたしはクレーデル≡サイフ」

「財布？ 変わった姓だね」

「それを言うならあなたの名前も変わってるでしょ」

そう返すとさくらと名乗った女は一瞬眉を動かす。

怒っているのかいないのか分かり難いが、もしかすると怒ったのかもしれない。

「そう。そういえば、助けてもらった礼をまだ言っていなかったね。ありがとう」

口だけでなく気持ちが進められていることが何とも不思議だとクレールは思い、

「律儀なんだ」思ったことをそのまま口にする。

さくらは特に何も言わずに腕を回して体の調子軽くみると、首を捻って何とも不気味な音を鳴らした後で軽く欠伸をする。

クレールはそんなさくらを観察するうちに彼女の鳶色の瞳を見てどこか鳥のような何となく思わされた。

そうして無遠慮に見ていけば視線を向けられる。

まるで何か言えと命じられているように感じたクレールは用意していた言葉を出す。

「さくらは一体なんで・・・もう治ってるけど、怪我なんてしたの？」

「ちょっとした小芝居に付き合っただけだよ」

「あんな大怪我を小芝居なんかで負えるっていうあんたの演じる魂に脱帽だよ」

「それにしても、凄いいいだね。これは、薔薇？」

「そ。あたしの故郷ではありがたいお守りなの。さくらの住んでい
る所ではどうか知らないけど結構な貴重品なんだ」

「じゃあクレールデルはお金持ちっていうことかな？」

「お守りだつて言ったでしょ。それも迷信とかじゃなく効果は本物
だから、頑張つて匂いをつけたんだ」

「そう。それじゃあ私は失礼するよ。やることがあるからね」

そうして動き出す兆候を見せた時には既に、さくらは音も無くク
レーデルの脇を通り過ぎて行く。

さくらはそのまま通り過ぎるつもりだった。その事に対する自信
を問われたのなら「余裕」の一言で片付くと。

だがしかし、クレールデルの手はさくらの服の襟首を難なく掴んで
それを阻んでいた。

「・・・・・・・・」

目を丸くしてクレールデルをまじまじと見つめるさくらに対し、ク
レーデルは不機嫌な顔をして言う。

「治つたつてのは分かるけど、怪我人だつたんだから少し大人しく
してなきや」

「心配してくれるのは結構だけど、怪我をしたことがあるからつて
引き留められる覚えはないよ。

それにしても、驚いたよ」

さくらはクレールデルのことを技術は相当だがそれを上の段階へと

押し上げる力が決定的に不足していると見ていた。

だから気付かれずにこの場を去ることは容易いと思極めたうえで行動した、その筈が、阻まれてしまった。

いかなる修練の為す技なのか、クレーデルの力が急激に上がったのである。

制御していたのかと再考するさくらであったが、それはあり得ないと結論付け、にやりと笑った。

「強かったんだね」

その一言に嫌な気配を感じたクレーデルはさくらから素早く距離を取る。

「怪我が治ったばかりなんだから、荒事も控えなきゃ・・・喧嘩なんてもつての他だからね」

クレーデルの言葉を聞いても、さくらの笑みは消える事がない。それがひたすらに不気味だった。

「少し、鍛錬に付き合ってくれないかな。付き合ってくれるなら、私はここに留まる」

それがさくらならりの配慮なのだろうと受け取ったクレーデルは苦い顔をする。

(本当なら遠慮したいけど、さくらを今自由にさせるのは・・・良くない気がする。

それに、あの回復力を考えて・・・最悪、しばらく動けないようにするしかないかも)

クレーデルはそう考えた。その考えがさくらへの危機感に侵されていることにも気付かずに。

そうして、渋々ながらさくらの願いを聞き入れることになる。

人目に付かないだろう森の中へと入り、適当な場所を見つけるとお互いにここだと決めたのか立ち止まる。

「さくらはすることがあるって言ってたのに、そっちの方はいいの？」

「今更だよ。それに、そう急ぐことでもないからね」

クレーデルは口の中から飴が無くなったのを感じると、それを合図とするようにコートの中からコピシユと呼ばれる短剣を取り出して右の手に持ち、左手には赤い革の手袋を嵌める。

「あたしはさくらの目的とかは知らないし、知ろうとも思わないけど、

今はあたしがあんたを引き留めなきゃいけない気がするから・・・

何か、物騒だし」

「確かに私は戦いを引き起こすし、そうすることしか能が無い人間だけど、こんな風に何もしないうちから止めに入る相手はあなたが初めてだよ、クレーデル」

対するさくらは軽妙に受け答えをするだけで、手には武器らしい武器をもっていない。

ついでに言えば、服や身体に仕込んだ武器はクレーデルに盗られたらしく、今になってさくらは自身が素手だということに気が付き、

辺りをうろつろと見回していた。

それでいて刃物を構えるクレーデルをさくらは「中々に卑怯な相手」と断じて、傍に落ちていた木の棒を拾う。

そして、それを目の前の木へと鋭く当てると、風を切る音を伴って振り切っていた。

遅れて倒れていく木を、クレーデルは呆然と見届けるしかない。

「え？ 木の棒って・・・棒で木を切り倒すって、嘘でしょ！」

「驚くことじゃないよ。窮めればこれくらいはできるようになるのが、人間だよ」

一度そこで言葉を切るとさくらは大きく息を吸う。

周囲の空間が怯えたようにしてぞわりと揺らぎ、クレーデルを恐怖で縛ろうとする。

無論、その程度の威圧で動きが竦むようなことはなかったが、焦りはある。

さくらは既に疾走を開始している。

その速度は十分目で追えるが、それがクレーデルを警戒させる。

急激に加速されれば自分の目が欺かれるという危機感が、焦りを募らせる。

その警戒を見透かしたのか、さくらはクレーデルを中心として周囲を歩き始めた。

そして、何やら木の棒を適当に振っている。

（遊んでるの？）

思わずそう感じるクレーデルは警戒を怠らず、コートの中からリングダガーを一本取り出すとそれをさくらに見せつけるようにする。さくらの注意がそこに向かいかけた瞬間、クレーデルの手からダ

ガーが忽然と消える。

ノーモーションでの投擲。

さくらの目を持ってしてもダガーが自動で飛んで来たようにしか見えないほどの技量を誇るその一投は間合いを完全に侵略し、二の腕に傷を負わせていた。

「面白い技だね」

だが、さくらは恐怖するどころか嬉々として言う。

怖いという気持が無いのかとクレードルは必然的に思わされたが、嬉しさにも狂気のようなものは感じられず、手品を見てただ純粹に喜んでいる子供のようにだった。

狂っているようでいて、正常とも思える矛盾。

それはつまり、始めから在り方が違うということの証明に他ならない。

狂人ではない。

目の前の相手は別物なのだと認識した事でクレードルの中にあつた未知に対する恐怖は消え、視界が一瞬前よりもクリアになった感覚に口の端が上がる。

「さくらみたいな子ってさ、理解できないけど、受け入れられれば怖くないね」

「そう言ってもらえると嬉しい」

二人の距離は変わらず、依然としてさくらはクレードルを中心として歩いていたが、会話の終わりと共にその足を止め、正面から向き合う。

互いに同時に踏み込み、また同時に互いの動きを予期する。

直感か、それとも経験を取るべきか。

その判断を先に下したのはクレーデルになる。

影が本体を忙しなく追っているかのように見える程の素早い動きで左手が突き出される。

開き切ったその手をさくらは間一髪で避ける。

しかし、避けたことにさくらが逆に違和感を感じたところで視界を塞がれ、次の瞬間に体を地面に打ちつけられていた。

顔を驚づかみにされていると気付いたところで自由の利かない目にならなくて第六感が鋭敏に働き危機を知らせる。

それに従ってさくらは顔を？んでいる腕へと攻撃を入れて拘束から抜け出す、目の前には再び、手の影が顔に落ちてくる。

何度避けても、すぐ目の前に赤い魔の手が映り込む。

これまで戦ってきた中で、ここまで視界の自由が利かない戦いをさくらは経験したことはなかった。

どれだけ動いてもまるで本当に目に焼き付いたようにして目前に赤い手が迫ってくる。

反撃しようにもそれができる暇が無いことにさくらの中で焦りが募る。

状況を打開するために大きく距離を取ろうと跳躍するとクレーデルは攻めの手を休め、油断なくさくらの状態を観察している。

さくらは息を切らせてはいなかったが、精神的には同じような状態にする。

そのための連続攻撃の効果のほどを判断していた。

一方、さくらは一呼吸終えた瞬間には平静を取り戻して反撃の手を考えている。

クレーデルの今の攻撃が逃がせばそれまでの使い捨て同然の奇襲であることは既に読めていたが、逆にそれによって常に変化するだろうという予測が相手に攻めさせてはならないということ告げて

いる。

(ならば、攻めさせないこと)

さくらがそう考えれば、当然クレイデルは攻められないことを考えている。

両者共に動かないという選択はしない。

もし動きを止めてしまえば、必要以上に見ることに注意を向けたその瞬間に不意を突かれることを既に理解していた。

しかし、動こうにもお互いに間合いを把握させないがために今は無言で距離を取り合っただけであちこち歩き回るといふ傍からすると間抜けな陣取り合戦という様相を呈していた。

「どうしたの？これじゃ鍛錬にならないよ？」

こうなってしまうと、さすがに挑発の一つでもしなければならなくなる。

だがクレイデルはさくらの挑発を無視する。

これにさくらは無然とした表情を浮かべる。別に彼女とてこんな無駄口を叩く気など本当なら真つ平ごめんなのだから。

(踏み込むべき死が見当たらない。だから死に踏み込んでもらうかと思っただけ)

思惑が外れたことをやや残念に思いながら、何時までも動きがないのが面白くないさくらは鍛錬ではするつもりはなかった手段で攻撃をすることに決める。

「仕方ないな。上手く避けてね」

手に持った木の棒を振るう。

只の棒とは信じられない鋭さを以って周囲の地面を切り抉り、粉塵と共に無数の石を宙へと舞い上げるその太刀筋は、人間からは遙かに遠い存在の業の為せるもの。

だがクレーデルはそれを眺めている余裕などなく、目の前の光景に背筋を凍らせる。

(来る！)

胸裏を警告が過ぎったその刹那、かろうじて見えていたさくらの棒捌きが加速する。

宙を舞っていた石の全てがクレーデルへと向けて打ち出され、襲い掛かってくる。

粉塵を吹き飛ばしながら迫る殺人技の連続を前に対抗する武器を選択する時間はあまりに短い。

可否を問う時間すら惜しまれる。

与えられている猶予はすぐにも尽きるだろう。

クレーデルは咄嗟の判断と己の技量に賭けるのは分が悪いと考える諦めをつけ、

己であることを一時やめる決断する。

「！」

さくらは二度目となる感覚の正体を得た。

迫る石たちを前にもうどうしようもないかと思われた瞬間に、クレーデルから感じる力が再び急激に上がるのが分かった。

紅い双眸が光の尾を引き、それにつられるようにして全身が朧な影を無数に生み出す。

無数の残像が消えた後に残るものは無音。

砕かれた筈の石は音を立てることなく崩れ去っており、まるでこ

の世から突然消えたようにすらさくらには思えた。
その神業を見て、彼女は懐かしいと感じていた。

(これほどの動きは、シルクリム以来かな)

あの日、死を超えて戦った相手のことを思い出し、彼女は微笑む。

「ああ、やっぱり戦いは楽しいね」

それが自分にかけられた言葉ではないと感じたクレードルは沈黙を守って、己に戻る。

紅くなっていた双眸は黒へと戻り、全身にあった威圧感も霧散する。

「あんたあたしを殺す気？ おかげで力使っちゃったじゃないの」

「悪いことをしたみたいだね。ごめんよ。鍛錬はもうやめにして、これからお互いについて、ゆっくり話せないかな？」

「厄介ごとに巻き込むつもりなら遠慮したいんですけど」

「遠慮しなくてもいいよ」

「するに決まってるでしょ！」

「ねえクレードル。一緒に世界を守ってみない？」

「いきなり過ぎると思わないそれ？」

「味方が殆どいなくなってるね。でも、あなたなら私と共に来れると

「いう確信を得た」

「ちょっと、話聞いている？」

「クレীদের」

「な、何？」

「事情を話すから協力してくれないかな？」

「いや、それなら単に協力するほうが楽でいいんだけど」

「ありがとう」

「え？いや、今のはどっちが気楽かって話であつて了承したとかそういうんじゃないの」

「一生付きまとうよ？」

穏やかな微笑と共に静かに告げられた言葉に、今まではまだ平和だった空気が凍る。

クレীদেরの顔を冷や汗が伝っていくなかで、彼女は混乱の極致に置かれていた。

(ええ・・・・・・付きまとうって・・・ええ？)

想像すると恐怖が軍勢となって襲い掛かる。

如何なる力にも打破できぬ恐怖にクレীদেরは頭を悩ませることで誤魔化す。

「あたしは予定が狂わされるのは好きじゃないんだけど」

「予定は変更されるものだよ」

「変更したくない」

「引き止めて私の予定を変更したのはあなただ。なら少しくらい乗っけてくれてもいい」

「・・・・・・・・分かったわ、じゃあ事情は聞いてあげる」

「聞いてもらえれば、クレードルはきつと力を貸してくれるよ」

そうしてさくらは自身の目的をクレードルへと語り始めた。

五十話 開祖の誘い（下）

人気の無い道を並び立って歩きながら、さくらは依然として手に棒を持ち、それを唸らせながら言葉を発する。

「目的は、歴史が狂うのを阻むこと。そのために歴史が狂う場所であるこの島をあるべき場所へと還すこと。方法は、この世界を刺激する戦いという手段を取る。だから私はこの島で行われる大会に参加して勝ち残る。そうして戦いの影響を傍で見守り、時にはこちらから干渉していつてこの島を元の場所へと戻すための道を作るんだよ」

詳細をぼかした言葉にクレードルは疑問の声を上げようとして、やめる。

（今の話でやることはだいたい分かったし、不用意に頭の中に情報を入れるのはよそう。それに、目的はともかく、手段としては指示に従えばこなせるものだし、今聞いた限りでは別段、私に都合が悪いことはないだし）

しかし、疑問はやはり残る。目的の達成において必ず現れると直感した敵の存在についてさくらが何も触れないことの薄気味の悪さを、クレードルは現に全身で感じていた。

しかしまた、と改めて考えたクレードルは結局質問をする。

「それで、敵はどんな奴なの？」

その質問という行為に対するさくらの感情の動きは無い。

少なくとも、別に都合の悪いことを隠している様子ではないことにクレーデルは人知れず安堵する。

「敵は大会で武を競う相手全員だよ」

しかしそれはクレーデルの欲した回答ではなかった。

聞いた瞬間に、やはり何か隠しているのではないかと、すぐにでもそれを暴き立てようとする言葉が喉まで出掛かったが、そこを堪えて、言い直す。

「あんな大怪我まで負って芝居する必要があつた敵は何なのかって訊いてんの」

そう訊けば、さくらは少しだけ感心した様子を見せる。

それが馬鹿にしているのかどうか判然としないクレーデルは目つきを険しくつつも、コートからミルクキャンディーを取り出し、包み紙を剥がしてそれを口に含むことで落ち着きを取り戻す。

ふと、さくらはそれらのことを行う僅かな時が、ふいに長いもののように感じていた。

そのふと感じ取ったものの精査に時間をかけていると、それを黙秘していると受け取ったクレーデルが言葉を発する。

「答える気はないってこと？」

返答如何によっては本気で逃げるつもりだと理解しているさくらはしかし、その心を変化させることはなかった。

「今回は敵のことは気にしなくていい。むしろ、気にしていると時間無駄になる」

「………気にしなくてもいい理由は何？」

「芝居を打った相手がその敵でもあるからだよ。その人物が私を倒すっていう役をこなすことで、敵の注意はしばらくこちらに向かないようになってる」

「あっそ。それであたしは大会に参加することになっちゃってるんだよね？」

これにさくらは当たり前という顔をして頷いてみせる。それにクレールは弱ったなという顔をしつつ言う。

「この世界は戦いで刺激されるって言うってたけど、それってこの世界全体に適用されてるルールみたいなものの？」

真偽に関係なく、興味を引かれた言葉について尋ねれば、さくらは首肯する。

「根拠は？あたしは理想やら妄想には付き合わない。今はあんたが嘘言ってるようには思えないからこうして付き合ってるけど、それがあんただけの現実じゃないって信じられるものがあたしには決定的に欠けてる。だからせめて納得の行く言葉が欲しい」

「賢明だね」さくらは呼吸の中に微かな笑いを含ませる。「クレールは歴史に奇妙な空白があることは知ってるのかな？」

「それくらい知ってるわよ。戦争がある度に色々な技術が一気に開発されて時代が飛躍していくのをそう言ってるんでしょ？確か、魔法とかが発展すると「本当に」それが起きるとか言う話も聞くけど、元からそんな歴史はなかったってことになって、でも技術だけは

いつの間にか普及してるから……きつと、多分、あったことになってて」

言い募ろうとするクレールデルではあったが、その言葉を発する事が段々とできなくなり、代わりに、疑問の声が届りてに上がる。

そこへ、やがてはこうして言葉に詰まる事を予期していたさくらは言葉を被せる。

「不思議だよね。でもそうやって過去を知らないことでこの世界は成り立っている。新たな命という白紙の紙がなくならない限り、この世界は今あるものは元々あったものだと思込んで、その紙の所有者もそれを信じることでこの世界は成り立っているんだよ」

「狂ってる。どうしてあたしは、どうして誰も疑問に思わないの？」

「どうやって疑問として明示すればいいと思う？だって、あまりに暗示的なんだから、何かおかしくないかなと思っても、そこで考えることをやめないといけない。そうじゃないといけないって、きつと本能で知ってるんだよ」

「もしかして神の摂理？ でももし、みんなが疑問に感じたら？」

「記録する為の資料を残し、古い紙は全部焼却して、新しい紙を大量に作り出すだろうね」

「まさか、それって、今いる人間皆殺しにしてまた新しい人間を同じ数だけ生み出すってことを言ってるの？ いくらなんでもそんなこと、できるわけがない」

「私もそう思いたいけど……きつと過去に一度か二度は行われている筈だよ」

確証が無い。それは信じられないと言うにはとても便利なものだったが、クレーデルはそれを口にするのを躊躇った。

（可能性はあった。ということは、さくらはその可能性を示す何かを知ってる。そこに嘘は無いと私自身が判定してる）

「一体誰がそれをしたっていうの？ちよつと待って。少なくともあたしの故郷はそうはなっていないはずだけど……でも、そう大規模じゃないとすれば、その役目をあたしの所で果たしていたのは、吸血鬼っていうことになる。でもさくら、あんたのところには吸血鬼はいないはずだから、別の何かがいるっていう、そういうことになる」

知恵や力を持ち過ぎた人間は昔から吸血鬼に狙われるというクレーデルの中の常識が新しく入ってきた情報と繋がることで一つの想像となっていく。

一方で、その想像を実行しているという相手を知るさくらは妖気のある笑みを浮かべる。

「そうだね。それがクレーデルが聞きたがっていた私の敵になる。過去には敵を打倒しようという動きもあったけど、いまいち正体が分からないから、それをするのは今はやめてる。やることはこれから起こると分かっていることを食い止めていくということだけだよ。だから敵の正体については深く考えない方向で行く。それに邪魔してくるのは敵だから、戦っていればいずれ尻尾を掴めるよ」

真相というものは聞くものではなく見るものだと思えば最後に付け加えられたクレーデルはその人智では及びもつかない説得力により内心

において無理に首を縦に振らされる。

「随分とスケールの大きな敵だけど、あんたは敵足りえる存在なの？」

想像力ではもはや推し量れない敵の力の大きさを前にクレイデルは肝要なことを訊く。

問いに対してさくらはしばらく答えずに、ただ空を見上げていた。

「私は敵になれるかもしれないっていうだけ。彼らにとっての敵は別にいる」

「それは誰なの？その相手とは接触した？今の関係はどうなってるの？」

「そう矢継ぎ早に質問しないで。相手は慕守と呼ばれている。簡単に言うと世界の守護者という使命を受けた者だけど………会ったのはこれまでに一度だけで、関係としては向こうは私のことをよく知っていて、私は向こうのことはよく、ううん。何も知らない」

「これ重要なんだけど、その守護者って今この島に来てるの？」

「確かに来ているはずだよ。ただ、私はあれが好きじゃない。あれは命を捨てるから。命を捨てるなんてことは、あってはならないのに」

強い感情が滲み出てくるその言葉にクレイデルは共感を覚えることとはないにしろ、さくらのことを一つ知ることができた気がした。

（犠牲を出さないと絶対を考えず、けれど無駄な犠牲は決して出

そうとはしない人。それでいて犠牲を強いることをしない人)

少なくともそういう想像はできた。

そして、それが当たらずといえども遠からずというところであることも。

それはさくらという人間が、全く支配的ではないからそう思えるというだけなのだ。

「守護者っていうのは無駄に犠牲を出すような奴なの？」

「あれは私たちの住んでいる場所を守るのが役目だから住人のことは歯牙にもかけない。だから今後の行く末によっては私の敵になる可能性もある」

「参考程度に聞きたいんだけど、そいつはどのくらい強いのか？」

「あらゆる世界の喪失の象徴だから、恐らくは秒増しで強くなっていくことだろうし、正確には分からないけど、今は私よりも少し強いくらいだと思いますよ」

「それは結構強いってことね」

「そうだね。結構強いよ」

言葉の終わりと共に手に握られていた棒が折れないのが不思議なほどに軋むのを聞いたクレードルの顔に苦笑が貼り付いた。

「さくらの実力を低く見てるって訳じゃないからさ」

「いや、別にクレードルの物言いに引つ掛かることはないよ。ただ、

思い返せばやっぱりあれは好きじゃないと思ってね」

確かに表情にも雰囲気にも怒りは無かった。ただ、クレードルとしてはああ言わざるを得なかったのだと、そう思うとどうにもやるせなくなり、やれやれと頭を振る。

「あつそ。ところで、大会に出るんだったよね？」

さくらはこれに首肯する。

「クレードルを入れてちょうどチームが組める。だから、これからチームを組んだっていうことを言いふらそうと思うんだ」

「はあ？ 悪目立ちしたら芝居打った意味とか無くなるとは思わないの。一応訊くけど、考えあつてのことだよな？」

「心得ているよ。さくらっていう名前を敵は知らないし、軽く変装すれば誤魔化せる」

「ならいいけど、予選が荒れるでしょ？」

「荒れた方がいい。だって、チームを早めに組めたとしても、三ヶ月という期間が終わるまでの間に他の参加者によつて分解しないとは限らないよ。つまり、早く組めば安全だって甘く考えている参加者をそうやってまず落とす。」

私が行きたいのはね、クレードル。まずはチームを早いうちに組ませるようにして、その後で今言ったことを私が教えるためなんだよ」

「何、嫌がらせ？」

「そうでもしないと弱者が本選に紛れ込むかもしれない。強者との戦いを望んでやまない私としては、そんなのは我慢がならないだけだよ」

「そんなに強い奴と戦いたいのか？」

「そうなる。けど、強さを見てみたいとも思っているよ。だって、今の私は勝負がしたい訳じゃないから」

「どういふことそれ？」

「心の弱い者がいかに武に優れていても、苛立ちを覚えるだけだからね。私は、心の強い者の武を見たいんだよ。うっん、最も強くなる瞬間を見てみたいのかもね」

「それがさくら、あなたの人生の目標だったりするの？」

「そうかもね。そうなんだ。一見弱そうな心でも、強さを見せる時は必ずある。それをこの目で見て、その力を武という形で受ける・・・至高の瞬間だよ。どんなに稚拙でも良いんだ。そこに気が籠っていたら、満足できる」

語るうちに言葉に熱が籠ってきているのを感じていたクレイデルは、そこから感じ取れる気に対する寒心を堪えた。

（やっぱり、危ない気がする）

さくらの矛先がいずれ自分に向くのかもしれないと思うとクレイデルは憂鬱になる。

こっぴついう心情に限り、生まれのせいか日の光が不幸のエネルギーに思えるクレイデルはとうとう溜め息を吐いた。

二人が森から出ると、大仰に手を振りながら男が一人やって来る。とても人懐こい笑みを浮かべながらも、どこか締まりのある表情と人として大きく感じられる雰囲気。鍛え上げられた肉体は年齢的に壮年とは思わせない若々しさが感じられた。

半白となった髪を撫で付けつつ、男はクレイデルを視界に入れるとその手を取って力強く握る。

「やあ初めまして。俺はカイル」サークス。君が五人目の仲間なんだろう？女の子みたいだから気が引けるけど、まあよろしく」

澁刺とした声と態度に気を取られること数秒。クレイデルは握手を解いてカイルを指す。

「あたしはクレイデル」サイフって言います。サークスってことは……この人、さくらのお父さん？」

『違うよ。どうしてそう思うのかな？』

訊けば、二人の声が重なって返ってくる。

これにクレイデルは照れるのを隠すように頬に手を当て言う。

「違った？ ええと、あたしの父親も……そのくらいの歳だからさ。自然な発想よ」

「そうなんだ」

そう言って、さくらはクレイデルから視線を外してカイルを見る。

「あの子はどうしてる？」

「シユエはこの間の子とまた喧嘩して、怪我したみたいだね。治療はしておいた」

「そう。それで、ノイルは何してるの？」

「彼女は猫みたいにフラツとどこかに行っただけ。探そうにも姿を変えてるだろうから、向こうが現れるのを待つだけだよ」

そうして会話をする中で、視線だけで何かを語り合っていることをクレードルは悟ったが、それを問い質すことは至難の業だろうと早々に諦める。

「分かった。五人揃ったことだし、予選終了までの時間も大分ある。それに最後の一人は期待していたよりもずつと頼もしいようだし、もしかすると私たちだけで十分かもしれないと思えてきたよ」

「その線は望み薄だよ」

さくらの言葉にカイルはきっぱりと言い放つ。その表情には年相応の厳肅さが宿る。

「三代目の出方はともかくとして、お姫様は確実に敵に回る。あの娘が十年もの歳月を、さくらを倒すために割っていたのは知ってるでしょ？ 避けることが出来ない以上は」彼の視線に真剣味が増す。
「俺たちだけじゃ厳しい」

「やってみないと分からないよ」

「さくらならそう言うと思ったよ。でも分かって欲しいんだ……」

・・・人の可能性には限界があるってことを」

その言い方は大人が子供に言い聞かせるそれで、だからだろう。さくらの表情には明白に分かる困惑がありありと表れている。

「『人間はそんなもの』だって、その言葉を・・・私はどうしても受け入れられない。それをカイルはよく知ってるはずだよ」

「だから言ったんだ。さくらはいつも人間として進む先を求めて、窮めようとしてきたけど、融魔としての力が強くなってきたここ数年のうちには君は変わった。今のさくらは人間を窮めようとするよりも、人間であることに拘ってる。だから在り方まで他人に似せてきているし、でもそれはさくらの、いや俺の思う君の人を窮めることは違うと思う」

「・・・私が人に惑わされてるって、カイルはそう思ってるの？」

言い終えたその時、さくらの気配が死ぬ。

情動の全てを絶ったそれは無我の境地を思わせたが、クレードルは否と直感する。

（鎮めた訳じゃない。到った訳でもない。何もかもが、生じていない？）

死者よりも死者らしいさくらの気配にクレードルの武が答えを得かけた頃にさくらはそのことに気が付いたのか気配を生じさせると無表情に言う。

「これだとあまり見えそうにもないね。カイル。私は確かに変わってきているけど、別に己を見失ってもいなければ、焦っていることもない。ただ己の可能性を信じてるだけ」

「だからそれが、危ないって俺は言いたいんだ。さくら、一人の間は全ての人間の可能性なんて持つてないんだ」

クレーデルはその場の空気に置いておかれたことを自覚しながらもさくらを横目で見る。

その表情は無表情から一転して、弱ったように眉根を寄せている。

そんな表情もするのかと彼女が思っていると、さくらは嘆息する。

「ふふっ、もう言い返す気が失せた。分かってるよ。三代目には事の次第を伝えて、エスとは決着を着ける。けどね、あの子とは一対一でやらせてもらうよ」

それをカイルとの会話の最後として、さくらは背を向けて歩き出す。

「私はただ、己を斬ることなく、空を飛びたいと夢想し、剣を振るう。相對する敵が変わっても、そう。この先の歴史というものがどうなるうともそれは変わらない」

誰にでもなく呟かれたその言葉を聞き取ったクレーデルは、それからの道中、その声に含まれた感情について考えを巡らせることになる。

聞き間違いでないのなら、さくらは最後にこう言っていた。

「だから私は求めるんだよ、私を斬れる強者を」

五十一話 人に教えて己に問う

青痣だらけになつたヤナギを治療し終えた私は、治療する間にうるさいので無視し続けていたヤナギの言葉にしばらく考えてから言う。

「大きな課題、目標に目を向けることは重要ではあるが、だからといって小さな積み重ねの意味を失わせてはならない。オマエは自分の目標と今やっている積み重ねとの結果を知らず知らずに比べて評価し、その効率の悪さに気を取られてしまつから積み重ねに意味を見出せずにいる。しかし、積み重ねなければ、目的地へと向かわなければ永久に辿り着くことはできない。まあ、より良い方法を探すことが悪いとは言わぬが、そういうことはやってみてから考える事だ。何より、拙者の教え方に文句をつけるのはやめる」

「要するに千里の道も一歩からつてことだろ？ それになあ文句を言ってるんじゃないやねってんだよ！ おめえがあちきをどう鍛えたのか知りてえって言うてんだ！ 何であちきはある時にシユエに一太刀浴びせることができたんだよ！！」

反復される言葉は大音声として叩きつけられる。

周囲にあるものが震えてビリビリと小うるさい。大元の声はとにかく五月蠅い。

眉間に皺が寄らないように手で表情を保ちながら私は答えた。

「今それを知ることの意味はあるまい」内心をそのまま言う。「だが、感じたはずだ。己が強くなっている実感を」

「そりゃあ、まあ、そうだけど……」

怒ろうにも頬が緩んでいるのか声に怒りの込められない怒れない様子のヤナギ。

「積み重ねていけば、いずれ気付く。その時が来たのならば、オマエは極意を？むだろう」

「じゃあなんだよ？ おめえはあちきの極意を知ってるのかよ？」

感情を隠さない言葉に可笑しさから笑うけど、私はそんなこと知らない。

「知らん。ただ、拙者とオマエの極意は全くの逆のようだと、そう思うだけだ」

「？ ならおめえ……師匠の極意って何だよ？」

「手掛かりはもう十分だろう。後はオマエ次第だ」

「ちえ、そこまで言うなら」

そうして質問を取り下げると正眼に構え、続けて木刀をつまらなさに振るうのだった。

その一振りの留めに感じた手首の強さに僅かばかりの嬉しさを覚えて頬が緩む。

「ヤナギ」

「おう」

「そろそろ次の修行法を加えようと思う」

「おう。何だよ？」

「常に左の手に木刀を持って」

「それだけかよ？　もしかして、飯食う時もそうなのか？」

「だったら嫌だと無言のうちに語りかけてくる様に私は首を横に振ってみせる。」

「いや、そこまでする必要は無い。ただ、なるべくそうしろ」

「そういやおめえも左手に武器持ってたけど、いいことあんのかよ？」

「老化が遅くなると拙者の師は言っていた」

「ああ、あの姉ちゃんか。なるほどねえ、そりゃあいいやって・・・
・・・それだけかよ！」

「そんなことよりも、足運びを気にし過ぎて姿勢が崩れているぞ。
もっと上半身に意識を向ける、姿勢を正すのだ」

構えと素振りの稽古は欠かさずに、且つ、体に今もなお習得させているから良いけど、足捌きが・・・・・・いざ動くとなると途端にそれも崩れてしまう。

「なこと言っても、足の位置がそろわねえからふらつくんだろ？」

「違う。そう考えて足元を見ようとすると自然と前倒しになってふらつくのだ。さっき言ったように上半身を意識して姿勢を正せ。さすれば崩れぬ」

「お？ 本当だ。ふらつかねえ」

成功したことへの嬉しさが声に多分に交じっている。それはあまり聞かない声色で、ああ嬉しそうだなと、私自身も少しだけそうした感情を持たせられる。

「全く、身のこなしは悪くないかと思っていたのだが、足運び一つでこうなるとはな……ガキだというのに妙な癖を身に付けたか」

「うるせええ！ そう言っておめえはあちきに教えた足運びなんか一つもしてねえだろう！」

「拙者は盲目故、不動にて立ち合うようにしているだけだ。しかし、だからといって足捌きの一つも体得していないという訳ではないぞ」

「じゃあ見せるとか言つつもりはねえけど、師匠はそれで勝ち続けられるのかよ？」

その言葉が心に引つ掛かるのは何故だろう。

気付けば私は既に左手に持った木刀を持ち替え、ヤナギの周囲を切り抉っていた。

「勝てぬと思うか？」

私は私の行いに後れて言葉を発する。

ヤナギは自分の爪先、その一寸先で行われた破壊に身を竦めながら、それでも私のことをまるで怯まぬ強い瞳で見ている。

見られている。それがはつきりと分かる視線に込められた感情は何なのか？

そうだ。この違い、違和感には何度か覚えがある。

気に入らない、というほどでもない。

強いて表すなら苦手な、あまり私が経験したことのない感情だった。

もしかすれば全くの未知のものかもしれない。

貪欲に、しかし静かで、まるで雨を待つ砂漠……そう、まさに砂漠だ。

かつて『心眼』を強化する為に渡った水を貪欲に吸い続ける不毛の大地。

ヤナギはそれに近い渴きを宿している。

そして、私の肌にそれを訴えている。

危ない。

コイツは私にとって危ない心を持っている。

私が持たないからこそ抱くこの感情、危機感は思い過ごしなんかじゃない。

在り方と、恐らくはあるだろう才覚が、私の意識を無理矢理内側に吸い込んでまで危険を訴える。

魂の危機を感知させる。

だから何？

知ったことじゃない。

魂で勝負が決まるなら剣など持たない。

剣術も、そもそも武などという力も必要としない。

けど、そんなものは世界ではない。

無明の中にある私でもそれは迷いなく断ずることができる。

より強い力を得た者こそが勝者となる。

そんな私自身の信じるものへの揺らぎの無さを確かめっていると、こっちの心の推移を見計らったようにしてヤナギが口の端を持ち上げたのが判った。

「力を振るう時には振るうってか？まあ、あちきは怪我してねえってことは、それは正しいってことなのかもしんねえな」

「何が言いたい？」

「師匠は力加減がちゃんと出来てるから今のは暴力じゃなかったって、あちきなりに納得したんだよ」

ヤナギはそれなりに考えているらしい。

そういえば、このくらいの頃の私は二代目とどんなやりとりをしていただろう。

そう、丁度私も今のヤナギと同じ修行に取り組み始めて、教えられたのだ。

刀は人を斬ることはしない。

刀を握って振るうのが私なら、斬ったのは間違いなく私で、

それが秋ちゃんなら、斬ったのは秋ちゃんになる。

生と死は一体なの。いい？

殺すは生かす。生かすは殺す。そこに至ってしまうと善と悪は剥がれ落ちる。

そして、戦い。これが時の争奪の縮図になる。

ただ、見出せないのは命の価値、命の本質。

とても遠くて、とても近い死のように、とても必要で、不要にもなる命。

過去が積もり、平等っていう敷居が高くなる度に、過去の偉人が未来の多くの生者の意味を喪失させる。そんな世において、命の数は増えていく。

命ってなんなんだろうね？

さてね。そんなの知ったことじゃないわ。

私はただ、フォルティスと戦う二代目の剣に宿る何か、言うなれば人殺しの技を美しいと感じて、魅せられただけの人間に過ぎないのだから。

そんな私の思案を他所に、ヤナギはわざとらしくヘラヘラ笑って言う。

「師匠が強えのは改めて分かったけどよ、単にそれだけってんじゃ、今やってる大会は勝ち残れないかもしんねえぞ」

「ほう、大会のことは知っていたのか」

「まあ、おめえが話してんのを聞いてたからな」

この答えを聞いて、まあそんなところだろうと思っていると、ヤナギは床に落ちていた紙を拾い上げて読む動作をする。

「ところでこの新聞、情報源としちゃかなり使える。今ここで開かれてる大会はこの恒例行事みてえなものらしい。それと、今回の

参加者に関する情報も結構載ってるみてえだ」

「となると、それをシュエが持っていたのは道理という訳か・・・」

私としては全く頼れない情報源だったので思考の余地が無かったけど、今はそれができる状態にある。このままヤナギから情報を聞き出して役に立ちそうな奴がいれば会いに行ってみるのもいいだろう。

どうにもこの大会、座したままでどうにかなるものでもなさそうだしね。

「ヤナギ、参加者の中で腕が立つと評されている者の情報を読み上げてくれ」

「ん？ああ、でもその前に余計なことを言っとく。師匠の名前がどこにもねえぞ・・・情報源としちゃこの新聞の精度は高えだろうし、だからこの情報に信頼を預けるって参加者は多いはず・・・だからここから省かれるってことはそのまま師匠の情報としての価値を低くするってことになるんじゃないか？」

「要らぬ心配だ。まだ最初の一ヶ月も経過していないのだぞ？つまり、まだまだ序盤、始まったばかりだ。もしも今のこの状況、この段階での情報を真に重要と受け取るのなら、それは軽拳妄動というものだろう」

「言われてみりゃそれもそうか」と言いつつもヤナギは何かを懸念している様子。

「何か気にかかることでもあるのか？」

試しに訊いてみると、何でもないと言い切られた。

その言葉に、嘘は既に無い。

コイツ、意外な所で？みどころがないな。

それを思い私が訝るようにして見るのを敢えて無視して、ヤナギは情報を読み上げる。

「まずは天川恵吾。天气流と呼ばれる霊術の流れを汲む奇剣の七代目継承者。影読みと称される技を極意とする。昼間、影あるところでは無敵と噂されるが、影なきところでは技が鈍る、だってよ。

お次は一如「R」ロドブロク。竜殺しの戦士を祖先神として奉る一族の末裔。

超一流の使い手にして『蛇剣』と呼ばれる妖刀の使い手として怖れられる。備考………ワイルドギース？なあ？ワイルドギースってなんだ？」

「………傭兵のことだろう。つまりは金次第では味方に引き入れるのは容易いという事だ。それで、目ぼしいのはその者達のみなのか？」

「のみだな。確かに師匠の言う通り、今はこんくらいなんだろうさ」

「しかし、思いのほか選ぶのが早かったな」

「シユエの野郎がご丁寧に書き込みしてやがったのさ。気に喰わねえけど確実だろう？」

「また思いのほか、と言うしかないな。嫌いな相手の言葉を信じるような真似をオマエがするなんて」

「あちきの先生みたいな奴が異教の教えだつて言つた後で教えてくれたんだよ。過去を追うな、未来を願うな。過去は過ぎ去つたものであり、未来は未だ到っていない。現在の状況をそれぞれによく観察し、明らかに見よ。今為すべきことを努力して為せつてな。要するにシユエが嫌いだからつて、そいつの能力の程を一応は知つてる以上、使える情報をシユエがどうたらとか言つて無為にするようじや正しい判断とは言えねえつてことさ」

「なるほど、オマエの好き嫌いはそういう風にしてなっているのか。確認しておくが、お前は何かを信仰しているのか？」

「うんにゃ。何も信仰してねえけど、いつかはそういうのに負けねえ自分の足場を持てたらつて、そう思つてる。そういうおめえは何か信じてんのか？」

「無いな。故にオマエの先生とやらから言わせれば、私は理性の無い獣といったところだろう。しかしまた、拙者にも守る掟はある。強いて言つならそれが拙者の理性なのだろう。で、急に思い出したのだが、オマエに型捨無流の禁じ手について話しておこう」

命題として「空」、勝つ為の最善を尽くすならいかなる手段も問わない型捨無流の剣には何故か一手だけ禁じられているものがある。私自身口伝のみの教えだったため未だにその本質には到っておらず、それどころか危うく忘れかけたこともある。そんなものだから、忘れぬうちに伝えておくことにした。

「脛斬り。この一手だけは型捨無流の禁じ手とされている」

野太刀を振るう剣術であるにも拘わらずに、だ。

野太刀を得物とするのなら確実に有効な一手であるはずなのに。

「それだけかよ？」

「それだけだな。それと、開祖の遺した教えを一つ、オマエに授けておこうと思う。もっとも、こうした教えを理解したところで、それは各々の理解であって開祖の剣に近づくことはあっても同じになることはない、始めに言っておく」

「何だよ？それだと教えることが二つじゃねえか」

「とにかく教える。これは気を殺されぬようにするためのもの。いいな？」

「おう」

「安全だからといって、今生きているという危険を忘れてはならない。生きるからこそ死ぬのだから、そのことをゆめゆめ忘れてはならない。それは不覚油断の到りなり」

「要は気を抜くなってことだろ？なんでそんな物騒な言い回しすんだよ？」

「拙者にそれを聞くな。だが、オマエの言う通りだ。気は抜くな。気を抜けば時に吞まれ、時に気付かぬ。それが死合いともなれば、」

「気を殺され、そのままバツサリ、だろ？」

「そのとおりだ」

「でもそれは負けなない為の教えだろ？ 勝つ為のやつを教えてくださいよ！」

なるほど・・・・・・・・ね。これでコイツの志向の輪郭は見えたかな？

「何に負けぬ為の教えか判って言っているのか？」

「相手だろ？」

「未熟」

「何い?!」

「相手に真に勝つ為の教えなどない。あるとすればそれはただ殺すためのものだ。死合いにおいて相手を殺すことは、開祖からすれば糞勝ち、と思われるものだったらしい。ただ、この辺りは二代目がそうしたような吐露を聞いたというだけのことらしいが」

正直なところ、訳が判らない。殺せば勝ちだろうに。

生きる者こそが勝者なのよ。死人は敗者だ。だから殺す。殺す殺す殺す。

殺すことは勝利。それを是とする剣の善なのに、一体、何を思っ
てそんなことを言ったのか？ そう思いながらも教えるのは私が師で
あるからだ。師は弟子に己の授かった技を正しく教える。あの二代
目も結局は私に型捨無流 殺人剣 を教えたように。

「開祖つて、本当に強くなりたかったんだな。なんか、やっぱ、あ
ちきの思ったとおりだ」

耳に入った言葉が一瞬で頭の中を空にする。

ヤナギは何か判ったようにして得意げになっている。

何が判ったの？

それが私にはさっぱり判らない。

「ヤナギ。一つ訊いてもよいか？」

「何だよ？」

「オマエは型捨無流を何だと思っている？」

「まだ分かんねえよそんなこと。ただ、おめえが師匠ならって、そう思ったら強くなれる気がただけだよ」

「またもや放たれる意外な言葉に私は地に根を張ったような様となる。」

「………何？」

「初めて会ったときに言ってたことがあっただろ。あれ聞いたときに、そう思っただよ」

「何故そう思っただ？」

「それに関しちゃ言葉じゃ言えねえ………。だってよ、言葉よりも先に覚えたことを言葉にしなきゃなんねえんだぜ？ そんな簡単にはできねえよ」

「そうか。ならば、その答えを剣で探してみるといい」

「剣で？ 言葉じゃねえの？」

「オマエが拙者に何かを感じ、それに通じるものが剣であるのなら、その想いは言葉ではなく、剣に込める。もし、オマエの剣にその想いが込められたなら、拙者がそれを剣で受けよう。そのときは……」

そのとき私は、どうするのだろうか？

そう思った瞬間に出掛かった言葉が頭の中からすっぽりと抜け落ちる。

そのことに私は呆然としていた。

そのせいで、ヤナギに小突かれて気が付くという失態を犯していた。

「!」

「うおっ！ 何だよ！ そんな驚くなよ!!」

「ああ、驚いたのだから仕方ないだろう。それで、オマエまで驚くのはどうしてだ？」

「そりゃあ、師匠はいつも物静かそんな雰囲気してるから？ だよな？」

「だから拙者に聞くな」

ふと、時間が気になったので体内時計で時刻を計れば、昼過ぎといたところか。

そういえば、アユムに命じられたことを片付けないと。

「ヤナギ、『季節名』を持ってついてこい。少し外に出るぞ」

「稽古はどうすんだ？今日はまだ全然してねえだろ」

「体を動かすばかりが稽古ではなし、それに今日から始めると教えたことがあるだろう？それをするだけでも稽古にはなる」

「そうかい」

納得が行ったらしいヤナギは太刀懸けから『季節名』を取るとそれを体に括り付け、木刀を左手に持った状態で私の前へと戻ってくる。

「では行くぞ」

「どっくに？」

「じゃねっつべの笛の音がするとっくに」

五十二話 エスタシア

ジジジ、ジジジとノイズを立てながら目前で映像が流れていく。

この色の無いモノクロの映像が、わたしにはかえってありがたい。

『本当にここ数年の大会は実況泣かせですよねえ、見てからそれを口にして伝える間にも次々と展開が……。本当に目まぐるしく変わりますからついて行けず、そのままに試合が終了なんてことも起こりかねないくらいです』

『でもそれなら試合の流れを読んで先んじて言ってみたらどうですか？』

『そんな離れ業をやったのけたらそれこそ大変なことになりますよ』
『でも、あなたがここ数年に入ってから毎年実況を続けている理由ってそれと近いような気がするんです よね。あの『そろそろ決着ですよ』の一言は毎回緊迫した試合の空気に何とも熱く震えるものを起こさせてくれますよ』

『それは単に試合の雰囲気が無人の山中のように静けさに満ちてしまっただけ、そうでないときは別でしょう。そろそろ決着ですよ』

『おっと、では決着のあとには私の見識の及びます限りで解説をさせていただきますよ』

そうしたやり取りの終わりと共に試合の場において凄まじい剣戟を繰り広げていた二人が間合いを大きく離す。どうやら解説役の人の言葉の通り、実況役の人は試合の流れを正確に読み取っているみたいだ。

『解説として失格だとは思いますが、これまでの試合の決め手となっっているあの自在に曲がる長刀、構えを一通り見てみたところ

でさっぱり原理が判りません。あれには何の神秘もないはずなんです。それならば異様にしなりやすい鋼を使ったものはずだと思いますが、それではまともに剣を打ち合わせることは難しく、またそれらしい現象も見受けられません」

「神秘が無いというのは、魔術的な要素が皆無というだけであって、人の業という神秘の可能性は捨て切れませんか？」

「幾らなんでもあの不思議剣にそれは無いでしょう。もしそれが可能だとするとよっぽど特殊な金属を鍛えたのか、もしくは創ったということですね」

「おや？そこを否定なさるのはおかしくないですか？」

「だからあの剣は人の手ではなく、魔術でもない何かによって生まれたと思うんですよ」

「その辺りに手を伸ばしても先は真つ暗ですよ……」

決着の瞬間までは休憩時間なのか、固唾を呑んで見守る他の人々を無視して雑談に興じ始めている解説と実況、その両者の言葉を意識の外に置き去りにしてわたしはこれからの決着を見逃さないよう集中する。

見るべきはただ一人……今見ている彼、一如「R」ロドブロクただ一人。

一如の剣が上段より袈裟に振り抜かれる。

その剣質は正しく剛剣。

その太刀筋、鋭さは避けることを許さず、結果、相手はその剣を受ける。

打ち合わされたかに思えた剣はしかし、次なる瞬間には蛇が絡みつくかのような異様な手応えを相手に与えていた。

同時に、猛烈な死の気配を伴って。

「！」

シャーッ！

蛇の威嚇にも似た金属の擦れ合う音が死の訪れとして響き渡る。その瞬間、相手は己が獲物、つまりは駆られる側の者なのだと悟る。

この錯覚が気を殺し、同時に技を鈍らせる。

寸時の空白、致命的な隙を突いて一如の手に握られた剣がしなる。それはまるで生きた蛇のように相手の首筋へと牙を突き立て、戻る際にその首を完全に断ち切った。

そして、勝負は決した。

「今の技はいつたい？」

呆然と呟く。そして会場が歓声に沸きあがるその一歩手前で映像は終わる。

「解説役は今の異常な剣のしなりを『蛇剣』と命名したそうだよ」

わたしの独り言に答えてくれたのはアユムさんだった。それ以上は何も言わず、ハツカ入りのシャーイ（お茶のことらしい）を一口飲むと視線を他所へと移してしまう。

もう聞き返しても答えてはくれなさそう。気が利いてるのか利いてないのか本当によく解らない人ですね。よく解らないと言えはこの部屋もイスラム建築が特徴で、床をみればアラベスク模様が見えている。

部屋の奥の方からパチパチと音がしたので目をやればチューリップの形をした銅製の火鉢の中に眩い輝きを宿した火が燃えていた。その火の持つ清らかさに思わず心を引きつけられそうになったところで、そこに微かな魔力が交じったのを感じた途端、わたしはその火から一切の興味を失ってしまっていた。

「そろそろ薪を付け足そうかな」

と言つてアユムさんは別室から薪を急いで取つてくると火鉢の中に放り込んで、それからわたしの方へと薄い笑みを浮かべて戻ってくる。

「そろそろいいかな？」

突然の問いにわたしはキョトンとなつてアユムさんを見る。

「何のことですか？」

「いや、何やら深く考え込んでいるように見えていたのが、普段の顔に戻ったから見たことへの、特に『蛇剣』への考察は済んだのかなと思つてね」

「そのことについては、よく解らないと答えるしかありません。ただ、名の通り一連の動きとして目に見えるもの聞こえるもの、肌伝わるものにまで蛇のような、という印象を受けたくらいで」

「とすると、やはり鍵は蛇ということになるのかな？」

「アユムさんは『蛇剣』の正体を知りたくてわたしに記録を見せてくれたんですか？ わたしてつきり今行われている大会のレベルを知るといふ目的だと思つていたんですけれど」

「それもあるけど、前大会の覇者の一人が今回もやって来た。それも今までの優勝者と違い対策が殆ど立てられないという嫌な相手ですね。そのことで今回の予選の経過がこれまでのものとは大きく逸脱

する可能性が出てくる。そこでそうならないように何か情報、アドバースが欲しくてね」

「彼が大会を二度制することに何か不都合でもあるんでしょうか？」

気になったことを口に出してみるとアユムさんが珍しく屈託無く笑う。

「そんなことはないさ。ただ分からないけど知ることができてることを、特に気になる事を放置しておける性分じゃないというだけだよ」

「そうですね」

「ところで、墓守と戦って決着は着かなかったみたいだけど……・倒せそうかい？」

「負けはしないと思います。けれど、何をしても勝ちたいとは思えないです」

「命は賭けられない？」

「命ですか……・そうですね。戦う以上は当たり前前にことにわたしは躊躇っているんです」

「同じ剣の使い手なのにトキナとは大違いだ」

「アユムさんは、殺すということについて何を思っているんです？」

「よく分からないかな。ただ嫌だなんていう気持ち胃を重くするような気分にはなるけど、そういう暗い気分を味わうという以外は

特に何の言葉も浮かばない。だから分からないんだと、そう思う。そうだな、空気を見ようとして目に力を込めたって何も景色が変わらないようなのと一緒さ。だからこれは気になるけど気にしないようにしてる。そうしないといけないものだと思うからね」

「目に見えないものは見えない。言葉にならないことは言葉にならないですか……」

「どうしても分からないことは分からない。そういえばエスタシアは経歴から受けた印象とは違ってまだまだ若かったね」そう語る目はどこか幼い子供を見るそれだった。「いや、仮にも一流派の正統な後継者で、おまけにもう継承者がいるって知っているかどうかにも長い年月を過ごしているような感じを今でも持ってしまうから」

「ええ、そうでしたね」

口ではそう言っているけど、わたしは今の言葉に返事なんてしていなかった。

わたしの心は言葉に囚われていた。

正統な後継者。

わたしは彼女から一体何を受け継いだんだろう？

面と向かって後継者だと言われたことなんて無かったから今まで思いもしなかったけれど、わたしは彼女との時間に体感したこと全くと、今も目に焼きついて離れることない彼女の最後の戦いの光景を知らず知らずのうちに再現するように剣を振るって、彼女の遺した言葉に大きな感銘を受けて、それで奮起して型捨無流を会得していた。

でも、だけどそれは本当に受け継いだって言えるんだろうか？

そのことを思うと胸が熱い。それでいて、とても哀しい気持ちになる。

わたしは、わたしの剣がわたしのものになるために足りないものがようやく解った気がした。

「そうですね。正統な後継者としてわたしはここでしなければならぬことがありました」

「そうかい？ それなら、それはここでしかできないことなんだろうね」

「え？」

この不思議な言葉にわたしが呆気に取られて声を上げると、アユムさんは何か秘密を知っているような、そんな不思議な眼差しを向けてきていて、何だか訳が解らなくなる。

「いやなに、ここは本当に場としての力があってね。様々なものが、特に運命が交差する場所だからね」

「運命というのは魅力的な言葉ですけど、幼いときに教わったことの影響なのか、その言葉で物事を片付けるのは安易に過ぎる気がします」

「厳しいね。あなたにそれを教えたのはさぞかし厳しい人だったんだろうね」

「いいえ。わたしの師は厳しくはありませんでした。そうですね、喩えて言うならこちらの歩調に合わせながら、優しく手を繋いで一緒に歩いてくれる。そんな人でした」

「それでも、その教えは厳しい。安易に過ぎると思ってしまうのなら、それは苦難へと向かう心構えであると共に、苦を伴う行いを自らに課することになるんだからね」

そうなのかもしれない。でも、それでも。

「わたしはそれが正しいと感じたんです」

「ならその心を大切にするといい。大切にしないと、心というものの作りはビクリするくらい崩れ易かったりするから……まあ、大切にする方法ってなかなかないようにも思うけど、まあい。話を戻そう。墓守に関してだけど、お願いするよ」

「はい。墓守に関しては任せて下さい」

ただ倒す相手としてではなく、墓守とはもう一度会って……
・戦ってみたい。

素直にそう感じた初めての相手だから、それに否という気持ちは一片もなかった。

「トキナを巻き込む積もりはやっぱりない？」

「毛頭ありません」

それがわたしのアユムさんに力を貸すそもそも理由なのだから、訊くだけ無駄だと知っているはずなのにどうして？

「それでエスタシアがやる気を出してくれるならそれでいいさ。僕はただ黙っているだけでいいんだから、こんなに楽なことはないし

ね

口で言っている事と表情が一致していない。まるでわたしに戦わせるのが嫌そうな顔をしている。

本当にどちらなのかと聞きただいたくなる人だって、そう思う。けれど、答えがどうであれ、わたしが戦わなくちゃ、墓守と戦うのはあの子になる。

だからこそ、わたしが戦う。

戦いの場となるこの島へとあの子を送り出してしまった者の責任として。

一人の師匠として、家族として。

あの子の為に。人の為に。誰かの為に。

それだけじゃない。わたしはあの人を見つけて、為すべきことを為さないと。

「そつだ、これを渡しておくよ」

考え事に集中しかけていた折にスツと差し出されたのはこの大会の期間中にだけ発行されているという新聞だった。

「これは？」

ここに記されていることをどう活用すべきなのか。もっと正確にはアユムさんはこれを元にどう動いて欲しいのかが今ひとつ不明瞭だったから疑問の声を上げる。

するとアユムさんはその疑問を理解してくれたようで一つ頷いてから言っ。

「こちらから指示することは無いよ。ただ参加者としてのあなたへのささやかな贈り物。エスタシアはトキナと同じくらい聡い割には、

あまり自分に自信がないみたいだね」

何を思ってそう言ったのかがよく解らず、わたしはただお礼を言
って部屋を後にした。

「悪いけど、あなたの都合に配慮なんかしてられないんですよね」

部屋を出た直後に　アユムさんがそんな大きな独り言を言っ
てくれた。

本当に、よく解らない人。どうして秋ちゃんはこの子を主と認め
たんだろう？

以降、それを心の中で持て余しながらしばらく歩いていると、わ
たしは後ろから意外な相手に声をかけられる。

「よう。また会ったな」

「また会ったね。フォルティス」

振り返って見れば十年前と殆ど変わらない黒のフード付きマント
姿がある。

「こうしてまた顔を合わせられる縁があるとは、不思議なものだな」

言葉と一緒にフードの奥に見えるあのぼんやりとした光を笑うよ
うに揺らす。

それが彼の眼差しに宿る心であって、わたしには不思議と安らぐ
光だった。

「わたしは本当に懐かしく感じます。フォルティスは秋ちゃんと同
じで気持ちが通じ合っているって気が淒くしていたから、何だか幼

馴染にでも会ってる気になる」

「そうか？ 出会い方も別れ方もロクなもんじゃあなかったが、確かにお前の家で世話になっていた時は……短いとはいえ、これまでの人生では随分と穏やかだったな」

「そう思ってもらえたなら何よりです。それでここへは何をしに来たんです？」

「大会に参加するなら仲間がいるだろう？ そこでまたいつかのようにお誘いに来たわけだが、今回は良い返事をもらえるか？」

「はい。いいですよ」

すぐに返事をするフォルティスはよほど可笑しかったらしく忍び笑いを漏らす。

「ああ、良い返事だ。思えば、俺はあの時からずっとこの返事が得られなかったのが悔しかったが、今は妙に清しい。く、くくつ。それじゃあな」

満足したと、そう心では口にするフォルティスはその姿を気配と共に徐々に歪ませていき、最後は景色に溶けるようしてこの場から姿を消した。

また一人になったところで、わたしはあまり人の使わない鍛錬場へと足を向けた。

中に入る。まずは適当に調子を軽く計る程度で手にした剣を抜刀する。

一回二回と初めは数を数えながら、それが千を越えたところから

はただ無心になる為にひたすらに体の動きを剣に伝えて、そして剣から伝わるものを体に反映させながらわたしは自分に重ねてきた彼女の影が実体を伴ってきたと感じられるまでにする。

そこから、わたしは影と重ねることをやめる。

そうするとただ立ち尽くすことが多い。

いつも、まるで金縛りにあつたような状態になる。

けれど、今回はそれをしない。動きは影と同じにしたままに、けれど影よりもより速く、より強く振るい続ける。

影は振り切れない。足元にある本当の影と同じようにどこまでもわたしについて来る。

いつの間にか影は目の前にあつて、わたしと技を競い始める。

……何だろう？ よく見える。

それはもう予見できると言い切つていくくらいに影の動きが、師の動きが解る。

それでもわたしは余裕なんて無い状態で剣を振るい続ける。

力で勝つても速さで勝つても、たとえ技で勝つても、肝心な気で勝つことができない。

だからそれによつて落ち込んだ力、技、速さが結局は劣つてしまふ。

それでも、わたしは心を折ることはしない。

これ以上、折れる訳にはいかない。

だからわたしは次の一秒、そのまた次の一秒においても影に負けることはない。

たった一時でもいい……己の迷い諸共に影を切る為の言葉を唱える。

「アパテイア 一斬一切斬」

唱え終わると同時にわたしの心に炎が燃え盛り、それを影へと掲げるようにして大上段に構えてみせる。あの人の教えにある「一斬

一切斬」の精神をもって対する。

それによつて影はより鮮明な闇となつてわたしの目前にある。

影はわたしにこう問いかけていると思う。

如何にしてこの影を斬つてみせるのかを　我と彼を斬るのかを。

わたしに必要な事は相手に対する殺す覚悟じゃない。

たとえどれほどの変化があつても、わたしがわたしであるならば、

わたしに必要な事はたった一つ。

わたしがわたしを殺すこと　わたしという我が死ななければ、

彼なる相手は殺せない。

けれど殺すという言葉が胸の内を過ぎるといつかの赤い雨が思い

起こされてきて恐い。

そう思つてしまうと影がゆらゆらと揺れる。それがわたしの心にある

炎の揺らぎである

と同時に、体の揺らぎだというのは明白だった。

そして影は亡霊となり、手にした刀をおもむろに八双に構えた。

しかも、そこから剣尖をこちらに向けて、半身となる。

その姿は正しく型捨無流の開祖……初代季節名そのもの。

「、」

息を乱したその刹那、ここが正念場だと全身の感覚が魂を叱咤してくれる。

わたしは寝かけていた刃を起こして、後ろへ退きかけていた足を戻す。

亡霊は未だに何も問うことはしない。こちらをじつと窺っているみたいに思える。

対面に在る亡霊の構え　型捨無流において名を有する数少ないその名は「虚仮」。

誘いの技であり、返し技でもあると同時に二段技が仕込まれたこ

の構えは曲者だ。

けれど、この構えは攻守共に足捌きが肝要。だから剣尖をこちらに向けて幻惑することで注意を引きつけ、方向感覚に隙を生み出す。それでも、足捌きへと注意を向ければ片手技に切り替えて、おまけに組み手も仕掛けてくる可能性がある以上、後の先での勝利はあり得ない。

そもそも、わたしの構えはいわば決め手。先の先以外に勝機は無い。

一筋の汗が目に入る。続けて、もう片方の目にも。

ぼんやりとした視界に変わった瞬間、亡霊が色を帯びたような気がした。

そんなときだった。

守れるか？

この短い問いが頭の中で弾けた。

真意を探る間もなく、亡霊は前足であった左脚を宙に浮かべて、後ろへと振るっていた。

「
」

遅れた！ 見えていると思ったのはその場に残された残滓。亡霊の足はもうそこにはない。

その場で一回転して放たれる捨て身の斬撃。

もはや受けることも避けることも叶わない。

これで勝敗は決する。

ここで、勝敗を決しなくてはならない！

「エエエエエエエアアアアアアアアツツツ！」

気が付けば、わたしは既に踏み込むと共に刀を振り下ろしていた。亡霊は、もうどこにもいない。

思わず唾を飲み込む。それからわたしは汗を拭いて自身の影を見詰めてみた。

何も起こらない世界はそれこそ時間が止まったような錯覚すらしてしまふ。

ただ剣を振るうときに強く思った。「守りたい」という一念。わたしはそれを答えとした。それは正答であるか否か？それを問うためにもう一度、上段に構える。

「……フウー」

深く息を吐き、そこから短く一吸する。

さつき、わたしは自分の心に従って全力の太刀を放った。問いに答えた、はず。

けれど、その答えを信じなくちゃいけない心がまだ微かに揺れている。

「だめだ」

一つの境地から離れていくのが体への疲労に化けて教えてくれる。それを押して、またそこから無心になって影を重ねようとして、

「よもや我が天気流以外にも重影の行を為す流派があったとは世の中、いや人のすることというのは本当にこつも似通うものなんですよ」

この声の主の登場によって中断してしまふ。

振り返ってその姿を見てみると細い目を笑みの形にしてニコニコ

と笑っている顔が目に入る。艶やかな黒髪を肩に少しかかる程度に伸ばし、そして前髪の毛先をどういった理由からなのか、元の黒を含めて五色に並べて染めているという奇抜さが良くも悪くも目立つ。けれど、特に気になったのは彼の着ている和服だった。確か……

……着流しだっけ？
彼もまたフォルティスやあの人と同じ故郷の人なのかな？

わたしが彼を見るように、彼もわたしを見ている。その僅かな時間で唐突に何を思ったのか、彼は表情を変えずに、しかしどこか感心しているような息遣いをする。

「おや？ 影を返すと隻腕だったんですね。これは凄い。こうなると影ではなく死者が乗り移ったとも言えますか。しかしあれは影なれば、あなたの中の影はよほど濃いということですか……」

腰に刀を差しているのと雰囲気から彼もまた今回の大会参加者の一人だというのは解るけれど、何と言うか、ぶつぶつと独り言を言っている姿は不気味だった。

ただ、言っていることの内容を考えると、わたしが何をしたのかを彼の流派、その術理に則って考えているのだろう。

「ところで、あなたは誰ですか？」

相手が傍に居るのに何もしないというのは気が引けたので声をかけると彼は驚いたようにして見せる。

見る者次第でははっきりとそうだと解る嘘の表情だった。

「我が名は天川恵吾。剣術、天氣流の七代目です。あなたは？」

「わたしはトキナ「エスタシア。型捨無流の二代目です」

型捨無流の名を聞いた瞬間、細められていた彼の目が見開かれて、ぶどう色の瞳が覗く。

そこから感じ取ることのできたものは奇怪なことに嫉妬と敬意が入り交じっている。

「戦場の野蛮な棒踊りと謗られながらも、その仮借なき剣に殺仏という言葉すら覚えるとして怖れられているという……あの型捨無流の使い手とお会いするとは、さて我はどう動くべきなのか、ということをお今日の夜によくよく考えなくてはならないようだ」

相手に語りかけるのと同時に自分にも語りかけている。それが天川恵吾という人物の話し方らしい。

見方を変えるために彼に足を向ければやっぱり、この場での切り間……間合いの取り方にも 恐らくは考え方にも、そういった所をみることができた。

「おつと危ない」

間合いを計つたのがばれたらしく、彼は自然体となってこれをあやふやなものにしてしまう。それぞれの手を視野を広げて収めて見れば右手は前髪を弄り、左手も懐に入れていて、刀に触れる気配は察知できない。

良かった。余計な事をしたせいで争いになるのは避けれたみたい。と、思ったのも束の間の事。彼は少しだけ笑みに威嚇の気乗せている。

「あなたは凄い、人を斬ったことがないのに百人を斬った者よりもずっとそれらしい剣を振るってみせた。それは忌むべき才であると我は思う」

「わたしの剣は実際の人殺しの剣よりも、より殺人剣に近いと言いたんですか？」

「プロ顔負けってやつでしょう」

その冗談めかした言い方は、どうもわたしを嘲笑っているつもりらしい。

「それはどんな立場から見てのことですか？」

そう言えば、彼はわざわざそれを聞くのかと言いたげに口端を持ち上げた。何故か愉快そうに。

「プロから見てくださいよ」

わたしはこの人のことがすっかり嫌いになつてしまったみたいだ。胸の中で荒々しいものが湧き起こるのを感じる。

「人を斬ることに、そんな呼称は不要だと思います」

「人を斬る技を長年かけて身に付け、今もこうして研鑽する以上、こうした心構えはより重要だと我は思っている。あなたは何故そうではないのか？ お聞かせ願えますかな」

そこで、彼は鯉口を切るところこちらに向かって歩んでくる。

わたしもそれに応えるようにして刀を右に一閃する構えで歩き出す。

間合いが徐々に詰まる。

お互いの目線はお互いの瞳に、その奥に在るものへと向ける。

彼は目を細めていて真意がまるで掴めない。それでも右手は太刀へと伸びていると察知できた。

対してわたしは自然体で、ただ手に持った刀を構えるのみ。ゆったりと歩き続けて、いつしか一足一刀の間合いすら超えて互いにすれ違う。

そのまま数歩進んだところでわたしは肩越しに振り返る。

結果を知る為に。

「……………お見事」

彼は手にした太刀を見詰めている。

根元から断ち切られた太刀だったものを。

「剣の根元にて、それも片腕の膂力のみで断つとは、げに恐ろしきは受け継がれた技ではなくあなたそのものだったか。そも、角のある刀の意味するところに気付けなかった我の見識の浅はかさ、この呪わしさか」

「わたしを試して、何がしたいんですか？」

せせら笑いを浮かべて言葉を口にする態度に対して若干の怒りを込めて訊くと、彼は言葉を発したわたしを再び嘲笑い、そのままこちらを振り返ることなく歩き出して太刀の残骸を後ろに放り投げてしまう。

「いやいや、あなたとは縁が無さそうです」

これだけ言い残して遠ざかる背中にわたしは叫ぶようにして言った。

「それは幸運でしたか？」

「それは事が済んでみないと分かりませんよ」

彼は去って行った。それだけで世界の半分が無くなったような気がした。

それからしばらくして、わたしはある一つの言葉、一つを思想を思い出す。

「解った」そう口にするのは同時だった。「型捨無流……」
「捨」が何なのか解った」

五十三話 邂逅

ヤナギを連れ立って森へと向かう途中、私は以前にやって来たときとの違和感、風向きの異様な変化から何度も立ち止まっては指先を舐めて風向きを確かめていた。

それをヤナギが訝り理由を訊いてくるので答えてやればかなり呆れ、そもそも私のような者に頼むことではないと言い、更には稽古の続きをする為に戻ろうと言い出す始末。

当然そんな意見は拳骨ひとつで却下して先へと足を進めることにしたけど、あのガキは自分の意見を曲げる気がさらさらなのか同じ事を繰り返す。

もうすぐにも辟易しそうな心境の私はもう一度拳骨を落とそうとして、そこに邪魔が入ったことでただでさえ不機嫌だった私の心象は更に悪化する。

「何の積もりか知らぬが。その手を放せ」

拳骨に恐れをなしてか、自慢できそうな逃げ足を發揮するヤナギの様子を把握しながら、私の行為を着物の袖を掴むことで妨害した相手へと意識を向ける。

突然の邪魔、相手のしたこの邪魔への苛立ちから殺気を加えて手を放すように言った。

「いやだね」

それなのに、茶屋の縁側に腰掛けているソイツは平然として言う。私の言葉を柳に風とばかりの態度で受け流すようにしながらも、私の殺気に対しては負けじとばかりに鋭い気を返して応じてきてい

る。

その力強さに私が驚いていると、相手は腹の底に怒りを押し込めた声で言う。

「なあ、恐い顔して子供を追い回すのは、女といえど見過ごせねえよ」

「そう言うオマエも女だろう。それにまだ追い回してなどいない」

言葉を返せば相手の女は妙な事に、無視されずに済んだ事を笑ったらしい。

確かめてみれば、隙だらけな構えの中で唯一、私の袖を掴む手に在る力が油断してはならないという警告を発していた。

コイツも大会参加者だとするなら、下手に関わり合いたくはない。今回はフィリップの造った刀を帯びているので、空手よりはマシだけど。

面倒ごとではできる限り避けたいところではある。

「あんたならガキ一人捕まえるのなんていつでもできるだろ？ なら今すぐじゃなくてもいいよな。そこでものは相談なんだけど、ちよつとあたいに時間を割いて、ついでに金を貸しちゃくれないか？ 今財布の中を見てみたら記憶してたのかよりかなり少なくなつてたよ」

女は腰から吊るしている財布を空いている手で取ると振ってみせる。

哀れむべきなのか、全く音がしない。

それで私には十分に分かった。コイツ、全然お金持っていない。

「オマエ、最初から金をせびる腹積もりで拙者に目を付けたのか？」

若干の軽蔑を込めた視線を送ると、女は妙な余裕を滲ませて笑った。

「だったらさ、あんたよりもさっきのガキを捕まえて、あんた脅してるかもしんねえよ？」

「・・・・・・・・」

それもそうかもしれないけど、何処か腑に落ちない。落ちないけど、コイツがお金が無くて勘定を済ませられずに困っているのは、どうにも本当らしい。

面倒臭い。それと胡散臭いと思わずにはいられない。

「金を貸せばその手を放すのか？」

「もうとっくに放してるよ」

「！」

瞬間、私はそこにあると感じ取っていた手に注意を向ける。

すると、途端に手の気配が霧のように散り散りとなって、私の顔の前に再び手の形をなして現れていた。

この事態に私は女から僅かに距離を取り、強い警戒心を孕んだ視線を突き刺すと共に、圧力を掛けた。

「ちよいと気を移して錯覚させたただけだよ。でも不意を打とうとかそんな事は考えてねえから安心して、さっさと睨むのやめてくんねえかな。なんつつかさ、その、眼力みたいなのあたい苦手なんだよ」

事実、かなり苦手な素振りをしている女に対してこのまま圧力を掛け続けようかとしたが、私は『心眼』の力を弱めていく。弱めるしかなかった。二代目に当てられた気のせい、どうにも上手くいかない。

こんな状態なら、出し抜かれたとしても仕方が無い。全く、二代目は当たり気の強さがいかれている。

疲弊から目頭を押さえると女は何故か異様に動揺した素振りをする。

「ああ」しかし、口を開けばそれも嘘のようだった。「疲れてんのか………ならどうだい？ 隣にでも座る？」

このまま無視して立ち去ってもいいものを、どうしてか私はこの女のこと気がかかる。

気にかかってしょうがない。

この女の息遣い。再び腰掛ける際の重心の繰り方といったものが、言わなければその人間一人一人に染み付いた……その人間にしかない固有の質感が、私の知る誰かによく似ている。けど、この女はそれを呼吸によってブレさせて気付かせまいとしていると気付いてしまった。

はつきり言つてこの女は怪し過ぎると私の勘が告げている。

「遠慮しておこう。それよりもオマエ、何者だ？」

訊けば女は弱つたなと小さく呟く。

「やっぱそれ聞く？ ならあたいが誰かに似てるって感じたってことだろ？」

「何故それを？」

「こっちの内心を知られるのは好きじゃないんだけど。」

「……そうだなあ、あたいが用意してた答えて、あなたにも言えることだろうから答えておくよ。えー、我は汝がいずれなるであろうところのものにして、かつては、汝が今かくあるところのものなりき。なんてね」

言葉の意味以前に、台詞を棒読みしてみせる女の態度が私には気に入らなかつた。

「ぶざけているのか？ それとも喧嘩を売っているのか？」

「店の前で喧嘩なんてするかよ。あんたにそれが出来たとしても、あたいはそんなことをするような迷惑な勇氣は持ち合わせちゃいないのさ」

気付いた時には女は私からスツた財布に手をつけて金を出していたかと思いきや、次の瞬間には私の後ろに立っている。

またしても出し抜かれている。

恐らく今の私はコイツが動いた跡を見せられているんだろうけど、その所々が欠落してる。

たとえば、コイツが私から財布スツた決定的瞬間が全く判らない時点で遊ばれていると言っても良い。

知らず奥歯がギリリと鳴る。物凄く気に喰わない。

コイツの気配はどうなってるの？ 動きはまるで判らず、けど速さ自体は恐らく常人のそれだ。幻術の類ではないようだけど、一体どうやってるのがまるで分からない。

女自身が言っていた「気を移す」という術……どこかで感じた覚えがある。

そう。あれは二代目が独り稽古をする時に似ている。もつとも、二代目がやるほど嫌な感じがしないだけマシなのかもしれないけど、非常に厄介ね。

「あたいの技が気にかかるって顔してるね？」

気に入らない言葉をかけられた私は女に殺気を浴びせるが、やはり効果は無く、逆に笑われた。

「殺気とかさあ、効かなきゃ意味のないものを無闇に使うのは下策じゃないの？ まあ、あんたの眼力があれば話は違ってくるけどさ、今は使えない。てことは万全じゃない。だからあんたは今あたいと仕合うことはしない。そうだろう？」

そこで一度息を継ぎ、後に放たれた言葉は私を怒らせた。

「負ける勝負はできないよな。だってあんた、すげえ臆病だもんな」

その一言が、どうしようもなく癪に障った。

「その言葉、挑戦と受け取っても良いのか？」

「いいけどさ、まだ予選だ。いや、もう予選だからってことでもあるのかな？」

コイツと意見を合わせる必要なんて無い。

私は刀を抜き、即座に女へと打ち込んだ。

「対策もなしに振ったって、あたいには掠りもしないさ」

三度、気配を錯覚する。それも、今度は当てるつもりでいたのに外した。

驚愕と焦り、そしてあつてはならない恐怖が胸中を過ぎる。それを瞬時に読み取ったらしい女はからかうように笑い声を上げる。

気に入らない。

二の太刀を打ち込もうとしたその時、腕を掴まれた。

即座に振り払おうとしても、私の腕はまるで言うことを聞かなかった。

「大人しそうな見た目して短気で危ない奴だな」女は手を離す。「ちよつとは落ち着きなよ。あんた、無理にあたいの気配を追って、肝心な気配から注意を逸らしただろ？ 今でもその気配の場所が分かるのかよ？」

「・・・・・・・・・・」

言われて気付く。『心眼』がヤナギを見失っていることに。

「どうするよ？ あの子ほっぽって置く訳にもいかないだろ？」

「・・・・・・・・・・そうだな」

この一言では到底済まされない様々な感情と言葉が胸中を巡ったものの、私はそれで全てを片付けることにした。

何時までもこの女に関わってはいられない。

それだけは、絶対に間違えようのないことだったから。

「やっぱり、あんた疲れてんだよ。仕方ない。こうなっちまったのはあたいのせいでもあるしさ、ガキを探すのを手伝うよ」

だというのに、この女はまだ私と関わるつもりでいるらしい。

「財布はくれてやろう。そしてさっさと立ち去るといい。拙者は才
マエとこれ以上関わるつもりはない」

「そう言うなって。あたいとあんたの仲だろっ?」

「戯れは程々にしておけ。でなければ早々に予選敗退となるぞ」

脅しつけるように言ってみるけど、予想通り、女はまるで応えた
様子が無い。

「いやいや、戯れは大事だろ?」

女は言葉と共に仕草を道化じみたものに変えて私の反応を推し量
っている。

笑わせでもするつもりかと思えば、女の指が私の眉間に触れそ
うになっていた。

それを軽く払いのける 今度は何故か上手くいった と女は
大げさに痛がってみせる。

「イッターイ！」全く痛そうに聞こえない声だった。「ひでえな。
あたいが誇る美しい指を叩くなんてあんまりじゃない!」

女は奇妙な調子で言いながら、先程から前に進もうとする私の前
に立ちはだかる。

そのことに、内心で舌打ちをする回数が増えていく。

「そこをどけ」

「どいてもいいけど、刀、納めたら」

「問答無用」

私は捨て身となつて、懐に潜り込んで切り上げる。

それがよほど意外だったのか、女は避けることを忘れて刀で受けた。

そうして、お互いに着かず離れずの鏢迫り合いとなる。

その最中に力を拮抗させる呼吸が重なったことに、私は不審感を抱いた。

とはいえ、口を動かすことはしない。

私と女は刃を絡み合わせたまま、円を描くようにして、足を一進一退させ、体を変化させ続ける。

まるで舞でも舞うかのように。

絡み合う刃が鳴る度に、ドンドンと音が聞こえる。

それは向こうも本気になったということなんだろう。

私が聞いている音というのは、相手が死神を呼び出そうと門を叩く音に他ならない。

相手がそうするように、私も相手の死の門を叩く。

互いに死神を呼び出そうと必死になっている音がする。

けど、死神が応じる気配は未だない。

それはそうよね。一対一の殺し合いにおける死神は己であり、相手なんだから。

死という門を叩き合ひはしても開けはしない。

だって開けた方が負ける。

門を潜らされて、終わる。

殺されてしまう。

「.....!」

「……………」

奇遇にも同時に死の気配を感じ取ったのか、状況は変化しなかった。

これに息を呑んだのは私の方なのか、女の方なのかは判らない。罅迫り合いは終わらない。

お互いに何度か隙を見せることはあつたけど、そこで衝動的に動くことはなかった。

誘導だと判りきっているのだからそれも当然。

けど、このままだとまずい。

この状態は五行で言えば比和、同じ気のぶつかり合いとも考えられる。

剣においても五行思想というものを当て嵌めて考えることは可能である。

その場合、それぞれの気の性質と構えが関係してくる。

土火金木水。これが五行。

土は下段、火は上段、金は脇構え、木は八双、水は正眼。

剣士の性質もこの構えに表れることがあるし、実際に相性が良いことが多い。

今でこそ無構えではあるけど、私は脇構えを得意としていた金の性質を持った剣士。

開祖は八双を得意としたから木の性質が強く、二代目は上段が得意だから火の性質が強い。

だからといって、開祖が二代目よりも弱いという訳じゃない。

この構えに見られる五行で重要なのは、構えそれ自体の相性にある。

でもそれも参考程度。地力が違ってしまえば、この五行は容易く反剋する。

そして……目の前で鏢迫り合いをしている女は水の性質の剣士。

得意とするのは正眼で間違いない。

鏢迫り合いという状況の中で、本当に水のように変化に富んだ運剣を行っている。

無構えという境地に立てば相性の問題など無いと思っていたけど、どうやら実力伯仲となってしまうと、この気の性質が影響するみたいね。

金気に対し水気。

理屈通りに事が運べば、私は負ける。

「

おまけに、相手には気を移す技がある。

集中し、感覚を研ぎ澄ませているからこそ欺かれてしまう可能性のある技が。

ここは退くべきところ。

けど、そうした気配をちらとも見せたなら斬られる。

私は退くに退けない。

なら相手はどうだ？

常ならば最も重要な動静を、危険を覚悟で見極めようとする。

その時、相手から声が発せられた。

「なあ、やめねえか？」

このたった一言が、心の水面を波立たせる。

一か八かではあるけど、ここで『心眼』を使う。

オマエが気を移す技を持つように、私には心を写す技がある。

オマエに引き出されたこの心、利用させてもらおう。

絡み合っていた剣が離れて、時を移さず、間合いを離すと同時に一閃する。

放たれた剣気は交差し、お互いの小手を打とうとして止まった。決定的に違うのは、私の刃が女の肌を裂いているということ。

「やっぱし一拍の動きはそっちに分があるわけだ。で、騙まし討ちしようとしたあたいの大事な右手はこのまま宙を舞うのかな？」

私は刀を鞘に納めた。

「小太刀なんぞを使っておいてよく言ったものだ。本来ならば決め手となるオマエの一刀は始めから拙者には届かないようになっていた。そんなことに今更になって気が付くとは……オマエの言う通り、疲れているようだ。しかし、どういっつもりだ？ 直前で気付いたとはいえ、拙者が剣を止めることをする可能性など無きに等しいだろうに。運試しでもしたかったのか？」

「結果的には興ざめしてやめただろ？」

「そういう訳ではない。しかし、勝負の最中にあの技を使ってこないのが不可解ではあったが、まさか剣の長さを錯覚させるために使っていたとは」

「それで罅迫り合いを何とかもたせてただろ？ だから手加減したとか、そういう話じゃ……」

「どうでもいいことだ」

「そうかよ」

「しかし、あのような手を選択する理由が拙者には判らぬ。あのままであったなら、オマエは死んでいたんだぞ？」

「あんたは短気だけど、マジで問答無用に斬り捨てるような奴じゃないだろ」

「知ったような口を利くな」

「それで、どうしてあたいの技は破られたんだ？ 教えてくれよ」

「簡単なことだ。オマエの剣気は切っ先に届いていなかった。オマエの実力からして、気が切っ先に届かないなどということはないはず。それに……」

「それに？」

「拙者が自身と同等と評した剣の使い手がそんな初歩もできないなぞと思いたくはない。そんな相手を斬ったところで面白くもなんともなかるう」

「へえ、やっぱり分かってんじゃないかねえか」

「何が言いたい？」

「勝負の楽しさってやつ。分かるだろ？ そんなで、殺し合いはそんな楽しさとは違っつてこともさ」

妙に涼やかな風が体に吹き付けてくる。

その発生源が女からだと思付くのに時間を要することは無かった。

けど、何故そんな風が起こっているのかがよく判らない。

「判らぬな。剣の勝負は殺してこそその勝利だ」

「それでも、ただ殺すっていうのは気分が良くないからあんたは剣を引いた。違う？」

女の語気が一時強まる。まるでそうであってくれと願うように。それを煩わしく思った私も語気を強めていた。

「違うな。拙者はただ己の掟に従って、無用の殺生を避けただけのことだ。何より」

「何より？」

「拙者にはオマエを殺す気など最初からありはせぬし、オマエを殺すと弟子を探すのに余計な時間をくう。まだあの未熟者には、死の臭いや気配といったものに触れる時機ではないからな。言うなれば、オマエは拙者の勝手な都合で生かされたに過ぎぬ」

途端、周囲が水を打ったように静まり返る。

ほんの一時の静寂だと思っていたそれは、五秒ほど続き、

「くっ、あははははははははは」

女の爆笑によって吹き飛ばされた。

「最高の師匠だ！ おお師匠！ 本当にあんたはもうこの時からこんなだったか！」

目で見えずとも笑顔だと判る喜色に溢れた声に、私の顔は何故か熱を帯びていた。

「何が可笑しい。気でも違ったか？」

「あはははは　　ごほごほっ……いや、あのガキは本当にいい師を持ったと思つてさ」

「それで何故笑うのか」

「ああ、そつだよな。笑つてなんかいられない。あんたは結局、気付けなかったから」

「オマエ、まだやるつもりか？」

「ないさ。今は刀持つてるだけで精一杯だ」

そう言つと、女は驚くほど速い納刀を行った後、恭しい動作で私に道を開けた。

「あたいに構わず弟子を探してあげなよ。あたいに構うのは、」

「本選で相手をしてやるっ」

短く告げると、女はようやくその場から離れていく。

「ああ、本選で」

嬉しさに溢れた声を残して。

私にはその声が、まるで嬉しくなかった。

五十四話 柳と雪と秋

それは完全な不意打ちだった。

「うわ」

師匠から拳骨もらうのが恐くて逃げてたら、いきなりだ。

本当に運よく当たらなかったからいいものの、当たってたら間違
いなく死んでた。

なにせ、使われてんのが真剣だしな。

ぎりぎりのところでよけたけど、勢い余ってゴロゴロと地面を転
がる破目になった。

「危ねえな！」

反射的にそう言って、犯人を見たあちきはその場から思いきり飛
び退いた。

あちきの前に再び現れたそいつの間合いがまるで分からなかった
から、とにかく距離を取ることで安全を確保する。

「シユエ………てめえ、復讐しにでも来たのかよ？ へへ、

この前より随分とおしゃれじゃねえか」

頭に巻かれた包帯を見て皮肉っぽく笑って言ってやる。

シユエは頭に巻かれた包帯を軽く撫でつけると、呆れた顔なんか
しやがる。

「この痛ましい姿を見て皮肉を言うなんてね。普通、怪我させたこ

とを謝ると思っけど」

「みみっちい奴だな。怪我とか言うなら、あちきの方がかなり怪我したってのによ」

「それはお前が弱いからだろ」

こいつ、なんつう手前勝手な。

「それならてめえの怪我だって、てめえが弱っちいからだろ？」

口に出した瞬間、あちきはビビらされた。

その瞬間に、もう手遅れだと分かっちまったんだ。

それは現状に対してでもあり、あちき自身の気持ちでもある。

やばい。

シユエの奴の目付きがおかしなことになってやがる。

明確な殺意に彩られた眼光。それが煌めく時とシユエの手にした剣と同時に変わった瞬間、あちきの命はなくなるかもしれない。

いや、今は気持ちの問題なんて放っておいて、泥棒を見て縄をなうようなこの状況を何とかすんだよ。

あちき頑張れ、頑張るんだ。

「何だよ？ 仮にも格下とか思ってる相手にムキになっちゃうのかよ。修行が足らねえぞ」

言いながら、あちきは極力姿勢を意識して、じりじりと間合いを取る。

傍目には引け腰には見えねえはずだけど、逃げようとしてるのがすぐシユエにばれた。

それで、シユエはあちきの虚勢が可笑しくなってきたのか、ちょ

っぴり笑顔になる。

それこそが、あちきの狙いさ。

この前のまぐれ当たりだって、てめえのそうした態度が原因だろうが。

確かにてめえはすげえよ。

この前の動きだって全然見えなかったくらいだ。

本当に、剣に関しちや正真正銘一流なんだろうさ。

けどな、隙を見せる瞬間は、本当に三流なんだよ。

「らあっ」

師匠の刀を地面に突き立てて、それを支えに体を浮かして蹴りを三回浴びせるようにして叩き込む。

真剣相手にやり合うには無謀かもしれないけど、普通はやらねえだろうから、やる。

それに、蹴りに関しちやシルクリムからしっかりと教わってる分、下手に剣を振るうよりもマシだってことをこれまでの経験から学んでるしな。

奇をてらったこの蹴りは当たりこそしなかったけど、三回とも掠った。

空振りじゃねえ。いい感じだ。

張りぼてかもしれないけど、とりあえずの自信は持てた。

シユエは反撃する素振りを見せない。どころか、刀をわざわざ左手に持ち換えて、右手を顎に当てて考える仕草をする。

そうやって、余裕を見せ付けてくる。ああ、頭に来る。

「お前、拳法使いだっただのか。それにしても、驚いた。白刃に対し何の守りもない両足を曝すなんてね。普通は脚甲ぐらいつけるだろう。馬鹿なのか？」

「お利口にして勝てるんなら、誰も技なんか考えずにルールを作るだろうさ。だからどいつもこいつもバカになる」

気付いてみりゃ、あちきは震えてた。

けど、震えている分だけ頭に來てるからな。

遅れて、全身から力が湧いてくるのがはつきりと分かる。

へへへ、本当にバカになっていやがる。でなきゃ今、充実感なんか覚えねえ。

「なるほど、それもそうか」

シュエが呼気と一緒に構えを解いた。

その一連の動作の流れが師匠そっくりで、こいつの才能ってやつがよく分かる。

そのまま流れるように今度は刀を肩に担いで、腰を大きく落とす構えになる。

それで血の気が失せかけるのを、あちきは頬を張ることどころにか防いだ。

今のが、相手を気で呑むってやつなんだろうな。

薄っすらとそんなことを思う間も、あちきはシュエから目は離さない。

重心は思い切り前足に。半身をずらして避けるとか、とにかく退くことが頭がない。

そんなシュエの構えは攻めの兆候を見切って、一気に間合いを侵略して斬れば勝てる。

でも、あちきじゃあ見切れねえから、勝てない。口惜しい。涙するくらいに。

担ぎにも似て見えるシュエオリジナルの構え。

峰が肩から二の腕の方に落ちたところで、シュエの足元から急に土煙が巻き上がった。

今の何なんだ？ まさか魔術

「呆けている場合か？」

「！」

いつの間にか間合いが詰められてる！

咄嗟に横に飛び退こうとした時、目に一瞬差し込んだ凶器の光に気付いて地に伏せることで間一髪のところでやり過ごす。

その最中にもシユエからは目を絶対に離さない。攻撃そのものが見えないのは今のでもよく分かった。なら、見えるこいつを見るしかない。

睨むようにして見れば、シユエはあちきの動く方向を予想して刃を構えただけ。

それは足を引っ掛けようと縄を張るフリをするのと大差ない。でも、その構えを見た瞬間に寒気が背筋を襲ってくる。

いつの間にか、シユエは背を向けていた。

足を交差させて、捻りの入った胴は引き延ばしたゴムみたいに力を溜めてるのが分かる。

師匠が見たら（見えてねえけど）隙だらけだって言うに違いない構えだ。

でも、一連の動作とここまでの流れからいって、この隙は隙にはならねえ。

何故なら、あちき自体が既に隙を晒していて、シユエはその隙を利用していただけだ。

あちきの隙を十二分に活かした、シユエが刀を振るう。

軌道は誰の目から見ても明らか、下から上への切り上げ。

狙いは、伏せたことで差し出す形になっているあちきの首だ。

その狙いの分かり易さは、先読みのできないあちきからすれば天の助けに違いなかった。

「うおおっ！」

「！ またか」

あちきは死ぬ気で立ち上がる。無茶だとは分かっていたものの、言いようのない痛みが足に走った。

鼻先を刀が掠める感覚と一緒に、刀から殺気が伝わってきて、気が遠くなりかけた。

大して動いてもいねえのに汗がすげえ飛び散っていく。

それが自分の血だなんて変な考えが出てくるんだから、洒落になんねえ。

本当にそうだったら、もう死んでんだからな。

そんなでもって、そんな風に考えてたら、次こそマジで死んじゃう。あちきは内心で大慌てしながらも教わったことを守って慎重、かつ大胆に距離を取る。

この手の動きは師匠の都合からか熱心に教わってる。それが功を奏した。

「また、かわした」

ふとした眩き。

シユエの奴は、攻撃を繋げることはず、動きを止めると不満げにそう口にした。

「一瞬小さく跳び上がって、体を引くことで剣の軌道から一寸だけ離れて、そのまま立ち上がる。そんな動作を殆ど同時にやってのける俊敏さ。才能がまるでないと叫びたけど、驚いた。最初に会った時には上体とそこに付随する足捌きからお粗末だったから、ああ言ったが、あの時のお前は型捨無流を学びもしていなければ、剣

士でもなかった訳だ」

淡々と、それこそ淡々と口にする。人間じゃなく人形が喋るよう
に。

その目は決してあちきの方を見ず、じつと自分の刀に固定して。
陽の光を受けているその刀は、かなり物騒な光を放っている。

けど、何でも斬れるようには見えねえ。

まあ、刀の良し悪しなんて、あちきにはてんで分からねえんだけ
どな。

「ヤナギ……だったな。お前の才を今ここで使い潰させて
もらう」

才だつて？ それと使い潰すつて、あちきの才能とやらは消耗品
かよ。

「要領を得ないといった顔だな」

どうも顔に出てたらしい。それにしたつて、こいつがこんな風に
話しかけてくるなんて、本当に意外だ。それこそ淡々と、何の感慨
もなく戦いそうな雰囲気をしているのに。

「当たり前だろ。才能つてのは伸ばすもんであつて、使い潰すよう
なもんじゃねえよ」

「そうだな。だから、お前には才能がない」

そこまで言つて、シュエはまた刀を担ぐ。さっきよりも姿勢が低
い。

構えると殆ど同時、今度は地面を蹴つて飛び出して来る。

まるで水の中を泳ぐように魚みてえに、スーツと間合いを詰めてくる。

けど、跳んで早々に失速してやがる。足でも滑らしたか？

地に足を着ける瞬間を狙えば、たとえ傷を負うことになっても、あの構えからして速くは振れねえだろうし、傷もそう深くはならないだろう。それに、痛いのは慣れっこだ。

あちきにとって何も問題がねえなら、これは千載一遇のチャンスか。

考える前に体は動いてる。

「もらったあ！」

空の彼方へとぶつ飛ばすつもりで、シュエの顎を狙って左の蹴りを放つ。

タイミングは完璧だ。

そこで、シュエの足が地に着く。

途端、またあの謎の土煙が巻き上がる。

そしたらどうという訳か、あちきの蹴りは空を切った。

「嘘」

あちきが口にする間に、蹴りを一寸引いた所から見送るシュエは、軸足の膝を折って、バネ仕掛けみたいにこつちに跳んでくる。

今度は明らかに飛距離が大きい。体当たりなんてするはずはねえだろうし、このまますれ違いざまに斬るつもりなのか。

とにかくモタモタしてらんねえ！

「だろ！」

有り余ってる勢いを利用して跳躍と共に右の蹴りで迎撃する。

斜め上がりだった蹴りと並行に振られた刀は上手い具合に衝突して、何とか凌げた。

それで、足がなくなっていたかもと遅れてビビる。踵がすげえ痛えよ。

「また、これもかわすのか」

「どうしたよ？ この間と比べて随分と遅いじゃねえか」

「……………チツ」

シユエの奴が腹立たしげに舌打ちする。段々と余裕がなくなってきた証拠だな。

逆にあちきは調子に乗ってきてる。気分が良い。

でも、ここで堪えねえとまずい。

そもそも、あちきには逃げるって目的がある。

どうやって逃げるのか？

とにかく、それを考えるんだ。

「シユエ、あちきは今思った。おめえと戦う意味がねえってさ。少なくとも、あちきには戦う理由なんざない。おめえはどうなんだよ？」

何だかんだで、刀でいきなり切りかかってくる奴だ。口で言っただけの相手じゃあねえだろうが、無視する気はねえはずだ。

「理由ならある」

「なんだよ？」

「私は型捨流を既に修めた。そして、新たな流派を名乗るに際して、私の剣術が支流であるというのは気に食わない。だから、本流の相伝の証たる野太刀、『季節名』をもらい受けにきた」

奪いに来た、の間違いだろ。師匠ならムドウモノだとか言っ叩きのめしてろぞ。

「あー、要するに自分が本流になりてえって、そう言うんだ？」

支流の支流なのにな？

「そつだ」

マジなのかよ。それじゃあ逃げても追われ続けるってことか？

いや、命が惜しけりゃ刀捨てて逃げる……ダメだ。それじゃあ師匠に殺される。

誰かに預けるならどうだ？ 師匠は無理だし、あの姉ちゃんに預けたら折られるかもしれない……どうい訳か八方塞がりじゃねえかよ。

この選択肢の少なさはおかしい。けど、考えても埒が明かねえようだし、ここはあちきが頑張るしかないのか？

それを確かめようと、ほんの少し右足にかける体重を増やす。踵のから響く痛みは引くどころか、足首全体にまで広がっていやがる。

「あー、シユエさん」

「何だ？ 足が痛むのが気になるのなら、気にするな。いずれ痛みは無くなる」

そう言って、シユエは変形の担ぎを構える。

痛めてることを見抜かれて、余計に冷や汗が出てくる。

しかも、あちきの体は死にたいのかこの土壇場で音を上げやがった。

くそ、シユエの奴……狙ってやがったんだ。

攻撃もせず、妙に時間をかけていたのは、あちきの疲れが表に出てくるのを待っていたからってことなんだろう。

そんなあちきの考えを、目の前のシユエがしたり顔で肯定してきた。

何てこった、考えを読まれていやがる。

やべえぞ、もう完全に息が上がってきた。

あれだけ走りこんだつてのによ……ちくしょう。

「おいおい、物騒過ぎるだろ？ 頼む、命だけは勘弁してくれねえかな」

あちきは息苦しいのを堪えて命乞いをする、シユエは心底意地の悪い顔で笑う。

「お前は、戦いの中に生きる気がないのか？ 型捨無流という殺人剣を学んでいるお前が、物騒なんて言うとはね」

「それを言うなら、活人剣を学んだおめえは、どうしてそんな物騒なんだよ？」

「お前には関係の無いことだ」

「けっ、そうかよ。嫌な奴だ」

空気の重みが変わった！

シュエの姿勢が徐々に前のめりになる。

多分、動きはさつきと同じで、バカ正直な一直線だと思う。

あちきは本能的に、集中しようと目を凝らす。

そこで、いきなり視界がぼやけて、何も見えなくなった。

衝撃があちきを襲ったのは、それとほぼ同時だった。

気付いた時にはあちきは脇腹を斬られて、糸が切れた人形みたいに崩れ落ちた。

痛いとか痛くないとかの次元じゃねえ、完全に力が抜けていくつていう感覚が、とにかく怖かった。

まさか、あちきは死んじまうのか？ 勝手に涙がこみ上げてきそうになる。

「……………服の中に短刀でもしまっていたのか。悪運の強い奴だね」

「……………う？」

この時ばかりはシュエの言葉に感謝しとく。本当に死んだかと思つて動かなかつた指先が、今の言葉に反応して動いたんだからな。

「はあ、くっ」

あちきはこれまでできてきたように、気合いと根性で立ち上がる。

気付けば息まで止まってたらしく、呼吸を荒く繰り返す。その度に体の中が痛んで膝が落ちかけた。

いつの間にか霞んでろくに見えなくなった目を凝らしてシュエを睨む間、脇腹に手を当てて服の中を探ると、シュエにやられた切り口から短刀の仕込まれた柄が地面に落ちる。

あちきはそれを慌てて拾おうとした。

普通に考えて、拾えない距離じゃねえのに、なのに手が届かず、空を切った。

「なんでだよ……………」

殺されるかもしれないのに、この土壇場で、なんで……………なんで届いてねえんだ！

あちきの焦る心に火が付いて、頭の中がこんがらがってくる。

シユエがどう動くのか見極めようにも、目が霞んでるし、おまけに心臓まで騒ぎ出してきやがったから耳もバカになっちまってる。

気が、殺されたってことなんだろう。

そこに何の前触れも無く、あちきの心の中に現れた師匠が「無理だ」って言いやる。

なら、このまま死んじまうのか？ そう思った時、シユエがくつくつと笑う声がおかしなくらいこの場によく響き渡った。

「やっぱり消耗品だった。お前が型捨無流の四代目とは、型捨無流はもう終わりだね」

「あちきは、四代目じゃねえつつてんだろ！」

カツとなってあちきが言えば、シユエはため息を吐いた。

「いいや、お前は四代目だよ。型捨無流という流派はそういうものなんだ。だから私は、型捨無流を学ばなかった」

「……………どういっつった？」

どうやらシユエはまたおしゃべりをする気になったらしく、おかげであちきは柄を拾うことができた。

敵に武器を取らせるなんて間抜けもいいとこだ。おかげで命拾いしたけど。

「あれは師が教えると真に思った弟子にしか伝わらない。そして、一度師が弟子を定めたのなら、たとえ師が技を教えずに果てたとしても、弟子は自然と体得してしまう。」

教われれば、必ず身に付いてしまう流派。それが型捨無流という剣術であり、呪いだ」

「呪いだって？ おいおい、冗談はよせよ」

その手の話は苦手なんだよ。

「呪いでないなら、何だ？」

「そんなこと訊かれて分かるかよ。あちきはまだ、基礎の基礎しか教わってねえんだ」

「なら、型捨無流の三形は知っているな」

「ああ、「妖」形は自分で作れとか言われたのなら覚えてる」

「ほら、やっぱり四代目だ」

「だから、何でそうなるんだよ？」

てめえには相互理解ってやつが必要だと思っね。

「私の師であるカイルは始祖から「剛」形のみを教えられた。差し詰め、それしか教える気がないと断言されたようなものだ。言っ

おくけど、私の師は私が認めた一角の剣士だ。そんなカイルであっても教える気がないとされた三形を、お前は口伝とはいえ教えを受けている。さらには「妖」形を工夫することをあの三代目に命じられている。そんなお前がどうして四代目でないと言える？」

「そりゃ、おめえの考え過ぎ、勘違いだ」

師匠はあちきに才能が無いってはっきり言った。「無理」だってよく言ってる。

だから

「あちきじゃ、きつと四代目になんかはなれねえ。でも、剣は最後まで教わるつもりだ」

「最後まで教わる？　なら、お前の言う最後は随分と中途半端だ」

言われてハツとする。その通りだ。あちきの言う最後って、本当にどこまでなんだ？

基本を終えて、それで最後だったとして、あちきはそれでいいのか？

良い訳なんかない。あちきは師匠にもっと剣を教えて欲しいと思ってる。

ならどこまでやる？　どこまでもやるに決まってる。

行き着くところは中途半端な最後じゃない。とことんまで行った先の最後だろ。

考え終わってみたら、可笑しくて、口の端が勝手に上がっていた。

「おめえに気付かされるつてのは気に食わねえけど、あちきは中途半端なところで終わるのを認めそうになってた。だから前言撤回する。あちきは、四代目になる！」

それが魔法の言葉にでも化けたのか、霞んでた視界が一気に晴れる。

目が治って、手には武器もある。勝ち目はないにしても、やり合える。

見れば、柄の目釘はもうどっかに消えている。そのまま外装を取っ払えば、両刃の短刀がその姿を現した。

日の光を受けて輝くそれに、あちきは興奮してきて、握る手に力が籠った。

「若いだけに回復が早かったか……けど、今日はあと一回が限度だろう」

「あちきの才能の話か？ 使い潰すだのなんなのって、言葉であちきを惑わすつもりか？」

シュエは答える気がもうないらしく、刀を斜め正眼に構える。

それだけで、あちきがシュエから感じていた色んなものが、シュエの中に吸い込まれて消えていくのを感じて、あちきはシュエを不気味だと心底から思った。

「………三代目のこともあるし、そろそろ決着を着けさせてもらおう」

その時、あちきとシュエ以外の人の声が、風鈴みたいに響いてきた。

「拙者に何か用か？」それは、紛れも無い師匠の声！

「おお！ 師匠！」

本当に神出鬼没といった具合の登場。けどそんなことはお構いなしに、あちきはこの天の助けに歓声を上げた。

そんな風にあちきが大喜びしていると、師匠はこのあちきの歓声が気に入らなかつたのか、顔を嫌そうに顰めている。

「何でそんなに嫌そうなんだよ！」

「オマエに非はない」あつさりと答えを返してくる。「しかし、見つけてみればこんな事態になっていようとは。シユエ、何か言い訳はあるか？」

よく見れば、師匠の額には汗が滲んでる。あの師匠にだ。

そこまでして探してくれるなんて、やっぱり師匠はいい人だよな。

師匠が来て余裕ができたのか、そんなことを考えつつ、あちきはシユエの方を見る。

シユエの奴はずっと無言のまま、構えは解かずに体の向きを師匠の方に変えた。

「この前といい、見計らつたようにして現れるね。今回はかりは、ずっと現れないでいて欲しかったのだけれど」

「『季節名』をそのヤナギが持っている以上、拙者は現れるさ。して、拙者に刃向かおうという気概は認めてもいいが、オマエが拙者の間合いに入ってくるというのなら、容赦はせぬぞ」

師匠は淀みのない動きで抜刀すると、脇構えになる。けど、それは構えているって感じがまるでしなかった。

敢えてそうしているという感じがひしひしと伝わってくる。手加減してるのかとも思えたけど、じっくりこない。ただ、する必要の

ないことをわざわざやってる気がする。

「型捨無流は野太刀を使う剣術、扱い慣れない定寸の刀を手にしてどこまでやれる?」

シュエのこの言葉に、あちきは開いた口が塞がらなくなった。何でそんな強気なことが言えんだ? 相手は仮にもあの師匠だつていうのに。

あちきはあまりのことに、シュエのそんな点を尊敬しようかどうか少し迷っちゃまった。

「その手に持った刀は飾りか?」

師匠は静かにそれだけを言つて、地面を少しだけ滑った。そうとしか見えない、無駄の無い足捌きつていうのは、まさにこのこと。スツと間合いを詰めていく。そんな師匠の足捌きに、あちきは驚かされていた。

師匠は問題無いと思つたあちきはシュエの方に視線を戻す。こつちは全く動いてない。

いや、違う。あちきが目を離れた隙に、師匠と同じ分だけ間合いを離していた。

「……………」

「……………」

二人とも黙りこくつて何も言わねえ。シュエにはもう完全に余裕がないってことだろう。

目に見える変化といえば、途中で何度かシュエの剣先が少し動いたくらいだった。

師匠から教わったことを当て嵌めれば、何かの誘いなのかとあちきが首を傾げたところで、シュエが構えを解いた。

「参りました」

シュエは恨みがましくそう言うと、あちきたちに背を向けて去って行った。

あちきは何がどうなったのかさっぱり分からず、師匠の袖を引いた。

「何だ？」

あちきの目に留まらぬうちに、師匠はいつの間にか刀を納めた状態で左手に持っていた。

これだけの速さならシュエが逃げ出すのも頷ける。けど、何をしたのかは師匠の口から聞いておきたい。

「一体何したんだよ？ 参りましたって言ったなら、師匠の勝ちなんだろうけど」

「簡単な事だ。攻撃をするフリを何度かしたただけだ」

「そのどこが簡単なんだよ？ それだけで相手が引き下がるなら苦労しねえよ」

あちきが食い下がるようにしてそう言うと、師匠は薄く笑ってあちきの頭に右手を置いてきた。蠟で固めたような硬い感触がした。

「確かに、それだけで済んだのなら苦労はあるまい。拙者がしたことは、フリによって相手、シュエが本能的に防御を苦手とする箇所、

「防御しようとする箇所を探ったのだ」

「それで探り当てられたから、あいつは引き下がったってのか？」

「ヤナギよ。オマエは喧嘩っ早い性格の割に、喧嘩自体はそれほど経験がないのか？」

「殴り合いとかそういうのは、物騒だろ。格闘技は少しやってたけど、そういうのは極力避けてたんだよ。それでも平和主義なんでね」

言った瞬間、師匠は吹き出して、しかもそのまま笑い始めた。

「笑うなあ！ 笑うんじゃねえ！」

恥ずかしくなって飛び掛かろうと体に力を入れても、頭に置かれた手が邪魔でまるで動けない。

「いやいや、見誤ったことがごうも可笑しく、嬉しいとは、あはははははは」

しばらく笑い続けたあとで、師匠はようやく、あちきの頭に置いていた手をどけた。

「拙者のした事は何ていうことはない小技よ。例を挙げて言えば、素人同士の喧嘩のやりとりにもよくあることで、相手の攻撃に対して思わず目を瞑るということがあるだろう？ 拙者がしたのもあれと同じことで、攻撃するという気を相手にぶつけて、その反応をみただけだ。何も特別なことではない。違うのは、相手が瞑る目が顔にないことくらいだろう。もっとも達人ならば、そうしたものは巧妙に隠すか、消すなりするものだがな」

「じゃあ、それができないシユ工は達人って訳じゃねえんだ」

「そういう訳ではないな」

「じゃあ、どついう訳なんだよ?」

「アイツが自信過剰にも程がある行為をした結果、拙者に弱点を見せた。それだけだ」

「え? じゃあ自滅ってことかよ!」

「やっぱあいつは間抜けじゃねえのか?」

「そうなるな。それよりも、オマエは拙者の時間を大分無駄にしたんだ。もう逃げるなよ。」

「傷の手当は、あとでしてやる」

師匠は怖い顔してあちきを睨んだかと思えば、柔らかく笑ってすたすたと歩いて行く。そんな表情とか動きを見てたら、言葉が本当に余計なくらい師匠の考えが分かって、素直に礼でも言おうかとも思ったけど、その背中は今まで知らなかった遠い世界の人間の背中で、あちきは結局、何も言えねえまま目の前にある背中を追いかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4418f/>

季節名の道

2011年11月10日17時54分発行